岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 149

北方地蔵遺跡2
北方薮ノ内遺跡

都市計画道路万成・国富線
建設に伴う発掘調査Ⅱ

2000

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 149

北方地蔵遺跡2
北方薮ノ内遺跡

都市計画道路万成・国富線
建設に伴う発掘調査Ⅱ

2000

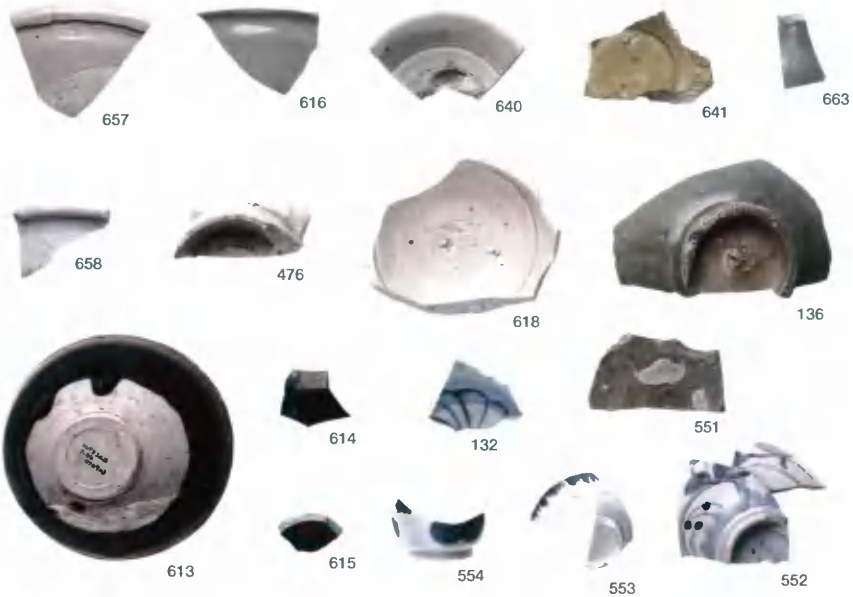
岡山県教育委員会

1　北方薮ノ内遺跡
中世～近世遺構
（調査時 6 区：
東より）

2　北方薮ノ内遺跡　土壙 2 出土の緑釉陶器椀　67

巻頭図版 2

1　北方薮ノ内遺跡　土壙 8 ・溝24出土の輸入・国産陶磁器



2　北方薮ノ内遺跡出土の輸入・国産陶磁器

序

本書には、岡山市中井町に所在する北方地蔵遺跡・北方薮ノ内遺跡の発掘調査結果を収載しました。

この調査は、都市計画道路万成・国富線の建設に伴う発掘調査であります。近年、都市のドーナツ化、スプロール化が著しい県都岡山市にあって、その急務の課題とされるのが都市交通網の整備です。都市計画道路万成・国富線は、こうした都市交通網整備の一環として、都心を迂回する役割を担う3本の環状道路の一つ、中環状線として計画されたものです。

岡山県教育委員会では、この建設計画に先立ち、路線内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて、関係部局と調整・協議を重ねてきました。その結果、現状での保存はきわめて困難であるとの結論に達し、やむなく記録保存のための発掘調査を実施することになりました。このうち、主要地方道岡山・吉井線より西側につきましては、平成7年度までに調査を終え、その成果を『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』126として平成10年3月に刊行しています。本書は、平成7・8年度に確認調査を、平成8年度から10年度にかけて全面調査を実施しました、岡山・吉井線よりも東側の調査結果を収載しています。

今回の調査では、弥生時代から古代までの旧河道や溝群、および中世から近世に至る集落遺構と旧河道を検出し、土地利用の変遷を知る上での貴重な資料を得ることができました。とりわけ、完形の緑釉陶器椀を納めた平安時代の土壙や、古代以降の里境に設けられたと考えられる東西方向の溝の発見が注目されるところです。

これらの成果を収めたこの報告書が、今後の調査研究、文化財の保護・保存のために活用され、また地域の歴史研究を深める資料として広く役立つよう念じて止みません。

最後になりましたが、発掘調査の実施および報告書の作成に際しましては、岡山県文化財保護審議会委員、岡山県土木部都市局都市計画課、岡山地方振興局、ならびに地元の関係者各位から温かい御理解と御協力を賜りました。末筆ながら、記して厚くお礼申し上げます。

平成12年2月

岡山県古代吉備文化財センター

所長　葛原克人

例　言

1　本書は、都市計画道路万成・国富線建設に伴って岡山県教育委員会が岡山県土木部都市局都市計画課から依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した、北方地蔵遺跡・北方薮ノ内遺跡の発掘調査報告書である。

2　都市計画道路万成・国富線の建設に伴う発掘調査報告書は、２分冊にわたる刊行であり、本書はその第２分冊目にあたる。

3　北方地蔵遺跡は岡山市中井町一丁目、北方薮ノ内遺跡は同一・二丁目に所在する。

4　調査は、第１次調査を中野雅美・宮野義治・前田能成が、第２次調査を正岡睦夫・大橋雅也が、第３次調査を江見正己・大橋雅也が、第４次調査を山磨康平・高田恭一郎・重根弘和が、第５次調査を岡本寛久・高田恭一郎・加藤和歳がそれぞれ担当した。

5　調査期間は、第１次調査が平成８年２月、第２次調査が平成８年５月、第３次調査が平成９年２月、第４次調査が平成９年７月～平成10年３月、第５次調査が平成10年４月～７月である。

6　発掘調査の実施にあたっては、下記の方々に専門委員を委嘱し、御指導・御助言をいただいた。記して深く感謝の意を表する次第である。

水内昌康（岡山県文化財保護審議会委員）　　近藤義郎（岡山大学名誉教授）

7　本報告書の作成は、岡山県古代吉備文化財センターにおいて平成10年度に実施し、高田が担当した。執筆は山磨・平井　勝・岡本・大橋・高田・重根が行ない、編集は高田が担当した。

8　遺跡の環境や遺物の材質に関する鑑定・同定については下記の諸氏・機関に依頼し、有益な教示を得るとともに、そのいくつかについては報告文をいただいた。

鉄滓分析	大澤　正己（たたら研究会委員）
	鈴木　瑞穂（株式会社九州テクノリサーチ）
胎土・羽口付着物成分分析	白石　　純（岡山理科大学自然科学研究所）
石材鑑定	妹尾　　護（倉敷芸術科学大学）
人歯の鑑定	小橋　　進（岡山県歯科医師会法歯会）
緑釉陶器の鑑定	吉瀬　勝康（防府市教育委員会）
	柴尾　俊介（財団法人北九州市教育文化事業団）
陶磁器の鑑定	家田　淳一（九州陶磁文化館）
	鈴田由紀夫（九州陶磁文化館）
	村上　伸之（有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館）
	野上　建紀（有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館）
花粉・植物珪酸体分析	株式会社 古環境研究所

9　旧河道出土の墨書土器の釈読等については、加原耕作、臼井洋輔両氏に御教示いただいた。また遺跡周辺の字名については、草原孝典氏に御教示いただいた。記して厚くお礼申し上げる。

10　遺物写真については、江尻泰幸氏の協力と援助を仰いだ。

11　出土遺物・図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）において保管している。

凡　例

1　本報告書で使用した高度は海抜高であり、北方位については第１・４・５図が真北で、それ以外はすべて磁北である。なお、遺跡付近の磁北は真北から西偏約６度40分を測る。

2　本報告書に掲載した地図のうち、第４図は国土地理院発行の1/25,000地形図「岡山北部」を、第５図は岡山市役所作成の1/2,500地形図を複製し、加筆したものである。

3　調査にあたっては、国土座標に沿って10ｍ方眼を設定し、実測を行なった。また、本報告書では既刊報告書のＸ＝－146,450、Ｙ＝－37,650を基線とする20ｍ方眼で西からｙ０・ｙ１・ｙ２…、北からｘ０・ｘ１・ｘ２…を付したグリッド線を踏襲している。グリッド名で記述するときは、北西角交点の名称を採る。なお、今回の報告地点はｘ４～ｘ９、ｙ39～ｙ54に位置している。

4　本報告書掲載の遺構および遺物実測図の縮尺はそれぞれ明記しているが、一部の例外をのぞき、下記のように統一している。

遺構

掘立柱建物・柱穴列：1/80　　井戸・土壙・土壙墓・溝断面：1/40

遺物

土器：1/4　　土製品：1/3　　石器・石製品：1/2・1/3　　金属製品：1/1・1/2・1/3

鉄滓：1/3　　木製品：1/4

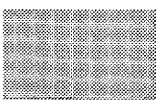
5　遺構番号については、北方地蔵・北方薮ノ内各遺跡ごとの通し番号で表記した。

6　遺物番号のうち、土器以外のものについてはその材質を示すため、下記の略称を数字の前に冠している。なお、遺物番号は遺跡の相違にかかわらず材質別の通し番号で表記した。

土製品：Ｃ　　石器・石製品：Ｓ　　金属製品：Ｍ　　鉄滓：Ｉ　　木製品：Ｗ

7　土器実測図の中で中軸線左右に白抜きのあるものは、小片のために口径・底径の推定が困難なものである。

8　土器のうち、緑釉陶器と灰釉陶器の断面、土師器の丹塗りと黒色土器の炭素吸着面については、下記のスクリーントーンで表現した。



9　本報告書における土層名称は、各発掘調査担当者によって標記方法が異なり、統一できていない。なお、土層図の色調は『標準土色帖』（農林水産省・農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修）によるが、数字等の記載のないものはこの限りでない。

10　本報告書の記述に使用した時代区分は一般的な政治史区分に準拠したが、古墳時代は７世紀前半まで、古代は７世紀後半から12世紀中頃まで、中世は12世紀後半から16世紀中頃を指している。また、遺構・遺物の時期については、各執筆者の意向に沿っており統一していない。

目　次

序

例言

凡例

目次

第1章　発掘調査および報告書作成の経緯…… 1

第1節　発掘調査の契機…… 1

第2節　発掘調査の体制…… 1

第3節　発掘調査の経過…… 3

1　確認調査…… 3

2　全面調査…… 3

第4節　報告書作成の体制および経過…… 4

第2章　遺跡の位置と環境…… 7

第3章　発掘調査の概要…… 9

第1節　調査区の概要…… 9

第2節　北方地蔵遺跡の概要……11

1　概要……11

2　弥生時代の遺構・遺物……12

3　古代の遺構・遺物……13

4　中世～近世の遺構・遺物……14

5　その他の遺物……18

第3節　北方薮ノ内遺跡の概要……19

1　概要……19

2　弥生～古墳時代の遺構・遺物……22

3　古代の遺構・遺物……26

4　中世～近世の遺構・遺物……33

5　その他の遺物……79

第4章　まとめ……84

付載

付載1　北方薮ノ内遺跡出土鉄滓の金属学的調査……87

付載2　北方薮ノ内遺跡出土緑釉陶器の胎土分析……91

付載3　北方薮ノ内遺跡におけるプラント・オパール分析……92

報告書抄録

図　目　次

第１図　遺跡の位置
第２図　確認調査トレンチＴ２・Ｔ３土層断面（1/60）… 3
第３図　調査区配置図（1/800）…… 5～6
第４図　周辺主要遺跡分布図（1/25,000）…… 8
第５図　調査区位置図（1/10,000）…… 9
第６図　調査区北壁土層柱状模式図（深さ1/60，幅1/120）……10
第７図　北方地蔵遺跡北壁土層断面図（1/100）……11
第８図　北方地蔵遺跡弥生時代遺構配置図(1/300)……12
第９図　溝１～３断面図（1/40）……13
第10図　溝４出土遺物（1/4）……13
第11図　北方地蔵遺跡古代遺構配置図（1/300）……13
第12図　溝５断面図（1/40）・出土遺物（1/4）……13
第13図　北方地蔵遺跡中世～近世遺構配置図（1/300）……14
第14図　北方地蔵遺跡中世遺構配置図（1/300）……14
第15図　建物１（1/80）……15
第16図　建物２（1/80）……16
第17図　溝６断面図（1/60）……16
第18図　溝６出土遺物（1/4・1/3）……17
第19図　粘土採掘坑１～４（1/40）……17
第20図　粘土採掘坑出土遺物（1/4）……18
第21図　包含層ほか出土遺物（1/4・1/3・1/2）……18
第22図　北方薮ノ内遺跡２区土層断面図（1/100）……19
第23図　北方薮ノ内遺跡１区北壁土層断面図（1/100）……20
第24図　北方薮ノ内遺跡３区北壁土層断面図（1/100）……21
第25図　北方薮ノ内遺跡１区（西半）弥生～古墳時代遺構配置図（1/300）……22
第26図　北方薮ノ内遺跡２区弥生時代遺構配置図（1/300）……23
第27図　溝１断面図（1/40）・出土遺物（1/4）……24
第28図　溝２・３断面図（1/40）・出土遺物（1/4）……24
第29図　溝４・５断面図（1/40）……25
第30図　溝６～８断面図（1/40）・溝７出土遺物（1/4）……25
第31図　北方薮ノ内遺跡１区（西半）古代遺構配置図（1/300）……26
第32図　旧河道１断面図（1/40）・出土遺物（1/4・1/3）……27
第33図　土壙１（1/40）……28
第34図　土壙２（1/20）・出土遺物（1/4）……28
第35図　溝９断面図（1/40）・出土遺物（1/4）……29
第36図　溝10断面図（1/40）・出土遺物（1/4）……29
第37図　溝11～14断面図（1/40）・溝14出土遺物(1/4・1/3)……30
第38図　溝15断面図（1/60）・出土遺物（1/4）……31
第39図　溝16・17断面図（1/60）・溝16出土遺物（1/4）……32
第40図　溝18断面図（1/40）……33
第41図　溝19断面図（1/40）……33
第42図　旧河道２・３断面図（1/60）・旧河道２出土遺物（１）(1/4・1/3)……34
第43図　北方薮ノ内遺跡中世～近世遺構配置図（1/600）……35～36
第44図　北方薮ノ内遺跡１・２区中世～近世遺構配置図(1/300)……35～36
第45図　旧河道２出土遺物（２）(1/4)……37
第46図　旧河道３出土遺物（1/4・1/3）……37
第47図　旧河道４出土遺物（1/4）……38
第48図　旧河道５出土遺物（1/4）……38
第49図　建物１（1/80）……38
第50図　柱穴列１（1/80）……39
第51図　井戸１（1/40）……39
第52図　井戸２（1/40）・出土遺物（1/4）……40
第53図　井戸３（1/40）・出土遺物（1/4）……41
第54図　井戸４（1/40）・出土遺物（1/4）……41
第55図　井戸５（1/40）・出土遺物（1/4・1/3）……42
第56図　井戸６（1/40）・出土遺物（1/4・1/3）……43
第57図　井戸７（1/40）・出土遺物（1/4）……44
第58図　土壙３～７（1/40）・土壙５出土遺物（1/4）……45
第59図　土壙８（1/40）……46
第60図　土壙８出土遺物（1/4・1/3）……47
第61図　土壙９（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）……48
第62図　土壙10（1/40）・出土遺物（1/4）……48
第63図　土壙11（1/40）……48
第64図　土壙12（1/40）・出土遺物（１）(1/4)……49
第65図　土壙12出土遺物（２）(1/4)……50
第66図　土壙12出土遺物（３）(1/4)……51
第67図　土壙13（1/40）・出土遺物（１）(1/4)……52
第68図　土壙13出土遺物（２）(1/4)……53
第69図　土壙14（1/40）・出土遺物（1/4）……53
第70図　土壙15（1/40）……53
第71図　土壙16（1/100）・出土遺物（１）(1/4)……54
第72図　土壙16出土遺物（２）(1/4)……55
第73図　土壙17～19（1/40）……55
第74図　土壙20（1/40）・出土遺物（1/4）……56
第75図　土壙21（1/40）・出土遺物（1/4・1/3）……58
第76図　土壙22（1/40）・出土遺物（1/4・1/3）……59
第77図　土壙23（1/40）……59

第78図　土壙24（1/40）……59
第79図　土壙25～27（1/60・1/40）・土壙25・27出土遺物（1/4・1/3）……60
第80図　土壙墓１（1/40）……60
第81図　土壙墓２（1/40）・出土遺物（1/4）……61
第82図　溝20～23断面図（1/40）・出土遺物（1/4・1/3）……62
第83図　溝24断面図（上　1/60，下　1/40）……63
第84図　溝24出土遺物（１）（1/4）……64
第85図　溝24出土遺物（２）（1/4）……65
第86図　溝24出土遺物（３）（1/4）……66
第87図　溝24出土遺物（４）（1/4）……67
第88図　溝24出土遺物（５）（1/4）……68
第89図　溝24出土遺物（６）（1/4）……69
第90図　溝24出土遺物（７）（1/4）……70
第91図　溝24出土遺物（８）（1/4）……70
第92図　溝24出土遺物（９）（1/4）……71
第93図　溝24出土遺物（10）（1/4）……71
第94図　溝24出土遺物（11）（1/3・1/2）……72
第95図　溝25出土遺物（1/4・1/3）……74
第96図　溝26出土遺物（1/4）……74
第97図　溝27～29断面図（1/40）・溝27・29出土遺物（1/4）……75
第98図　溝30断面図.（1/40）・出土遺物（1/4・1/3）……75
第99図　溝31断面図（1/40）・出土遺物（1/4）……76
第100図　溝32断面図（1/40）・出土遺物（1/4・1/3）……76
第101図　溝33～36断面図（1/40）・出土遺物（1/4・1/3）……77
第102図　水田１出土遺物（1/4・1/3）……78
第103図　水田２出土遺物(1/4)……78
第104図　柱穴出土遺物（１）（1/4）……80
第105図　柱穴出土遺物（２）（1/4）……81
第106図　柱穴出土遺物（３）（1/4・1/3・1/2）……82
第107図　包含層出土遺物（１）（1/4・1/3・1/2・1/1）…82
第108図　包含層出土遺物（２）（1/4・1/3・1/2）……83

表　目　次

表１　発掘調査概要一覧表…… 1

図　版　目　次

巻頭

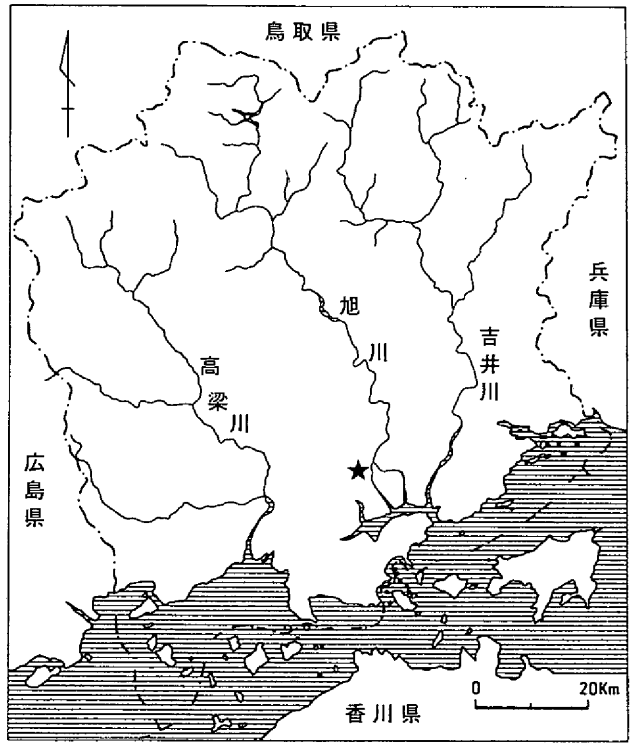
図版１　１．北方藪ノ内遺跡　中世～近世遺構（調査時６区：東より）
　　２．北方藪ノ内遺跡　土壙２出土の緑釉陶器椀
図版２　１．北方藪ノ内遺跡　土壙８・溝24出土の輸入・国産陶磁器
　　２．北方藪ノ内遺跡出土の輸入・国産陶磁器

巻末

図版１　１．第２次確認調査　T２南壁土層断面（北より）
　　２．北方地蔵遺跡　遠景（東より）
　　３．北方地蔵遺跡　粘土採掘坑群東半（北西より）
図版２　１．北方藪ノ内遺跡　１区北壁土層断面(南西より)
　　２．北方藪ノ内遺跡　溝１（南西より）
　　３．北方藪ノ内遺跡　溝２～５（東より）
図版３　１．北方藪ノ内遺跡　溝13～17（東より）
　　２．北方藪ノ内遺跡　中世～近世遺構（調査時５b区：東より）
　　３．北方藪ノ内遺跡　中世～近世遺構（調査時５a区：南東より）
図版４　１．北方藪ノ内遺跡　中世～近世遺構（調査時３c区：南より）
　　２．北方藪ノ内遺跡　中世～近世遺構（調査時３b区：南西より）
　　３．北方藪ノ内遺跡　建物１（南より）
図版５　１．北方藪ノ内遺跡　井戸７（南より）
　　２．北方藪ノ内遺跡　溝24土層断面（東より）
　　３．北方藪ノ内遺跡　２区南壁土層断面（北より）
図版６　１．北方地蔵遺跡　粘土採掘坑群東半（北より）
　　２．北方地蔵遺跡　粘土採掘坑土層断面（南より）
　　３．北方藪ノ内遺跡　溝４土層断面（南西より）
　　４．北方藪ノ内遺跡　溝５土層断面（南西より）
　　５．北方藪ノ内遺跡　土壙２椀出土状況（南より）
　　６．北方藪ノ内遺跡　土壙２土層断面（北より）
　　７．北方藪ノ内遺跡　旧河道１検出状況（南より）
　　８．北方藪ノ内遺跡　旧河道１土層断面（南より）
図版７　１．北方藪ノ内遺跡　井戸１（東より）
　　２．北方藪ノ内遺跡　井戸４（北より）

3．北方薮ノ内遺跡　井戸５（南より）
4．北方薮ノ内遺跡　土壙墓２（南より）
5．北方薮ノ内遺跡　土壙12（西より）
6．北方薮ノ内遺跡　土壙13土層断面（北より）
7．北方薮ノ内遺跡　土壙20（南より）
8．北方薮ノ内遺跡　土壙21（北より）

図版８　弥生土器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器（１／３）
図版９　土師器・古瀬戸天目椀（１／３）
図版10　弥生土器・備前焼（１／３、１／５）
図版11　瓦（１／２、１／３）
図版12　１．線刻文字塼（１／２）
　　２．石製品（１／２）
図版13　１．土製品（１／２）
　　２．鞴の羽口（１／３）
　　３．金属製品（１／２）
　　４．捩文鏡片（１／１）
　　５．銅銭（２／３）



第１図　遺跡の位置

第１章　発掘調査および報告書作成の経緯

第１節　発掘調査の契機

都市計画道路万成・国富線は、岡山市万成から国富までの約５kmの道路として計画されたが、学南町から大和町までの区間で遺跡の存在が予想されることから、建設にあたって都市計画課は文化課にその対応を依頼した。協議の結果、まず確認調査を実施し、平成４年度以降は調査体制を整え、平成７年度末には大和町の主要地方道岡山・吉井線までの調査を終了した。

岡山・吉井線から東側の旭川橋脚までの区間については、平成７年度に一部確認調査を実施していたが、平成８年度当初に都市計画課から文化課に協議の申し入れがなされた。都市計画課としては、平成11年度の共用開始を目指して建設計画を進めており、工事工程との関係で西川の東の市道から東側を先に調査できないかと言う話であった。これに対し文化課としては平成８年度は確認調査を行い、全面調査は平成９・10年度を考えている旨を伝え、ほぼその計画で協議がまとまった。しかし、平成８年９月になっても用地買収が進まず、調査に入れない場所が多いことから再度協議を行い、平成９年度当初からは全面調査に入れないことを確認した。全体では平成８年度７月から工事工程や用地買収の様子を見ながら、小さく区分けした調査区の全面調査を進め、平成10年度７月までで岡山・吉井線から東側を終了し、都市計画道路万成・国富線の埋蔵文化財調査を完了した。　（平井）

第２節　発掘調査の体制

都市計画道路万成・国富線の建設に伴う発掘調査は、岡山県教育委員会が岡山県土木部都市局都市計画課から依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが昭和62年度に確認調査を、そして昭和63年度から平成10年度にかけて確認調査および全面調査を実施した。

今回報告する北方地蔵・北方薮ノ内遺跡の調査については、平成７・８年度に確認調査を実施、平成８～10年度に全面調査を実施したものである。

また発掘調査にあたっては、遺跡の保護・保存ならびに発掘調査にあたっての専門的な指導・助言を得るために、岡山県遺跡保護調査団の推薦を受けた方々に「専門委員会」の２名の委員を委嘱した（例言参照）。

表１　発掘調査概要一覧表

次	調査期間	種別	調査担当者	調査面積	遺跡名	遺構数	遺物数
1	1996．2．2～6．2．9	確認	中野雅美・宮野義治・前田能成	30㎡	北方薮ノ内	1	1箱
2	1996．5．21～5．22	確認	正岡睦夫・大橋雅也	90㎡	北方薮ノ内	2	1箱
3	1997．2．3～2．7	全面	江見正己・大橋雅也	40㎡	北方薮ノ内	3	1箱
4	1997．7．7～1998．3．24	全面	山磨康平・高田恭一郎・重根弘和	2,952㎡	北方薮ノ内	35	62箱
5	1998．4．1～7．25	全面	岡本寛久・高田恭一郎・加藤和歳	1,245㎡	北方地蔵・薮ノ内	68	25箱
計				4,357㎡		109	90箱

平成７年（1995年）度発掘調査

岡山県教育委員会
- 教育長　森崎岩之助

岡山県教育庁
- 教育次長　黒瀬　定生

岡山県教育庁文化課
- 課長　大場　淳
- 課長代理　樋本　俊二
- 参事　葛原　克人
- 課長補佐（埋蔵文化財係長）　高畑　知功
- 主任　若林　一憲

岡山県古代吉備文化財センター
- 所長　河本　清
- 次長　高塚　惠明
- 次長（文化課本務）　葛原　克人

（総務課）
- 課長　丸尾　洋幸
- 課長補佐（総務係長）　井戸　丈二
- 総務主幹　守安　邦彦
- 主査　石井　善晴
- 主任　木山　伸一

（調査第二課）
- 課長　伊藤　晃
- 課長補佐（第二係長）　福田　正継
- 文化財保護主査　中野　雅美（調査担当）
- 文化財保護主事　宮野　義治（　同　）
- 主事　前田　能成（　同　）

平成８年（1996年）度発掘調査

岡山県教育委員会
- 教育長　森崎岩之助

岡山県教育庁
- 教育次長　黒瀬　定生

岡山県教育庁文化課
- 課長　大場　淳
- 課長代理　松井　英治
- 課長代理　臼井　洋輔
- 参事　葛原　克人
- 課長補佐（埋蔵文化財係長）　平井　勝
- 主任　若林　一憲

岡山県古代吉備文化財センター
- 所長　河本　清
- 次長　高塚　惠明
- 次長（文化課本務）　葛原　克人
- 文化財保護参事　正岡　睦夫（調査担当）

（総務課）
- 課長　丸尾　洋幸
- 課長補佐（総務係長）　井戸　丈二
- 総務主幹　守安　邦彦
- 主査　木山　伸一

（調査第一課）
- 課長　高畑　知功
- 課長補佐（第一係長）　江見　正己（調査担当）
- 文化財保護主事　大橋　雅也（調査担当）

平成９年（1997年）度発掘調査

岡山県教育委員会
- 教育長　黒瀬　定生

岡山県教育庁
- 教育次長　平岩　武

岡山県教育庁文化課
- 課長　髙田　朋香
- 課長代理　臼井　洋輔
- 課長代理　西山　猛
- 参事　葛原　克人
- 課長補佐（埋蔵文化財係長）　平井　勝
- 主事　三宅　美博

岡山県古代吉備文化財センター
- 所長　鍬本　克之
- 次長　正岡　睦夫

（総務課）
- 課長　小倉　昇
- 課長補佐（総務係長）　井戸　丈二
- 主査　木山　伸一

（調査第二課）
- 課長　伊藤　晃
- 課長補佐（第二係長）　山磨　康平（調査担当）
- 文化財保護主任　高田恭一郎（　同　）
- 主事　重根　弘和（　同　）

平成10年（1998年）度発掘調査

岡山県教育委員会
- 教育長　黒瀬　定生

岡山県教育庁
- 教育次長　平岩　武

岡山県教育庁文化課
- 課長　髙田　朋香
- 課長代理　西山　猛
- 参事　正岡　睦夫
- 課長補佐（埋蔵文化財係長）　松本　和男
- 主事　三宅　美博

岡山県古代吉備文化財センター
- 所長　葛原　克人
- 次長　大村　俊臣

（総務課）
- 課長　小倉　昇
- 課長補佐（総務係長）　安西　正則
- 主査　山本　恭輔

（調査第三課）
- 課長　柳瀬　昭彦
- 課長補佐（第三係長）　岡本　寛久（調査担当）
- 文化財保護主任　高田恭一郎（　同　）
- 主事　加藤　和歳（　同　）

第３節　発掘調査の経過

１．確認調査

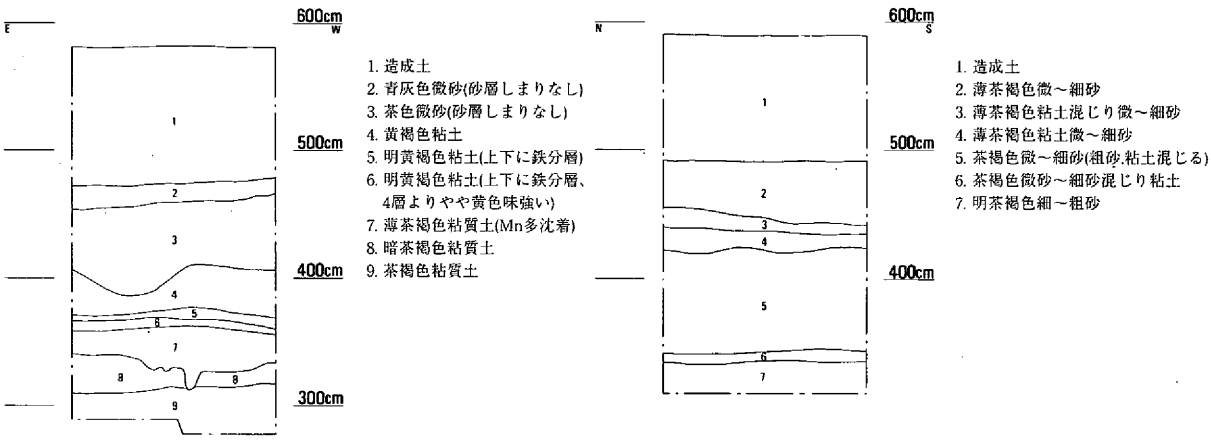
都市計画道路万成・国富線が計画された路線内における主要地方道岡山・吉井線以東の遺跡の有無・範囲を把握するため、まず、平成８年２月２日～９日にＴ１の確認調査を実施した。さらに同年５月21日～22日にＴ２～Ｔ４の確認調査を実施した。合計調査面積は約120㎡である。

Ｔ１では、現地表下約360cm(海抜240cm)まで掘り下げ、その結果、下部では河道内の堆積状況が確認された。また、上部でも低位部および旧耕作土の堆積である可能性が高く、明確な遺構は確認されなかった。遺物も土師器細片を数点見たのみである。

Ｔ２では、造成土の下に洪水砂と中世段階とおぼしき水田層が堆積しており、さらにその下、海抜340cm付近で暗茶褐色粘質土(第８層)を確認した。この層位は、中溝遺跡・北方地蔵遺跡など周辺遺跡の調査所見から弥生時代前期の層位である可能性が高い。

Ｔ３・Ｔ４では、現地表下300cm(海抜280cm)まで掘り下げたものの、堆積層は、ほぼ洪水砂であり、遺構・遺物とも確認されていない。

以上の調査結果から、Ｔ１以東は旧河道ないし、その氾濫原内であり、遺跡はこれより西側に広がっていることが確認された。　（大橋）



第２図　確認調査トレンチＴ２・Ｔ３土層断面（1/60）

２．全面調査

本調査は平成９年２月に北方薮ノ内遺跡２区の一部にあたる西川左岸の橋脚基礎部分を先行して行った。新年度の同年７月からは、調査員３名の１班体制で、遺跡の東端が確認された新幹線高架付近の工場跡地より開始した。西川以西の調査区については、事前に試掘調査を実施し遺構の把握を行うことと、路線内の宅地移転の状況を把握しながら、随時西側に調査を進めることとした。しかし、調査区東端の北方薮ノ内遺跡３区の調査では、全面調査に着手したもののＪＲ西日本と高架付近での調査の事前協議が不十分で、調査の続行が不可能となり土層断面と平面による微高地の東端の下がりを確認したのみで終了を余儀なくされた。また、西川より西の調査区では市街地の調査のため市道や

民家の出入り口の確保が必要なことや、未移転地等で調査区をかなり細分した調査となった。平成9年度末には、宅地の移転もほぼ終了し、課題も多かったが北方薮ノ内遺跡1区までの調査を大方終了した。この間平成9年9月22日には専門委員会を実施し指導、教示を得た。（山磨）

平成10年度は前年度の3名体制を維持し、北方薮ノ内遺跡の北端部分と県道以東の北方地蔵遺跡を対象として4月から実施した。旧4区から調査を開始し、調査区西端で東西方向の大溝を確認した。旧6区の南辺には条里の坪境と考えられる市道が東西に走り、4区の大溝は条里に関係する可能性が強くなった。生活道路である市道下は調査対象外としていたが、条里制を考える上で重要な遺構があると判断し、迂回路を設けて市道下の調査が実施できるように事業主体者側と協議を行い、その了承を得た。4区の調査終了後、迂回路を設置して6区の調査に入った。北方地蔵遺跡は排土の関係で対象地を二分し、6区の調査中にa区の調査に入り、a区終了後にb区の調査を実施した。なお、6区北西隅から北方地蔵遺跡の北側道路沿いは、駐車場への出入り口として未調査区を広くとったが、近接する調査区では溝以外に顕著な密集した遺構が見られず、調査区の拡張は行わなかった。（岡本）

第4節　報告書作成の体制および経過

報告書の作成は、専従職員1名で、発掘調査終了後の平成10年8月1日に開始し、年度末までの8ヶ月間実施した。整理対象の発掘調査総面積は4,357㎡、遺構総数109、遺物箱数90箱であった。

整理作業はまず、一部未終了であった出土遺物の水洗・注記から開始した。続けて土器の復元に取り掛かり、実測対象土器の選定を行なった。また、これらと並行して抽出遺物の台帳の作成と実測対象遺物の選定を行ない、選定の終了した土器と抽出遺物についての実測を順次進めた。

遺物については、両遺跡合わせて土器・瓦666点、石器12点、木器1点、金属器46点、土製品101点、鉄滓7点を掲載したが、紙数の関係で割愛した実測土器やその他の遺物も多い。

遺構については、発掘調査時に遺構と認識したものについては、ほぼ掲載している。また、多数検出した中・近世の柱穴については、発掘調査時、整理作業時において検討を加えたが、大半は建物としてまとめることができなかった。なお、柱穴出土遺物については可能な限り掲載に努めた。

各時代の遺構に伴わない遺物については、その他の遺物として各遺跡末に一括して掲載している。なお、各種観察表については紙面の関係で割愛した。（高田）

平成10年（1998年）度報告書作成

岡山県教育委員会

教育長	黒瀬　定生

岡山県教育庁

教育次長	平岩　武

岡山県教育庁文化課

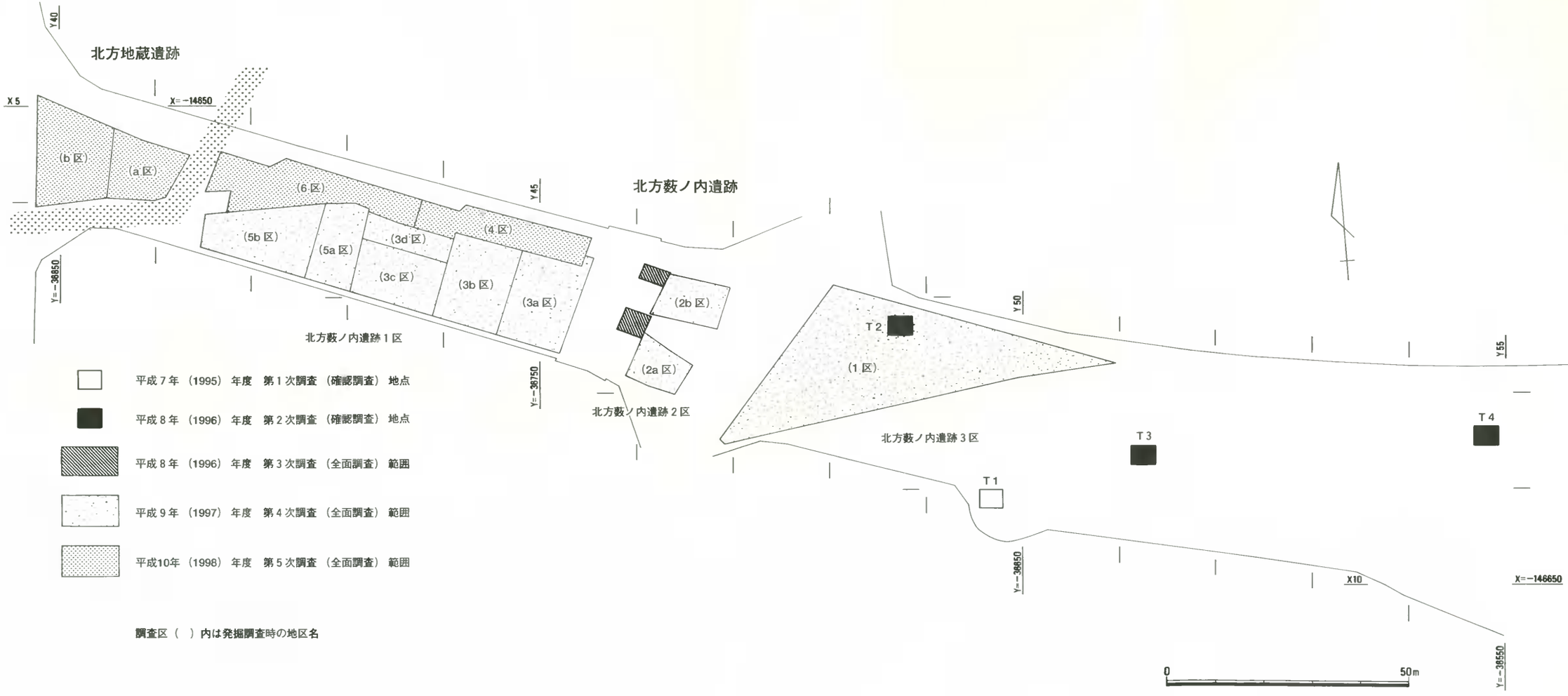
課長	高田　朋香
課長代理	西山　猛
参事	正岡　睦夫
課長補佐（埋蔵文化財係長）	松本　和男
主事	三宅　美博

岡山県古代吉備文化財センター

所長	葛原　克人
次長	大村　俊臣
（総務課）	
課長	小倉　昇
課長補佐（総務係長）	安西　正則
主査	山本　恭輔
（調査第三課）	
課長	柳瀬　昭彦
課長補佐（第三係長）	岡本　寛久
文化財保護主任	高田恭一郎

（報告書作成担当）

報告書作成協力者　阿部典子　田中淑子　峠田秀子　松尾和子　三垣佐知子　山本千恵子



第3図　調査区配置図（1/800）

第２章　遺跡の位置と環境

北方地蔵遺跡・北方薮ノ内遺跡は、岡山平野北部の旭川西岸に所在する弥生時代～近世の複合遺跡である。岡山平野は、中国山地に源を発し、吉備高原を南流して児島湾に注ぐ旭川の河口に形成された沖積平野である。かつての旭川は、吉備高原南縁の笠井山と竜ノ口山の間を出たあたりを扇の起点として広がるいくつかの河道に分かれていたようで、それら河道の両岸には自然堤防である微高地や後背湿地が形成されている。今回報告する北方地蔵遺跡・北方薮ノ内遺跡は、その扇の起点にほど近い微高地上にあり、現地表面の海抜高は５～６ｍ前後である。

周辺で確認された最も古い遺跡は、半田山の丘陵裾に位置する朝寝鼻貝塚で、縄文時代後期の貝塚の下層から前期の遺物が出土している。後期以降は沖積地への定住化が進み、後期の朝寝鼻貝塚、後期から晩期の遺構・遺物を検出した津島岡大遺跡、晩期の水田を検出した津島江道遺跡など、津島地区一帯に人々の生活痕跡が残されている。

前代に受容の萌芽がみられた水稲農耕は、弥生時代前期以降、着実に展開していく。前期水田を検出した遺跡は、津島遺跡、津島岡大遺跡、北方下沼・横田・中溝・地蔵遺跡などがあり、微高地の縁辺や低位部に拓かれた広大な水田と、それに伴う灌漑施設が確認されている。また、津島遺跡では微高地上に営まれた集落もみられる。中・後期には、沖積化の進行と土地開発能力の向上から、水田と集落がさらに展開した考えられ、津島遺跡、南方遺跡、上伊福遺跡などの拠点集落が知られる。

弥生時代後期末から古墳時代前期には、平野背後の半田山丘陵上に都月坂墳墓・古墳群、七つ坊古墳群、ダイミ山古墳、一本松古墳群が、西側の京山丘陵上に津倉古墳が、東側の沖積地の自然堤防上に全長約150ｍの神宮寺山古墳が築かれる。これら連続して築造された墳墓は、発展・安定した生産基盤を背景に営まれた集落の首長の墓と考えられ、旭川西岸地域の首長墓系譜を示している。

古墳時代後期は、津島遺跡、北方下沼遺跡で集落を、北方中溝遺跡周辺や津島岡大遺跡で水田を確認しているが、築造される墳墓の質・量は前代に比べて激減することが知られている。

現在、岡山平野で観察される条里（正方位）地割の施行は、古代まで遡ると考えられ、津島遺跡、津島岡大遺跡、北方下沼・横田・中溝遺跡などで条里制の坪境等に比定される溝や整地層を検出している。この時期の集落の実態は不明な点が多いが、津島江道遺跡で検出した掘立柱建物群は、御野郡衙や半田山の丘陵裾に推定される古代山陽道との関連が考えられる。

前代からの地割は中世以降も継承され、条里関連の溝の多くが古代を踏襲した検出状況を示す。また、河道の埋没や統合、耕地の大規模な開発もさらに進み、水田が一面に広がる荘園景観を呈するようになる。鎌倉時代後期には、こうした荘園内の商業活動の場として各地に市庭が成立する。東大寺文書によると、応長元（1311）年には御野郡広瀬郷に東大寺領野田荘広瀬市がみられ、平野南部の鹿田市とともに旭川や瀬戸内海の水運を生かした活発な交易が窺われる。この時期の遺跡としては、二日市遺跡、鹿田遺跡、伊福定国前遺跡、岡山城二の丸跡下層などがある。また、北方地蔵遺跡では、鎌倉時代初頭という限られた一時期に形成されたと考えられる粘土採掘坑群を検出している。

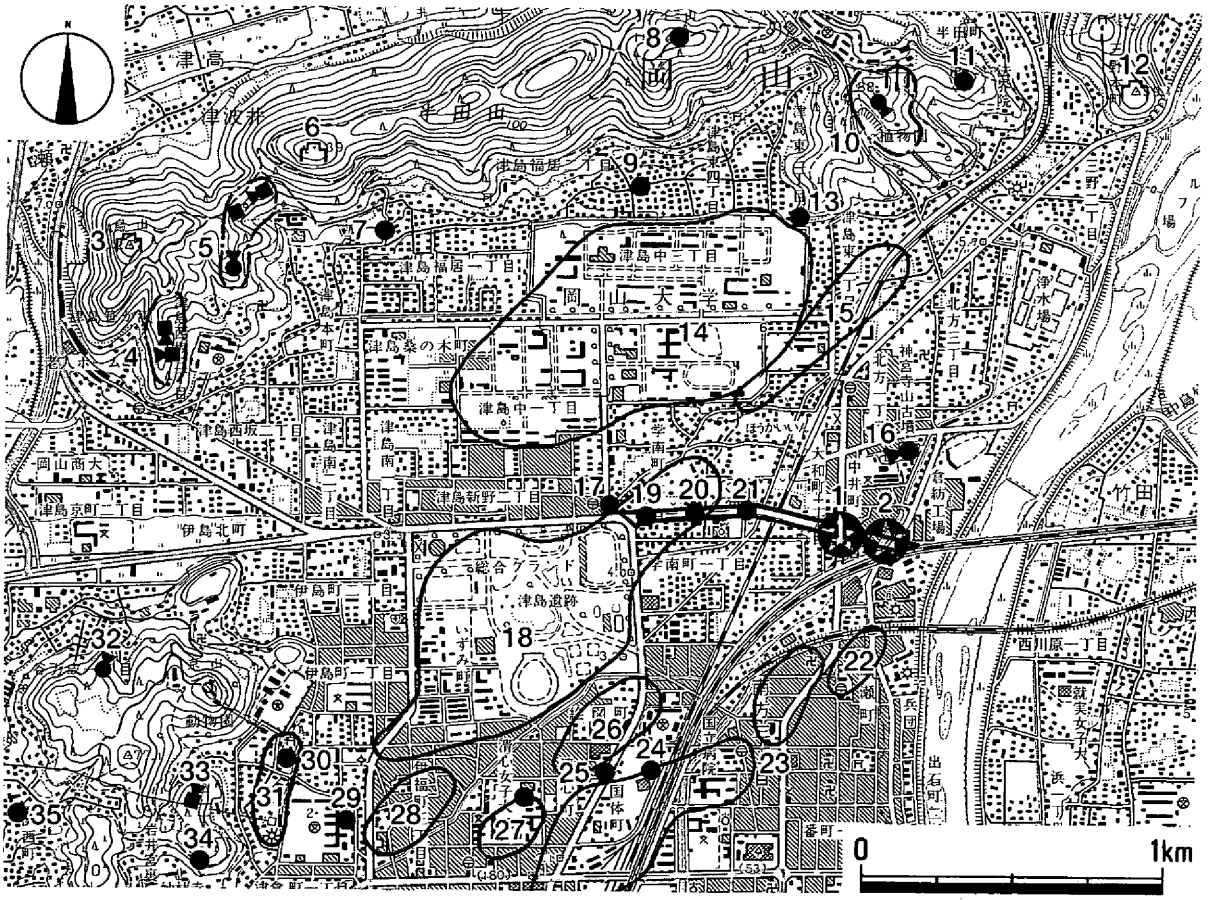
戦国期には、小戦国大名にまで成長した松田氏の領国形成のもと、金間（萬）氏などの在地小勢力が割拠する状態となり、半田山丘陵に半田山城や妙見山城などが築かれる。その後、永禄10（1567）

年の明禅寺合戦、天正10（1582）年の備中高松の役を経て有力大名へと成長した宇喜多氏による岡山城と城下町の建設が進められ、慶長５（1600）年の関ヶ原の合戦で宇喜多氏が滅亡した後は、小早川氏、池田氏によって整備・拡張が続けられる。また、城下町周辺は近世以降、水田が広がる農村地帯となる。この時期の遺跡としては、本丸中の段、二の丸跡など岡山城関連がある。

明治41（1908）年の陸軍第17師団の設置により、それまで平野北半部に広がっていた農村地帯が造成されて師団屯営地となる。その後は宅地化が進み、とくに近年の市街地化は著しい。　（高田）

参考文献

近藤義郎編『岡山県の考古学』吉川弘文館　1987
『岡山県史』第５巻中世Ⅱ　岡山県　1991
出宮徳尚「歴史的環境」『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』岡山市教育委員会　1997
杉山一雄「遺跡の位置と環境」『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告125　岡山県教育委員会　1998
岡田　博「遺跡の位置と環境」『北方下沼遺跡ほか』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告126　岡山県教育委員会　1998
野崎貴博「津島岡大遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境」『津島岡大遺跡10』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第14冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1998
氏平昭則「地理的・歴史的環境」『津島遺跡１』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告137　岡山県教育委員会　1999
なお、個々の遺跡に関わる報告書については省略した。



1. 北方地蔵遺跡
2. 北方薮ノ内遺跡
3. 烏山(笹ヶ迫)城跡
4. 七ッ塚墳墓群
5. 郡月坂墳墓群
6. 半田山城跡
7. 津島福居遺跡
8. ダイミ山古墳
9. おつか様古墳
10. 一本松古墳群
11. 不動堂古墳
12. 妙見山城跡
13. 朝寝鼻貝塚
14. 津島岡大遺跡
15. 津島江道遺跡
16. 神宮寺山古墳
17. 津島新野遺跡
18. 津島遺跡
19. 北方下沼遺跡
20. 北方横田遺跡
21. 北方中溝遺跡
22. 広瀬遺跡
23. 南方遺跡
24. 南方(済生会)遺跡
25. 南方(中電)遺跡
26. 絵図遺跡
27. 上伊福九坪遺跡
28. 上伊福遺跡
29. 伊福定国前遺跡
30. 尾針神社南遺跡
31. 上伊福西遺跡
32. 青陵古墳
33. 津倉古墳
34. 妙林寺古墳
35. 石井廃寺

第４図　周辺主要遺跡分布図（1/25,000）

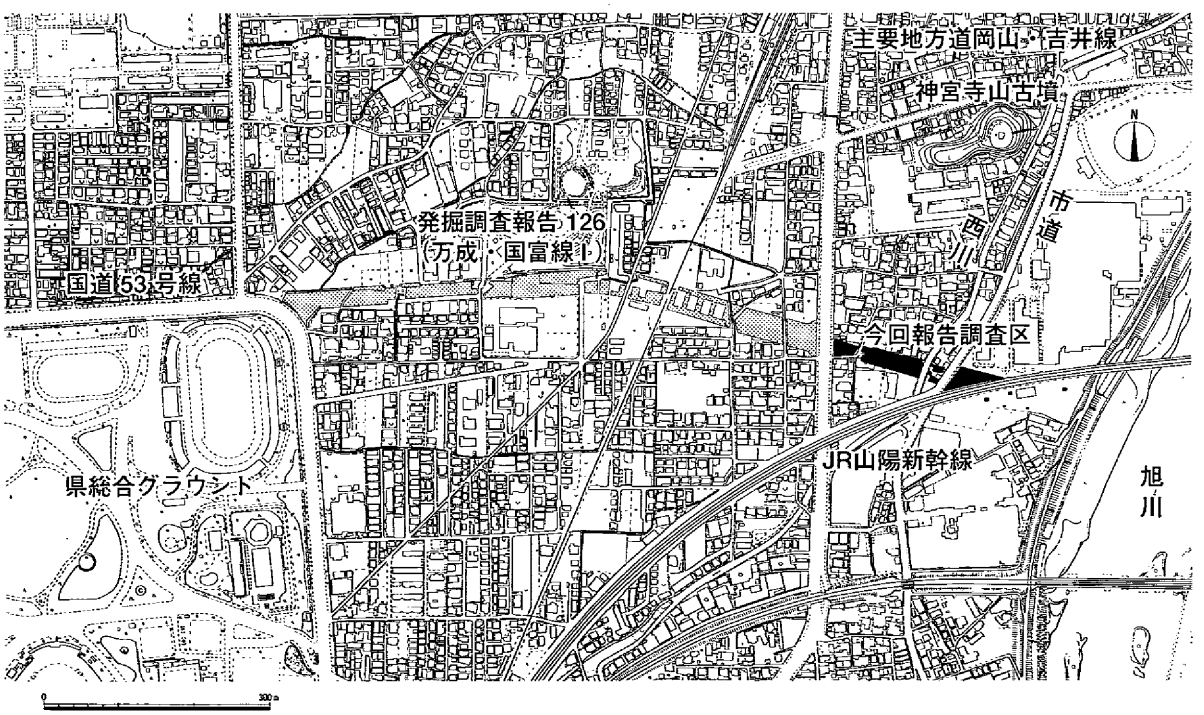
第３章　発掘調査の概要

第１節　調査区の概要

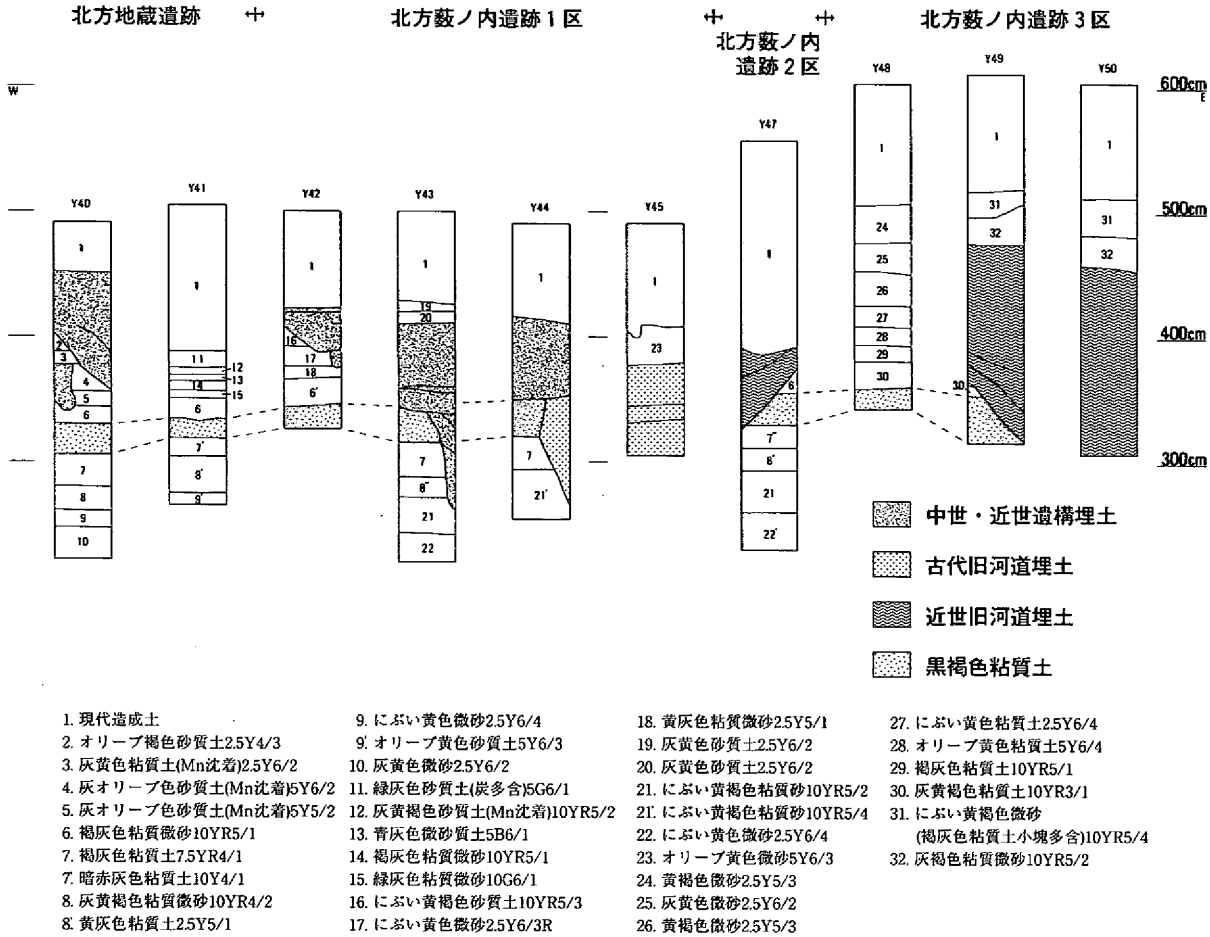
全面調査を実施した調査区は、主要地方道岡山・吉井線からＪＲ山陽新幹線高架下までの間、約230ｍである。このうち、岡山・吉井線の東約30ｍに位置する小字境の市道を挟んで、西を北方地蔵遺跡、東を北方薮ノ内遺跡として報告する。両遺跡に冠する「北方（きたかた）」は大字である。

北方地蔵遺跡は、調査区の西端に位置し、グリッドはｘ４～６、ｙ39～41となる。これは都市計画道路万成・国富線建設に伴う発掘調査報告書の第１分冊である『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』126（以下、万国Ⅰと略す）の「北方地蔵遺跡３区」と岡山・吉井線を挟んで隣接するものである。一方の北方薮ノ内遺跡は、グリッドのｘ５～８、ｙ41～50に位置し、ｙ46線付近を流れる西川とｙ47線付近の市道によって分断される。本報告では、この２箇所の未調査部分を境に西から１～３区として記述する。

第６図は調査区北壁の土層柱状模式図である。ｙ46線付近とｙ49線以東で確認した中・近世の旧河道は、それぞれ現在の西川と旭川の前身と考えられる。北方地蔵遺跡の第２層と北方薮ノ内遺跡２・３区の第24～26層は中世の洪水砂で、厚さが80cmに達する箇所もある。北方薮ノ内遺跡３区では、この洪水砂で覆われた水田を検出しており、第27・28層はその畦畔にあたる層位である。また、北方地蔵遺跡では畦畔を検出していないものの、第11・12層が水田層と推定される。この北方地蔵遺跡の水田開発に伴っては、大規模な地下げが行われたと考えられ、第12層除去後の粘土採掘坑群の検出面は海抜380cm



第５図　調査区位置図（1/10,000）



1. 現代造成土
2. オリーブ褐色砂質土2.5Y4/3
3. 灰黄色粘質土(Mn沈着)2.5Y6/2
4. 灰オリーブ色砂質土(Mn沈着)5Y6/2
5. 灰オリーブ色砂質土(Mn沈着)5Y5/2
6. 褐灰色粘質微砂10YR5/1
7. 褐灰色粘質土7.5YR4/1
7'. 暗赤灰色粘質土10Y4/1
8. 灰黄褐色粘質微砂10YR4/2
8'. 黄灰色粘質土2.5Y5/1
9. にぶい黄色微砂2.5Y6/4
9'. オリーブ黄色砂質土5Y6/3
10. 灰黄色微砂2.5Y6/2
11. 緑灰色砂質土(炭多含)5G6/1
12. 灰黄褐色砂質土(Mn沈着)10YR5/2
13. 青灰色微砂質土5B6/1
14. 褐灰色粘質微砂10YR5/1
15. 緑灰色粘質微砂10G6/1
16. にぶい黄褐色砂質土10YR5/3
17. にぶい黄色微砂2.5Y6/3R
18. 黄灰色粘質微砂2.5Y5/1
19. 灰黄色砂質土2.5Y6/2
20. 灰黄色砂質土2.5Y6/2
21. にぶい黄褐色粘質砂10YR5/2
21'. にぶい黄褐色粘質砂10YR5/4
22. にぶい黄色微砂2.5Y6/4
23. オリーブ黄色微砂5Y6/3
24. 黄褐色微砂2.5Y5/3
25. 灰黄色微砂2.5Y6/2
26. 黄褐色微砂2.5Y5/3
27. にぶい黄色粘質土2.5Y6/4
28. オリーブ黄色粘質土5Y6/4
29. 褐灰色粘質土10YR5/1
30. 灰黄褐色粘質土10YR3/1
31. にぶい黄褐色微砂
(褐灰色粘質土小塊多含)10YR5/4
32. 灰褐色粘質微砂10YR5/2

第６図　調査区北壁土層柱状模式図（深さ1/60，幅1/120）

を測る。これは中世以降の屋敷地である、北方薮ノ内遺跡１区の中・近世遺構検出面よりも約30cm低い。また、粘土採掘坑群の検出状況は、万国Ｉの「北方地蔵遺跡３区」のものと酷似し、一連の広がりとともに、その東限を確認している。一方、北方薮ノ内遺跡１区の中・近世の遺構は、西半部は第１層下部の現代水田耕作土直下において検出し、東半部は古代の旧河道上に堆積した18世紀後半代の包含層の上下面で検出している。調査区を東西に貫流する溝24は、里境にあるものと考えられ、鎌倉時代末から18世紀前半代までの多くの遺構はこの溝に規制された検出状況を示す。

古代の遺構は、主に北方薮ノ内遺跡１区の第16層上面で検出している。１区東半の旧河道は幅50ｍと推定され、その後も規模を変えながら、現在の西川に継続するものと考えられる。また、土壙は１区北西部の比較的高所にあり、同方向の調査区外に屋敷地等が想定される。

弥生時代から古墳時代にかけての遺構は、弥生時代後期の堆積である第６層の上下面で検出した溝群である。一例を除いて、東北から南西方向に流走し、旭川の分流によって形成された同方向の自然堤防上を掘開した給排水路と考えられる。

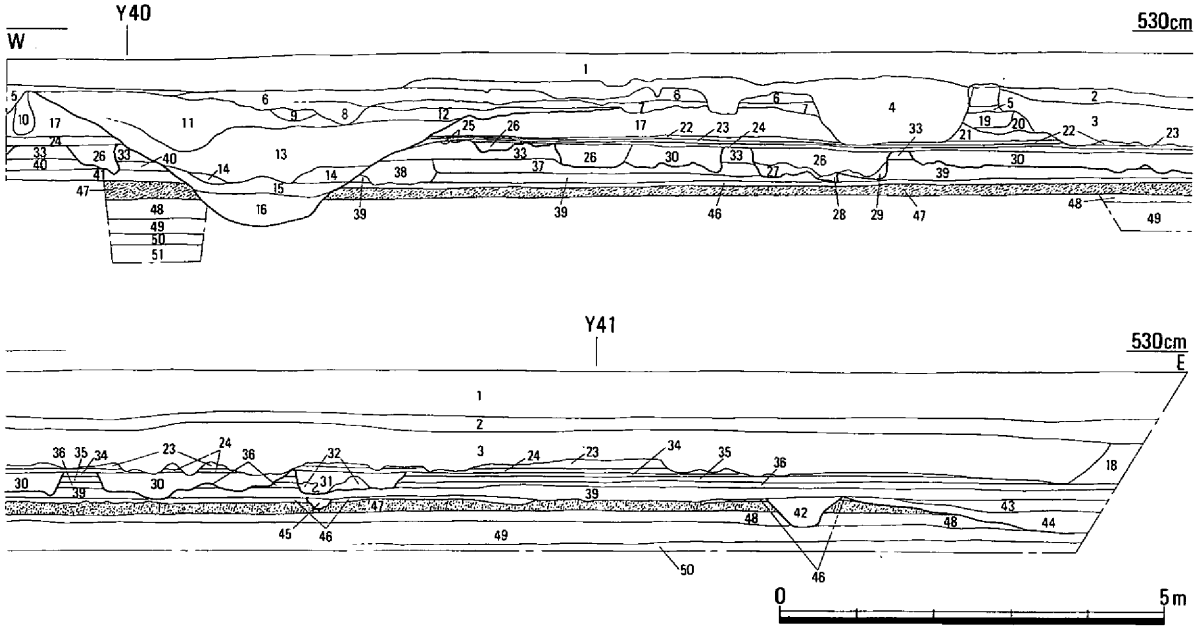
スクリーントーンで示した黒褐色粘質土は、万国Ｉにおいて弥生時代前期の水田層あるいは包含層と報告される層である。後世の旧河道により不明なｙ44～46線間とｙ49線以東を除く、調査区のほぼ全面で確認している。上面の海抜高は、調査区西端の北方地蔵遺跡で330cm前後と最も低く、北方薮ノ内遺跡３区のｙ48線付近で360cm前後と最も高い。ｙ43線付近の土壌分析で水田層の可能性が指摘されるが（付載３）、平断面の検討にもかかわらず、調査区内では畦畔を確認していない。（高田）

第２節　北方地蔵遺跡の概要

１．概　　要

北方地蔵遺跡は今回報告する調査範囲の西端に位置し、小字境となる市道を挟み、その東に位置する北方薮ノ内遺跡と接する。調査にあたっては、排土の関係で遺跡内を二分し、旧ａ区を先行した。周辺住民からの聞き取りでａ区には池が存在していたということであったが、ｂ区の東端で南北方向に宅地境の石垣が検出され、それより西は宅地、東は池であったことが再確認された。検出された遺構や出土遺物から判断すると、この景観は近世以降のことで、池は戦後埋め立てられていた。

第７図は調査区北壁の土層断面図である。第３層は池を埋め立てた土で、第４層との間、第５層上が石垣の石材である。第16層が堆積した溝６は、洪水によるとみられる第17層の堆積後に掘削され、溝６の埋没後に宅地となったようである。第26～32層の埋まった穴は中世の粘土採掘坑で、その上面に広がる中世包含層の第22～24層は生活面に堆積したものとみられる。第42～45層は弥生時代後期の溝の埋土で、第47層は周辺一帯に広がる弥生時代前期の水田層と同じ土と考えられる。おそらく、古代以降に周辺で地下げがなされ、その後に第33～41層が堆積したものであろう。　　（岡本）



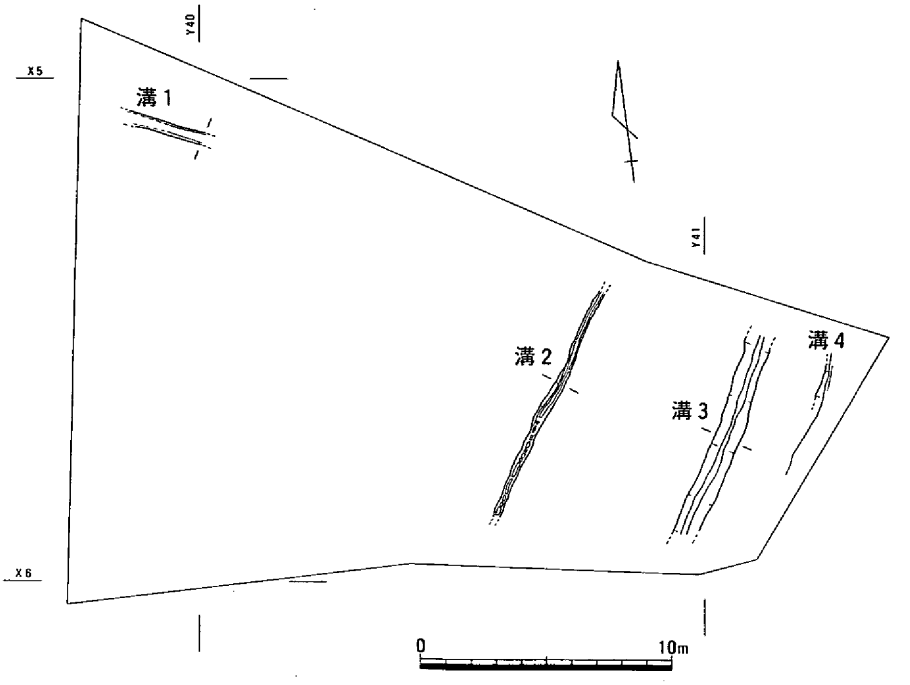
1. 現代造成土(真砂土)
2. 現代水田耕土？
3. 現代造成土(廃材)
4. 暗オリーブ褐色微砂(Fe沈着) 2.5Y3/3
5. オリーブ褐色砂質土2.5Y4/4
6. 暗灰黄褐色微砂(Fe沈着)2.5Y4/2
7. 黄灰色微砂(Fe沈着)2.5Y4/1
8. 灰褐色砂質土(礫含)7.5YR4/2
9. にぶい黄褐色砂質土10YR5/3
10. 暗灰色砂質土N3/0
11. 灰黄褐色砂質土10YR4/2
12. 明黄色砂質土(Fe沈着)10YR6/6
13. 灰黄褐色砂質土10YR4/2
14. 暗青灰色粘質土5B4/1
15. 暗青灰色粘質土10BG4/1
16. 灰色粘土N4/0
17. オリーブ褐色砂質土2.5Y4/3
18. 緑灰色砂質土(炭多含)5G6/1
19. 黄褐色砂質土(Fe沈着)2.5Y5/6
20. 明黄褐色砂質土(Fe沈着)10YR6/6
21. 黄灰色粘質土2.5Y4/1
22. 灰色砂質土(Mn 沈着)5Y5/1
23. 灰色砂質土(Mn 沈着)10Y5/1
24. 灰黄褐色砂質土(Mn 沈着)10YR5/2
25. 黄灰色砂質土2.5Y5/1
26. 暗灰黄色砂質土2.5Y5/2
27. 灰黄砂質土2.5Y7/2
28. 黄褐色砂質土2.5Y5/4
29. 灰色砂質土5Y5/4
30. 黄褐色砂質土2.5Y5/3
31. 暗青灰色砂質土5B4/1
32. 褐灰色粘質土微砂10YR5/1
33. 暗灰黄色砂質土2.5Y5/2
34. 青灰色微砂質土5B6/1
35. 褐灰色粘質微砂10YR5/1
36. 緑灰色粘質微砂10G6/1
37. 灰オリーブ砂質土(Mn 沈着)5Y5/2
38. 灰黄褐色砂質土10YR4/2
39. 黒褐色粘質土10YR2/2
40. 灰オリーブ砂質土(Mn 沈着)5Y5/2
41. 黒褐色粘質土10YR2/2
42. 褐灰色粘質微砂10YR5/1
43. 暗緑灰色粘質土(炭・焼土粒多含) 7.5Y4/1
44. 黄灰色粘質土2.5Y4/1
45. 褐灰色粘質微砂10YR5/1
46. にぶい黄褐色粘質土10YR4/3
47. 黒褐色粘土～粘質土10YR3/1
48. 暗赤灰色粘質土10R4/1
49. 黄灰色粘質土2.5Y5/1
50. オリーブ黄色砂質土5Y6/3
51. 灰黄色微砂2.5Y6/

第７図　北方地蔵遺跡北壁土層断面図（1/100）

２．弥生時代の遺構・遺物

（１）概　　要

北方地蔵遺跡の今次の調査で検出された弥生時代の遺構は溝が４条であった。このうち、東半部から検出された３条の溝は平行し、西端の１条の溝はそれらと直交する方向をとっていた。溝２～４は位置関係から同時の弥生時代後期の可能性が高い。隣接する北方薮ノ内遺跡の西端でも、弥生時代後期から古墳時代にかけての平行する溝群が検出され、この付近では長期にわたり用水路が維持されていたものとみられる。ただ、両遺跡の溝の方向はやや異なっていた。弥生時代前期の水田層と同じ層が全域にみられたが、溝とともに後世の削平を受けたためか、畦は検出できなかった。（岡本）



第８図　北方地蔵遺跡弥生時代遺構配置図（1/300）

（２）溝

溝１（第８・９図）

調査区の北西隅で一部を検出したにとどまる。溝の幅が48cm、深さは46cmを測った。溝の壁は垂直で、断面形は箱形を呈していた。出土遺物はなく、弥生時代前期の層の上面で検出された。（岡本）

溝２（第８・９図）

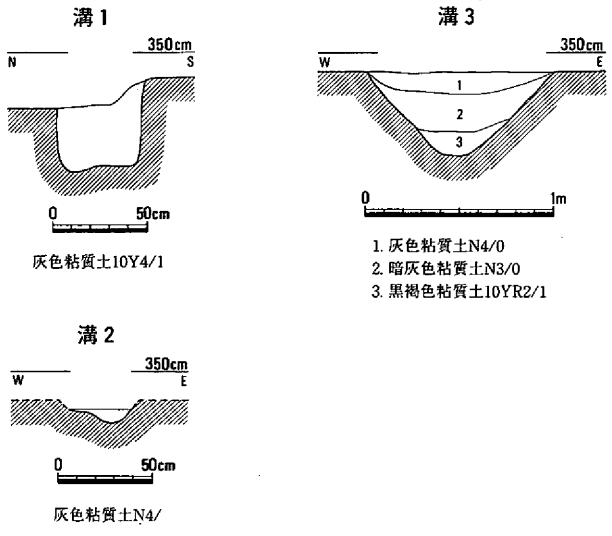
調査区の東半、ｘ５ｙ40区の南東部で検出された。北北東から南南西の方向をとる直線的な溝で、幅26cm、深さ８cmと細くて浅かった。出土遺物はないが、溝４と平行し、同期とみられる。（岡本）

溝３（第８・９図）

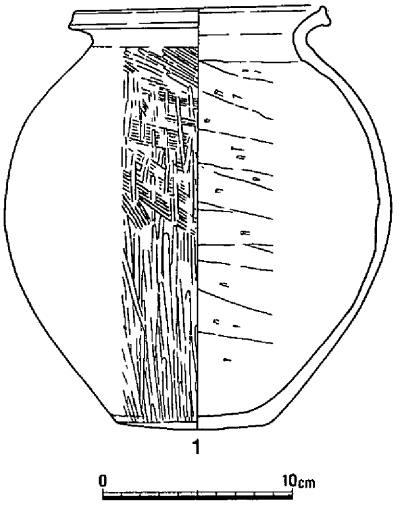
ｙ41線を跨ぎ、溝２の東７ｍで平行して検出された。溝の幅が100cm、深さは45cmで、断面形は「Ｖ」字状を呈していた。埋土は３層に分けられたが、おもには色調の変化による細別である。出土遺物はなかったが、位置関係から溝２・４と近接した時期のものとみられる。（岡本）

溝４（第８・10図）

調査区の東端で一部を検出したのみであるが、溝２・３と平行していたとみられる。第６図の東端に断面がみられるが、かなり幅の広い溝になるようである。溝の深さは40cmを超える。図示した土器は上層の第７図第43層から完形に近い状態で出土した。弥生時代後期中葉の甕とみられる。（岡本）



第９図　溝１～３断面図（1/40）

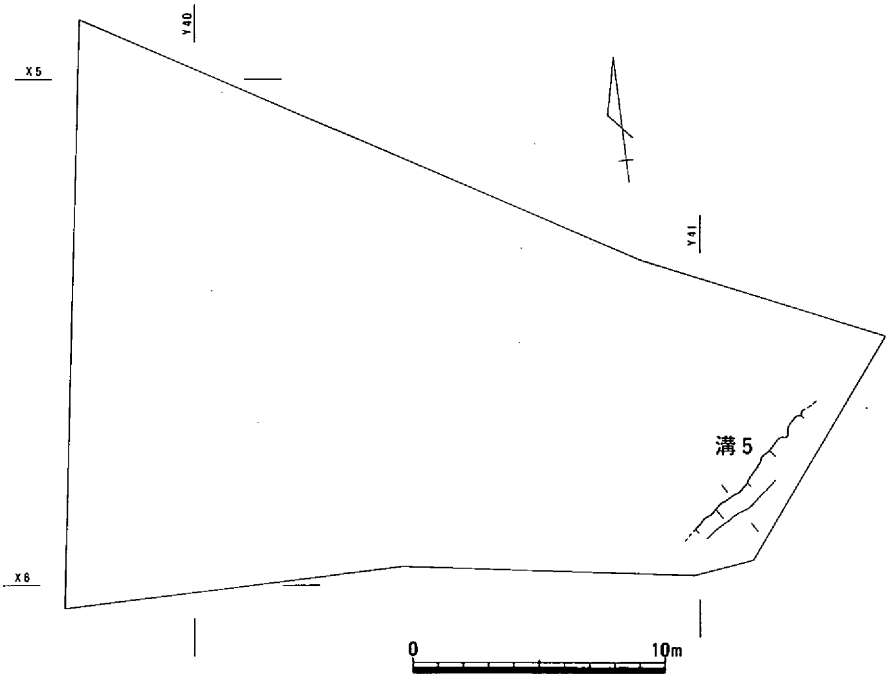


第10図　溝４出土遺物（1/4）

３．古代の遺構・遺物

（１）概　　要

北方地蔵遺跡から検出された古代の遺構は溝１条のみで、それも調査区の南東隅で一部を検出したにとどまる。溝５の検出面は、後述する中世の粘土採掘坑の検出面と等しく、溝５の年代は古代末期とみられる。東隣の北方薮ノ内遺跡でも多くの古代の溝が検出されたが、溝５は溝15とほぼ平行し、規模や埋土も類似することから共存した可能性が強い。　（岡本）

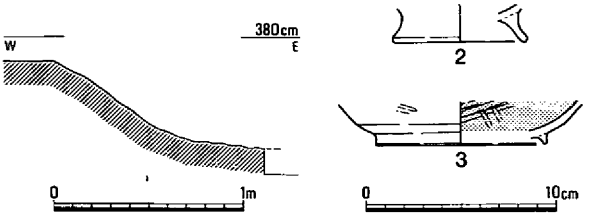


第11図　北方地蔵遺跡古代遺構配置図（1/300）

（２）溝

溝５（第11・12図）

調査区南東隅で一部を検出した。大形の溝とみられ、中心は現市道下にある。検出部分で幅110cm、深さ50cmを測った。埋土は砂で、古代末の土師器２や黒色土器３の椀が出土した。　（岡本）

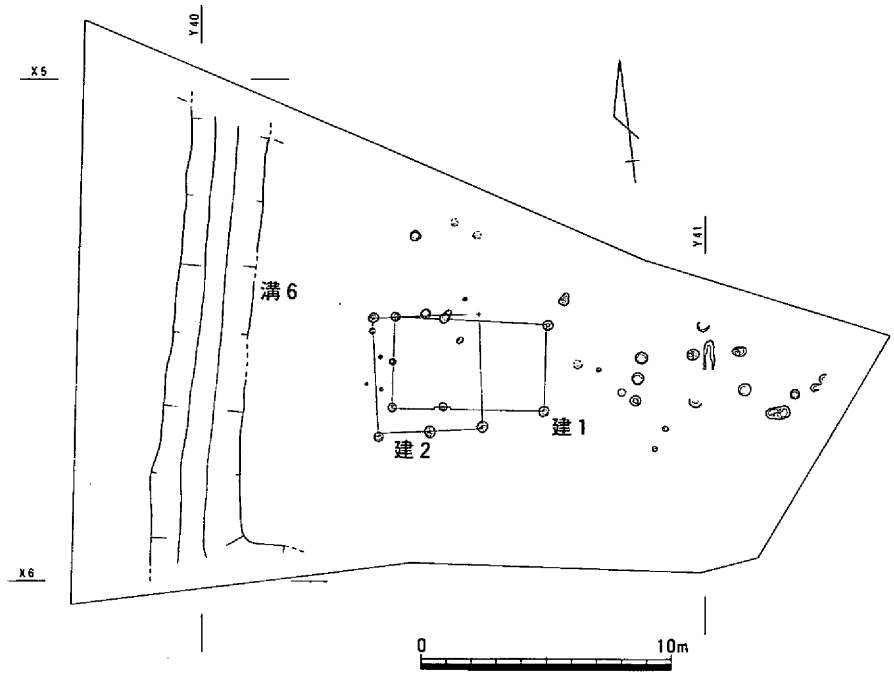


第12図　溝５断面図(1/40)・出土遺物(1/4)

４．中世～近世の遺構・遺物

（１）概　　要

北方地蔵遺跡で検出された中世の遺構は、その検出面の違いから３時期に分けることができる。もっとも上方にあったのは溝６で、第７図第17層の洪水堆積の砂層上面で検出された。中世末期から近世にかけての溝とみられる。つぎに、洪水砂層を除去して検出された遺構群で、第13図の柱穴群があり、建物が２棟確認できた。中世後期の室町時代のものと考えられる。したがって、第13図は中世後期に存在した全遺構の配置を示したものであり、溝と柱穴群は共存していなかった。



第13図　北方地蔵遺跡中世～近世遺構配置図（1/300）

もっとも下で検出された遺構は中世包含層を除去して検出された粘土採掘坑であり、中世前期の鎌倉時代のものとみられる。第14図に全体の配置状況を示した。粘土採掘坑の検出面は古代末期の溝５の検出面と等しく、中世になってから全域で地下げの行われた可能性が強いと考える。中世後期に至って集落域になったと推測されるが、隣接する北方薮ノ内遺跡の集落がこの地区まで続いていたものとみられる。（岡本）

第14図　北方地蔵遺跡中世遺構配置図（1/300）

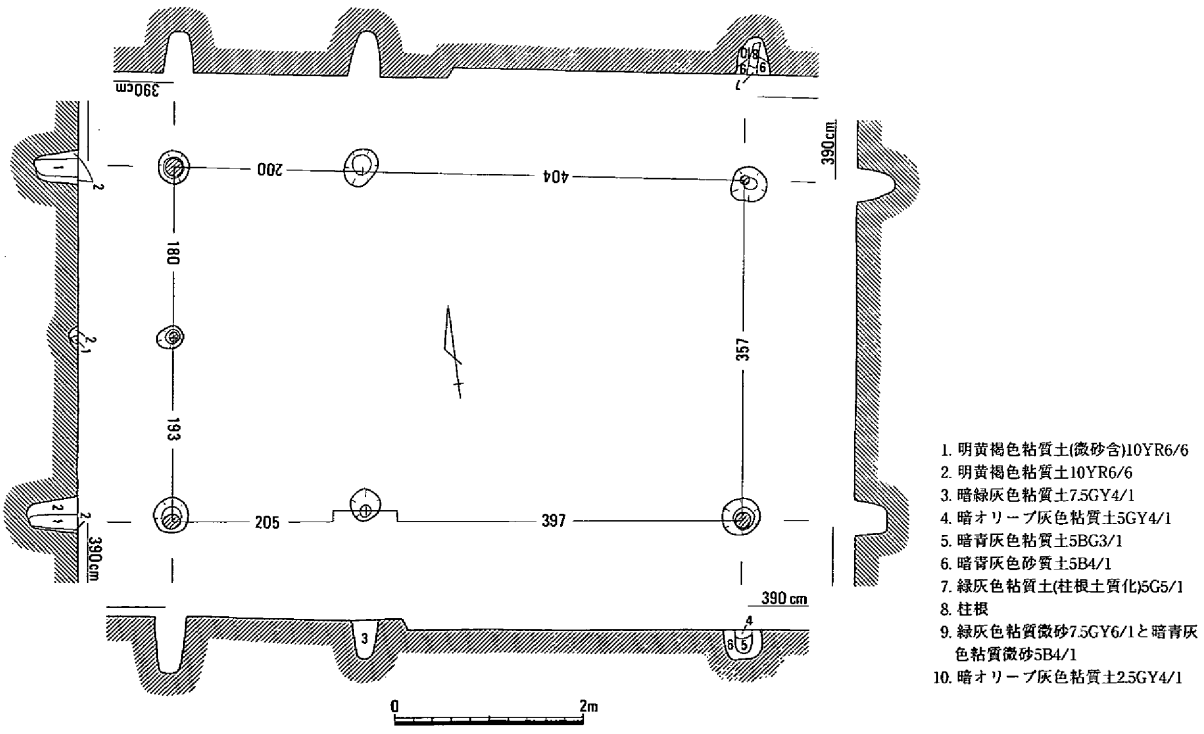
（２）建　　物

建物１（第13・15図）

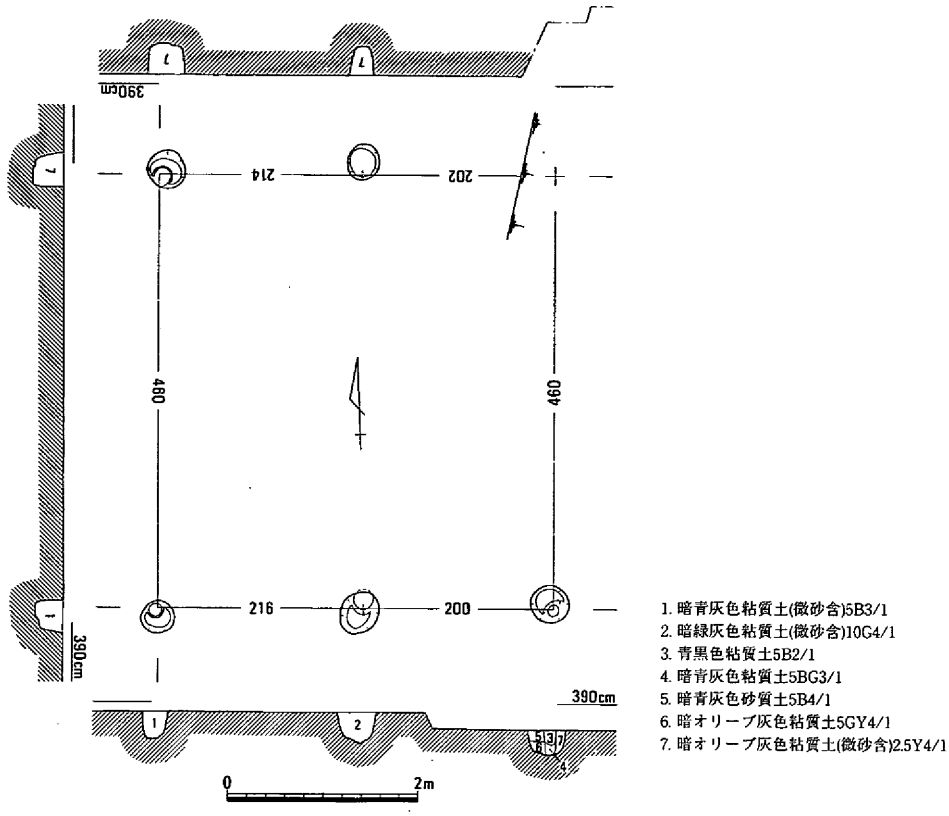
ｘ５ｙ40区の中央付近に位置していたが、旧ａ区とｂ区に跨って検出されたため、調査時には図示したような形では認識できず、ｂ区検出の柱穴のみで建物を推定していた。東西棟の掘立柱建物で、３×２間の構造と考えられる。図上では桁行は２間だが、東端の柱穴とその西の柱穴との間がａ区とｂ区の境で、調査区の側溝を掘削したり、池の底部が荒れていたために柱穴と粘土採掘坑の検出面が同一面となったために見落としたものと思われる。桁行の柱間をみると、東の柱間は397cmと404cmで、西の柱間205cmと200cmのほぼ倍になっていて、東の柱間の中間に柱穴を１個想定するのが自然である。梁間は２間だが、中央の柱穴はきわめて浅いため束柱の可能性が高い。東側梁間の中央柱穴は後世の削平で消滅したものとみられる。梁間の全長は東側が357cm、西側が373cm、建物の床面積は22㎡を測る。柱穴は円形で、長径が30～44cm、深さは最大で60cmであった。西側梁間の中央柱穴の深さは８cmにすぎなかった。建物の年代は検出面から判断して室町時代と考えられる。　　（岡本）

建物２（第13・16図）

建物１とほぼ重複する形で検出された。やはり旧ａ区とｂ区に跨っていたため、建物１と同様に図上で構築された。各辺の全長から南北棟の掘立柱建物と考えているが、建物１のように柱穴の見落としを恐れている。梁間の中央柱穴が建物１のように浅くはなく、両端の柱穴と同じ深さで、長径もほぼ等しいためである。残念ながら３間の桁行の東西棟建物であった可能性を完全には否定できない。とくに２棟の建物の重複関係から、建て替えの可能性が強いだけになおさらである。梁間の柱間は、北が202cmと214cm、南は200cmと216cmで、梁間全長は416cmを測った。桁行全長は460cmで、建物の床面積は19.1㎡であった。柱穴は円形で、長径が36～44cm、深さは最大で36cmだった。　　（岡本）



第15図　建物１（1/80）

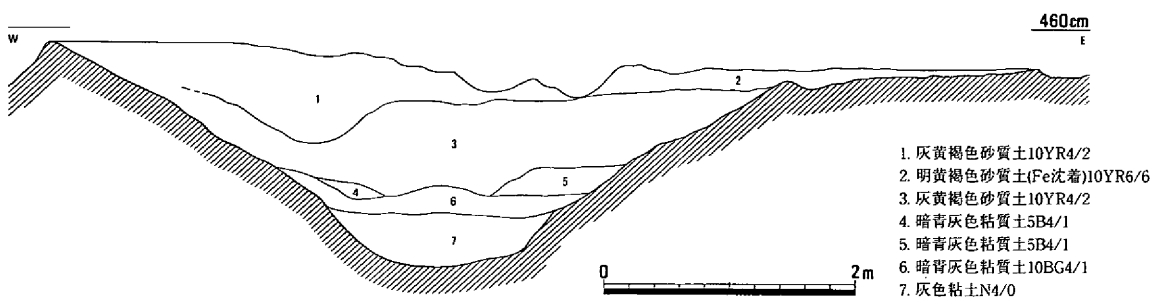


第16図　建物２（1/80）

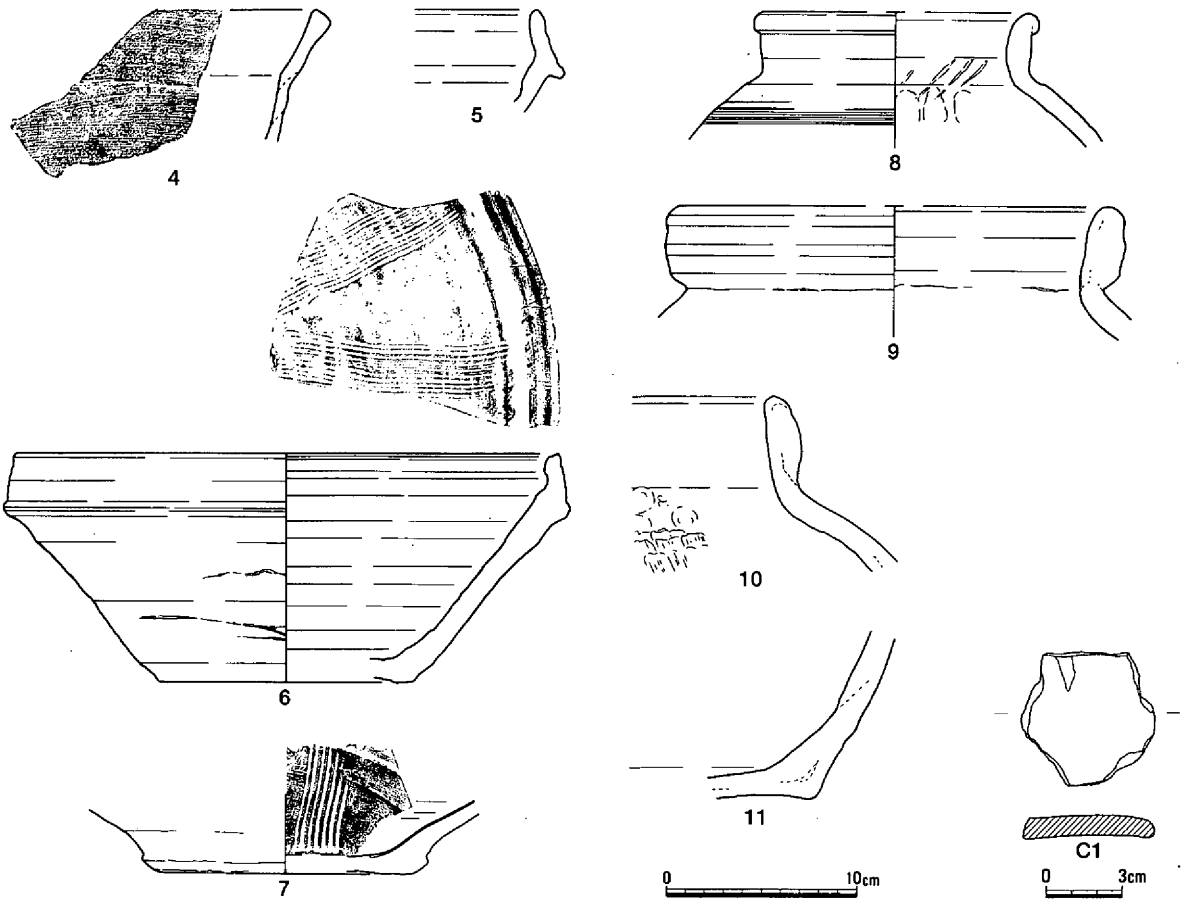
（３）溝

溝６（第13・17・18図）

調査区西半を南北に走る大溝である。溝の幅は３～3.5m、深さは1.8mを測った。溝の走行はほぼ真北を向き、遺跡周辺に広く残存している条里地形と合うようで、条里地割りの規制の中で掘削された溝とみられる。溝の埋土は７層に分けられたが、大きくみれば上層の砂質土と下層の粘質土に二分された。粘質土からは図示したような遺物が多く出土したが、上層からは遺物の出土がほとんどなく、上層の埋没が短期間であったと思われる。土質からみれば、再び洪水が襲ったものであろうか。人為的な埋没とは考えられない。第18図に示した遺物のうち、４は瓦質土器、５～11は備前焼、Ｃ１は土師質土器片を転用した円板状土製品である。６の擂鉢の口縁端部断面は方形に近く、内面下端には凹線状の段が巡る。９の甕の口縁部は玉縁を上下に拡張し、外面には凹線を施している。遺物の年代は16世紀後半とみられ、溝が機能していたのは中世末期から近世初頭頃と考えられる。　（岡本）



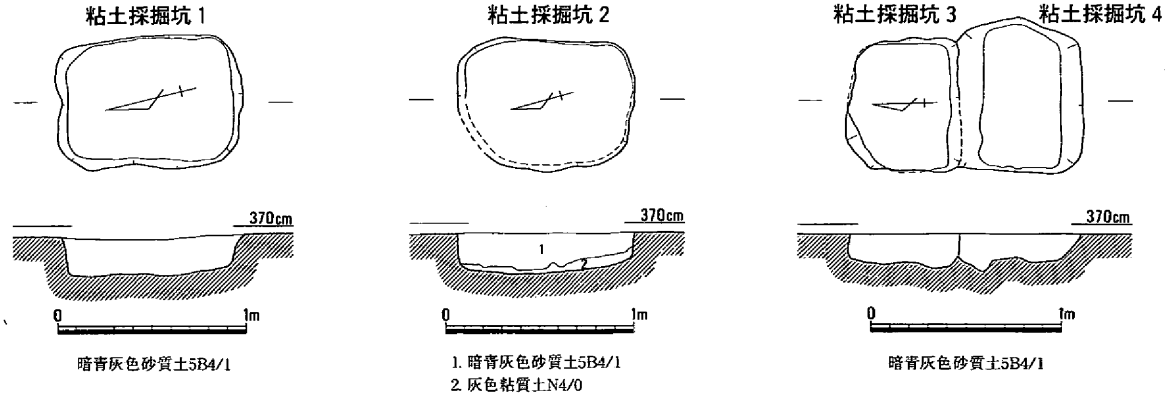
第17図　溝６断面図（1/60）



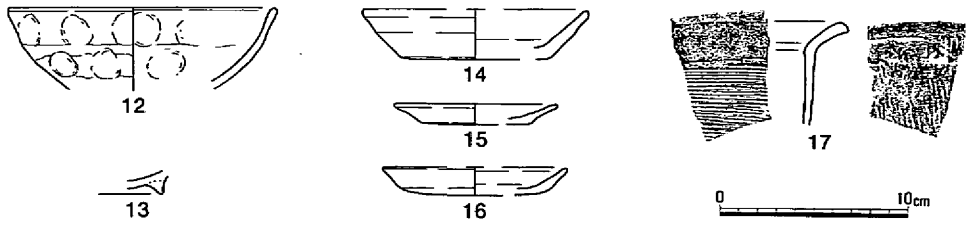
第18図　溝６出土遺物（1/4・1/3）

（４）粘土採掘坑

ｙ41線の西２ｍ付近から西で、中世包含層の下から大量の穴が検出された。個々の穴は長方形ないしは楕円形の平面形をもっていたが、そのほとんどは他の穴と重なり合っていた。なかには頻繁な重複が繰り返されて、溝状のくぼみを呈している部分も認められた。これらの穴は、万国Ｉの報告書（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』126）で述べたように、今回の調査区の西に近接していた北方地蔵遺跡３区で検出された粘土採掘坑の続きと考えられた。ｙ41線付近で検出されなくなるが、採掘坑群の東端が南北方向をとることは、当時の地割りや土地利用を考える上で留意される。



第19図　粘土採掘坑１～４（1/40）

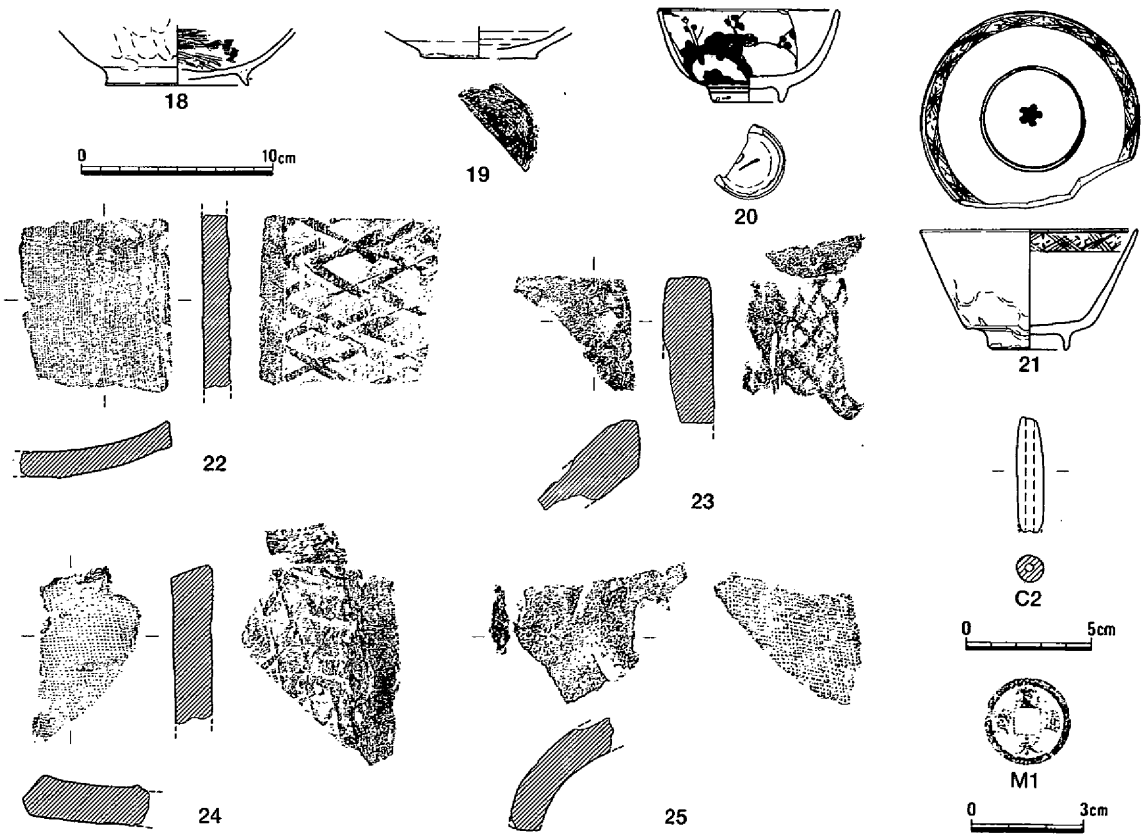


第20図　粘土採掘坑出土遺物（1/4）

第20図に粘土採掘坑の典型的なものを示した。粘土採掘坑１は長方形で、長軸が100cm、短軸は70cm、深さ20cmを測った。粘土採掘坑２の長径は99cm、同３は73cm、同４は82cmであった。第19図には粘土採掘坑から出土した土器を示した。いずれも土師質土器である。12・13は椀、14は杯、15・16は小皿、17は鍋である。これらの土器の年代から粘土採掘坑は13世紀前半とみられる。（岡本）

５．その他の遺物（第21図）

北方地蔵遺跡の今次の調査区からは、前述の遺構以外からも多くの遺物の出土をみたが、その一部を第21図に示しておく。18は黒色土器の椀である。19は須恵質土器の椀で、底面には糸切り痕跡を残している。20・21は典型的な伊万里焼の染め付け磁器椀である。20は外面に梅樹を描き、21は広東型の染め付け青磁で、口縁部には四方襷文、見込みには五弁花のスタンプ文を飾る。旧ｂ区のゴミ穴から出土した。18世紀後半のもので、屋敷地が江戸時代以来のものであることを示すか。22～25は中世の瓦片である。周辺に瓦葺きの建物が存在していたことが考えられる。Ｃ２は土錘で中世後期の柱穴群から出土した。Ｍ１は銅銭で「寛永通寶」と読める。新寛永銭である。（岡本）



第21図　包含層ほか出土遺物（1/4・1/3・1/2）

第３節　北方薮ノ内遺跡の概要

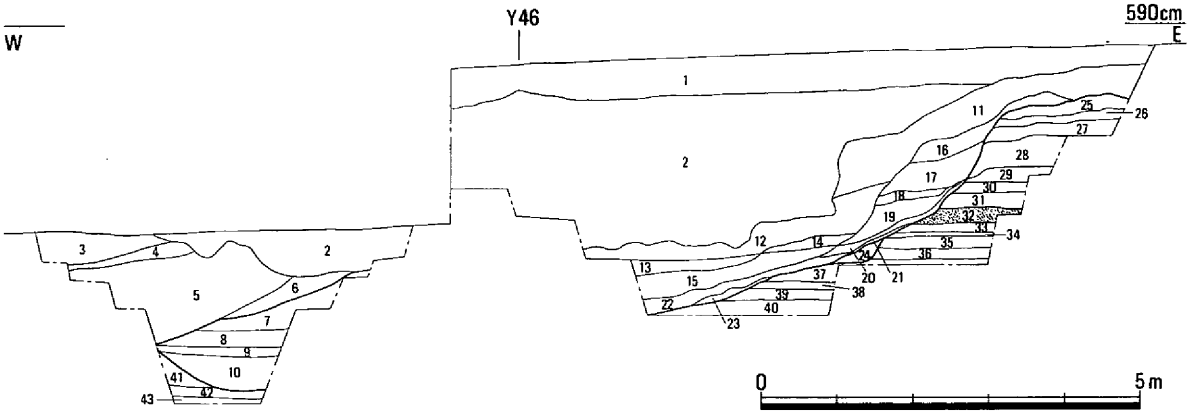
１．概　　要

北方薮ノ内遺跡は、北方地蔵遺跡との境になる市道以東に位置し、東端は旧旭川と考えられる近世河道となる。調査は、排土や生活道路の付け替えの関係で13調査区に分割して行なったが、報告書の記述は、西端から西川までを１区、西川東の市道までを２区、新幹線高架下までを３区としている。

第23図は１区の北壁土層断面図である。表土直下の第18・19・43層上面が中世～近世遺構検出面である。第20～42層は１区を東西に貫く溝の堆積で、里境に位置するものであろう。第66～71層は１区東半を占める古代の旧河道の堆積で、１区が屋敷地として利用されるのは、この旧河道埋没後の12世紀後半以降と考えられる。第72層上面は古代の遺構の検出面で、第117層上下面は弥生～古墳時代の遺構の検出面である。第119層は北方地蔵遺跡以東で確認される黒褐色粘質土である。

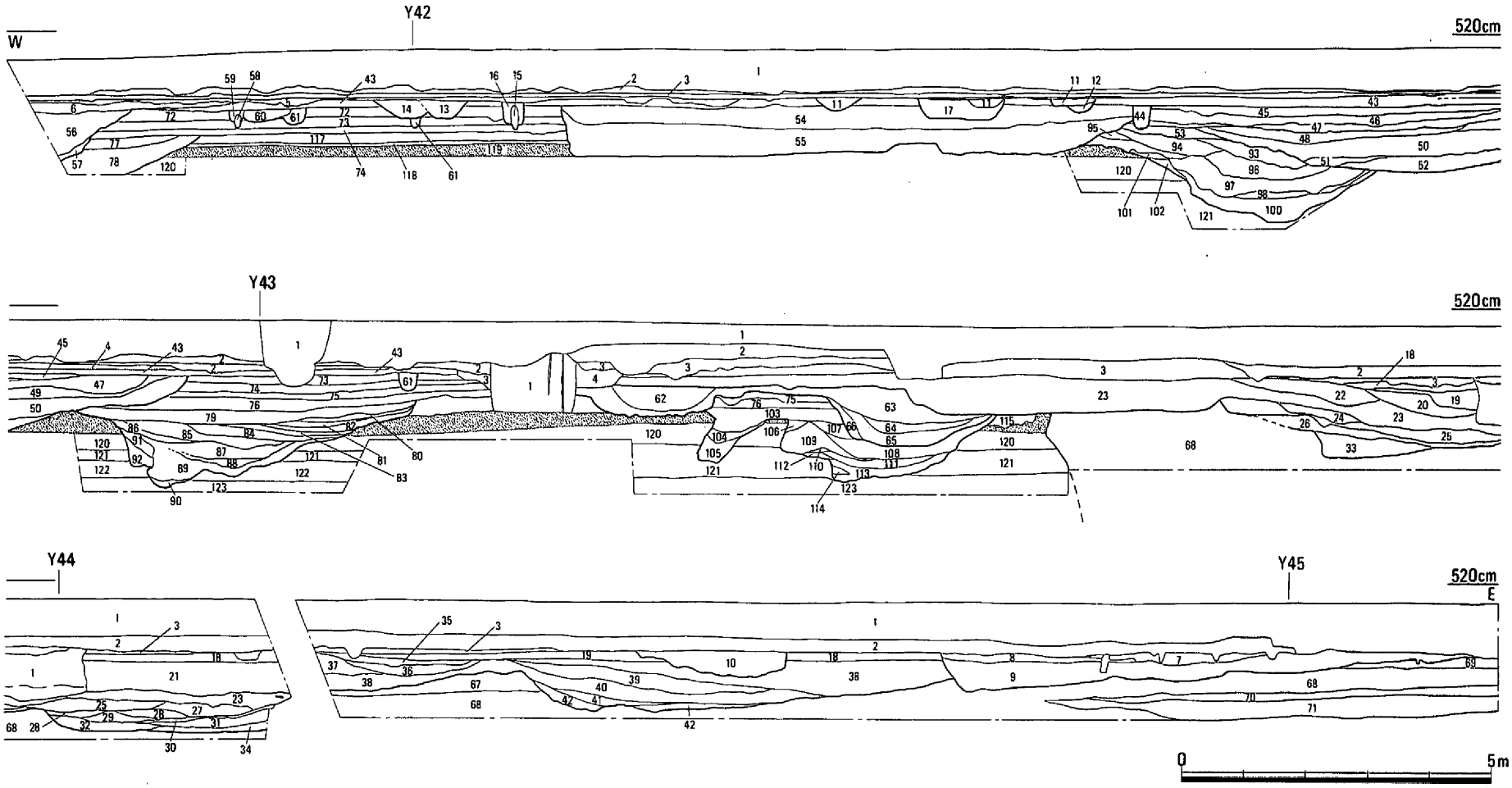
第22図は２区の南壁土層断面図である。第３～６層と第７～23層は、現西川以前の旧河道の堆積である。この旧河道の東肩は旧津山・倉敷往来で、現在の市道に重なる。第25～28層の洪水砂で覆われる第29層は３区から続く中世水田層と考えられる。

第24図は３区の北壁土層断面図である。第９～15層は近世河道の堆積で、海抜190cm以下は激しい湧水のため掘り下げ不可能であった。第22～27層は洪水の堆積と考えられ、第29・31層の中世水田層と第32・33層の畦畔を覆っている。田面の標高は海抜410cm前後である。第28・30層は中世段階の土壙の埋土と考えられ、北方地蔵遺跡で検出した粘土採掘坑と検出状況が酷似する。　　（高田）



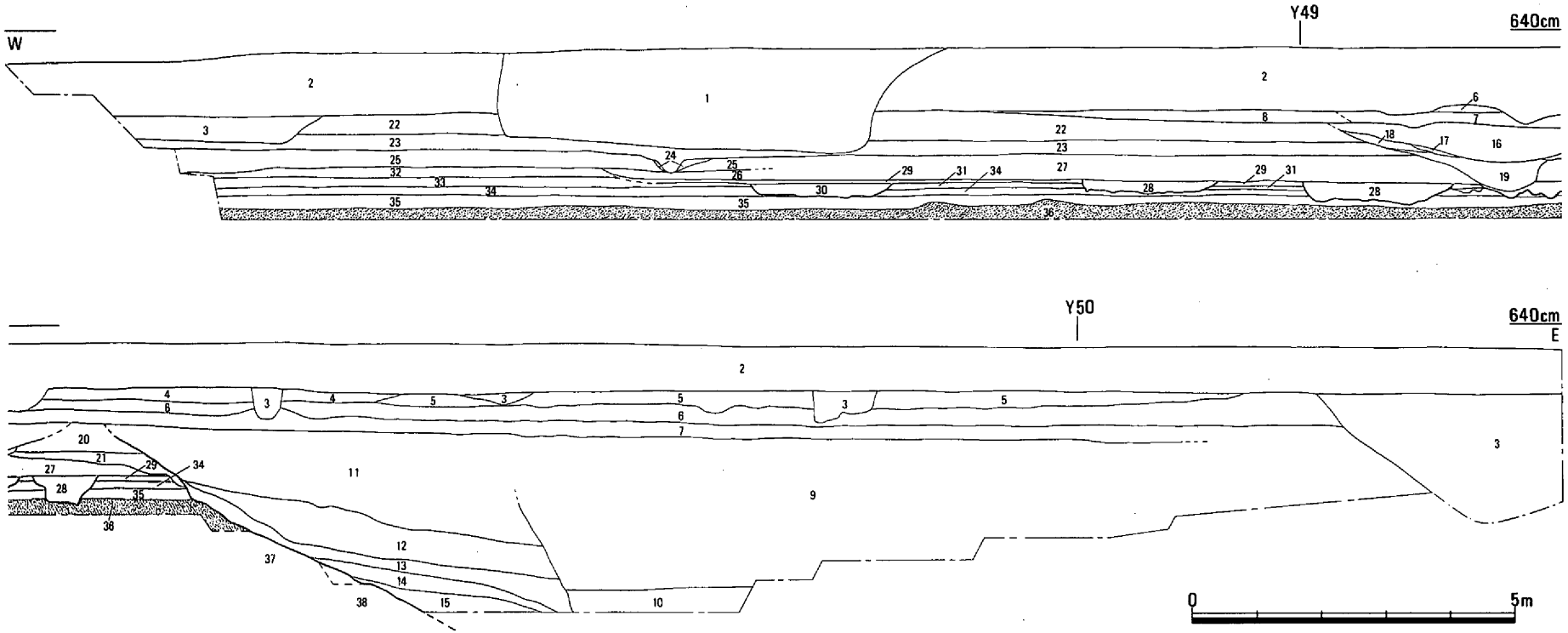
1. 現代造成土
2. 現代攪乱(オリーブ黒色細砂)
3. 淡茶褐色粘質微砂
4. 淡青灰色細砂
5. シルトと微砂の堆積
6. シルトと微砂の堆積
7. 灰色微砂
8. 灰色シルト
9. 灰色微砂
10. 灰色粘質微砂
11. にぶい赤褐色微砂5YR5/4と灰褐色粘質微砂5YR5/2(オリーブ黄色微砂斑多含)
12. にぶい褐色微砂(グライ化部分は緑灰色粘質微砂)7.5YR5/3
13. 緑灰色粘質微砂10G4/1
14. にぶい褐色微砂7.5YR6/3
15. 緑灰色粘土10GR5/1
16. 灰褐色粘質微砂5YR5/2
17. にぶい黄褐色微砂10YR5/3と灰オリーブ色微砂5Y6/2とにぶい赤褐色粗砂5YR5/4の互層
18. にぶい褐色微砂7.5YR6/3
19. にぶい褐色微砂7.5YR5/4
20. にぶい黄色粘質微砂2.5Y6/3
21. 黄灰色粘土2.5Y4/1
22. 黄灰色粘土2.5Y5/1
23. 暗灰黄色粘質微砂2.5Y5/2
24. 褐灰色粘土10YR4/1＊溝8埋土
25. 灰オリーブ色微砂(オリーブ黄色微砂斑含)7.5Y4/2
26. 灰オリーブ色微砂(オリーブ黄色微砂斑含)7.5Y5/2
27. 灰オリーブ色微砂(26層より粒子細い)7.5Y5/2
28. 灰オリーブ色微砂7.5Y5/3
29. オリーブ黄色粘質微砂7.5Y6/3
30. 灰黄褐色粘質微砂10Y6R5/2
31. 褐灰色粘質微砂10YR6/1
32. 黒褐色粘土(Mn多沈着)10YR3/1
33. 灰黄褐色粘土10YR4/2
34. 灰黄褐色粘質微砂10YR4/2
35. 黄灰色粘土2.5Y5/1
36. 黄灰色粘質土2.5Y5/1
37. にぶい黄褐色粘質微砂10YR5/3
38. オリーブ灰色微砂2.5Y6/1
39. にぶい黄褐色粘質土10YR5/3
40. オリーブ灰色粘土2.5GY5/1
41. 暗灰色粘質土
42. 灰黄色粘質土
43. 明灰色粘質土

第22図　北方薮ノ内遺跡２区土層断面図（1/100）



1. 近・現代造成土・溝・ノッポ
2. 近現代水田耕土・床土
3. 灰色微砂7.5Y5/1 ＊近現代
4. 灰色微砂5Y5/1
5. 灰褐色粗砂(Fe多沈着)5YR6/2
6. 灰褐色砂質土(FeMn沈着)7.5YR5/2
7. にぶい黄色微砂5Y6/3
8. 灰オリーブ色粘質砂～微砂(FeMn沈着)
9. オリーブ黄色微砂5Y6/3
10. 溝34埋土
11. 灰黄色微砂2.5Y6/2
12. 暗灰黄色砂質土2.5Y6/2
13. 溝22埋土
14. 溝23埋土
15.1 6.柱穴埋土
17. 柱穴埋土
18. 灰オリーブ色微砂(灰色微砂斑含)7.5Y5/2
19～42. 溝24埋土
43. 灰黄色砂質土(Mn多沈着)2.5Y6/2
44. 暗灰黄色粘質土(炭・焼土粒多含)2.5Y5/2
45～53. 溝15埋土
54.55. 溝10埋土
56.57. 溝20埋土
58. 灰黄褐色粘質土10YR5/1柱穴埋土
59. 暗灰黄色粘質土2.5YR5/1柱穴埋土
60. 灰黄褐色粘質土10YR5/1
61. 灰黄褐色砂質土(にぶい黄褐色砂質土斑多含)10YR5/1
62. 溝18埋土
63～65. 溝19埋土
66. 灰オリーブ色微砂5Y5/2
67. 暗灰黄色粗砂(上部Fe沈着)2.5Y5/2 ＊旧河道1埋土
68. にぶい黄色微砂2.5Y5/2＊旧河道1埋土
69. 灰黄褐色微砂(Mn多沈着)10YR6/2 ＊旧河道1埋土
70. 褐灰色粗砂5YR5/1 ＊旧河道1埋土
71. にぶい褐色粗砂7.5YR5/4 ＊旧河道1埋土
72. にぶい黄褐色砂質土10YR5/3
73. にぶい黄色微砂2.5Y6/3
74. 黄灰色粘質微砂2.5Y5/1
75. オリーブ黄色粘質微砂7.5Y6/3
76. 灰オリーブ色粘質微砂7.5Y5/3
77. オリーブ黄色粘質微砂5Y6/3＊溝埋土
78. 暗灰黄色粘質土2.5Y5/2＊溝埋土
79～92. 溝2・3埋土
93～102. 溝1埋土
103～114. 溝4・5埋土
115. 灰褐色粘質土7.5YR5/2
116. 灰オリーブ色粘質土5Y4/2
117. オリーブ黄色粘質微砂7.5Y6/3 ＊土壌分析試料3
118. にぶい黄褐色粘質土10YR4/3
119. 黒褐色粘質土10YR3/1 ＊土壌分析試料4
120. 褐灰色粘質土10YR4/1 ＊土壌分析試料5
121. 暗灰黄色粘質土2.5Y5/2
122. にぶい黄褐色粘質砂10YR5/4
123. にぶい黄色微砂2.5Y6/4

第23図　北方薮ノ内遺跡1区北壁土層断面図（1/100）



1. 攪乱
2. 現代造成土
3. 近・現代攪乱
4. 明黄褐色土2.5Y7/6と黄灰色2.5Y6/1(円礫多含)＊造成土
5. 黄褐色微砂10YR5/6
6. にぶい黄褐色微砂(褐灰色粘質土小斑多含)10YR5/4
7. 灰黄褐色粘質微砂＊水田層
8. 褐灰色粘質土10YR6/1
9. 灰色粘質微砂(上部ほど褐色強と微砂質強)＊河道5埋土
10. 赤褐色粗砂(Fe沈着)2.5YR＊河道5埋土
11. 灰黄褐色粘質微砂(下部にぶい黄色微砂顕著)10YR5/2
12. 灰黄褐色粘質微砂10YR5/2
13. 灰色粘質微砂5Y6/1
14. 黄灰色粘質微砂(Fe沈着)2.5Y6/1
15. 緑灰色微砂10GY6/1と緑灰色粘質微砂10GY5/1の薄い互層
16. 黄褐色微砂2.5Y5/3
17. 暗灰黄色粘質微砂2.5Y5/2
18. 褐灰色粘質微砂10YR6/1
19. にぶい黄色微砂2.5Y6/4
20. にぶい褐色微砂7.5Y5/3＊河道5埋土
21. 灰黄褐色砂質土10YR6/2＊河道5埋土
22. 黄褐色微砂2.5Y5/3
23. 灰黄色微砂2.5Y6/2
24. 暗灰黄色粘質微砂2.5Y5/2
25. 黄褐色微砂(炭・焼土粒多含)2.5Y5/3＊中世水田を覆う洪水砂
26. 暗灰黄色粘質微砂2.5Y5/2
27. にぶい黄褐色微砂質土10YR5/4
28. にぶい褐色粘土7.5Y6/3＊津・土堰(中世)埋土
29. オリーブ黄色粘土(下部Fe沈着)7.5Y6/3＊中世水田層
30. オリーブ灰色粘土(Mn沈着)10Y6/2＊中世土壌埋土
31. オリーブ黄色粘土(下部Mn・Fe沈着)7.5Y6/3
32. にぶい黄色粘質土2.5Y6/4＊畦畔
33. オリーブ黄色粘質土5Y6/4
34. 褐灰色粘質土10YR5/1
35. 灰黄褐色粘質土10YR5/2
36. 黒褐色粘質土(Mn多含)10YR3/1
37. 黄褐色砂質土2.5Y5/4
38. にぶい黄色微砂2.5Y6/4

第24図　北方薮ノ内遺跡３区北壁土層断面図（1/100）

２．弥生～古墳時代の遺構・遺物

（１）概　　要

弥生～古墳時代の遺構は、古代の旧河道１以西の１区西半で溝７条を、２区で溝１条を検出している。いずれも東北―南西方向に流路をもち、ほぼ直線的に並走する。検出面の標高は、溝１～３が約380cmとやや高く、溝４～８は360cm以下であった。溝底の標高は、溝１～８の順に242cm、230cm、323cm、269cm、239cm、279cm、331cm、274cmである。狭い調査区内での検出であり、各溝における底のレベル変化は乏しいが、概ね東北から南西に低くなる傾向がみられ、同方向への流水が想定される。

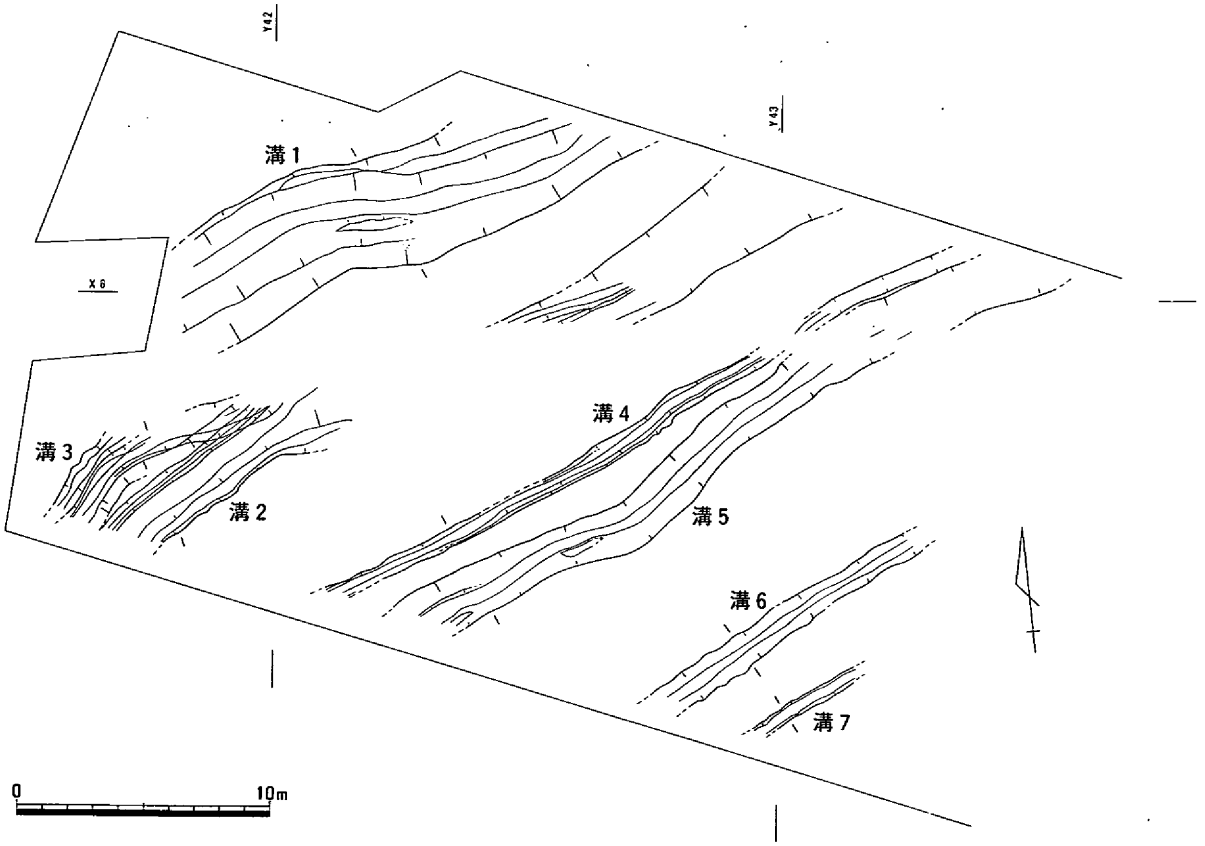
出土遺物は溝１でややまとまった量を確認した他は、溝２・３・７で少量みられ、その他の溝では皆無であった。

出土遺物と検出レベル、埋土の堆積状況から、弥生時代後期後葉から古墳時代にかけての溝１～３と、それらよりも古い時期の溝４～８のまとまりが考えられる。また、他の遺構が存在しないことと、遺物の出土状況から、生活域と隔たり、用水路が集中する地域であったことが窺える。　　（高田）

（２）溝

溝１（第25・27図、図版２－２）

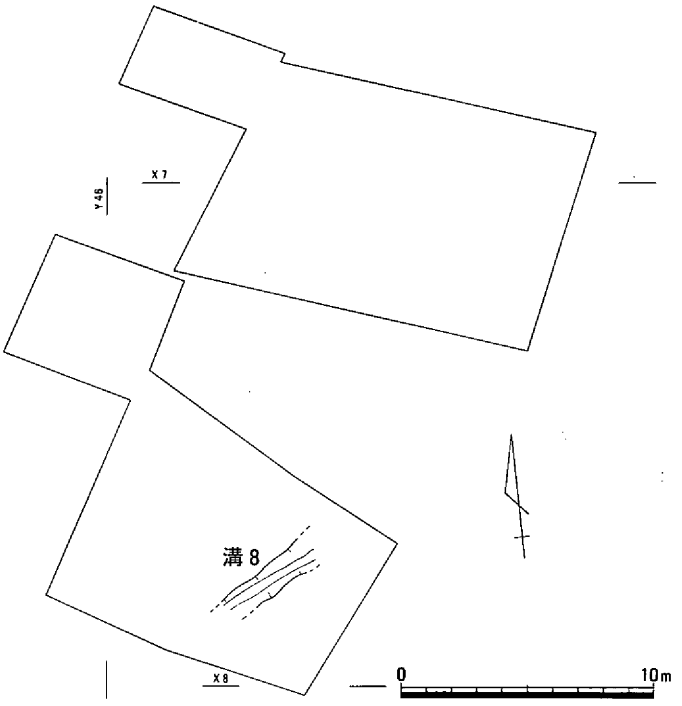
１区西端に位置し、やや蛇行しながら北東―南西方向に流走する溝である。黄灰色粘質微砂層（第23図74層）上面の標高380cmで長さ20ｍを検出したもので、その規模は幅4.8ｍ、深さ約1.5ｍを



第25図　北方薮ノ内遺跡１区（西半）弥生～古墳時代遺構配置図（1/300）

測る。溝底の標高は北東端で242cm、南西端で224cmである。断面形態は比較的緩やかな「Ｖ」字形を呈し、斜面中途に段をもつ。これは、後述する上・中層段階の流路によるものと考えられる。埋土は上層（１～７層）・中層(８・９層)・下層（10～14層）に大別される。

遺物はすべて上層からの出土である。壺**26**は「く」の字状口縁である。甕**27**は２重口縁の屈曲部外面をやや下方に拡張し、甕**28**は「く」の字状の口縁で、わずかに底部をもつ。鉢**29**は外面下半にタタキ後ハケメを施す。鉢**30**は台付、鉢**31**は内外面ヘラミガキで外面に一条の凹線を施す。



第26図　北方薮ノ内遺跡２区弥生時代遺構配置図
(1/300)

溝の時期は、弥生時代後期後葉と考えられる。（高田）

溝２（第25・28図、図版２－３）

溝１に平行するように北東から南西方向に流走する溝である。溝３は本溝の再掘と考えられる。検出規模は、最大幅約５ｍ、深さ約1.5ｍを測り、底面中央が幅40cm、深さ30cmに一段深くなる。断面形態は逆台形で、斜面に段をもつ。埋土は微砂と粘質微砂で、一段深い部分に粘土が堆積している。

遺物は主に上部から出土しており、図示した土器は土師器の甕**32**と台付鉢**33**である。

溝の時期は、検出状況と出土遺物から古墳時代初頭と考えられる。（高田）

溝３（第25・28図、図版２－３）

先述した溝２の再掘と考えられる溝で、検出規模は幅1.2ｍ、深さ30cmを測る。断面形態は「Ｕ」字形を呈する。出土遺物の須恵器杯身**34**は、口径14.6cm、器高5.7cmを測るほぼ完形品である。

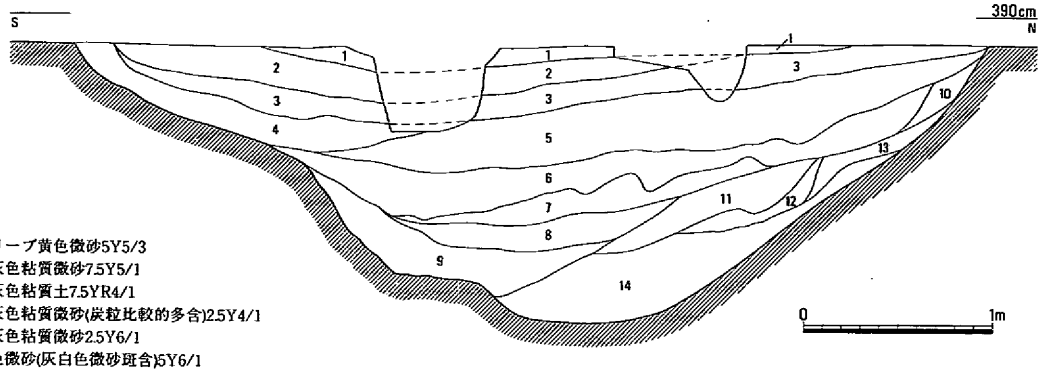
溝の時期は、出土遺物から６世紀前半代と考えられる。（高田）

溝４（第25・29図、図版２－３・６－３）

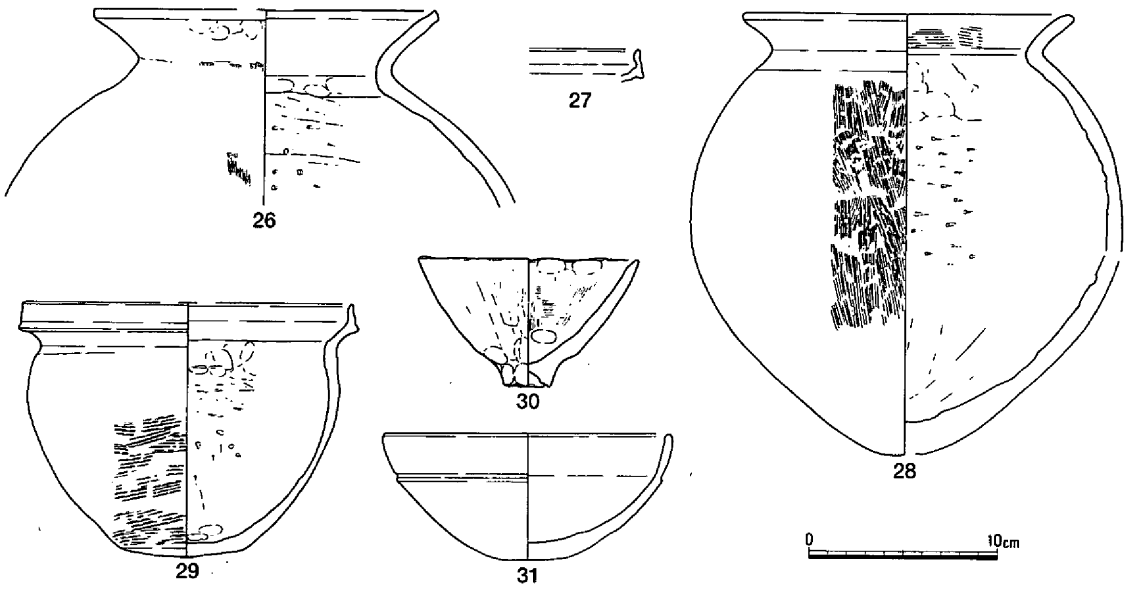
１区西半のほぼ中央を東北―南西方向に直線的に流走する溝である。溝５とは東北端で接するが、その他では約１ｍの間隔をもって並走する。検出規模は最大幅・深さが約90cmを測る。断面形態は下半が明瞭な箱形で上部が逆「ハ」の字形を呈し、周辺の溝と異なる。埋土は下半がブロック充填の埋め戻しと推定される。出土遺物は皆無で、検出状況から弥生時代の溝と考えられる。（高田）

溝５（第25・29図、図版２－３・６－４）

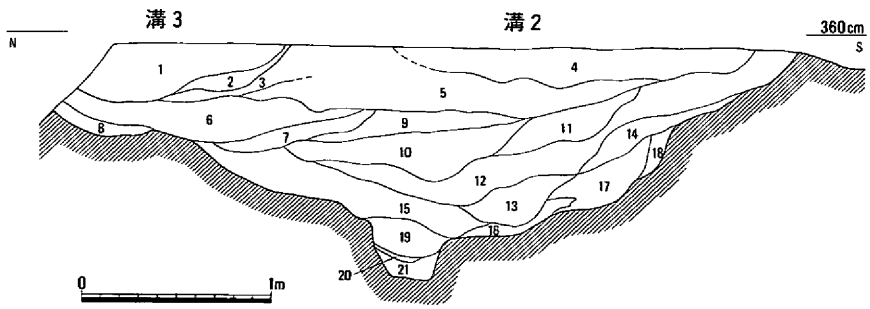
先述の溝４の南東側に位置し、ほぼ直線的に流走する溝である。残りの良好な地点での検出レベルは標高360cmで、規模は最大幅で約2.3ｍ、同深さ約1.2ｍを測る。断面形態は「Ｕ」字形を呈する。埋土は顕著な微砂の上層（５・６層）と、中層（７～13層）・下層（14・15層）に大別され、それぞれの段階での機能が推定される。出土遺物は皆無であるが、調査区北壁において溝４と共通する最上層の埋土を確認したことから、近接した時期に機能したものと考えられる。（高田）

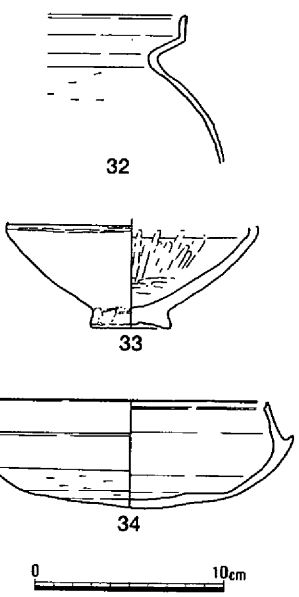


1. オリーブ黄色微砂5Y5/3
2. 褐灰色粘質微砂7.5Y5/1
3. 褐灰色粘質土7.5YR4/1
4. 黄灰色粘質微砂(炭粒比較的多含)2.5Y4/1
5. 黄灰色粘質微砂2.5Y6/1
6. 灰色微砂(灰白色微砂斑含)5Y6/1
7. 褐灰色粘質土(灰色微砂斑含)7.5YR4/1
8. オリーブ灰色粘質土(暗青灰色粘土小塊含)2.5GY5/1
9. 灰色粘質微砂(暗青灰色粘土塊含)N5/
10. 灰オリーブ色微砂(灰色微砂斑含)5Y5/2
11. 灰色粘質微砂(灰色微砂斑含)5Y5/1
12. 暗青灰色粘土塊(灰色微砂斑含)5B4/1
13. 灰色微砂5Y5/1
14. 暗緑灰色粘質微砂(灰色微砂斑,暗青灰色粘土塊含)5G4/1



第27図　溝１断面図（1/40）・出土遺物（1/4）





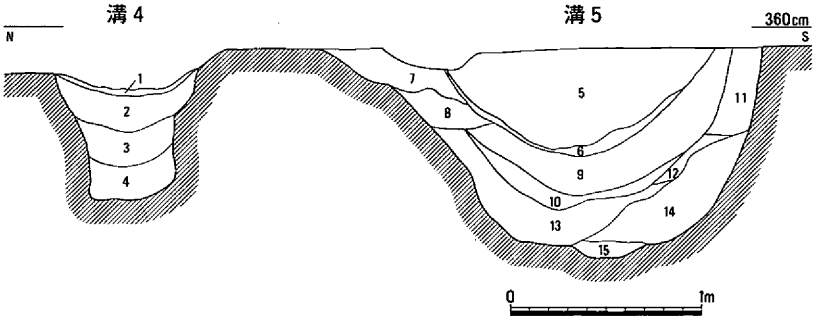
1. 灰褐色粘質微砂(明褐灰色微砂斑含)7.5YR5/2
2. 褐灰色粘質微砂(明褐灰色微砂斑含)7.5YR5/1
3. 明褐灰色微砂7.5YR7/2
4. 灰オリーブ色砂質土(Mn沈着)5Y6/2
5. 黄灰色粘質微砂(Mn沈着)2.5Y5/1
6. 灰色微砂5Y6/1と灰白色粗砂5Y7/2(Fe沈着)
7. 灰白色微砂5Y7/2
8. 灰色微砂(灰色微砂斑)7.5Y6/1
9. 黄灰色粘質微砂2.5Y5/1
10. 黄灰色微砂2.5Y5/1と灰白色微砂5Y7/2
11. 黄灰色粘質微砂2.5Y5/1
12. 灰色微砂(灰白色微砂斑含)5Y6/1
13. 緑灰色微砂
(灰白色微砂斑, オリーブ黄色粘土塊含)5G6/1
14. 褐灰色粘質土7.5YR5/1
15. 緑灰色粘土と13層の塊と灰白色微砂斑充填10GY5/1
16. 灰色微砂5Y6/1
17. 緑灰色粘土5G6/1
18. 褐灰色粘質微砂(Mn沈着)10YR6/1
19. 緑灰色粘土(暗緑灰色粘土塊含)7.5GY5/1
20. 灰オリーブ色粘質微砂5Y6/2
21. 緑灰色粘土(暗緑灰色粘土塊含)7.5GY5/1

第28図　溝２・３断面図（1/40）・出土遺物（1/4）

溝６（第25・30図）

溝５の南東約６ｍを東北―南北方向に直線的に流走する溝である。その東北端は後述する古代の旧河道１に切られ、南西端は調査区外に延びると考えられる。

検出時の規模は長さ約12ｍ、幅約1.3ｍ、深さ75cm前後を測る。断面形態は「Ｖ」字形で、上部はさらに大きく開く。埋土は比較的堅緻なレンズ状堆積を呈し、最下層の第６層の埋土に弥生時代前期の包含層と考えられる黒褐色粘質土ブロックを含んでいる。



1. 灰黄褐色粘土(Mn・Fe沈着)10YR5/2
2. 褐灰色粘質土
(にぶい黄橙色微砂～粗砂含,Mn・Fe沈着)
10YR5/1
3. 黄灰色粘質土2.5Y5/1と黒褐色粘土2.5Y3/1
(Mn・Fe沈着)
4. 黄灰色粘質土2.5Y4/1と黒褐色粘土2.5Y3/1
(Mn・Fe沈着)
5. 灰オリーブ色微砂(Mn沈着)7.5Y5/2～6/2
6. 灰白色微砂7.5Y7/2
7. 褐灰色粘質微砂10YR6/1
8. 灰褐色粘質微砂7.5YR5/2
9. 黄灰色粘土2.5Y4/1
10. 黄灰色粘土2.5Y5/1
11. 褐灰色粘質微砂(黄灰色粘土塊含)10YR6/1
12. にぶい黄色砂質土(黄灰色粘質微砂斑多含)2.5Y6/4
13. 緑灰色粘土
(灰白色微砂斑, 黄灰色粘土塊含)7.5GY5/1
14. 暗灰黄色粘質土(黄灰色粘土塊含)2.5Y5/2
15. 黄灰色粘土(黒褐色粘土塊含)2.5Y4/1

第29図　溝４・５断面図（1/40）

出土遺物はないが、検出状況から弥生時代に属する溝と考えられる。（高田）

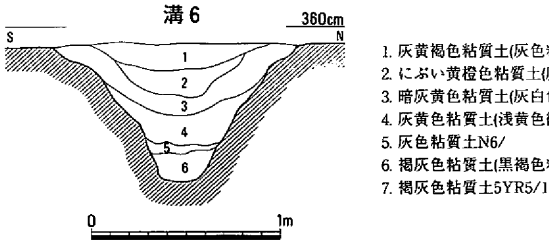
溝７（第25・30図）

溝６と約２ｍ間隔をおいて並走する溝で、東北端を旧河道１に切られる。検出時の規模は長さ約4.5ｍ、幅約1.15ｍ、深さ25cmを測る。断面形態は平らな底面をもつ逆台形状を呈し、埋土には弥生時代前期包含層と考えられる黒褐色粘質土ブロックを顕著に含んでいる。図示した土器35は、指頭圧痕文凸帯を貼り付けた甕の頸部である。出土遺物の時期は弥生時代中期中葉と考えられる。（高田）

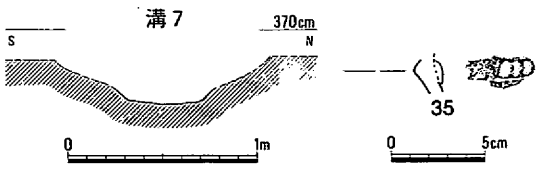
溝８（第26・30図）

２区南半に位置する溝である。検出長は約４ｍで、東北―南西方向に流路をもつ。検出規模は幅約1.3ｍ、深さ70cmを測る。断面形態は、底面が平坦な逆台形状を呈する。埋土は比較的堅緻な粘質土と粘土のレンズ状堆積である。

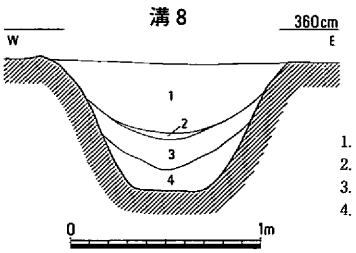
出土遺物はないが、検出状況から１区の溝群と近接した時期の溝と考えたい。（高田）



1. 灰黄褐色粘質土(灰色粘質土塊多含,明黄褐色微砂斑含,Mn・Fe沈着)10YR5/2
2. にぶい黄橙色粘質土(灰白色粘質土塊多含,浅黄色微砂斑多含,Mn・Fe沈着)10YR6/3
3. 暗灰黄色粘質土(灰白色粘質土塊多含,黄色微砂斑含,Mn・Fe沈着)2.5Y5/2
4. 灰黄色粘質土(浅黄色微砂斑含,Mn・Fe沈着)2.5Y6/2
5. 灰色粘質土N6/
6. 褐灰色粘質土(黒褐色粘質土塊含)7.5YR4/1
7. 褐灰色粘質土5YR5/1



黄褐色粘質微砂(黒褐色粘土塊多含)2.5Y5/3



1. 褐灰色粘質土10YR5/1
2. 灰色粘土2.5Y5/1
3. 褐灰色粘質土10YR5/1
4. 褐灰色粘質土10YR4/1

第30図　溝６～８断面図（1/40）・溝７出土遺物（1/4）

３．古代の遺構・遺物

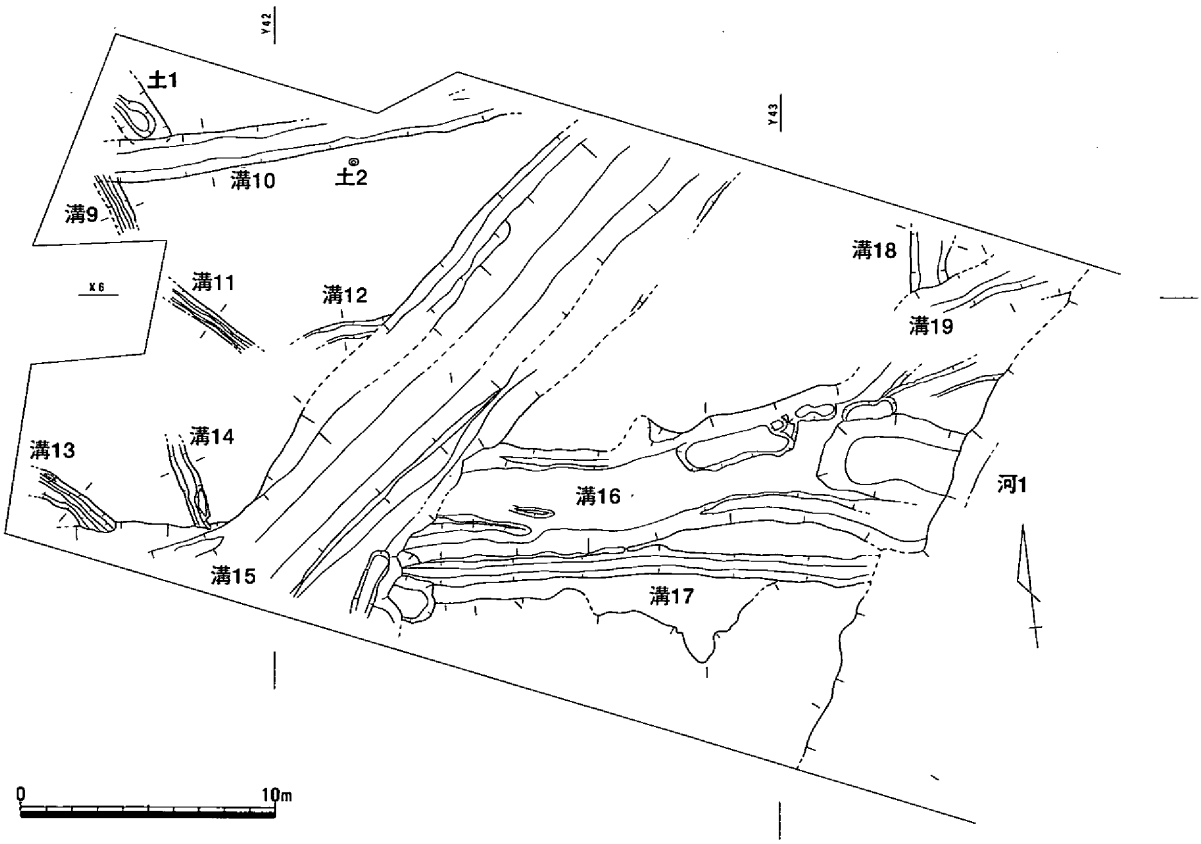
（１）概　　要

古代の遺構は、１区東半を占める旧河道と、その西側で検出した２基の土壙と11条の溝である。古代の遺構検出面は北西から南東側に徐々に低くなっている。土壙はいずれも１区北西端に位置し、これは検出面の高所にあたる。また、溝17よりも南側の15～20cmほど低くなる範囲は、灰白色砂質土～灰オリーブ微砂によって埋没している。これは溝16・17の最上層の埋土と共通する堆積で、断面等の観察でも同時に埋没した状況にあった。低くなる範囲の底面は、凹凸が激しく洪水等の流水によって洗われたことが想起された。この地点の土壌分析を行なった結果、イネのプラント・オパールを検出し（付載３）、畦畔等はみられないが水田耕作土であった可能性が高いと考えられる。

旧河道１と溝15は流路を北東―南西方向にもつもので、弥生～古墳時代の溝群の流路に近い。これに対して溝16・17などは東西方向に流路をもち、後述する中～近世の溝24の存在と合わせて里境の溝の可能性も考えられるが、南西側の流路が不明であり、現状では慎重にならざるを得ない。

時期的には、旧河道１が９～11世紀代、土壙２が10世紀後半代、溝15が11世紀代、溝16が９世紀代と考えられる。旧河道以西の遺構については、大きく平安時代の前半と後半に遺構のまとまりが想定される。

特質される遺物としては、土壙２出土の緑釉陶器椀と溝16出土の墨書土器がある。また、中世の遺構・包含層出土であるが、灰釉陶器片10数点や軒丸・平瓦の瓦当片も注目される。　　（高田）

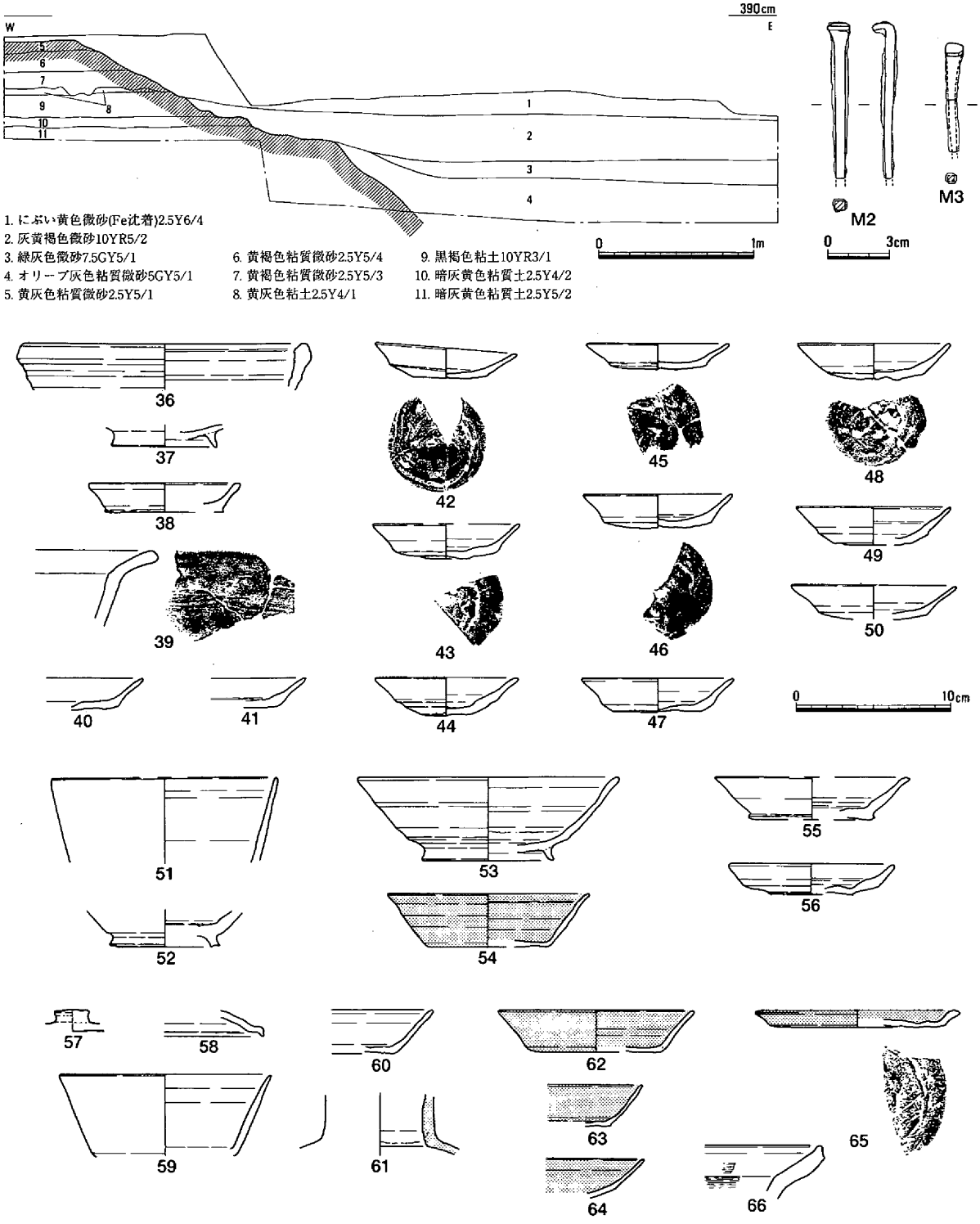


第31図　北方薮ノ内遺跡１区（西半）古代遺構配置図（1/300）

（２）旧　河　道

旧河道１（第31・32図、図版６－７・８）

１区のほぼ中央において西肩を検出した旧河道である。１区の東半全面にその埋土である微砂層が存在することから、東肩は現在の西川付近に存在したものと考えられる。推定幅は約50ｍである。調査は激しい湧水のため全掘は不可能で、西肩斜面の検出と一部の坪堀りによる底の確認にとどまった。



第32図　旧河道１断面図（1/40）・出土遺物（1/4・1/3）

西肩斜面の断面形態は北半と南半で様相が異なり、南半は第32図にみられるように中途の段から上部は比較的緩やかな傾斜をもち、段から下部が急斜となるのに対して、北半は第23図にみられるようにほとんど垂直に落ち込んでいる。これは北半が水流の攻撃面となることによるものである。西肩検出面の標高は370cm前後、ｘ６ｙ43区付近の坪掘りで確認した底の標高は210cmを測る。

埋土は３層に大別される。上層（１～３層）は微砂層で、中層（４層）は粘質微砂層である。下層は激しい流水が想定される砂礫層で、４層以下や坪掘り箇所の最下層で確認している。坪掘り箇所の砂礫層からは、流木などの植物遺体とともに縄文～古墳時代の遺物（第107図）が出土している。これらは摩滅が比較的少なく、遠くない上流部から運ばれたものと考えられる。

出土遺物は先述した縄文～古墳時代の遺物以外に須恵器・土師器・灰釉陶器・鉄釘がある。出土状況は36～50が西肩口近くの上層でまとまったあり方を示し、51～56が肩口に近い地点と坪掘り箇所の中層、57～66は坪掘り箇所の下層からの出土である。須恵器は鉢36、杯51・59・60、壺52、蓋57・58で、土師器は椀37・53、皿38・40～50・55・64・65、鉢39、杯54・62～65、甕66、灰釉陶器は長頸壺61である。42～50は底部の周縁をヘラキリし、中央をユビオサエあるいはナデ調整するもので、口径は90～106mmを測る。また、54・62～65は内外面に赤色顔料の塗布がみられる。

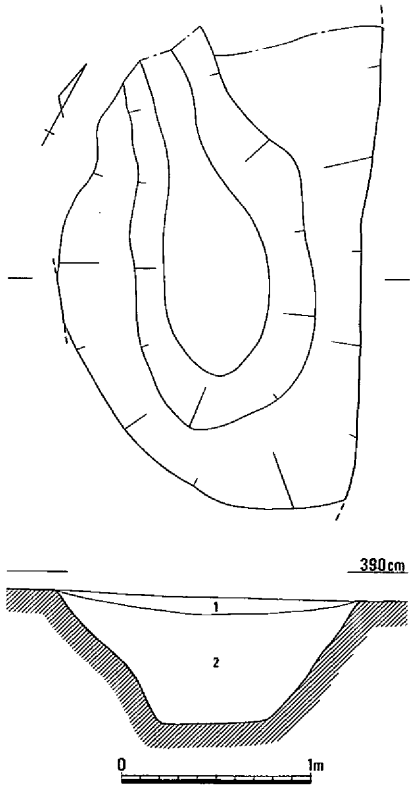
図示した遺物は９～11世紀前半代に属し、長期に亘る旧河道の存続が想定されよう。　（高田）

（３）土　壙

土壙１（第31・33図）

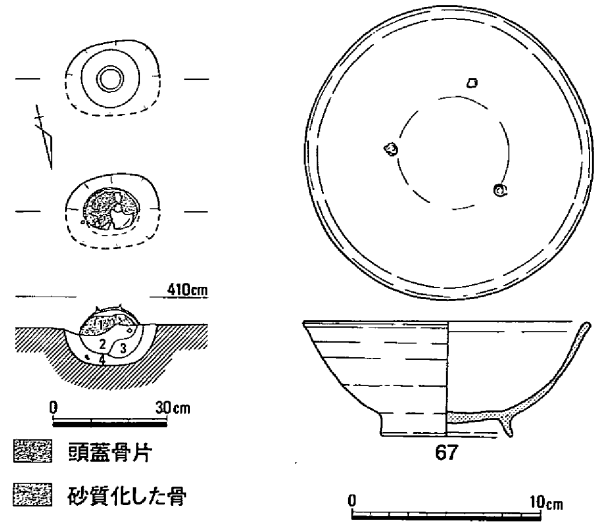
１区北西端に位置する土壙である。南側を溝10に切られ、西側は調査区外となるため全体の形状と規模は不明である。図示した箇所の断面形態は途中に段をもつ逆台形で、幅1.6ｍ、深さ67cmを測る。

出土遺物はないが、検出状況から古代に属するものと考えられる。　（高田）



1. 灰オリーブ色砂質土(Mn沈着)
2. にぶい黄褐色粘質微砂(黒褐色粘質土塊・浅黄色微砂塊含)

第33図　土壙１（1/40）



1. オリーブ褐色微砂(頭蓋骨片・歯含.青灰色粘土小塊含)2.5Y4/3
2. 明黄褐色微砂2.5Y4/3
3. 黄褐色土砂質土2.5Y5/1
4. 褐灰色砂質土(歯含)10YR5/1

第34図　土壙２（1/20）・出土遺物（1/4）

土壙２（第31・34図、巻頭図版１－２・図版６－５・６）

１区西端近くに位置する小土壙である。にぶい黄褐色砂質土層を掘り下げ中に伏せた状態の緑釉陶器椀が出土し、その後の精査で椀の下部に土壙の掘り方を検出した。検出時の掘り方の規模は東西長25cm、南北長19cm、深さ10cmで、平面形は長楕円を呈する。

埋土の堆積状況は、椀内部に歯と骨片を含む微砂が確認され、さらにその下部には歯と、砂質化したと考えられる骨片を含む微砂と砂質土が認められるというものであった。椀内部の骨片には薄い層状に観察し得るものがあり、歯の出土と合わせて人の頭骨片と判断した。また、その他の骨片で人体の部位と確認できるものはなかった。肉眼観察の可能な歯６点を小橋進氏に鑑定依頼した結果、いずれも磨耗の少ない10代の永久歯の可能性があるとの教示いただいた。

緑釉陶器椀**67**は完形品で、口径15.1cm、高台径6.9cm、器高6.2cmを測る。胎土は土師質で釉調は濃緑色を呈し、内面と外面の一部にヘラミガキを施す。高台は貼り付けで、見込みに三叉トチン跡がみられる。以上の特徴から、10世紀後半代に周防で生産された製品と考えられる。　（高田）

（４）溝

溝９（第31・35図）

１区西端を南北方向に流走する溝で、北端は溝10に切られる。南側は未掘部分を介して溝11あるいは溝14につながる可能性がある。検出規模は幅85cm、深さ26cm、底面の標高347cmを測る。

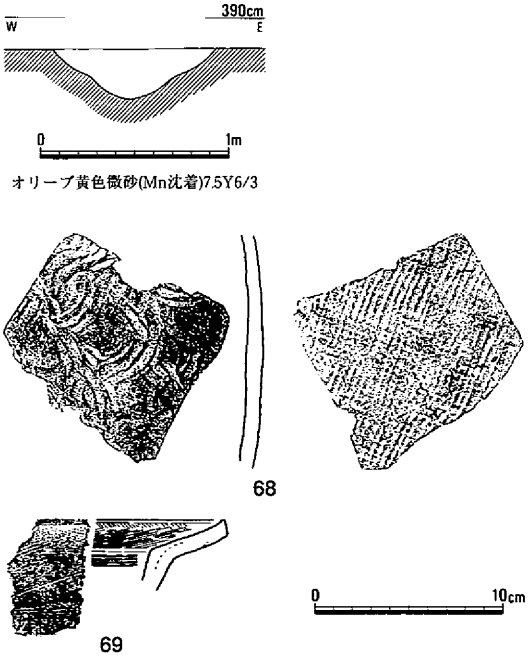
図示した出土遺物は、須恵器と土師器の甕片である。時期は古代と考えられる。　（高田）

溝10（第31・36図）

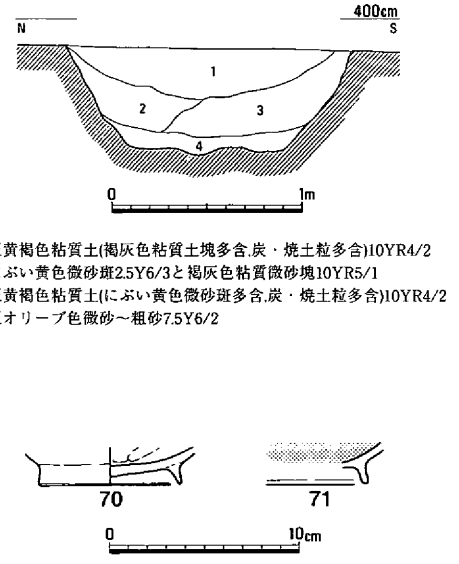
１区西端を東西方向に直線的に流走する溝で、西端は調査区外に延び、東端は溝15につながることを北壁断面で確認している。検出規模は幅150cm、深さ57cm、底面の標高330cmを測る。

図示した遺物は、土師器椀の高台**70**と内面黒色土器椀の高台**71**である。

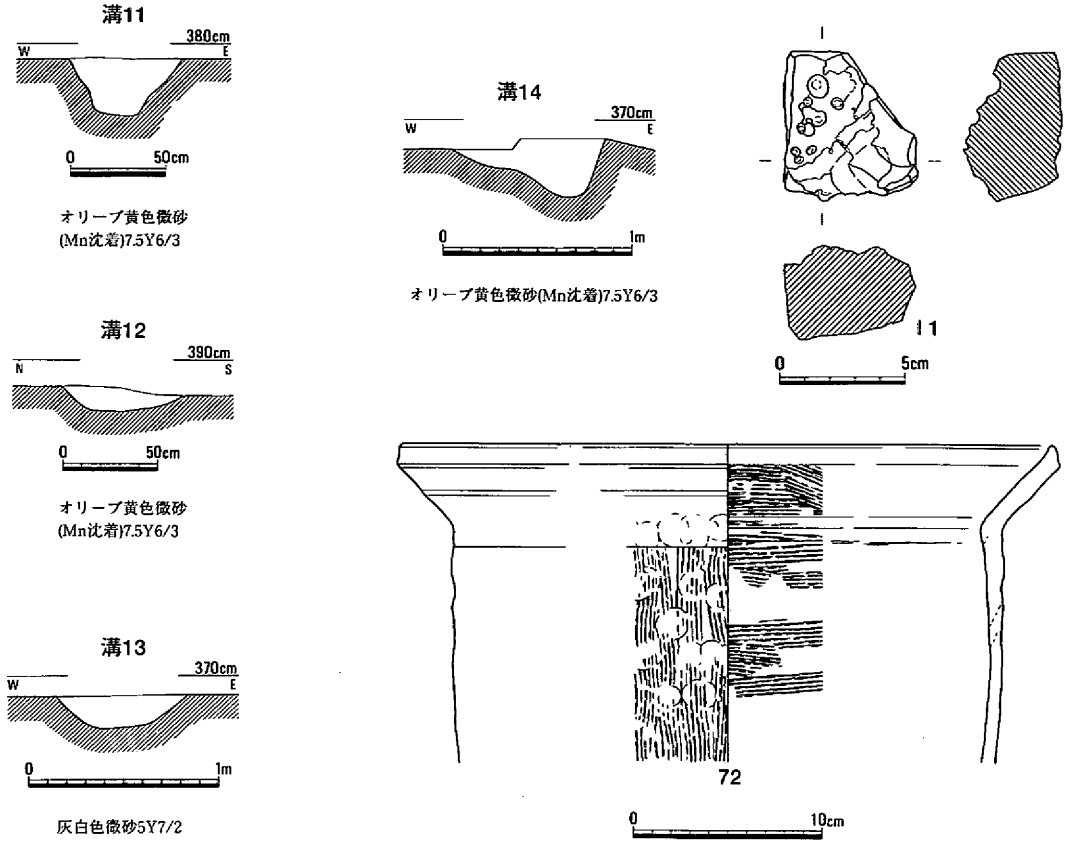
溝の時期は、検出状況と出土遺物から平安時代に属するものと考えられる。　（高田）



第35図　溝９断面図（1/40）・出土遺物（1/4）



第36図　溝10断面図（1/40）・出土遺物（1/4）



第37図　溝11～14断面図（1/40）・溝14出土遺物（1/4・1/3）

溝11（第31・37図）

１区西端に位置する溝で、西端が調査区外、東端は中世遺構に切られる。検出規模は幅60cm深さ39cm、底面の標高341cmを測る。出土遺物はないが、検出状況から古代と考えられる。（高田）

溝12（第31・37図）

溝11の東に位置する溝で、東端は溝15に注いでいる。検出規模は幅60cm、深さ13cm、底面の標高363cmを測る。検出状況から溝15と同時期に機能していたものと考えられる。（高田）

溝13（第31・37図、図版３－１）

１区南西端に位置する溝で、西端が調査区外に延び、東端は溝15に注ぐ。検出規模は幅68cm、深さ27cm、底面の標高343cm、断面形状は逆台形を呈す。時期は平安時代と考えられる。（高田）

溝14（第31・37図、図版３－１）

１区南西端に位置する溝で、北端を中世遺構、南端を溝15に注ぐ。検出規模は幅80cm、深さ40cmを測る。底面は標高330cmで東側が一段深くなる。埋土はオリーブ黄色微砂である。

図示した出土遺物は、土師器の甕72と鉄滓Ｉ１である。この鉄滓は粗割後の第１次製錬滓との鑑定結果を得ている（付載１）。検出状況から溝の時期は平安時代と考えられる。（高田）

溝15（第31・38図、図版３－１）

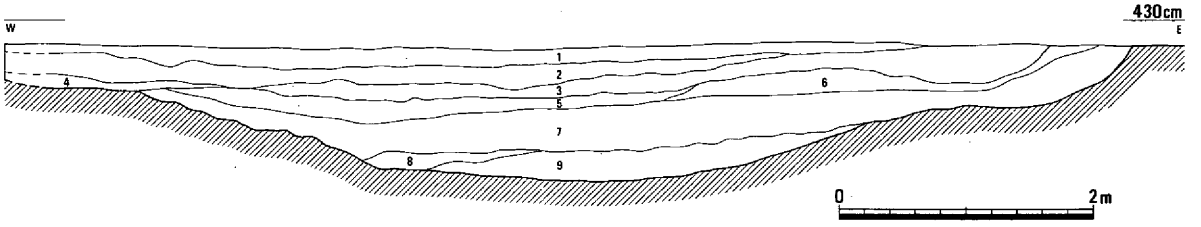
１区西半のほぼ中央を東北―南西方向にほぼ直線的に流走する溝である。北壁付近で溝10と接し、西岸中央では溝12が注ぎ、南壁付近では西に広がり溝13・14が注ぎ込む。また、東岸の南半では溝16・17が接するが、後述するように本溝が新しいと考えられる。検出規模は長さ約24ｍ、幅6.2～7.2ｍ、深さ1.05ｍを測る。溝底の中央は幅1.5ｍのほぼ平坦で、そのレベルは北壁付近で標高300cm、

南壁付近で295cmと変化に乏しい。壁は両岸とも緩やかに立ち上がるが、いずれも中途にテラス状の平坦部分やいくつかの傾斜変換点をもつ。

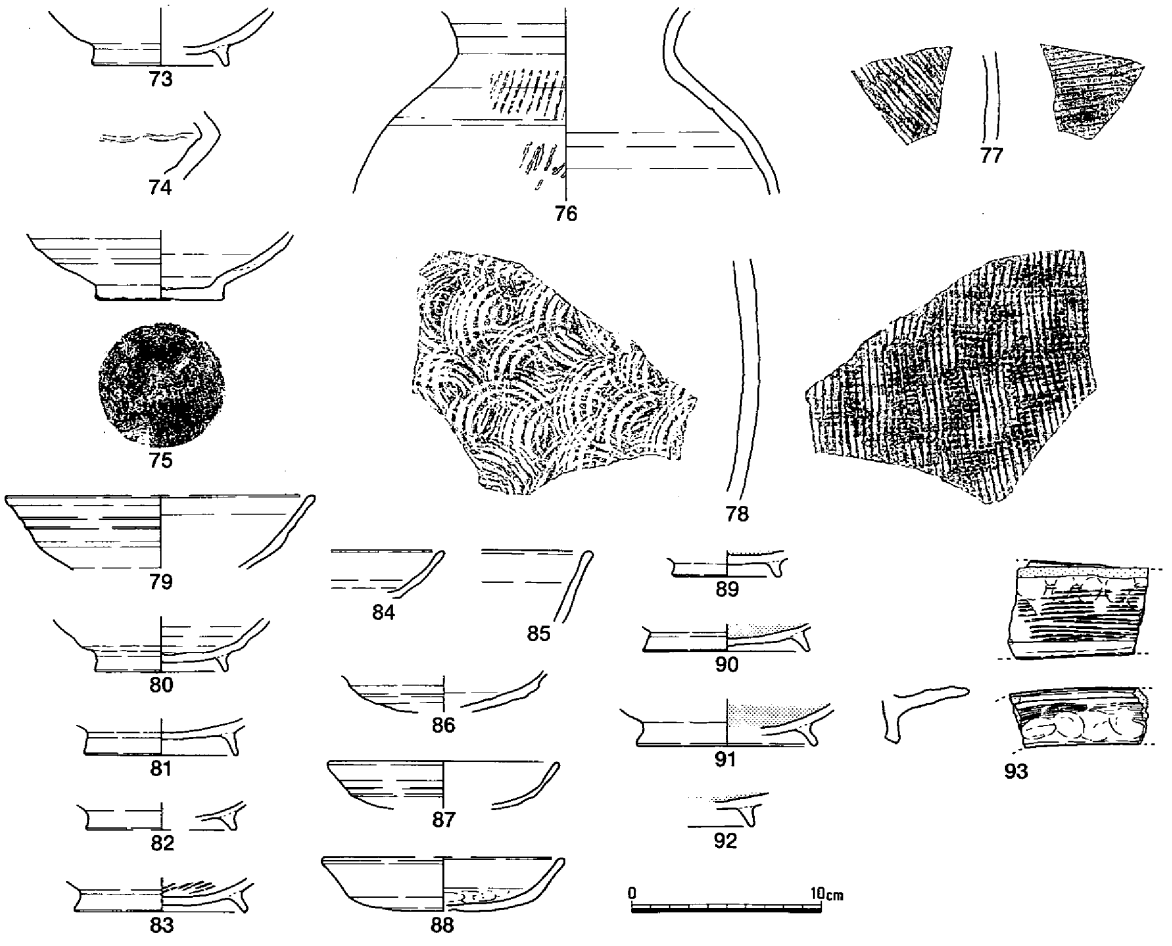
埋土は基本的に上層（１～７層）の微砂と、下層（８・９層）の粗砂からなる。上層の微砂は、溝10の埋土の一部と溝12～14の埋土と酷似するものであり、同時か近接した時期に埋没したことが考えられる。また、下層に堆積した粗砂は、3～5cm大の円礫と細砂を多く含み、激しい流水があったことを窺わせる。

出土遺物は主に上層から出土している。須恵器は椀73、長頸壺74、鉢75、壺76、甕77・78である。土師器は椀79～83・85、杯84・86～88、内面を黒色処理した椀89～92、カマド93である。これらは概ね11世紀代の平安時代後半期に属するものである。

出土遺物の時期的には、旧河道１の下限に近いことから両者の関連性を指摘できよう。　（高田）



1. にぶい褐色砂質土7.5Y5/3
2. 灰黄褐色微砂(炭,焼土粒多含)10YR5/2
3. にぶい黄色微砂2.5Y6/3
4. にぶい黄色微砂2.5Y6/3
5. 灰褐色砂質土(炭,焼土粒多含)7.5YR5/2
6. オリーブ黄色微砂(褐灰色粘質土塊含)5Y6/3
7. にぶい黄色微砂2.5Y6/4
8. 灰色粗砂(円礫多含)5Y5/1
9. 灰オリーブ色微砂～粗砂(上部に円礫含)5Y5/2～6/2



第38図　溝15断面図（1/60）・出土遺物（1/4）

溝16（第31・39図、図版３－１）

１区西半に位置する東西方向の溝である。その東端は旧河道１と接し、西端は溝15に切られることを南壁断面で確認している。また、南側に接して並走する溝17とは同時に埋没した状況が窺える。検出規模は幅４～８ｍ、深さ60cm前後だが、底面は凹凸が激しく、部分的にさらに30cmほど窪む箇所がみられる。また、旧河道１に接する東端では、５×3.5ｍの範囲で底面よりも25～50cm落ち込んでいる。なお、この落ち込み内に東西方向２ｍに亘って、径５cm、深さ10cm前後の杭穴列が認められた。検出状況から流水方向は西から東と推定される。

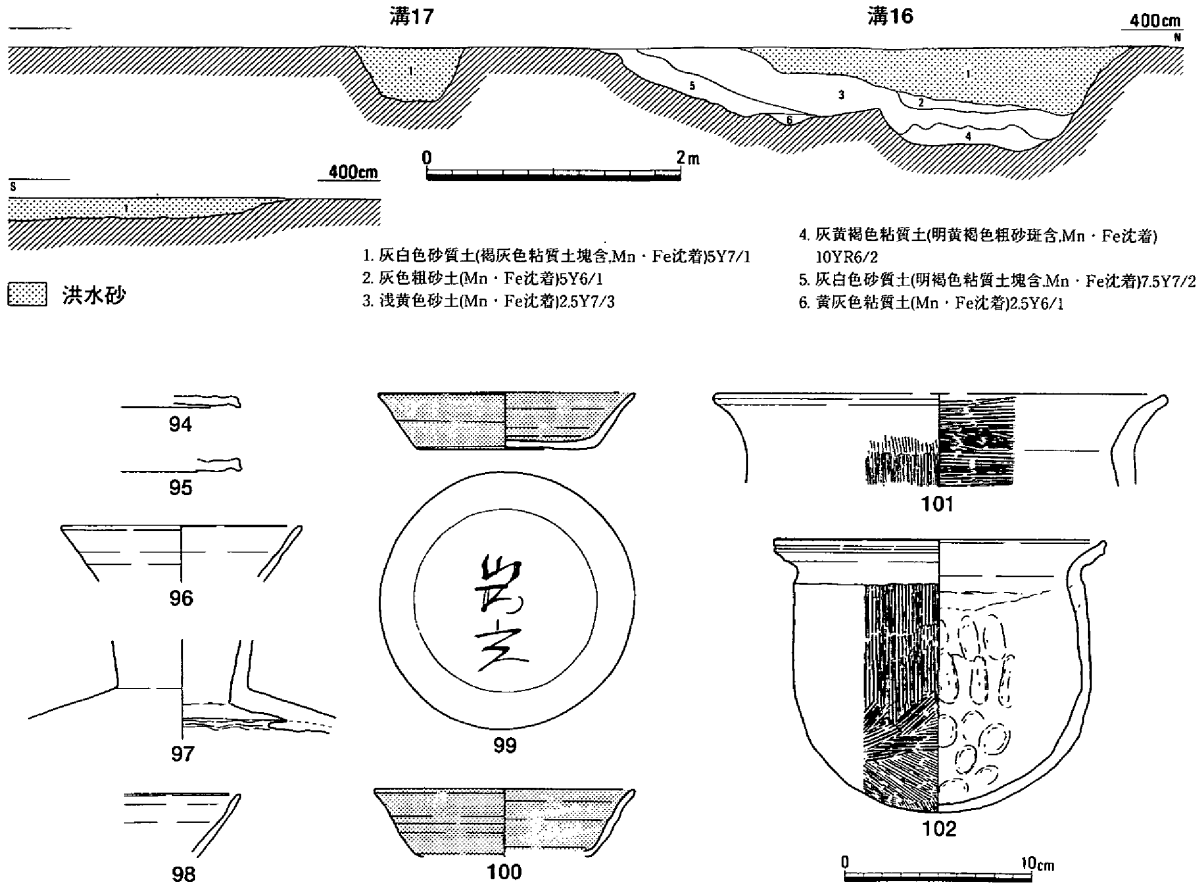
埋土は砂質土からなる上層（１～３・５層）と、粘質土の下層（４・６層）に大別できる。このうちの最上層は、溝17とその南に広がる窪地の埋土と共通する洪水砂と考えられる。

出土遺物には須恵器と土師器があり、すべて上層からの出土である。須恵器は蓋**94**・**95**、杯**96**、長頸壺**97**である。土師器は杯**98**～**100**、甕**101**・**102**である。このうち、杯**99**と**100**は内外面に赤色顔料を塗布するもので、**99**の底部には墨書がみられる。これは漢字２字を配すると考えられ、上字は「やまかんむり」と推定されるが判読不明、下字は「定」の可能性を加原耕作氏に教示いただいた。口径13.5cm、底径9.65cm、器高3.0cmを測り、９世紀代の年代が与えられる。

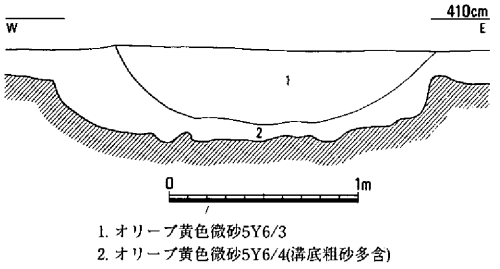
本溝は時期的には旧河道１の上限付近に重なり、有機的な関連性を指摘できる。　（高田）

溝17（第31・39図、図版３－１）

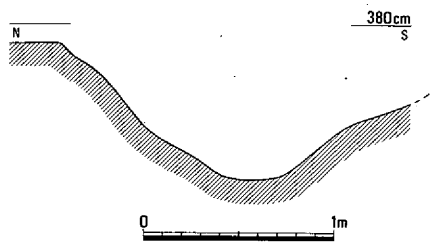
先述の溝16の南側に位置する溝で、東西に直線的に流走する。その西半は溝16にほぼ接して肩を共有している。西端は溝15に、東端は近世遺構にそれぞれ切られるが、本来は旧河道１に接するもの



第39図　溝16・17断面図（1/60）・溝16出土遺物（1/4）



第40図　溝18断面図（1/40）



第41図　溝19断面図（1/40）

と考えられる。検出規模は幅85～100cm、深さ45cmである。底面レベルは変化に乏しく、標高340cm前後を測る。断面形態は逆台形を呈し、底面と壁ともほぼ直線的で周囲の溝に比べて企画性が高いことが指摘できる。

溝16の埋土との共通性など検出状況から、時期は平安時代前半期と考えられる。（高田）

溝18（第31・40図）

ｘ５ｙ43区に位置し、１区北壁際で検出した溝で、流路をほぼ南北にとると考えられる。北端は調査区外に延び、南は溝19に接する。検出規模は幅２ｍ、深さ30cmで、下層には粗砂を多く含む。

出土遺物はないが、埋土の共通性など検出状況から、溝の時期は平安時代と考えられる。（高田）

溝19（第31・41図）

溝18の南側に接して位置する溝で、北東端は調査区外に延びる。南西側は中世遺構等に削平され不明瞭だが溝16からの分岐と考えられる。規模は深さ70cm前後で、埋土は溝18とほぼ共通する。

出土遺物はない。検出状況から溝の時期は平安時代と考えられる。（高田）

４．中世～近世の遺構・遺物

（１）概　　要

中世～近世の遺構は、１～３区の調査区全面で検出している。その内訳は旧河道４条、建物１棟、柱穴列１基、井戸７基、土壙25基、土壙墓２基、溝17条、水田２箇所で、大半は１区に集中する。

１区西半の遺構検出面は、第23図の第43層上面で、海抜高は410cm前後である。これに対し、１区東半の遺構検出面は、第23図の第18・19層の上下面で、上面の海抜高が400cm、下面が390cm前後である。第18・19層は、古代の旧河道１の埋没範囲に堆積するもので、18世紀後半代と考えられる。土壙16はこの層の上面で、その他の東半遺構の多くは層下で検出している。また、２区の旧河道は海抜490cm、３区の旧河道は海抜480cmで検出しているが、これは２・３区において中世水田より上層の洪水砂が１ｍ近くも堆積することによるものである。

遺構の分布をみてみると、１区では、南西端の水田１と東端の旧河道２・３の間に多数の柱穴とともに建物、柱穴列、井戸、土壙、土壙墓、溝があり、屋敷地の広がりが想定される。中でも調査区を東西に貫流する溝24は、この屋敷地の空間構成に多大な影響を与えたと考えられる。それは、溝の南北両側には幅約２ｍの遺構の空白地帯があり、また、溝にほぼ平行・直交する軸線をもつ遺構の存在から窺える。２区では、旧西川の流れと考えられる旧河道４があり、その東側は水田の広がりが想定される。３区では、遺跡の東端となる旧河道５の西側に水田２がある。以上のような景観の形成は、１区の旧河道１が完全に埋没した後の12世紀後半以降に始まったと考えられる。

遺構の時期的なまとまりは、鎌倉時代初頭頃、鎌倉時代末頃、室町時代後半代、近世中期にある。また、溝24は鎌倉時代末頃から近世初頭までは里境の溝として、その後は通路として連綿と踏襲されたものと考えられる。遺構の軸線の方向に注目すると、溝24と土壙16の二者に平行・直交するまとまりの存在が指摘できる。前者には鎌倉時代初頭から室町時代後半代の遺構の多くが属し、後者には近世中期の遺構が属すことから、時期的なまとまりとほぼ整合するものである。

出土遺物は日常雑器を中心に多種多様なものがある。また、鉄滓や羽口などの鍛冶関連遺物の出土は、中世～近世の鍛冶活動の一端を示す資料といえよう。　（高田）

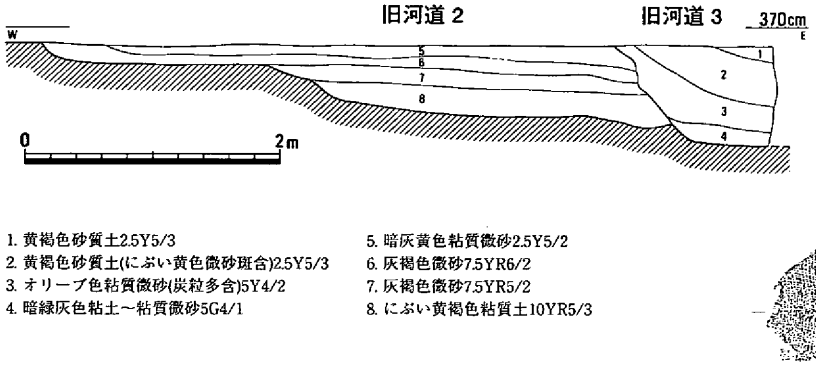
（２）旧　河　道

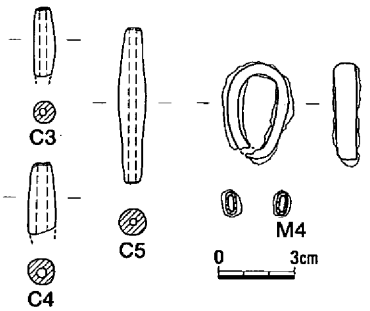
旧河道２・３（第42～46図）

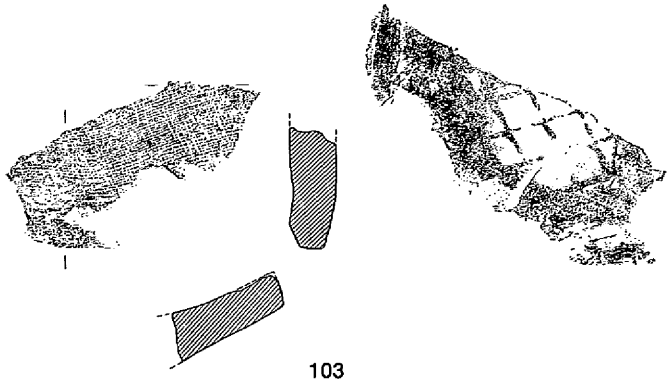
１区南東端に位置する旧河道である。調査区内ではその西肩のみを検出したもので、平断面の観察から旧河道３は旧河道２よりも新しいことを確認している。また、旧河道の北側は近現代の落ち込みによって削平されるために、その形状は不明である。旧河道２の流走方向は、北北東―南南西であり、１区の中世～近世溝の多くがほぼ東―西あるいは南―北方向に位置することと異なる。後述する２区の旧河道４の東肩や、１・２区間に存在する現西川の流れに平行することから、これらと密接な関係にあるものと考えられる。

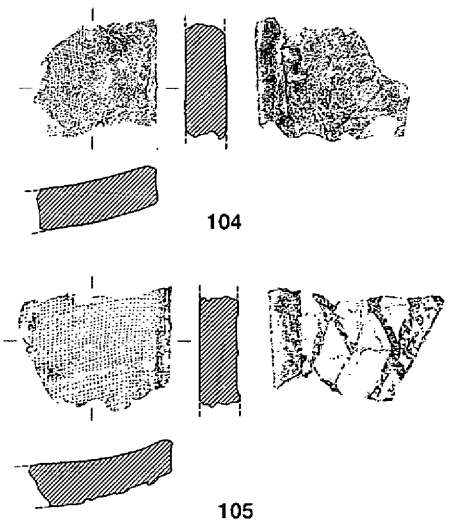
旧河道２の断面形状は、肩から約４ｍまで深さ30cmほどの平坦部が続き、そこからさらに30cmほど落ち込むというものである。なお、第43図の断面図付近では、肩からの平坦部は約２ｍで、そこから急に落ち込む形状となる。

旧河道３は南北長約５ｍ、東西幅約1.5ｍ、深さ80cmを検出したに過ぎないが、旧河道２が流れを変えたものと考えられる。

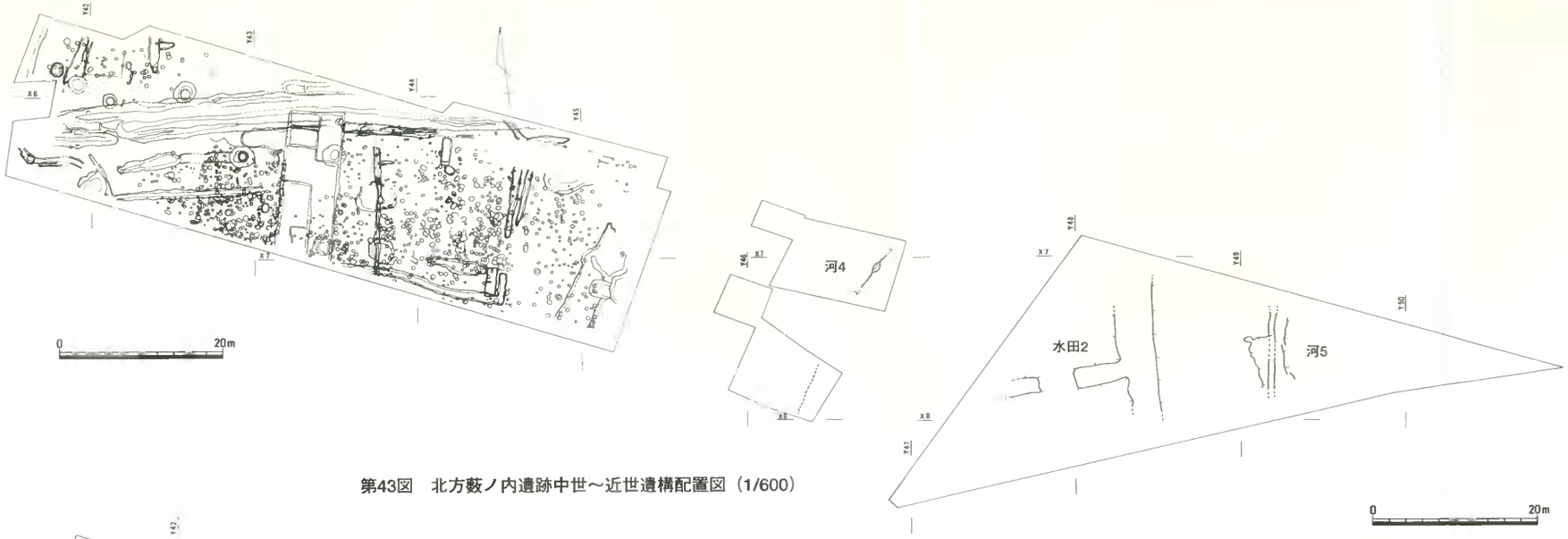




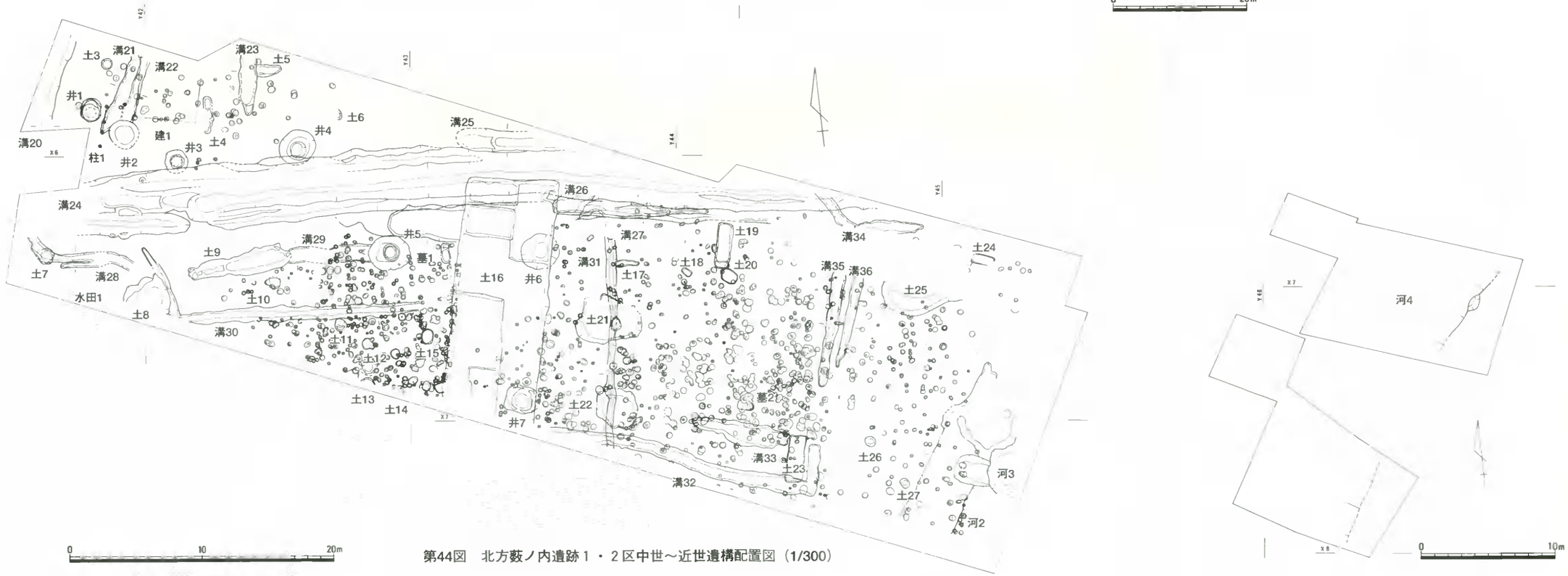




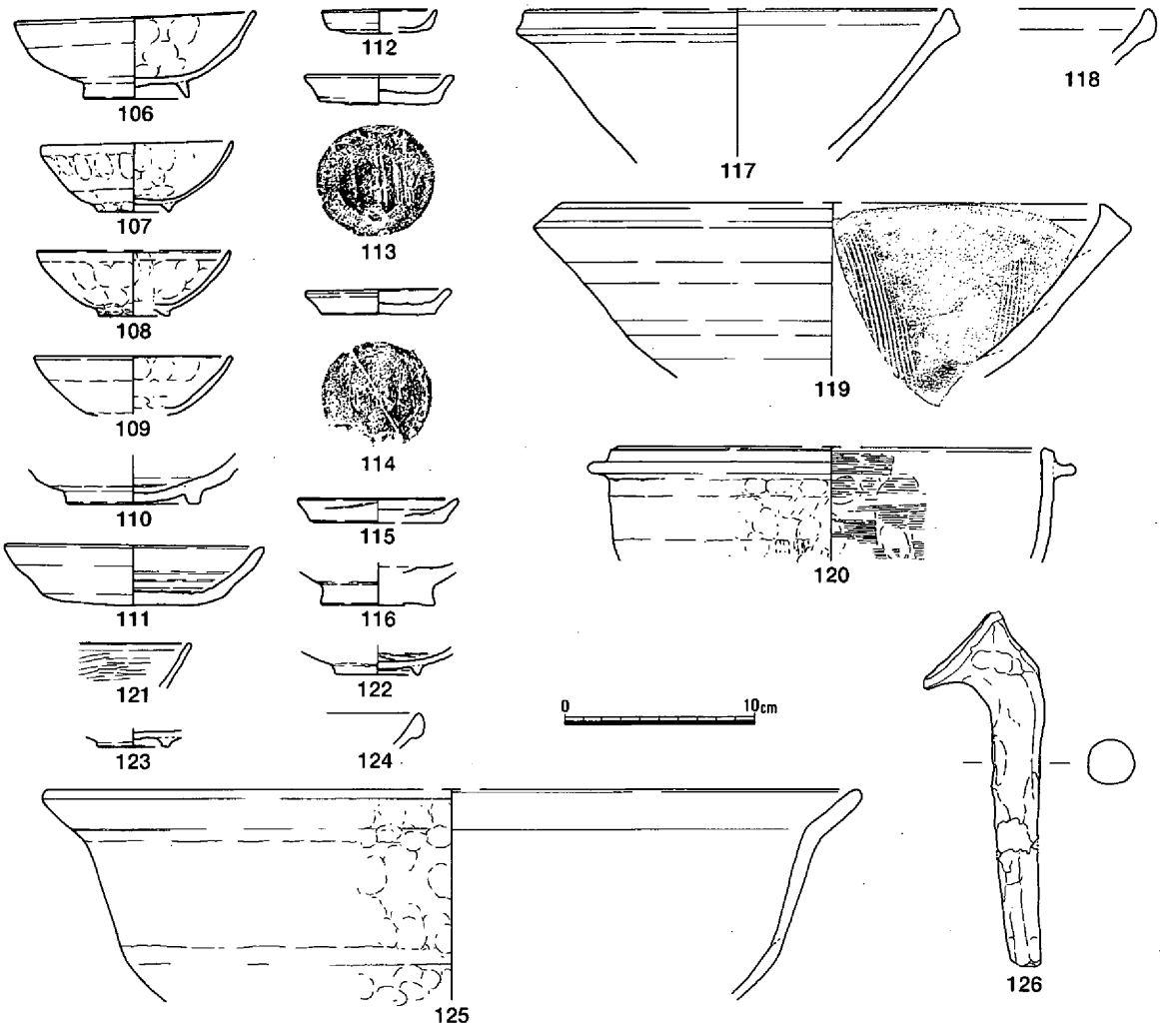
第42図　旧河道２・３断面図（1/60）・旧河道２出土遺物（１）（1/4・1/3）



第43図　北方薮ノ内遺跡中世～近世遺構配置図（1/600）



第44図　北方薮ノ内遺跡１・２区中世～近世遺構配置図（1/300）

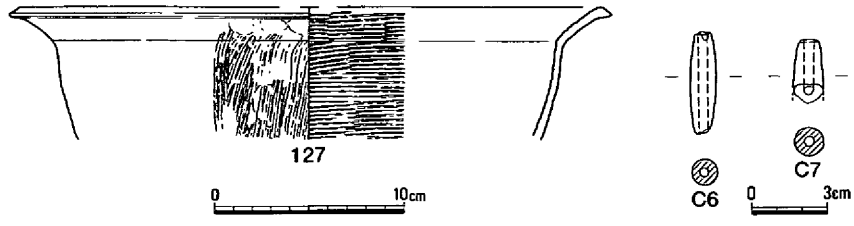


第45図　旧河道２出土遺物（２）（1/4）

旧河道２の出土遺物には、土師器、瓦質土器、亀山焼、備前焼、白磁、瓦、土錘、鉄製品がある。土師器の椀106～110は、比較的しっかりした高台をもつ106・110と、断面三角形の低い高台をもつ107・108がある。106の口径は12.7～13.3cm、高台径5.2～5.7cmを測る。107・108の底径は3.8cmを測る。土師器の杯111は口径13.6cmを測る。土師器の皿112～116のうち、113・114はほぼ同規格で底部に板目痕をもち、口径7.6～7.75cm、底径6.0～6.1cmを測る。117・118は東播系須恵器の捏鉢で、119は備前焼の擂鉢である。120・125・126は土師器鍋、121～123は瓦器椀である。124は白磁碗である。瓦103・104は凸面に比較的大きな正格子や斜格子、凹面に布目痕をもつ平瓦である。Ｃ３～５は棒状単孔の土錘である。Ｍ４は錆膨れが激しいが、締め金具等の刀装と考えられる。

旧河道３の出土遺物には、土師器鍋127と土錘Ｃ６・７がある。

旧河道２・３の埋没時期は、出土遺物から13世紀末～14世紀前半代と考えられる。　（高田）



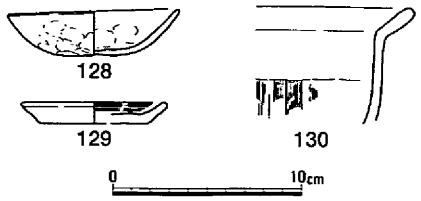
第46図　旧河道３出土遺物（1/4・1/3）

旧河道４（第43・44・47図）

２区でその東肩を検出したもので、西肩は現西川付近にあったと考えられる。２区北端部では肩斜面側に石垣がみられた。

堆積は第22図の３～23層で、激しい流水と滞水を繰り返したことが窺える。出土遺物は少なく、図示した土師器の皿・鉢以外に少量の近世遺物片がある。

検出状況から本遺構は中～近世の旧河道で、現西川の基になるものと考えられる。（高田）



第47図　旧河道４出土遺物（1/4）

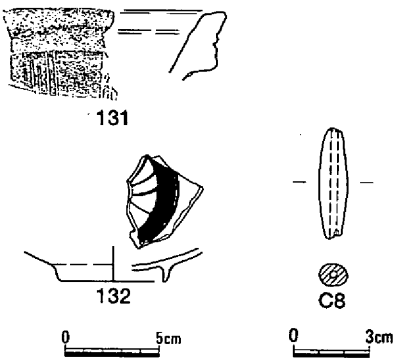
旧河道５（第43・48図）

３区東端でその西肩を検出したもので、海抜190cmまで掘り下げたが、激しい湧水のため以下の調査は不可能であった。

堆積は第24図の９～15層で、砂を基調とする。

出土遺物は図示した備前焼の擂鉢131、中国製染付け皿132、土錘Ｃ８等の近世遺物がある。

検出状況から、旧旭川の最西端の肩と考えられる。（高田）



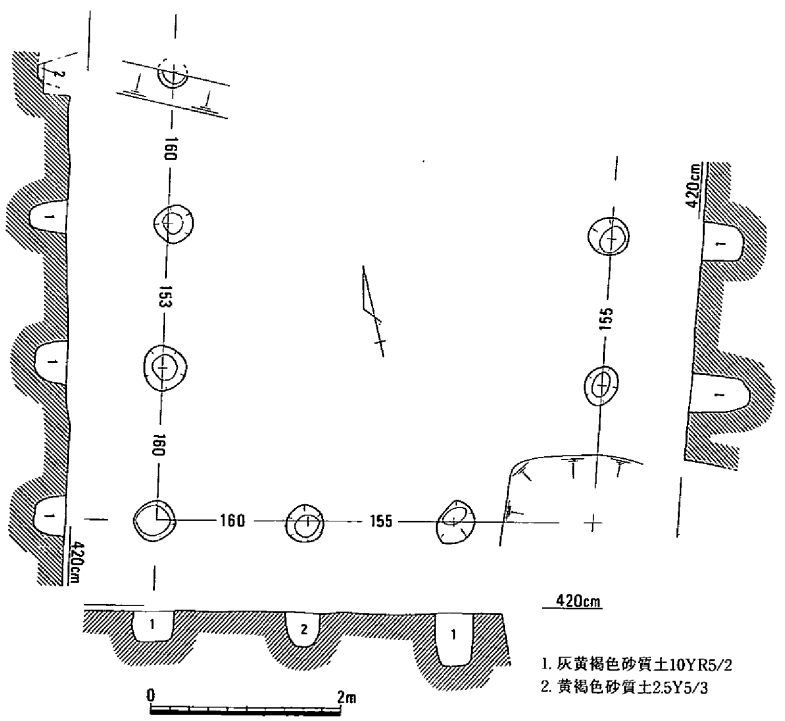
第48図　旧河道５出土遺物（1/4）

（３）建　　物

建物１（第43・44・49図、図版４－３）

１区北西端に位置する掘立柱建物である。周辺の遺構との関係では、溝22と切り合っており、それらよりも古いことを確認している。また、溝24の北側約3.5ｍの位置にあるが、ほぼ東西方向の溝24に対して、本建物は軸がやや振れている。建物北辺の並びは調査区外となり不明で、また建物南東隅の柱穴が現代撹乱によって失われたものと考えられることから、検出したのは西辺３間、南辺２間、東辺１間である。西辺北端の柱穴が建物の北西隅となれば、３×３間のほぼ正方形の建物となり、西辺がさらに北側に延びるならば、３×４間以上の南北棟の建物が想定される。各柱間は153～160cmとほぼ等しい。柱穴の径はほぼ40cm前後を測るが、深さは34～60cmとややばらつく。現状では、南・東辺に比べて西辺の柱穴の規模が揃っている。埋土は１層で、柱痕等は確認できなかった。

出土遺物は土器小片のみである。周辺遺構との関係等、検出状況から、建物の時期は鎌倉時代後半代よりも古く考えられる。（高田）

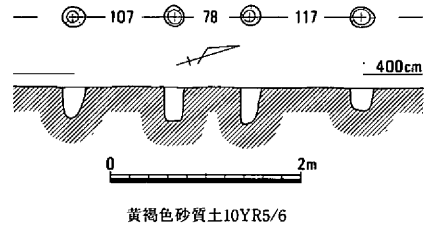


第49図　建物１（1/80）

（４）柱　穴　列

柱穴列１（第43・44・50図）

１区西端で検出した柱穴列である。溝21と切り合い、本遺構のほうが古い。先述の建物１西辺と２ｍ離れて平行する。柱間は北から117cm、78cm、107cmを測る。柱穴径は20cm前後とほぼ等しく、深さは22～38cmである。検出状況から、建物との密接な関連性が指摘できる。（高田）



第50図　柱穴列１（1/80）

（５）井　　戸

井戸１（第43・44・51図、図版７－１）

１区西端に位置する井戸で、溝21や柱穴列１に近接する。上部に近現代撹乱が存在したため、検出面は海抜385cmである。平面形は南北方向にやや長い楕円を呈し、検出規模は南北1.85ｍ、東西1.5ｍを測る。断面形は中位の海抜250cm付近に段をもつ以外はほぼ垂直な壁となる。底は海抜150cmまで下げた段階で湧水があり、壁の崩落の危険性が予測されたために調査不可能となったが、さらに50cmほど深くなると推定する。

埋土は１～８層と９～11層に大別され、上層はブロックを充填した埋め戻し土である。

遺物は全く出土していないが、検出状況から中～近世に機能・廃絶したものと考えられる。（高田）

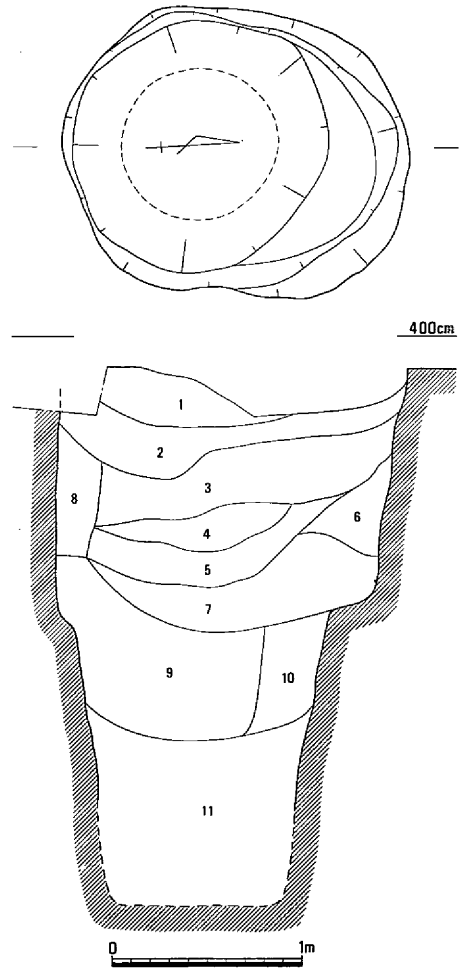
井戸２（第43・44・52図）

１区西端近くに位置する井戸で、井戸１の南東側１ｍと近接する。また、溝21・22と切り合い関係にあり、それらよりも新しいことを確認している。上部南半を近現代の撹乱で失うが、海抜417cmで検出した平面形はやや歪な円形を呈する。検出規模は東西長230cm、深さ192cmを測り、底面の海抜高は195cmである。この海抜高は周辺では井戸４のそれに近く、井戸１・３が100cm前後と推定されるのとは１ｍ近い差がある。断面形はほぼ逆台形を呈し、底面は平坦となる。

埋土は上下２層で、大半を占める１層はブロック土を充填した状況から、明らかに埋め戻されたものである。

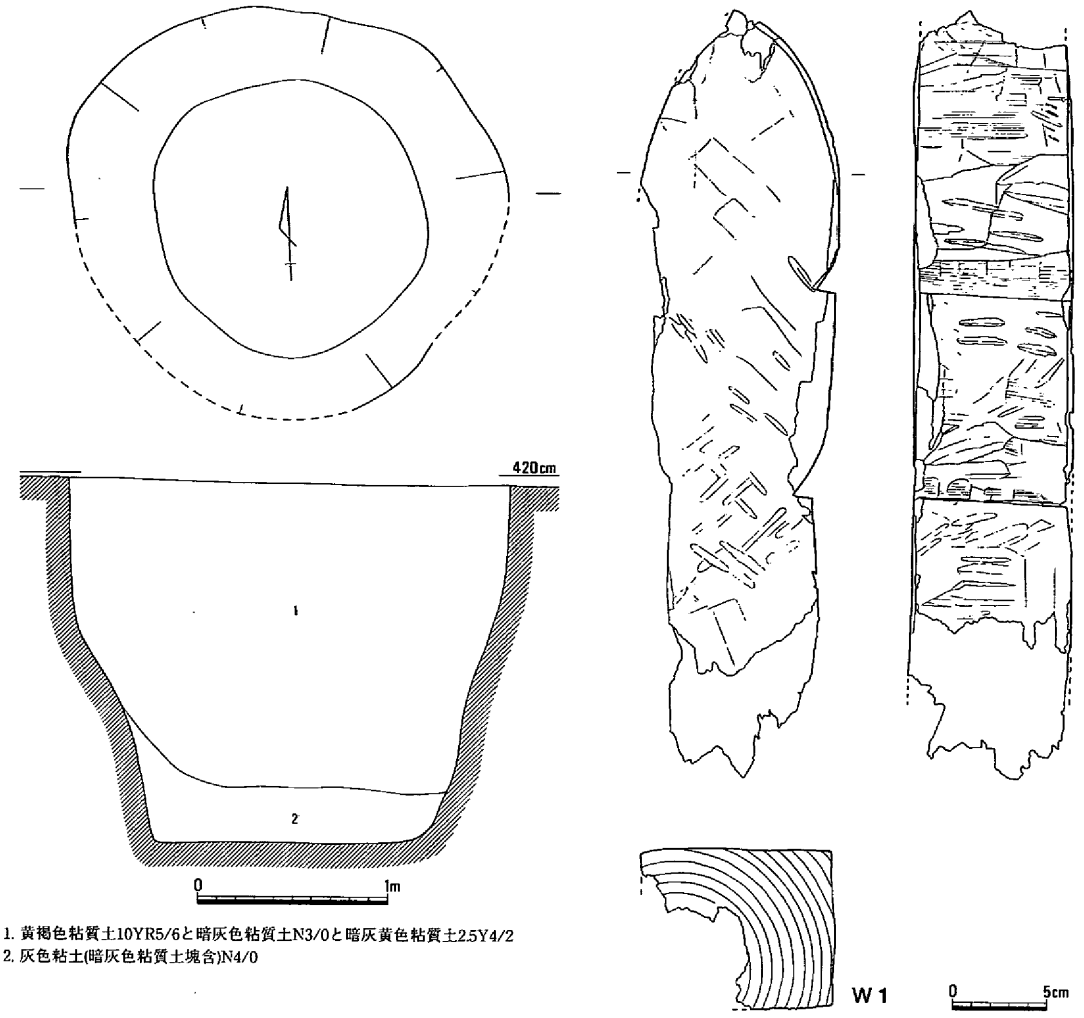
出土遺物は小片少量で、土器類に図示できるものはない。**Ｗ１**は１層下部から横位の状態で出土した加工木片で、供養塔の頂部と考えられる。

井戸の時期は中～近世と考えられる。（高田）



1. 灰黄褐色粘質土(にぶい黄褐色砂質土塊含)10YR5/1
2. 灰黄褐色粘質土10YR5/1
3. 黄灰色粘土～粘質土(黄褐色砂質土塊少含)2.5Y5/1
4. 黄灰色粘土塊2.5Y4/1と黄褐色砂質土塊10YR5/3と黄灰色粘質土塊2.5Y5/1
5. 灰色粘質微砂N5/と灰オリーブ色微砂5Y6/1
6. オリーブ黒色粘質土塊5Y3/1と灰オリーブ色微砂5Y5/1
7. オリーブ黒色粘土塊とにぶい赤褐色粘質土塊2.5YR5/3
8. オリーブ黒色粘質土5Y3/1～褐灰色粘質土10YR5/1
9. 青灰色粘土10BG5/1と暗青灰色粘土10BG4/1
10. 灰色砂質土2.5YR4/1
11. 灰色粘質砂5Y5/1

第51図　井戸１（1/40）



第52図　井戸２（1/40）・出土遺物（1/4）

井戸３（第43・44・53図）

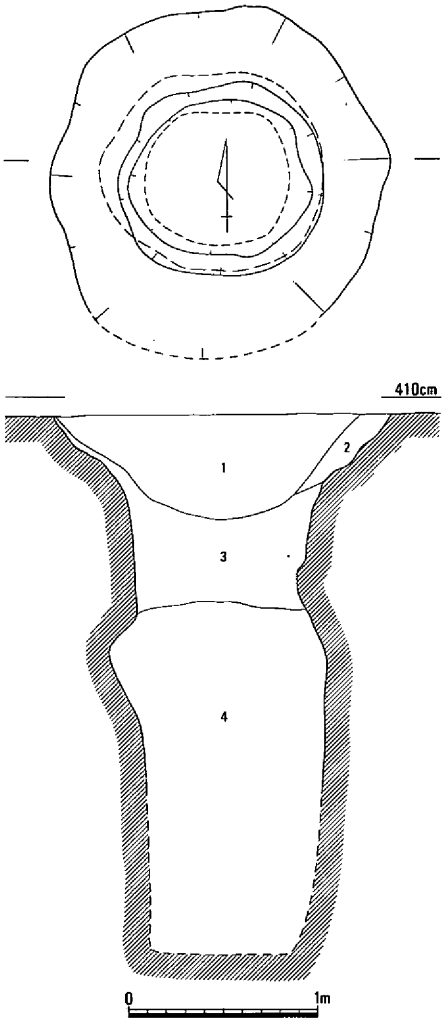
１区西端近くに位置する井戸で、南側の一部を溝24と同時に掘り下げてしまったが、溝24よりも新しい。先述の井戸２とは南東側に約2.5ｍ離れる。海抜200cm付近で湧水したため以下の掘り下げを中止したが、１ｍ強ほど下に硬い面を確認したことから、これを底面と考えている。平面形はやや歪な円形を呈し、検出規模は径1.8ｍ、推定深度2.85ｍを測る。断面形は最上部が緩やかな皿状で、以下は壁の崩落等がみられるもののほぼ垂直となる。埋土は４層で、井戸１・２のような埋め戻しのブロックはみられなかった。出土遺物は僅かに図示した平瓦片２点があり、いずれも燻し瓦である。

井戸の使用時期は溝24との切り合い関係から、17世紀中頃以降と考えられる。　（高田）

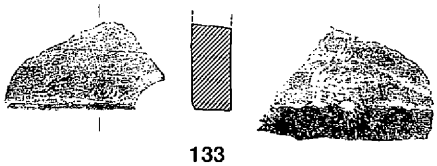
井戸４（第43・44・54図、図版７－２）

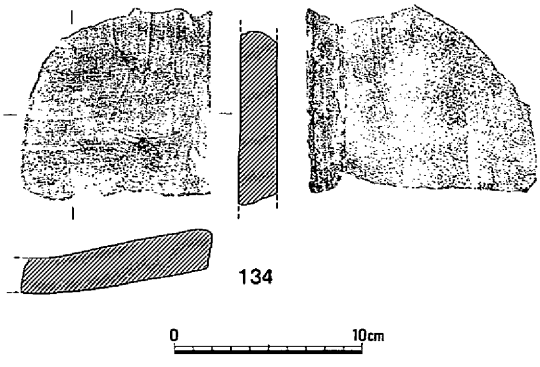
先述の井戸３から東へ７ｍの位置にあるもので、井戸３同様に南側の一部が溝24と切り合い関係にある。検出面は海抜400cm前後で、平面形はほぼ円形を呈す。検出時の規模は径2.78ｍ、深さ２ｍを測る。断面の形状は上部が椀形で、井戸中位の海抜300～325cm付近のテラス状平坦面を経て、以下の壁がほぼ垂直に落ち込むものである。この平坦面は古代の溝15の底面にあたり、井戸壁面は溝15の埋土である。底面はほぼ平坦で、海抜高は210cmである。

埋土は１～７層までの粘質土と、８～10層の粘質砂～砂に大別される。井戸の埋没に際しては、下層に存在する溝15埋土の影響が大きいと考えられる。

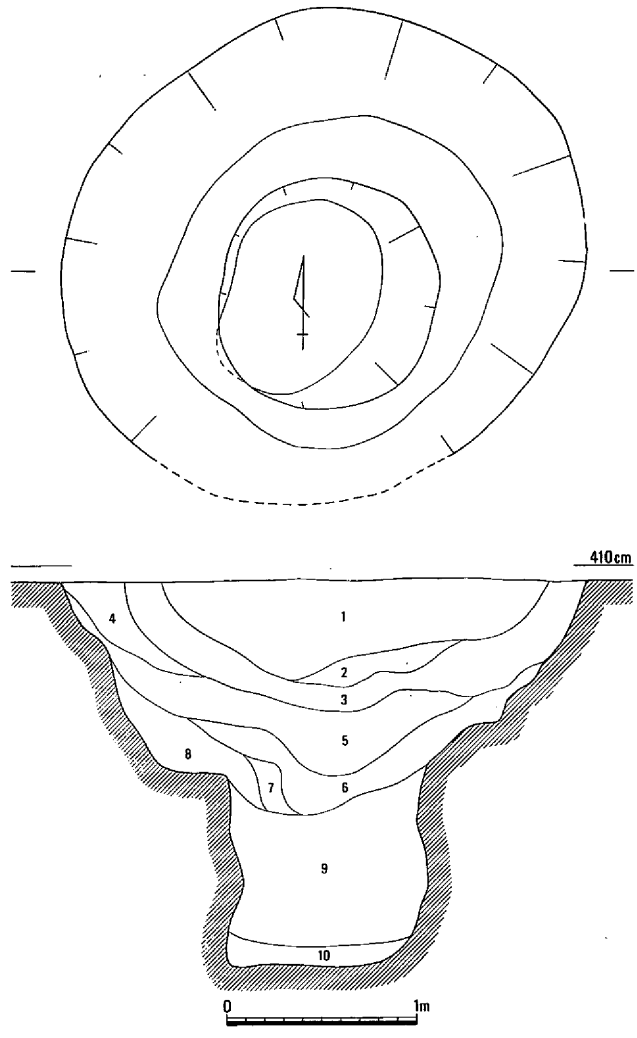


1. 灰黄褐色粘質土(Mn沈着)10YR4/2
2. 褐灰色粘質土(Mn沈着)10YR5/1
3. 黒褐色粘質土(Fe・Mn沈着)10YR3/2
4. 暗オリーブ灰色粘土2.5GY3/1

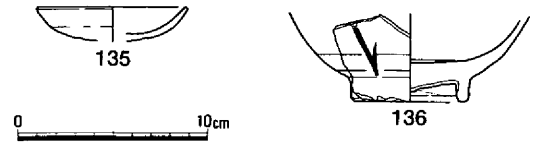




第53図　井戸３（1/40）・出土遺物（1/4）



1. オリーブ褐色粘質土(黒褐色粘質土塊含)2.5Y4/3
2. 暗灰黄色粘質土2.5Y4/2
3. オリーブ褐色粘質土(灰色粘質土塊含)2.5Y4/4
4. 暗オリーブ色粘質土5Y4/3
5. にぶい黄褐色粘質土(灰色粘質土塊含)10YR4/3
6. 灰色粘質土(微砂斑多含)7.5Y4/1
7. 黄褐色粘質土2.5Y5/6
8. オリーブ褐色粘質砂(Mn沈着)2.5Y4/4
9. オリーブ黒色粘質砂7.5Y3/2



第54図　井戸４（1/40）・出土遺物（1/4）

出土遺物には土師器と青磁がある。土師器皿135は井戸の中位出土したもので、口径7.9cmを測る。内面はナデ、外面はユビオサエとナデである。136は龍泉窯系青磁碗で、内面に沈線、外面に片彫連弁文の一部がある。高台径は5.2cmを測る。

井戸の使用時期は、溝24よりも新しいことから17世紀中頃以降と考えられる。　（高田）

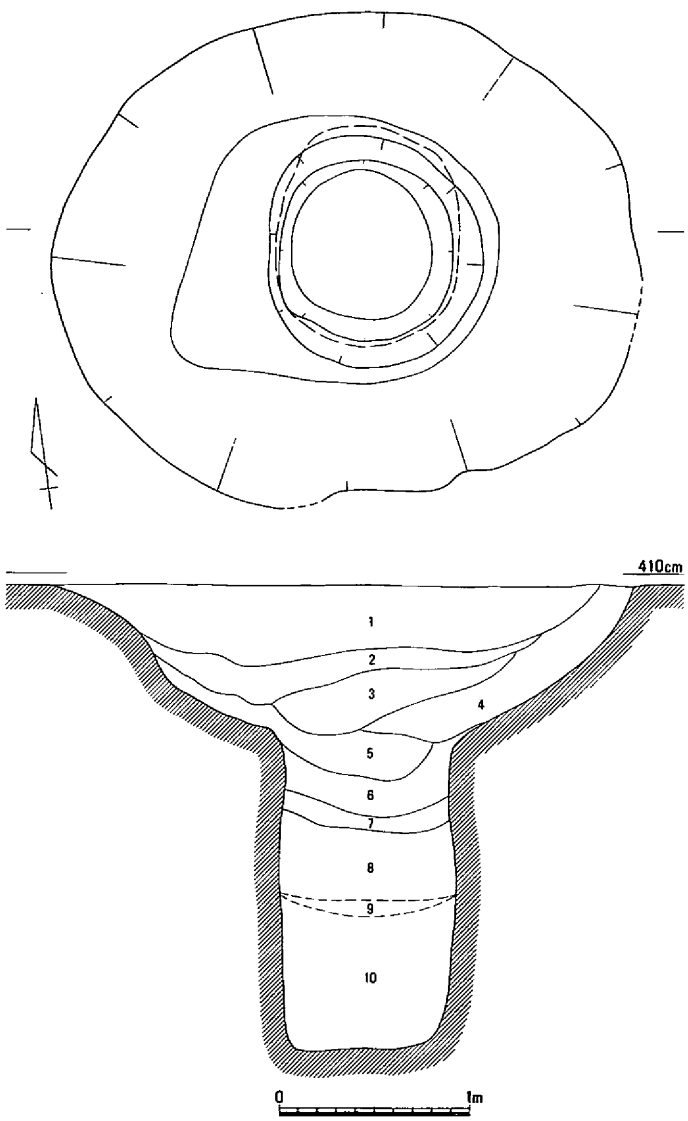
井戸５（第43・44・55図、図版７－３）

１区中央付近に位置し、溝24の南側2.5ｍで検出した井戸である。その西側は溝29に接し、あたかも溝が井戸に流れ込むような状況である。検出面は海抜405cm前後で、平面形は東西に長い楕円形を呈す。検出時の規模は東西径3.1ｍ、南北径2.55ｍ、深さ2.45ｍを測る。断面形は椀形の上部から、海抜320cm付近以下の壁がほぼ垂直に落ち込むもので、南西側の椀形の底に平坦部をもつ。

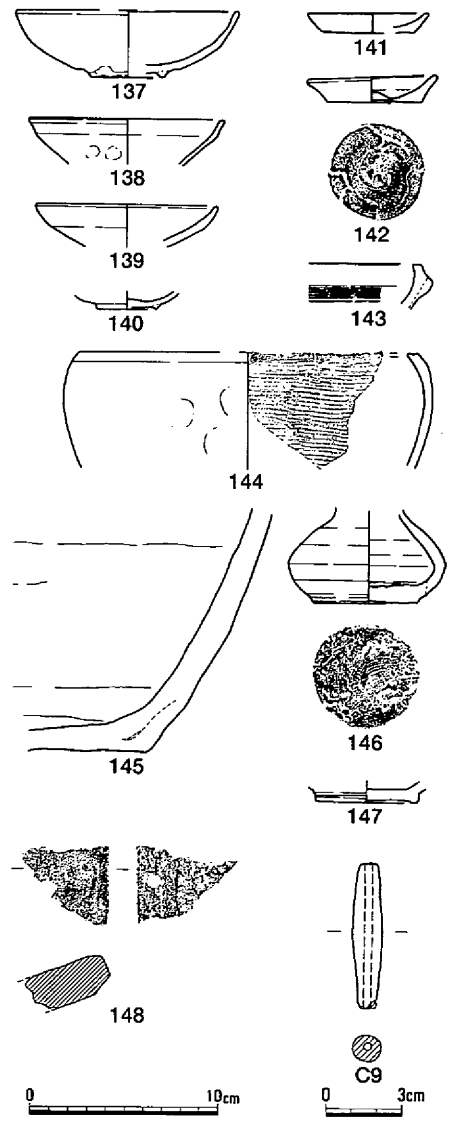
埋土は粘質砂～粘質土で、比較的安定した堆積状況を呈す。

図示した出土遺物は、土師器椀137～140、土師器皿141・142、瓦質土器鍋143、瓦質土器鉢144、備前焼甕145、備前焼壺146、青磁碗147、平瓦148、土錘Ｃ９である。137・138の口径は10cm前後を測る。142は外底面ヘラキリで、口径6.8cm、底径5.0cmを測る。

井戸の使用時期は、出土遺物の内容と検出状況から14世紀前半代と考えられる。（高田）



1. にぶい橙色粘質砂(灰褐色粘質土塊多含.Mn・Fe沈着)7.5YR6/4
2. にぶい褐色粘質砂(灰白色粘質土塊多含.Mn・Fe沈着)7.5YR5/3
3. 青灰色粘質土(赤灰色粘質土塊多含.Mn・Fe沈着)5B6/1
4. 灰黄褐色粘質砂(灰色粘質土塊多含.Mn・Fe沈着)10YR6/2
5. 灰白色粘質土(にぶい黄橙色砂質土塊多含.灰褐色粘質土塊多含.Mn・Fe沈着)7.5Y7/1
6. 灰白色粘質土(にぶい褐色微砂斑.灰褐色粘質土塊多含.Mn・Fe沈着)2.5Y7/1
7. 青灰色粘質土(灰オリーブ色微砂斑含.Mn・Fe沈着)10BG5/1
8. 暗オリーブ灰色粘質土(灰黄色微砂斑含)2.5GY4/1
9. 暗青灰色粘質土10BG4/1
10. 暗オリーブ灰色粘質土2.5GY4/1



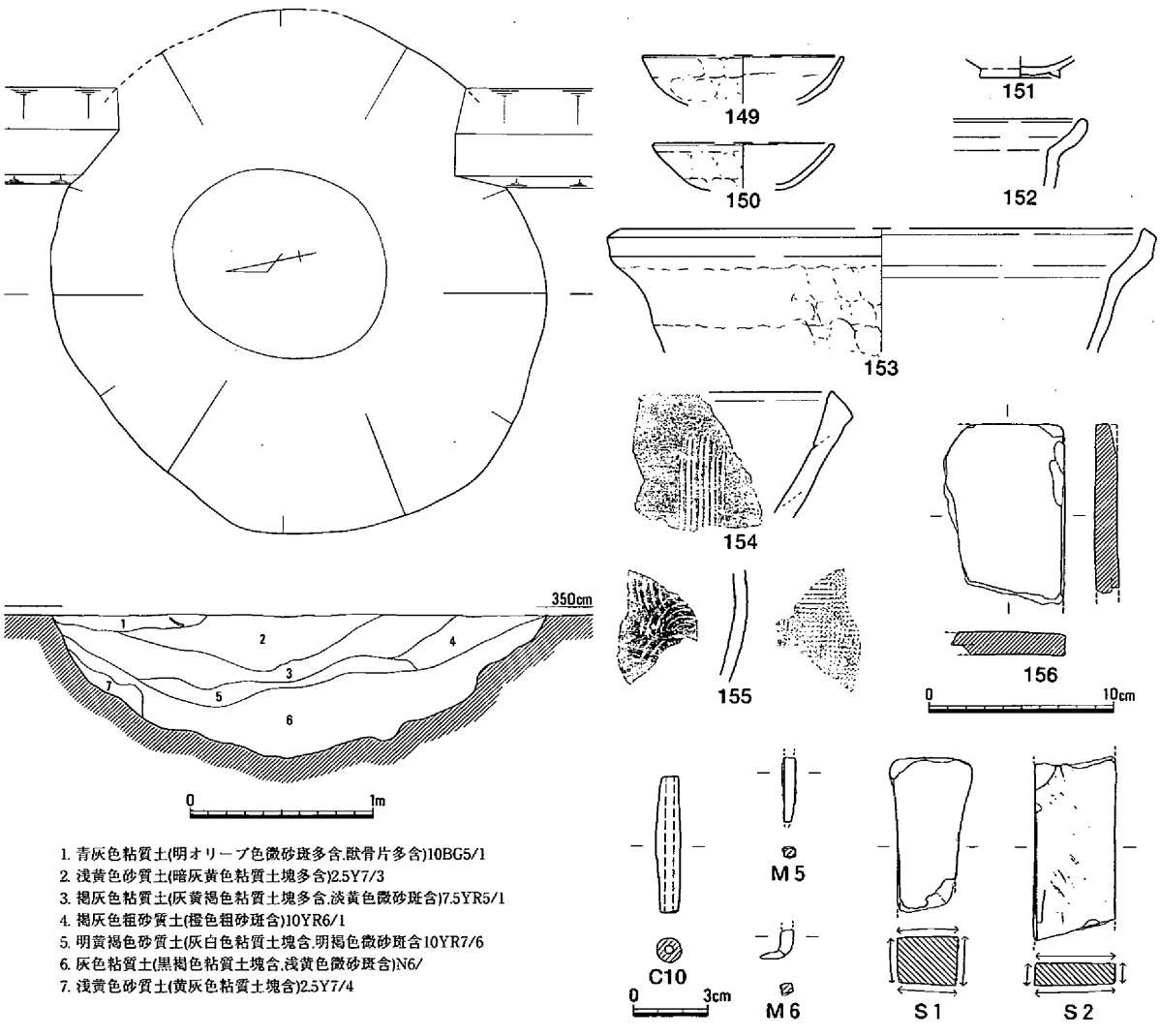
第55図　井戸５（1/40）・出土遺物（1/4・1/3）

井戸６（第43・44・56図）

ｘ６ｙ43区の中央やや北寄りで検出した。井戸５の東８ｍ、井戸７の北９ｍに位置する。平面形はややいびつではあるが円形を呈し、底面の形状は擂鉢状である。検出面において、径は260～290cm前後で、深さは最深部で78cmを測る。埋土は砂質土、あるいは微砂を多く含む粘質土で、レンズ状の堆積を示す。

埋土中からは、少量の土器片、土錘、釘、砥石、獣骨が出土した。

149～151は早島式と呼ばれる吉備系土師器椀である。149、150の口径は、それぞれ推定108mm、97mmであるが、小片のため検討の余地が残る。151の底径は推定44mmである。152は土師質の鍋で、煤が付着していた。153は瓦質土器の鍋である。口径は推定284mmである。これも煤が付着する。154は備前焼の擂鉢である。内面にはおろし目が施される。外面において自然釉が観察できる。155は亀山焼の甕である。外面には格子目の叩き目が、内面には同心円状の当て具痕が確認できる。煤が付着する。156は平瓦である。凸面には13×13mmの正格子叩き、凹面には布目痕が残る。厚さは最大24mmを測る。これらの土器の時期は14世紀初頭であろう。C10は土錘の完形品、Ｍ５・６は鉄釘破片、Ｓ１・２は砥石である。Ｓ１・２はともに流紋岩である。（重根）

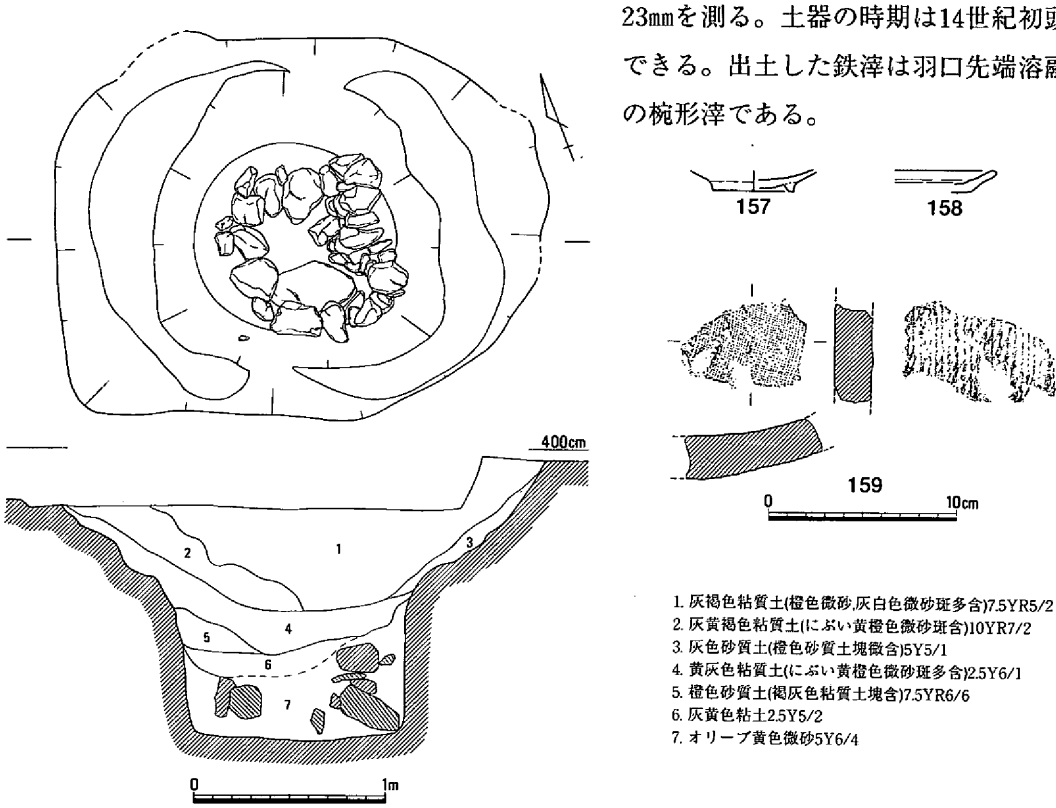


第56図　井戸６（1/40）・出土遺物（1/4・1/3）

井戸７（第43・44・57図、図版５－１）

ｘ６ｙ43区の南端で検出した。井戸６の南９ｍに位置する。掘り方の平面形は、検出面では不整形な長楕円であるが、おそらく円形を意識したものであろう。規模は長軸約260cm、短軸約200cmであり、深さは検出面より最大125cmを測る。断面形は、底面よりほぼ垂直に立ち上がる筒状をなし、底面から約80cmのところで大きく開く漏斗形である。底面は平坦で、径約105cmの円形である。底面付近では、平面方形を示す石組みを検出した。この石組みは、もともと底部付近にのみ低く積み上げたものであり、堀り方全面に積み上げてあったものを取り壊したものではない。埋土は粘質土、あるいは粘質土を含む砂質土で、６層より上層はレンズ状の堆積を示す。

遺物は、埋土中より土師器椀157、土師器皿158、平瓦159、鉄滓が出土した。157の底径は44mmである。159は凸面縄叩き、凹面布目痕が残る。縄叩きは、30mm幅８本が一単位である。厚さは最大23mmを測る。土器の時期は14世紀初頭が推測できる。出土した鉄滓は羽口先端溶融物付着の椀形滓である。（重根）



第57図　井戸７（1/40）・出土遺物（1/4）

（６）土　　壙

土壙３（第43・44・58図）

１区の北西端に位置する土壙である。検出面の海抜高は386cmで、平面形は円形を呈する。検出規模は径80cm、深さ12cmを測る。断面は逆台形である。

出土遺物はないが、検出状況から中～近世と考えられる。（高田）

土壙４（第43・44・58図）

１区の建物１の東辺に接するように位置する土壙である。その西側を近現代撹乱で失っているが、平面形は南北に長い小判形で、底面北側が一段高くなっている。南半の低い部分の底面には炭と焼土塊の顕著な層がみられた。検出規模は南北長2.8m、東西長63cm、深さ17cmを測る。

出土遺物は少量の土器片があるのみで、土壙の時期は検出状況から中～近世と考えたい。（高田）

土壙５（第43・44・58図）

１区北西部に位置し、溝23に西側を切られる土壙である。全体の平面形は不明だが、検出規模は東西長1.9ｍ、南北長95cm、深さ17cmを測り、底面はほぼ平坦である。

出土遺物には土師器片がある。土壙の時期は検出状況から、中世と考えられる。（高田）

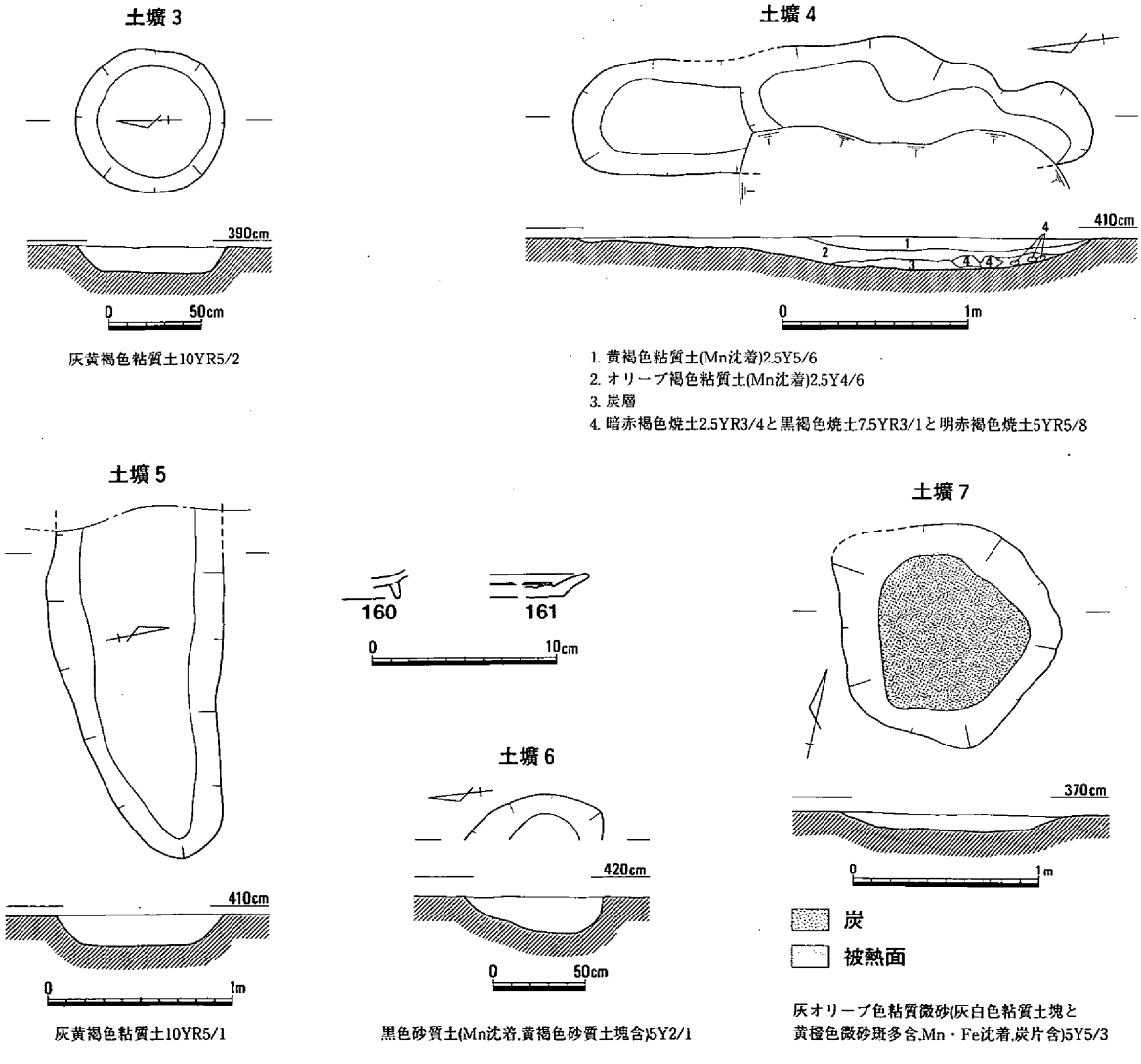
土壙６（第43・44・58図）

１区の井戸４の北東側約2.5ｍに位置する土壙である。溝24の北側の中～近世遺構が集中する箇所の東端になる。その西側を近現代撹乱で失うが、検出規模で南北長75cm、深さ20cmを測る。

出土遺物はないが、検出状況から中～近世の時期が与えられよう。（高田）

土壙７（第43・44・58図）

１区南西端に位置し、水田１の耕作土を掘り下げた後に検出したものである。溝28と切り合い関係にあり、本遺構が新しい。平面形は角の丸い五角形ともいうべき不定なもので、検出規模は最大長1.3ｍ、深さ10cmを測る。底はほぼ平坦でよく焼けており、その上に炭層の広がりがある。被熱影響は底面から最大１cm程度である。出土遺物はなく、検出状況から中世段階の炉跡と考えられる。（高田）



第58図　土壙３～７（1/40）・土壙５出土遺物（1/4）

土壙８（第43・44・59・60図、巻頭図版２－１）

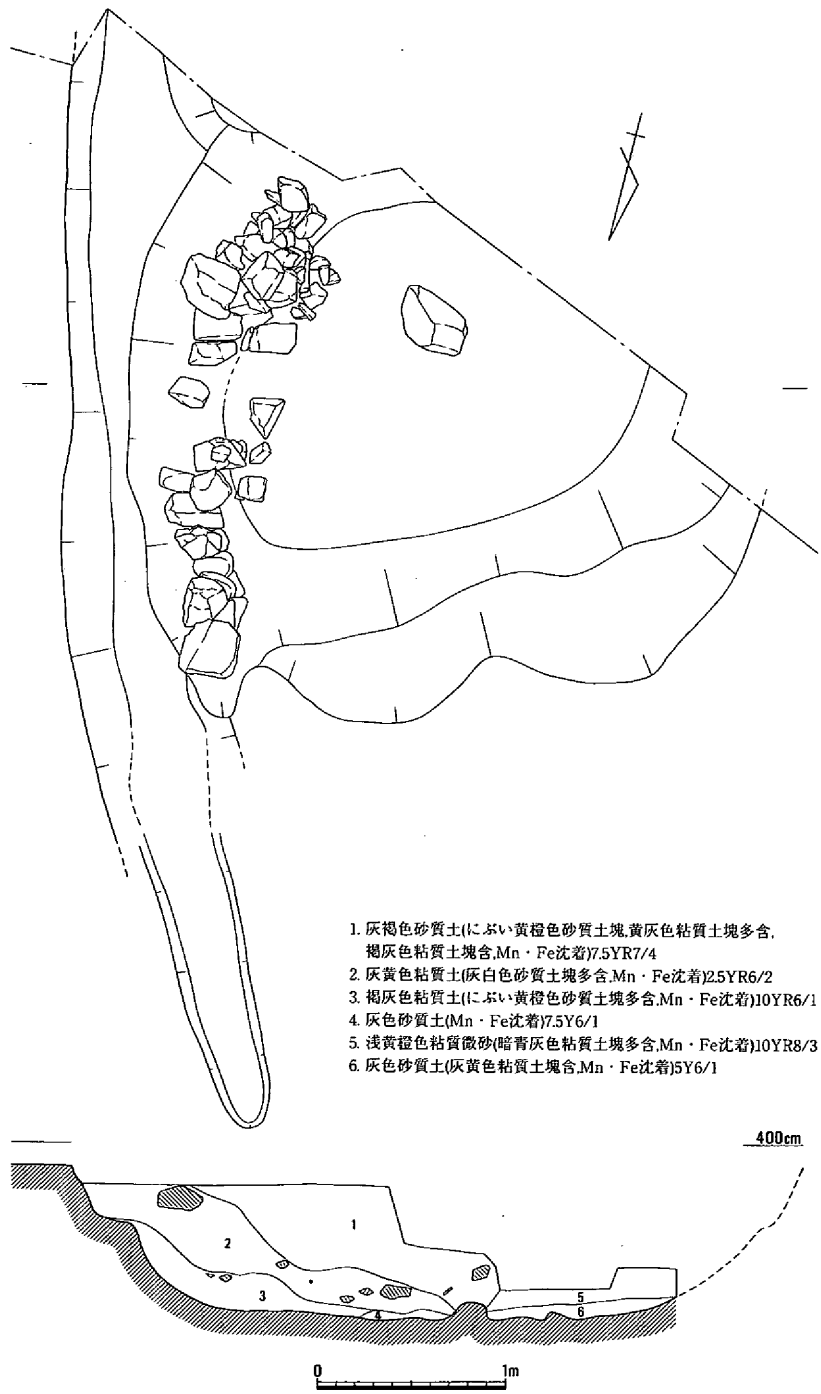
１区の南西部に位置する遺構で、その南側は調査区外となる。水田１・溝30と切り合っており、それらよりも新しいことを確認している。検出面は海抜390cm前後で、不定形な落ち込みの東側に南北方向の溝が付帯するような平面形を呈する。検出規模は、落ち込みの東西・南北長3.2m、深さ80cmを測り、溝状部分で長さ６m、幅80cm、深さ33cmを測る。落ち込みの東側斜面には、川原石を２・３段に積む石組みがあり、使用する石の大きさは、拳～人頭大が多く、大きい石で一抱え程度である。石組みの上面の海抜高は380cm前後、下面はほぼ355cm前後に纏まるが、石組みから離れたものでは下面が320cmとなるものもある。しかし、いずれも落ち込みの底面からは遊離している。

埋土は１層が埋め戻し土と考えられるもので、落ち込みと溝状部分を画するような堆積はみられない。

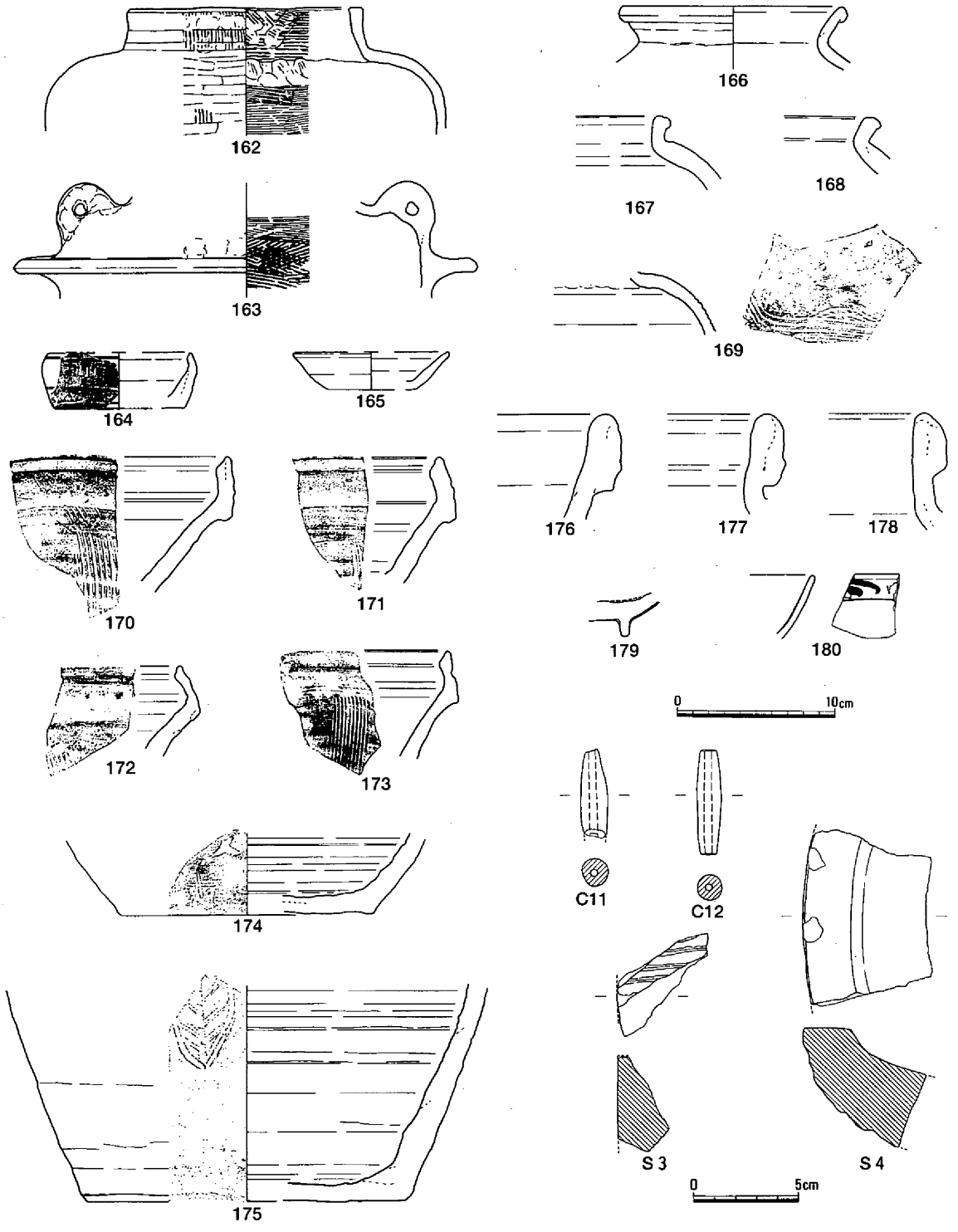
出土遺物は土師器、瓦質土器、亀山焼、備前焼、青磁等の土器類と、土錘や石臼、獣骨片で、各層から出土する。図示したものは、瓦質羽釜162・163、瓦質火鉢164、備前焼の杯165、備前焼の壺166～169、備前焼の擂鉢170～173、備前焼の壺か甕174～178、青磁碗179・180、土錘C11・12、石臼S３・４である。164はいわゆる「奈良火鉢」で、外面にスタンプ文がある。本来は有脚であろう。174・175の外面にはヘラ記号がある。180の外面には雷文帯が陰刻される。S３・４の材質は砂岩である。

第91図は溝24の出土資料と接合するものである。このことから、両者の廃絶時期が極めて近いことが窺われ、ほぼ17世紀前半代であろう。

以上から本遺構の性格は、溝24と接続する溝をもつような池と考えたい。　（高田）



第59図　土壙８（1/40）



第60図　土壙８出土遺物（1/4・1/3）

土壙９（第43・44・61図）

ｘ６ｙ42区の中央やや北寄りで検出した。溝30の北約2.4ｍに位置する。平面形は東西に長い、不整形な長楕円形を呈する。規模は最大長528㎝、最大幅139㎝となり、深さは検出面より67㎝を測る。底面も外形に沿って長楕円形となるが、西側が高く、段状になる。断面形は船底状である。この土壙の性格、用途は不明である。

埋土中からは、極少量の土器片、および鉄釘、毛抜きが出土した。

181は土師器椀である。底径は推定42㎜を測る。182は備前焼の壺である。土器の時期は、14世紀初頭が推測できる。Ｍ７～８は鉄製の釘である。Ｍ７は先端部が欠損しているが、Ｍ８は完存する。Ｍ９は鉄製毛抜きの破損品である。　（重根）

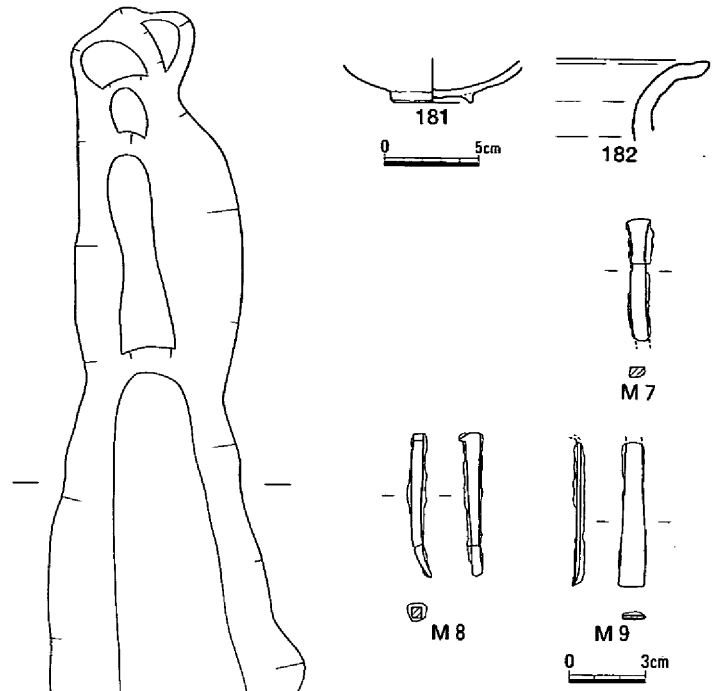
土壙10（第43・44・62図）

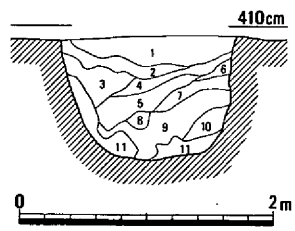
ｘ６ｙ42区のほぼ中央で検出した。土壙９の南側に隣接する。平面形は東西に長い長楕円形を呈する。規模は最大長122cm、最大幅66cmとなり、深さは検出面より67cmを測る。断面形は底面付近でやや広がる袋状である。

遺物は、埋土中より土師器椀183・184、瓦質土器鍋185、土師器皿186～189が出土した。200の底径は52㎜である。186～188の口径推定値は84～90㎜程度で、底径推定値は66㎜～73㎜程度である。土器の時期は14世紀初頭であろう。　（重根）

土壙11（第43・44・63図）

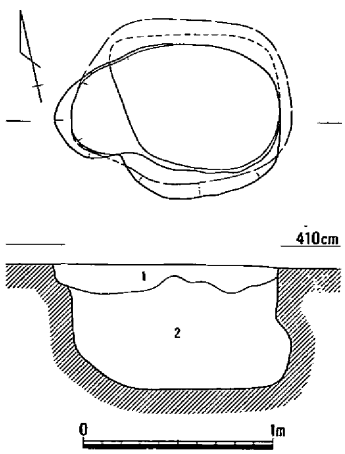
ｘ６ｙ43区の南東部側で検出した。土壙10の南東約５ｍに位置する。平面は径約90cmの円形を呈し、底面は中央が一段低い。深さは検出面より36cmを測る。出土遺物はない。　（重根）

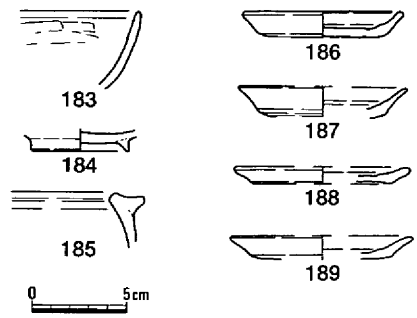




1. 灰黄褐色粘質微砂(暗赤灰色粘質土塊,
淡黄色砂質土塊多含,Mn・Fe沈着)10YR6/2
2. 灰褐色粘質微砂(明青灰色粘質土塊多含,
Mn・Fe沈着)7.5YR6/2
3. 浅黄色砂質土(灰黄褐色粘質土塊含,
灰白色砂質土塊多含,Mn・Fe沈着)2.5Y7/4
4. 褐灰色粘質微砂(灰白色粘質土塊多含,
Mn・Fe沈着)10YR6/1
5. 黄褐色粘質土(にぶい黄橙色砂質土塊含,
Mn・Fe沈着)2.5Y5/3
6. 灰白色粘質土(灰オリーブ色粘質土塊含,
浅黄橙色砂質土塊含,Mn・Fe沈着)7.5Y7/1
7. 灰黄色粘質土(灰白色粘質土塊多含,
浅黄橙色砂質土塊含,Mn・Fe沈着)2.5Y6/2
8. 灰黄褐色粘質土(灰色粘質土塊含,
Mn・Fe沈着)10YR5/2
9. にぶい黄橙色砂質土(浅黄色砂質土塊多含,
灰白色粘質土塊含,Mn・Fe沈着)10YR6/3
10. 灰白色粗砂(Mn・Fe沈着)N7/
11. 暗赤灰色砂質土2.5YR3/1

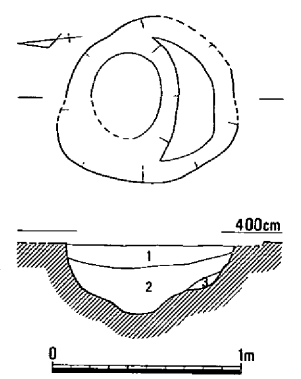
第61図　土壙９（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）





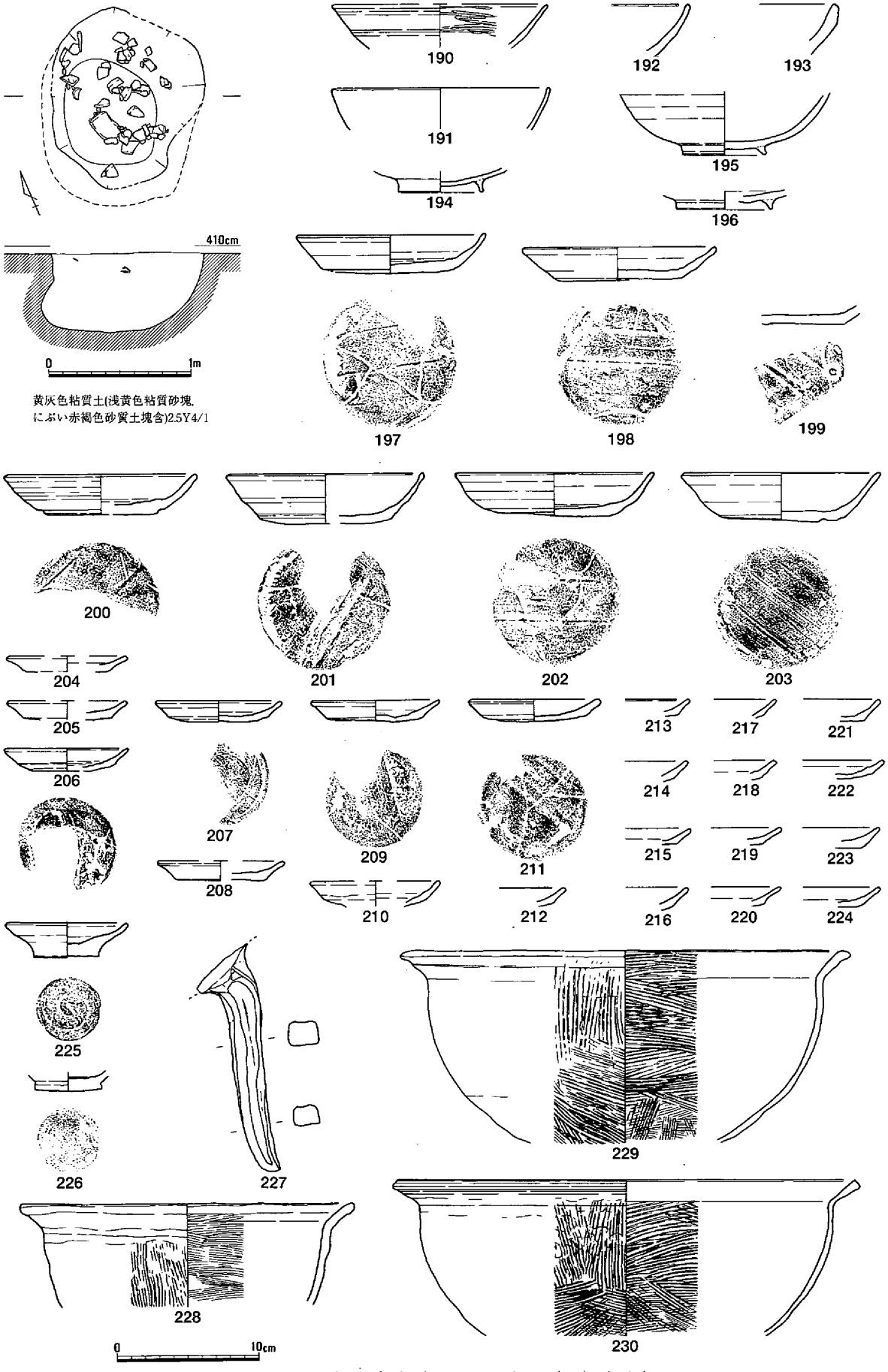
1. 灰褐色砂質土(黄灰色粘質土塊多含,Mn・Fe沈着)7.5YR6/2
2. 褐灰色粘質土層(浅黄橙色砂質土塊多含,Mn・Fe沈着)5YR6/1

第62図　土壙10（1/40）・出土遺物（1/4）

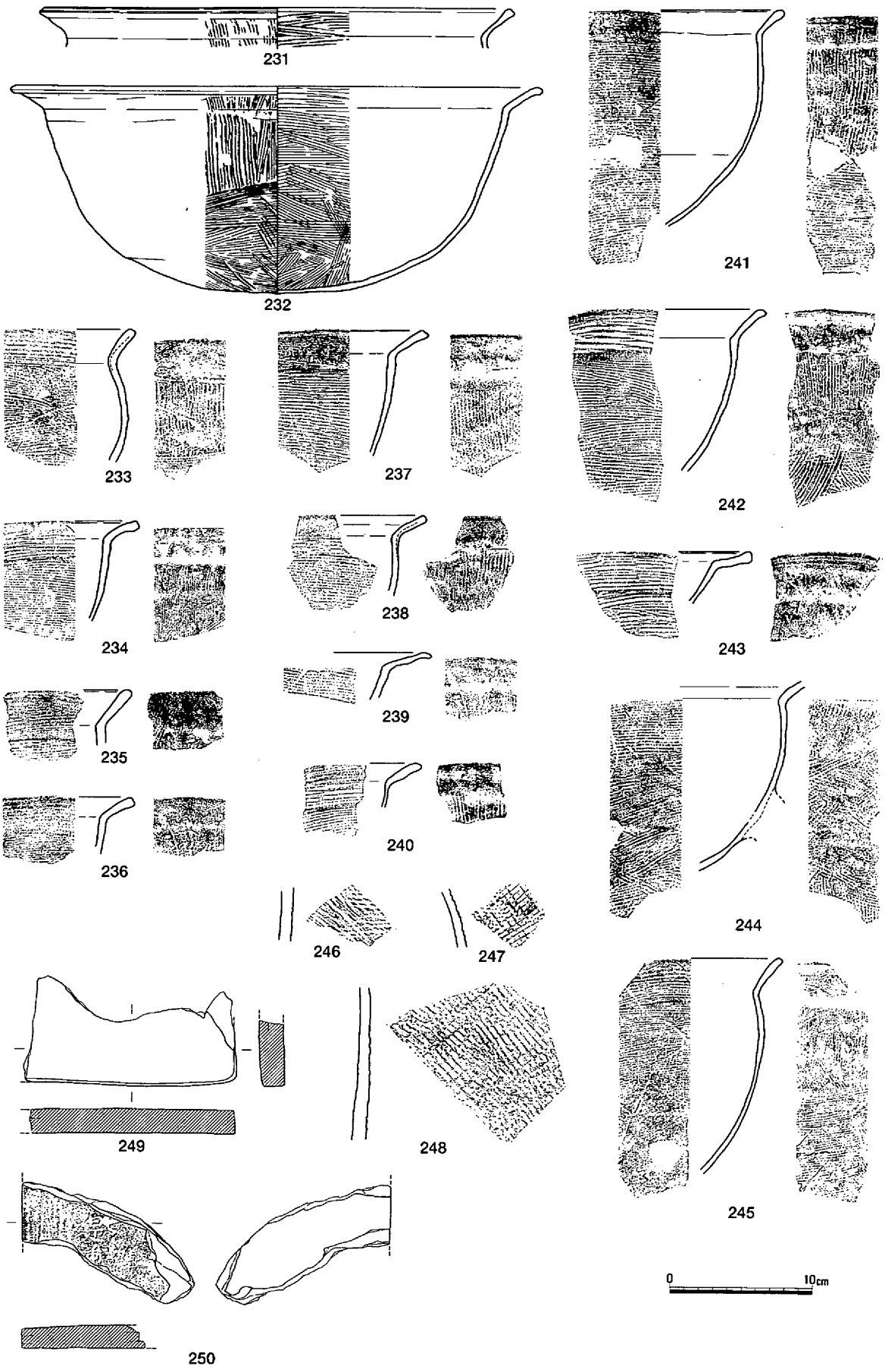


1.褐灰色砂質土10YR5/1
2.灰褐色砂質土10YR5/2
3.灰黄褐色微砂(にぶい黄色微砂斑含)10YR5/2

第63図　土壙11（1/40）



第64図　土壙12（1/40）・出土遺物（１）（1/4）

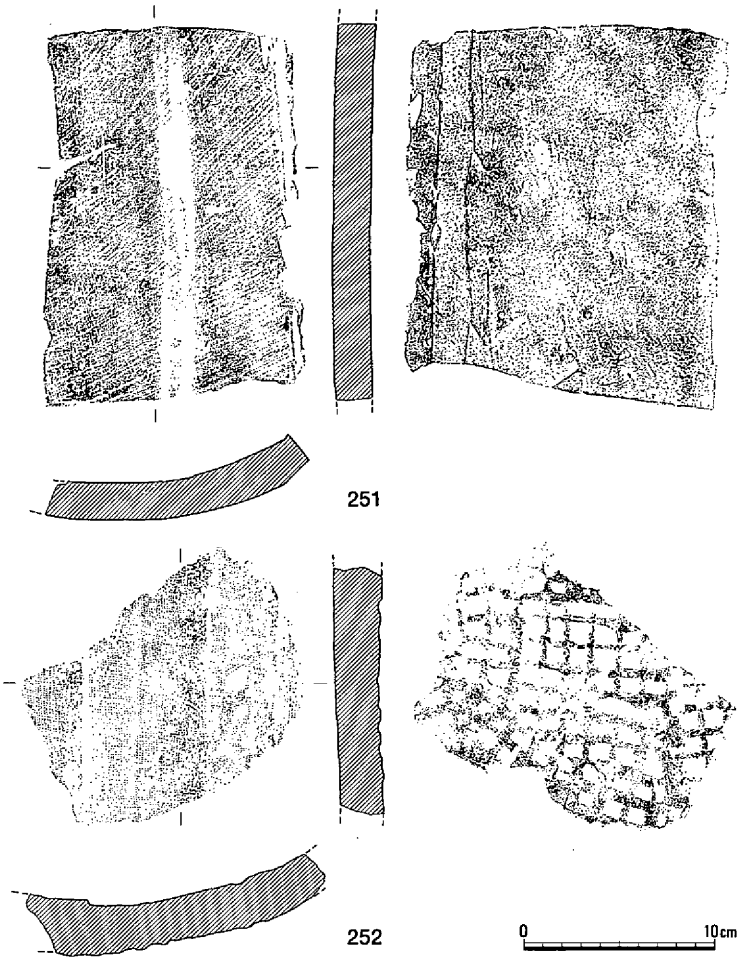


第65図　土壙12出土遺物（２）(1/4)

土壙12（第43・44・64～66図、図版７－５）

１区中央の南端、ｙ43線付近に位置し、土壙13・14と近接する土壙である。現代耕作土層を除去した段階で多量の土器片と炭・焼土塊を検出した。検出時の海抜高は405cm前後で、平面形はやや歪な楕円を呈する。検出規模は、南北の長軸長1.25m、東西の短軸長1.09m、深さ55cmを測る。壁は南半の中位以下が袋状に膨らむのに対し、北半は急斜となる。底面はほぼ平坦である。

埋土は黄灰色粘質土の単層で、大量の土器・瓦片とともに、炭と焼土塊が混在する。この焼土塊を詳細に観察すると、平らな生きた面を持つものや、内部に混和した草木質のみられるものがある。これらのことから、焼土塊の多くは焼成施設の炉壁片と判断している。



第66図　土壙12出土遺物（３）(1/4)

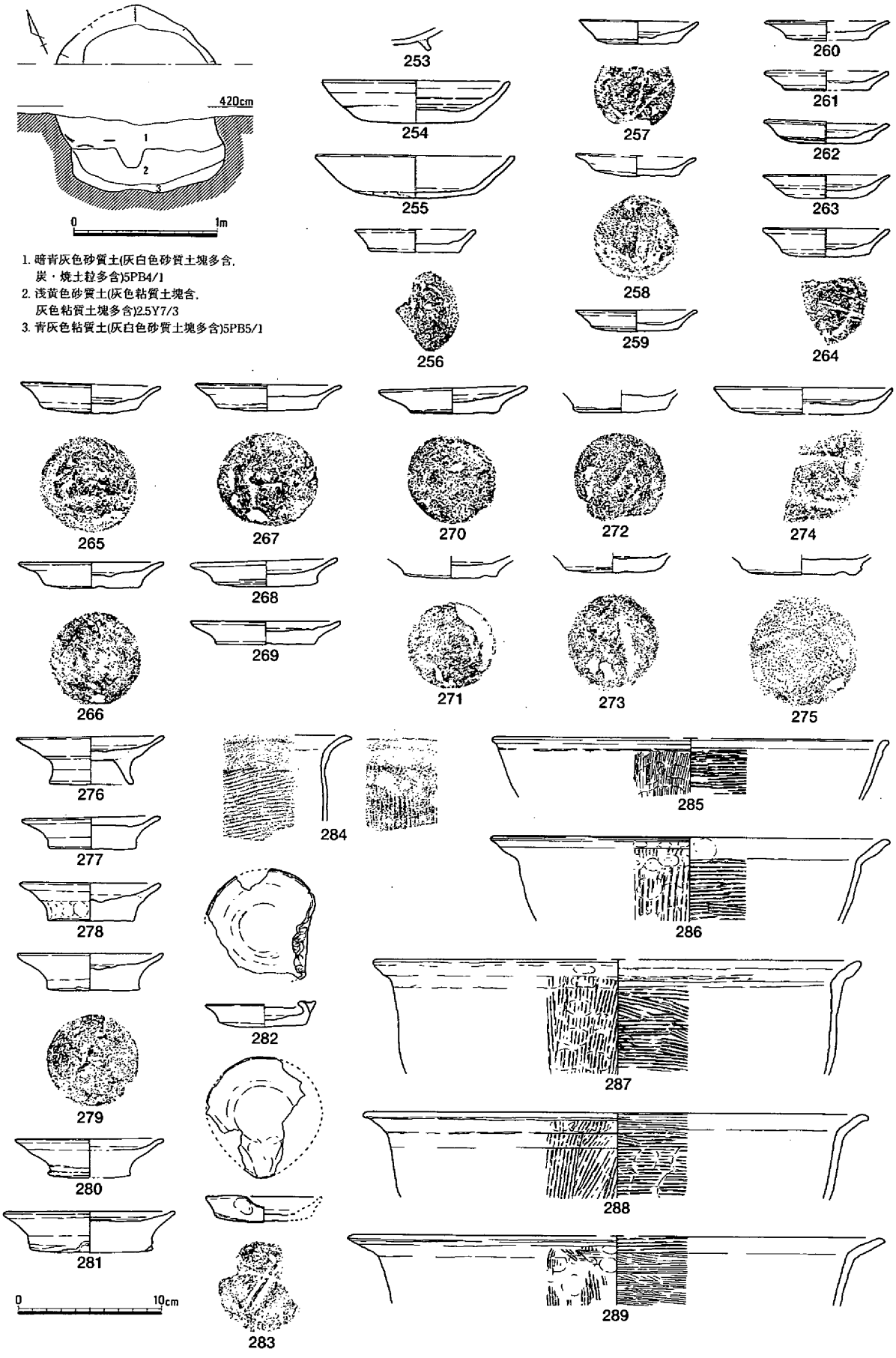
遺物の出土状況は、底から20～30cm離れ、かつ中央に偏るもので、土壙の埋没途中の一括廃棄を窺わせる。数点の完形品以外は復元不可能な破損品である。土師器椀190～196のうち、190～192・194～196はいわゆる早島式土器で、190と195は内面ヘラミガキがわずかに認められる。土師器杯197～203は口径13.1～13.8cm、器高2.3～3.6cmを測り、底部外面はヘラキリ後板目、内面をナデる。土師器皿204～224は、杯と同様の調整を施すものと、底部外面をヘラキリで終えるものがある。口径8.2～9.2cm、器高1.15～1.65cmを測る。土師器杯225と土師器皿226は底部外面をヘラキリで終える。土師器鍋227～245は、口径に対して器高の低い浅鍋で、大小２種がある。須恵器壺・甕246～248の外面は、平行と格子のタタキがある。土師質塼249・250は、厚さ1.6cmの扁平な矩形板の破片と考えられ、厚さ5mm前後の粘土板を重ねて成形する。250は線刻の「是重」と判読される縦書き２文字があり、周辺包含層からも同様の製品が出土している（第108図665）。平瓦251・253の凸面は正格子タタキと、ナデによる無文の２種がある。251の凹面はイトキリによる緩弧線、252は模骨痕がある。

出土遺物には土師器の杯・皿・鍋が多く、飲食に伴う一括廃棄が想定される。遺物の時期は12世紀末から13世紀初頭と考えられ、土壙の埋没もほぼ同時期であろう。（高田）

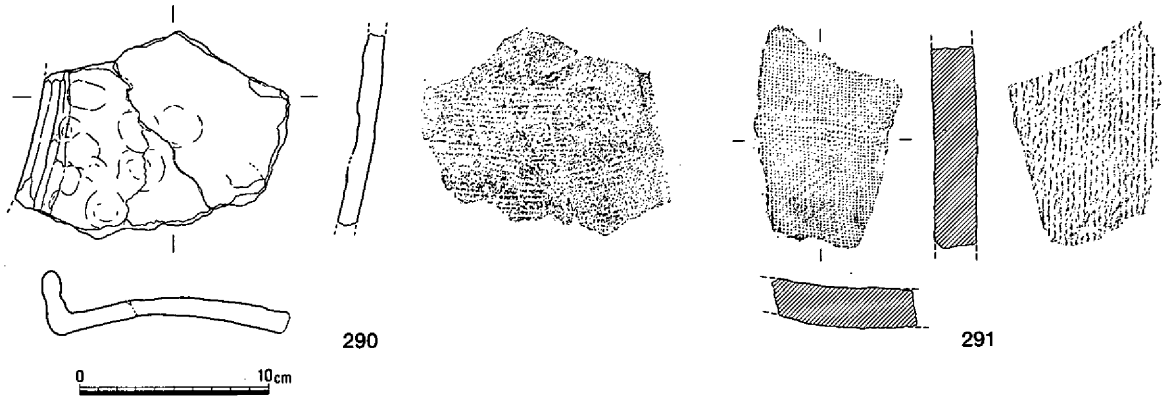
土壙13（第43・44・67・68図、図版７－６）

土壙12の南側に接して位置し、その大部分は調査区外にあるものと考えられる。平面形は不明だが、調査区南壁での断面形はやや袋状を呈する。検出面の海抜高は415cm前後、深さは50cmを測る。

埋土は３層でいずれも灰～灰白色土塊を含み、特に最上層の１層は炭と焼土塊も多く含んでいる。



第67図　土壙13（1/40）・出土遺物（１）(1/4)



第68図　土壙13出土遺物（２）(1/4)

この焼土塊の中には、土壙12と同様に炉壁と観察できるものがある。

図示した出土遺物は土師器椀の高台253、土師器杯254・255、土師器皿256～283、土師器鍋284～289、土師器カマド290、須恵質平瓦291である。大半を占める土師器の皿については、完形品やそれに近いものが多い。これらは口径8.3～8.8cm、器高1.4～２cmを測るものと、口径9.5～12.4cm、器高1.7～2.1cmを測るもの、口径9.4～11.8cm、器高2.5～3.1cmを測るものに分類できる。また、256～275の底部外面は摩滅して観察不可能なものもあるが、ほぼヘラキリ後板目を施すもので、277～281のうち観察可能な279～281がヘラキリで終えるのと違いがある。

出土遺物の内容は飲食後の一括廃棄を窺わせ、土壙12と内容的・時期的類似を指摘できる。(高田)

土壙14（第43・44・69図）

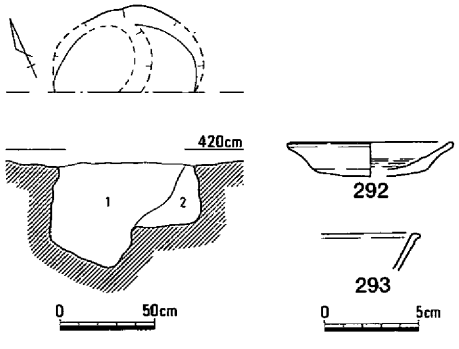
土壙13の東側1.5mに位置し、その南半は調査区外と考えられる土壙である。側溝とともに掘り下げたため、平面形その他の詳細は不明だが、袋状の断面形で底が２段に落ち込むものと推定される。埋土は土壙13に酷似する。出土遺物は少量で、図化したものは土師器皿292と白磁碗293である。

出土遺物量に差があるが、埋土や検出状況から土壙12・13と一連の遺構と考えたい。　(高田)

土壙15（第43・44・70図）

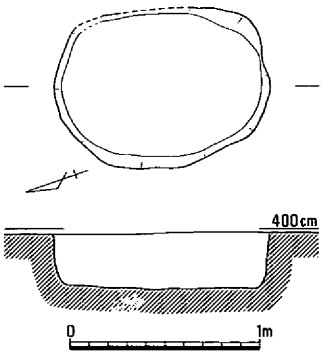
１区中央南寄りのｙ43線付近、先述の土壙14の北東側3.5mに位置する。検出面の海抜高は４ｍ前後で、平面形は長軸を南北にとる小判形を呈する。検出規模は南北長1.15m、東西長85cm、深さ30cmを測る。壁はほぼ垂直で、平坦な底面直上には炭化した植物遺体が層状にみられる。

炉壁と考えられる焼土塊を出土することから、周辺の土壙との関連性が指摘される。　(高田)



1. 灰色粘質土(灰黄色砂質土多含.灰白色粘質土塊含)7.5Y5/1
2. 黄灰色粘質土(灰白色砂質土塊多含)2.5Y5/1

第69図　土壙14（1/40）・出土遺物（1/4）



暗青灰色砂質土(灰白色砂質土塊多含.炭・焼土粒多含)5PB4/1

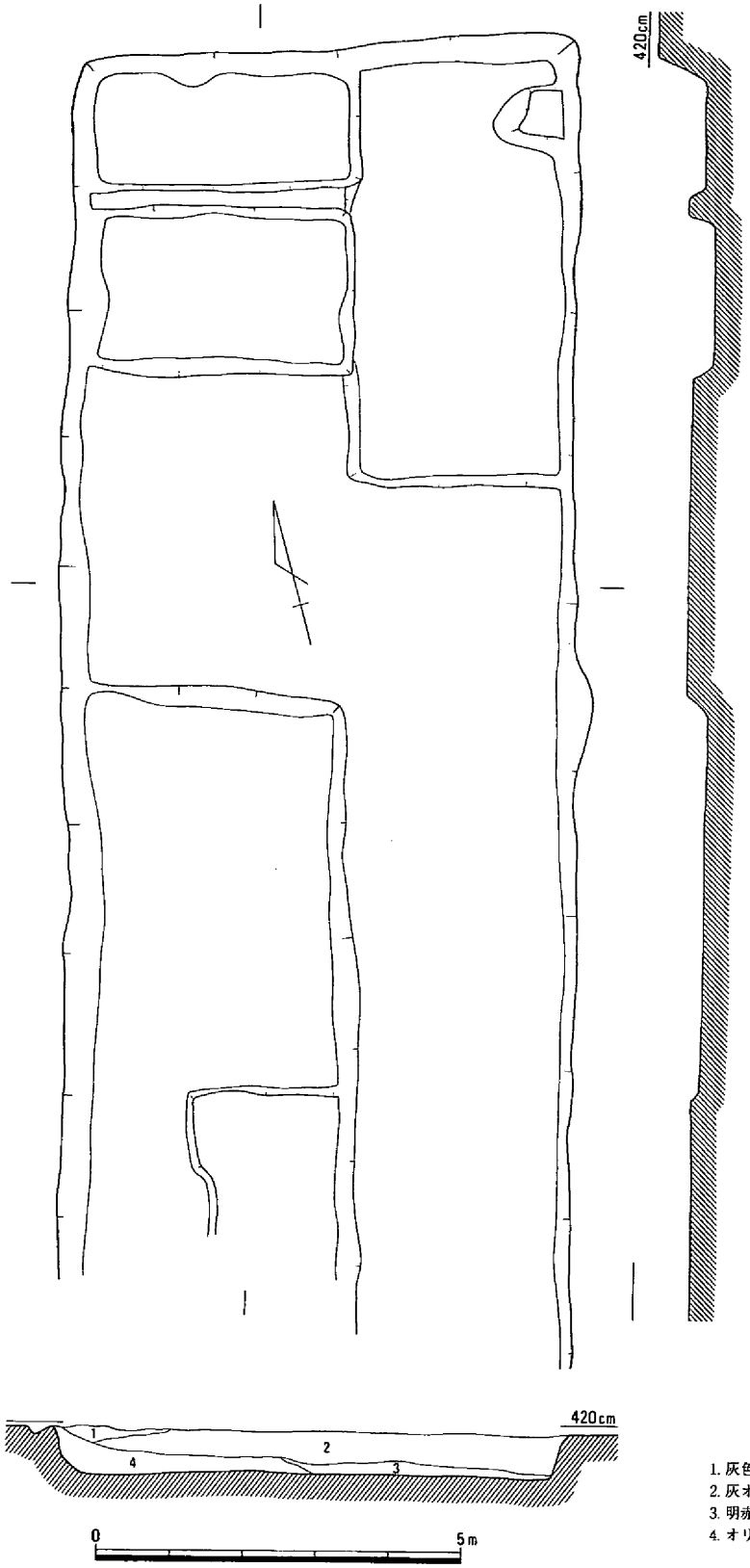
第70図　土壙15（1/40）

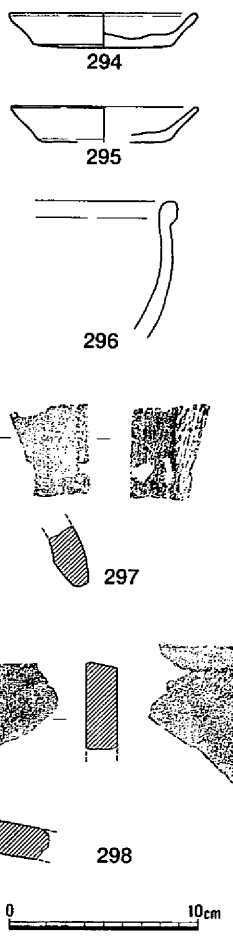
土壙16（第43・44・71・72図）

１区の中央、ｘ６ｙ43区に位置する。現代耕作土除去後に検出したものである。当初は南北方向の大溝を想定して掘り下げたが、北端を確認したことから長大な土壙として記載する。南側は調査区外に延び、検出規模は南北長18.4m、東西長7.3m、最深部で80cmを測る。底面は数段の矩形の落ち込みがあり、北西部には土手状の間仕切りがみられる。

埋土は微砂で、図示した出土遺物は土師器皿294・295、口唇部露胎の施釉陶器鉢296、丸瓦297、平瓦298～300がある。

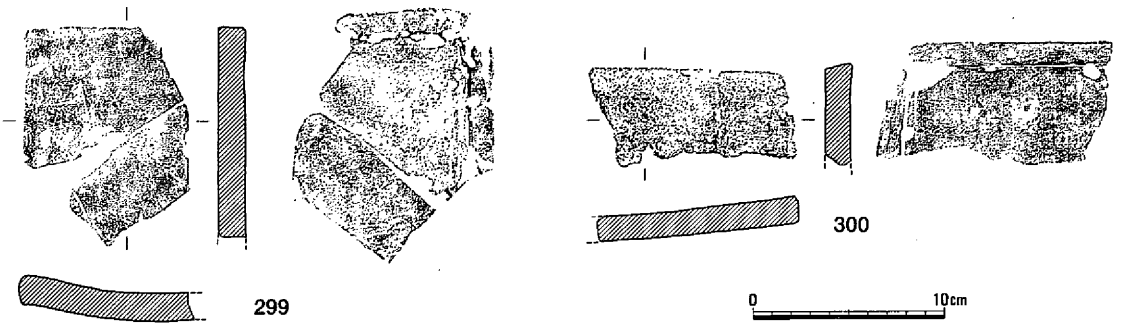
本土壙は、古代の旧河道１の肩に重なり、現代用水路下に位置す





1. 灰色微砂5Y5/1
2. 灰オリーブ色微砂7.5Y6/2
3. 明赤褐色微砂2.5YR5/6と灰色微砂5Y6/1
4. オリーブ黄色微砂(黄灰色粘質微砂塊多含)7.5Y6/3

第71図　土壙16（1/100）・出土遺物（１）(1/4)



第72図　土壙16出土遺物（２）(1/4)

ることから、土地利用上の区画を兼ねた施設であると推定される。

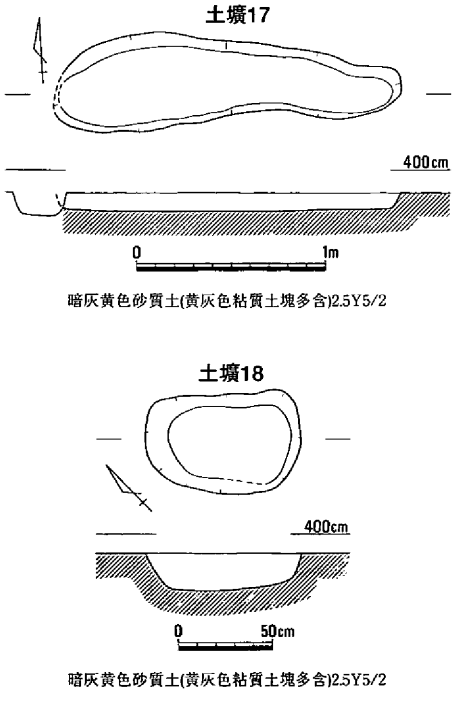
18世紀後半以降の堆積である灰白色微砂上面で検出したことから、近世後期以降に機能・廃絶したものと考えられる。（高田）

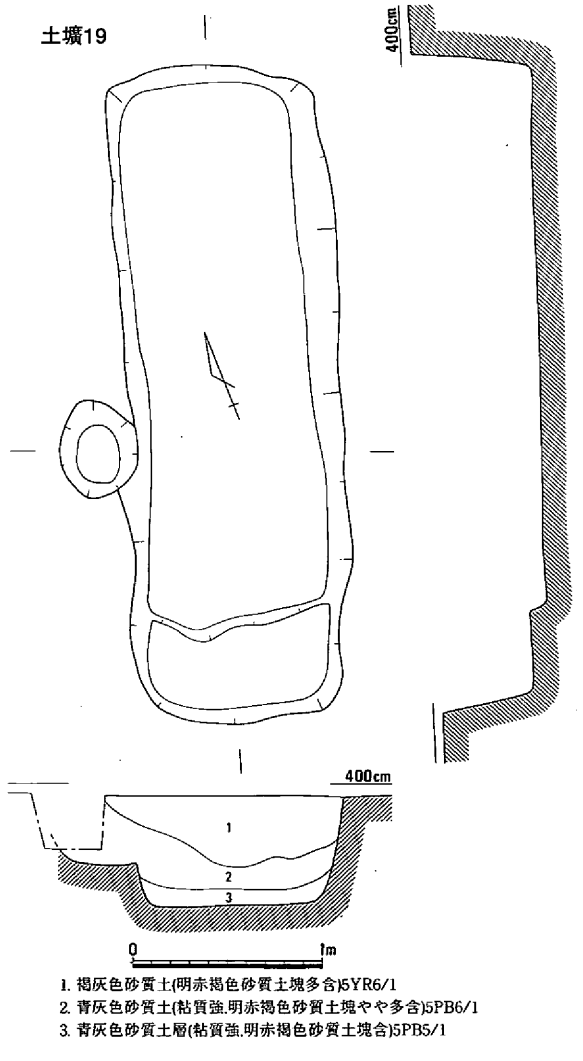
土壙17（第43・44・73図）

ｘ６ｙ43区の北東部寄りで検出した。溝31の東側に隣接する。平面形は東西に長い、不整形な長楕円形を呈する。規模は最大長が186cm、最大幅53cm、検出面からの深さは９cmを測る。出土遺物はない。（重根）

土壙18（第43・44・73図）

ｘ６ｙ44区の西端中央で検出した。土壙17の東約３ｍに位置する。平面形は不整形である。底面も不整形であるが、南東から北西にむけてやや傾斜が下がる。規模は最大長85cm、最大幅54cm、検出面からの深さは、最深部で19cmを測る。出土遺物はない。（重根）





第73図　土壙17～19 (1/40)

土壙19（第43・44・73図）

ｘ６ｙ44区の北西部で検出した。土壙18の東約２ｍに位置し、土壙20の北に隣接する。

平面形は南北に長い隅丸長方形を呈する。規模は最大長351cm、最大幅119cmとなり、検出面からの深さは最大65cmを測る。底面は平坦であるが、南側が一段高くなる。埋土はいずれも砂質土で、グライ化の激しいものであった。遺物には少量の土師器細片があるのみで、時期の判るものはない。

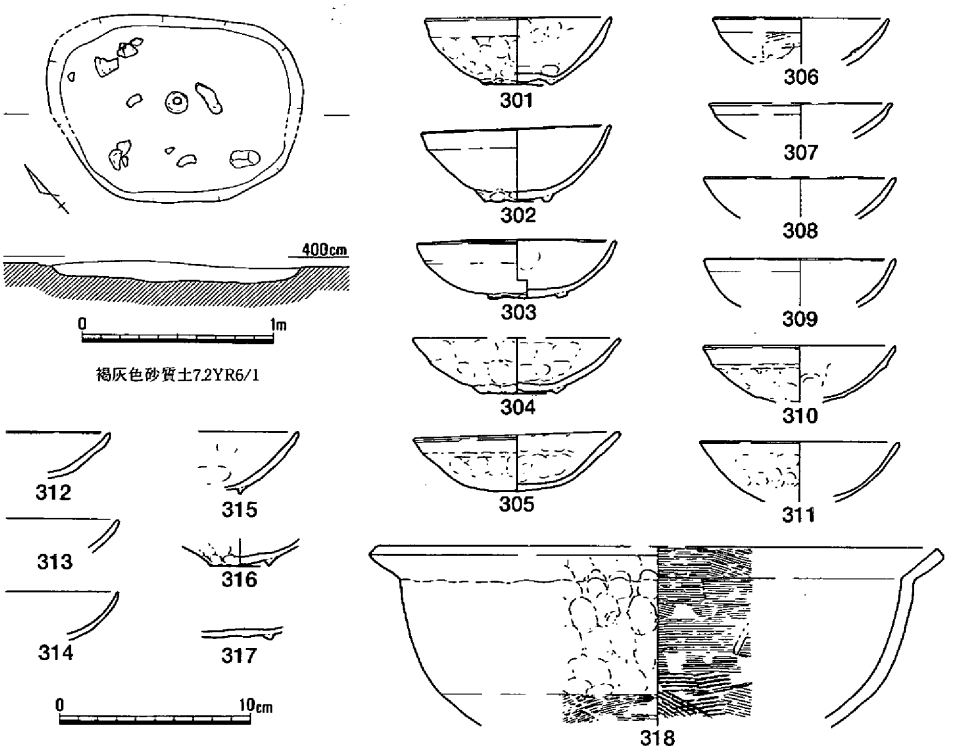
遺構の時期は明確ではないが、周囲の土壙16や溝35・36などとほぼ同一の軸線をもつことから、近世と考えられる。（重根）

土壙20（第43・44・74図、図版７－７）

ｘ６ｙ44区の北西部で検出した。土壙18の東約２ｍに位置し、土壙19の南に隣接する。平面形は、不整形な長楕円形を呈する。規模は最大長137cm、最大幅100cmである。断面形は皿状を呈するといえるだろうが、底面はやや起伏があり、平坦ではない。検出面からの深さは最大６cmを測る。埋土は褐灰色の砂質土であった。

出土遺物には土師器椀301～317、土師器鍋318がある。いずれも埋土中からの出土で、底面において出土した遺物はない。

301～317は早島式と呼ばれる吉備系土師器椀である。これらは、内外面ともに指オサエ、ナデ調整よって仕上げられる。ミガキ調整が施されたものはない。301～304、315～317には粘土紐張り付けの高台が確認できるが、いずれも粗雑で、その径も不均一である。305には、高台をつくり付けた痕跡は観察できなかった。301、302、310の口径は、それぞれ97mm、99.5mm、100mmで、303～309、311、315の口径推定値は、93～109mm程度である。301～303の底径は、順に35mm、34mm、42mmである。318は土師器鍋であるが、内面は粗いハケメ調整が、外面は押圧、ハケメ調整が施される。煤が付着していた。この土師器鍋318の口径推定値は296mmである。土器の時期は14世紀前半であろう。（重根）



第74図　土壙20（1/40）・出土遺物（1/4）

土壙21（第43・44・75図、図版７－８）

ｘ７ｙ43区の中央やや西よりで検出した。土壙17の南約2.5m、土壙22の北約3mに位置する。溝31よりも新しい。現代の攪乱により、遺構の一部が削平を受ける。平面形は不整形である。断面形は皿状を呈するといえるだろうが、底面はやや起伏があり、平坦ではない。規模は最大長494cm、最大幅353cm、検出面から底面までの深さは最大27cmを測る。底面中央やや南東には、平面不整形な長楕円形を呈する落ち込みを確認した。この落ち込みは、最大長99cm、最大幅75cm、遺構底面からの深さは最大24cmを測る。また、底面において石を多く検出した。検出した石の中には、火を受けて赤化したものがいくつか見受けられた。これらの石はここで使用していたものか、あるいは他の場所から運ばれ投棄されたのかは不明ではある。いずれにせよ検出状態は、当時の使用状態をとどめているものではない。

出土遺物には土師器皿319、瓦質土器羽釜320、備前焼擂鉢321・322、亀山焼擂鉢323、丸瓦324、鉄滓Ｉ２、石臼Ｓ５、焼土塊がある。土師器皿319の口径推定値は104mmである。備前焼擂鉢321の口径推定値は282mmである。324は内面に布目痕が残る。厚さは最大25mmを測る。Ｉ２は椀形滓で、表面において多くの付着物を確認した。この他にも鍛冶滓の小片がある。Ｓ５は石臼の破片である。石材は花崗岩質砂岩である。計測最大値は長さ111mm、幅89mm、厚さ102.5mm、残存重量は939gを測る。すりあわせ面推定径は200mmになる。遺構の時期は室町時代後半であろう。（重根）

土壙22（第43・44・76図）

ｘ６・７ｙ43区で検出した。土壙21の南約3m、井戸７の東約4.5mに位置する。溝31よりも新しい。平面形は不整形で、断面形は浅い擂鉢状を呈する。規模は長軸364cm、短軸303cm、検出面から底面までの深さは最大９cmを測る。底面の中央、最深部付近において台石が一点出土した。

出土遺物には土師器椀325、土師器皿326、328～331、土師器杯327、釘Ｍ16、性格不明鉄製品Ｍ11、平瓦332、焼土塊がある。

土師器椀325の口径推定値は88mmである。土師器皿328～331の口径推定値は、76～87mm程度である。328は手ずくねにより成形されたもので、底面にヘラ切り、糸切りの痕跡はない。土器の時期は14世紀前半であろう。Ｍ16は先端部が欠損していた。Ｍ11は刀装の一部ではないかと考えるが、小片のため断定はできない。332は凸面に５×６mmの斜格子叩き、凹面に布目痕が残る平瓦であるが、摩滅が著しい。厚さは最大28mmである。（重根）

土壙23（第43・44・77図）

ｘ７ｙ44区の北端で検出した。溝33の東に隣接する。溝32よりも古い。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は最大長359cm、最大幅142cm、検出面から底面までの深さは５cmを測る。底面は外形に沿った隅丸長方形で、平坦である。出土遺物はない。（重根）

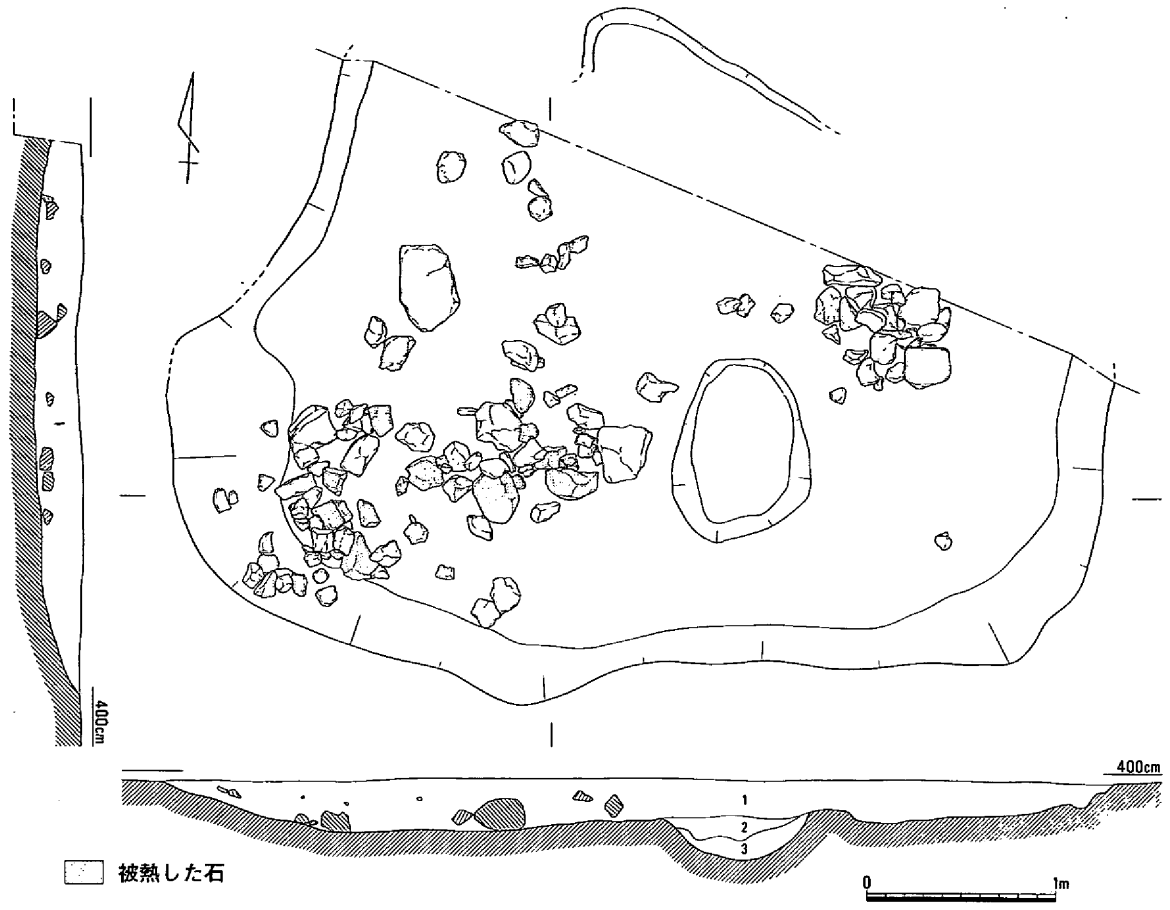
土壙24（第43・44・78図）

１区北東端で検出した土壙である。その東側は、上部に位置する近現代の落ち込みによって削られているが、ほぼ東西に長軸をもつ隅丸長方形の平面形を呈する。規模は東西長1.7m、南北長70cm、深さ35cmを測る。底はほぼ平坦で、壁は垂直近くに立ち上がる。埋土は鉄分の沈着が目立つ。

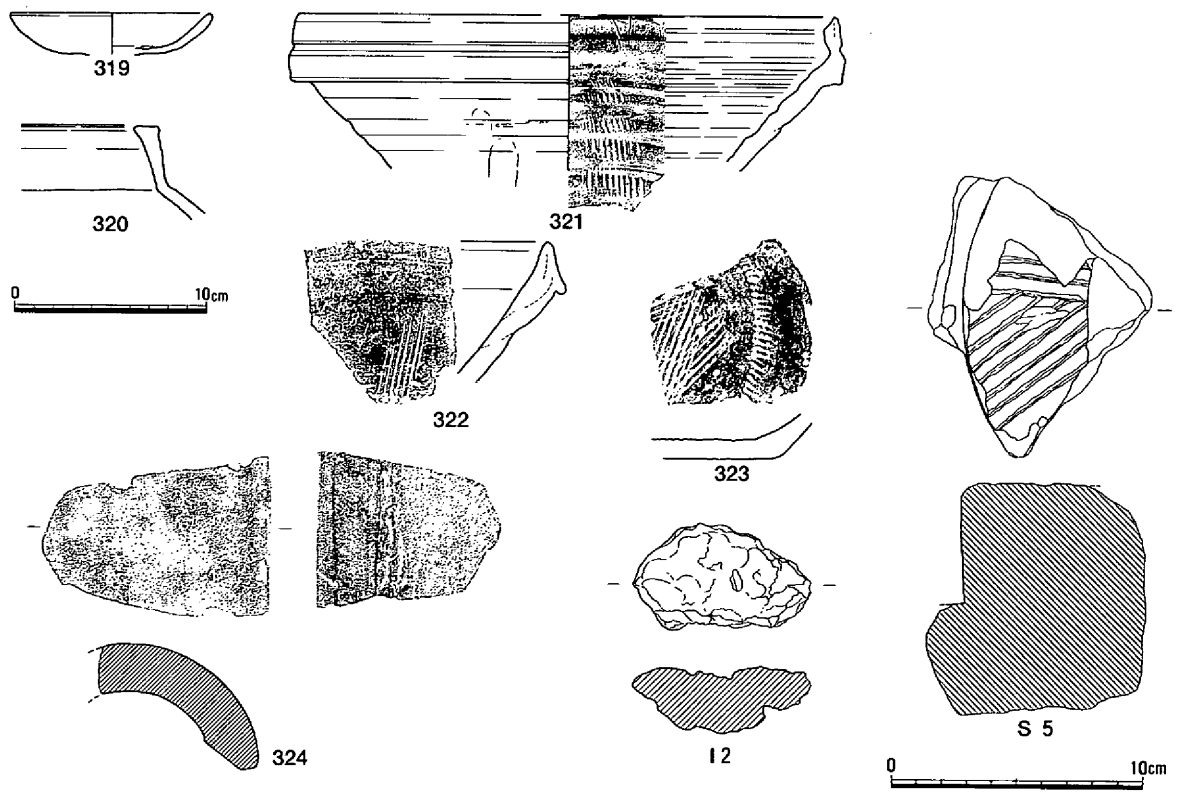
出土遺物は皆無だが、検出状況とその形態等から、中世以降の土壙墓の可能性がある。（高田）

土壙25（第43・44・79図）

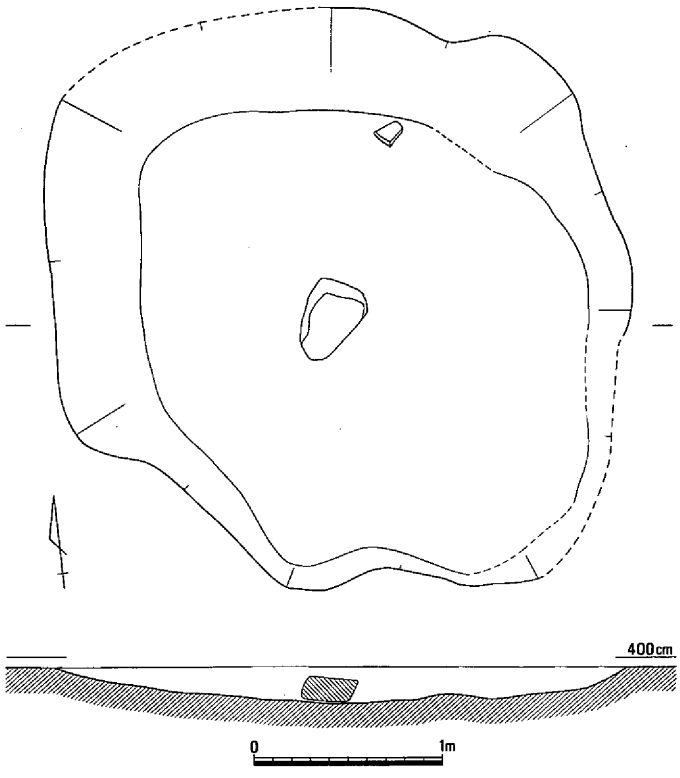
１区の北東部、ｙ45線付近に位置する。その北側を近現代攪乱で失い、全体の形状は不明である。



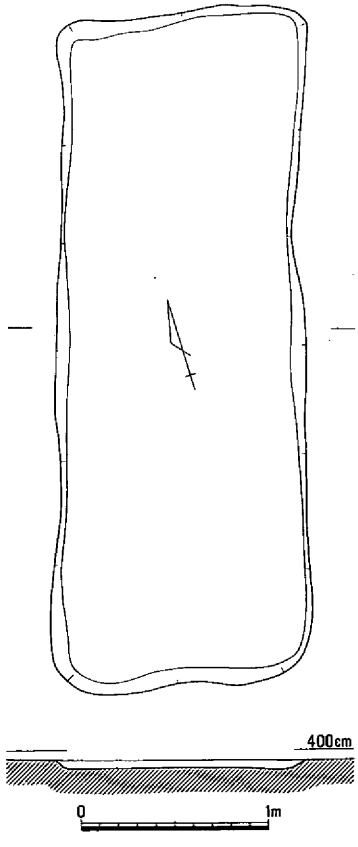
1. 暗灰黄色砂質土(黄灰色粘質土塊多含)2.5Y5/2
2. 緑灰色砂質土(黄灰色粘質土塊含,炭片含)7.5GY6/1
3. 褐灰色砂質土(灰白色砂質土塊多含)7.5YR4/1



第75図　土壙21（1/40）・出土遺物（1/4・1/3）

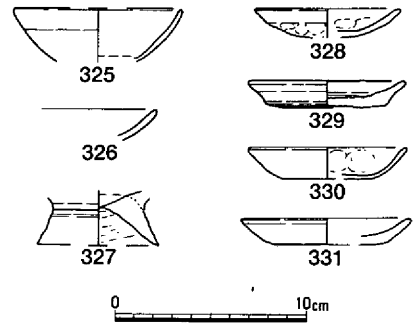


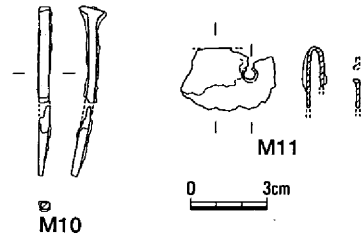
暗灰黄色砂質土(黄灰色粘質土塊多含)2.5Y5/2

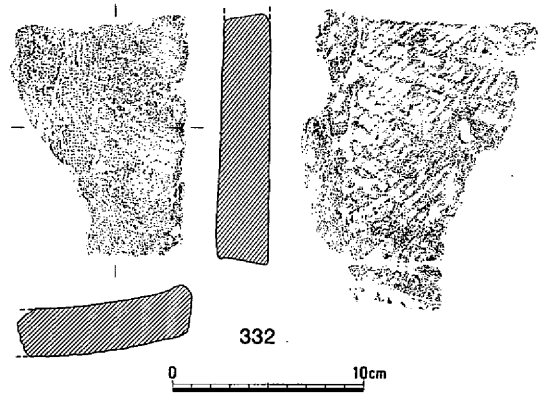


褐灰色砂質土10YR4/1

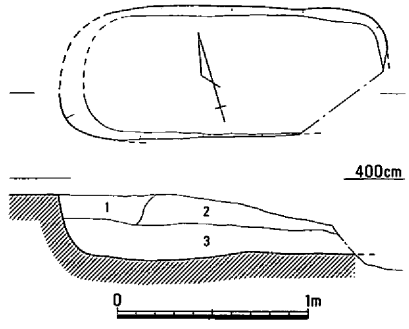
第77図　土壙23（1/40）







第76図　土壙22（1/40）・出土遺物（1/4・1/3）



1. にぶい赤褐色粘質土(灰色粘質土塊含)5YR4/3
2. にぶい赤褐色粘質土5YR4/3
3. 暗赤褐色粘質土(灰色粘質土塊含)5Y6/1

第78図　土壙24（1/40）

検出時の規模は東西長6.15m、南北長2.15m、深さ50cmを測る。断面形は椀形を呈し、底面は平坦ではない。西端部分が最も深く、東側に向かって徐々に浅くなる。埋土は１層で堅緻な堆積である。

出土遺物は土師器、青磁、土錘がある。土師器は小破片で図示していないが、早島式の椀と考えられる。龍泉窯系青磁碗333は内面見込に花文のスタンプがある。

土壙の時期は、出土遺物と検出状況から15世紀以降か。（高田）

土壙26（第43・44・79図）

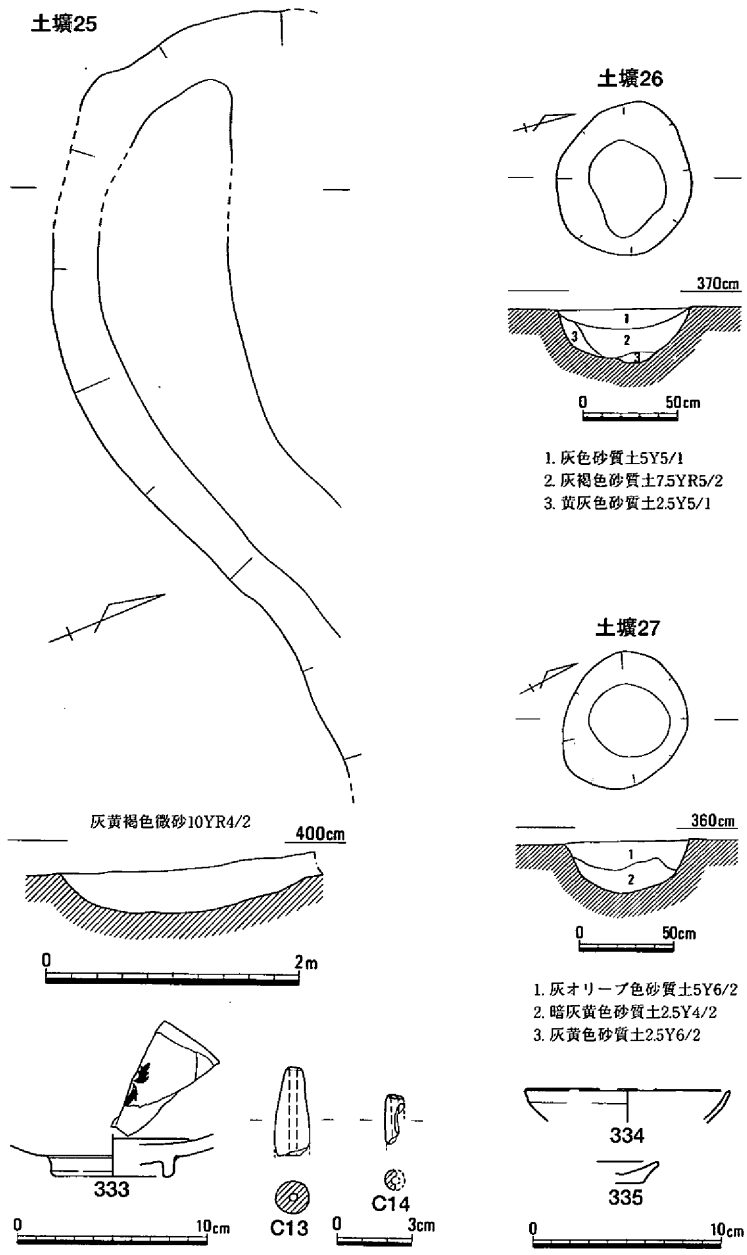
１区南東部に位置する。平面形はほぼ円形を呈し、検出時の規模は径80cm、深さ30cmを測る。

出土遺物は少量の土師器小片のみで、検出状況が似る土壙27との関連から鎌倉時代末頃か。(高田)

土壙27（第43・44・79図）

土壙26の南西側約３mに位置する。平面形はやや歪な円形を呈し、検出時の規模は径65～75cm、深さ27cmを測る。埋土は砂質土である。

図示した遺物は土師器椀334、土師器皿335で、時期は鎌倉時代末頃と考えられる。　（高田）

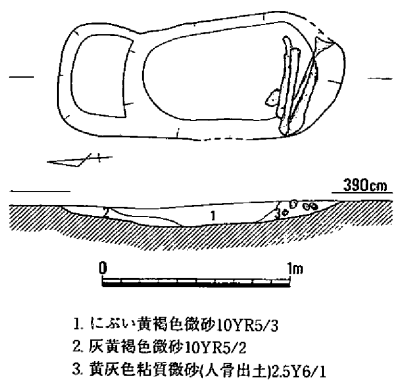


第79図　土壙25～27（(1/60・1/40）・土壙25・27出土遺物（1/4・1/3）

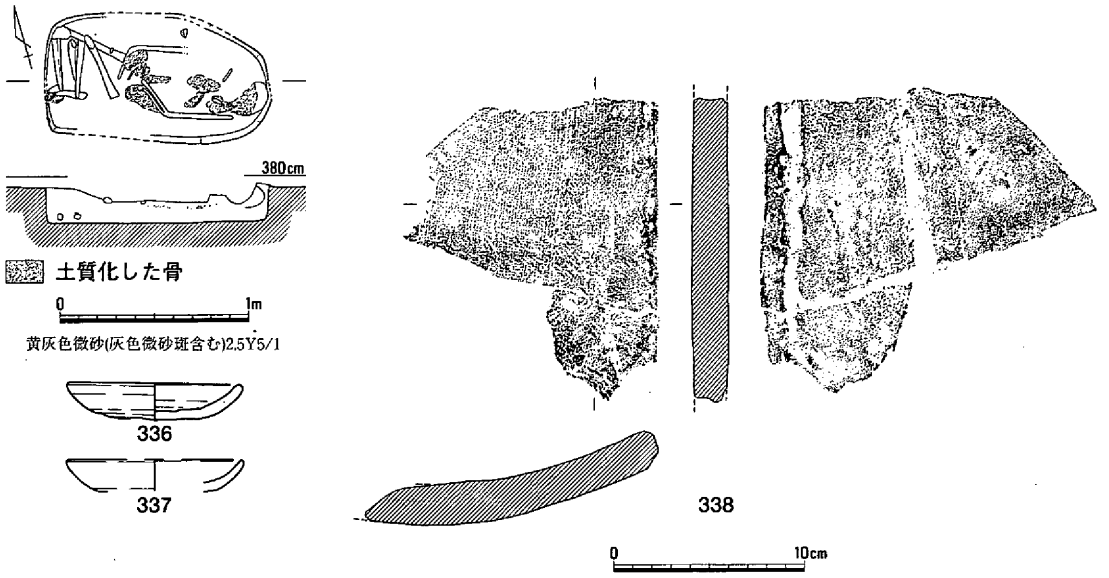
（７）土　壙　墓

土壙墓１（第43・44・80図）

ｘ６ｙ43区の北西部で検出した。井戸５の東約2.5mに位置する。平面形は不整形である。底面は北側がやや段状に高くなる。規模は最大長152cm、最大幅67cm、検出面から底面の深さは最大11cmを測る。土壙内南に人間の足の骨が残存していた。この残存状態より、頭を北にしていわゆる屈葬状態で葬られたものと推測する。また、埋葬された人物は、出土した歯より40歳過ぎの男性が想定される。人骨以外、出土遺物はない。　（重根）



第80図　土壙墓１（1/40）



第81図　土壙墓２（1/40）・出土遺物（1/4）

土壙墓２（第43・44・81図、図版７－４）

１区の東半、ｘ６ｙ44区の南西隅に位置する。平面形は東西に長軸をもつ西端がやや直線的な小判形で、検出規模は東西長1.2m、南北長70cm、深さ20cmを測る。底は平坦で壁は垂直に落ち込む。

埋土は微砂で、基盤層との判別が困難であった。人骨はほぼ土質化しており、頭部を東に置き、脚部を屈曲させた仰臥屈葬と推定される。頭部と脚部は掘り方に接し、脚部を除く部位は底面から約７cmほど遊離する。小橋進氏による歯の鑑定から、30才前後の男性と推定される。

図示した出土遺物は、土師器皿**336・337**と須恵質の平瓦**338**である。**336**は口径9.05cmを測る。

検出状況と出土遺物から、鎌倉時代の東頭位の土壙墓と考えられる。（高田）

（８）溝

溝20（第43・44・82図）

１区の北西端に位置する溝である。調査区西壁に平行し、西半と南北端は調査区外に推定される。北壁では海抜400cm前後から掘り込まれることを確認しているが、検出時の規模は長さ約６ｍ、深さ90cmを測る。断面形は、平坦な底から壁が直線的に立ち上がる逆台形と推定される。流水方向は不明で、埋土は灰色微砂層である。図示した出土遺物は、須恵質の壺**339**と鉢**340**、平瓦**341**がある。

溝の時期は、検出状況や出土遺物から、室町時代と考えられる。（高田）

溝21・22（第43・44・82図）

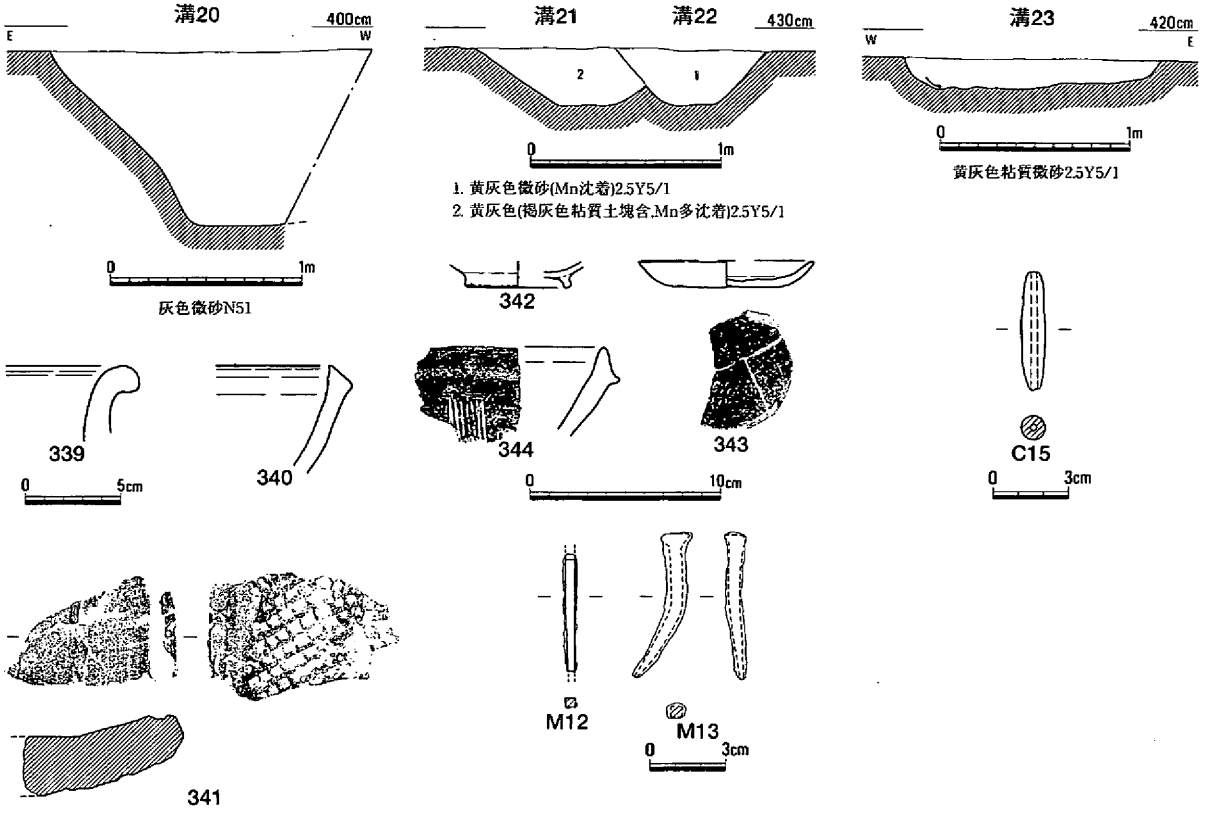
１区の北西部に位置する２条の重複する溝で、先述の溝20の約４ｍ東に平行する。その北側は調査区外に延び、南側は井戸２に切られる箇所で途切れる。建物１と柱穴列１と重複し、それらよりも新しい。検出面の海抜高は420cm、規模は長さ約6.5m、深さ30cmを測る。両溝の埋土は近似するため、一部を同時に掘り下げたが、断面形はいずれも逆台形を呈し、溝22が新しいことを確認した。

図示した出土遺物は、土師器椀**342**、土師器皿**343**、備前焼擂鉢**344**と、鉄釘**M12・13**である。

溝の時期は、検出状況や出土遺物から、室町時代と考えられる。（高田）

溝23（第43・44・82図）

１区の北西部に位置する南北方向の遺構で、北端は調査区外に延び、南端は浅くなって途切れる。土壙５よりも新しく、溝24とは北側に約3.5m離れている。検出面の海抜高は410cm前後、規模は幅



第82図　溝20～23断面図（1/40）・出土遺物（1/4・1/3）

1.35m、深さ15cmを測る。断面は底の幅広いU字形を呈す。埋土は締まった粘質微砂である。

出土遺物は少量の土師器片のほか、図示した土錘**C15**がある。時期は中世と考えられる。（高田）

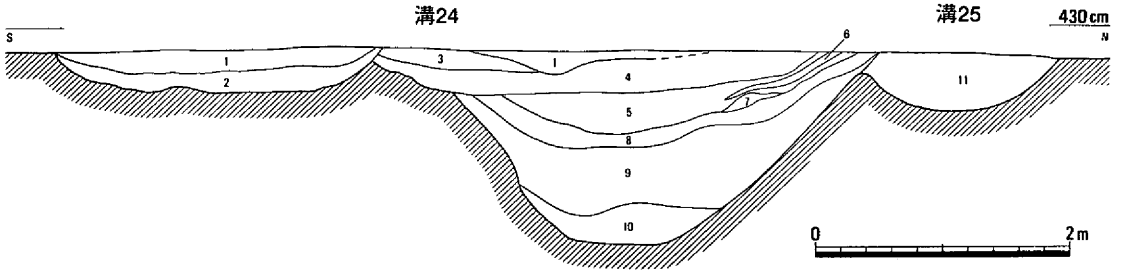
溝24（第43・44・83～94図、巻頭図版２－１、図版５－２）

１区北半を占める東西方向の大溝である。真上に幅２mの生活道路が重なって存在したため、当初はこの道路を残しながら溝の調査を進め、最終的に道路を付け替えて全掘が可能となった。このため、細切れの調査を余儀なくされ、旧調査区名で４・５ａ・５ｂ・６区にまたがっている。

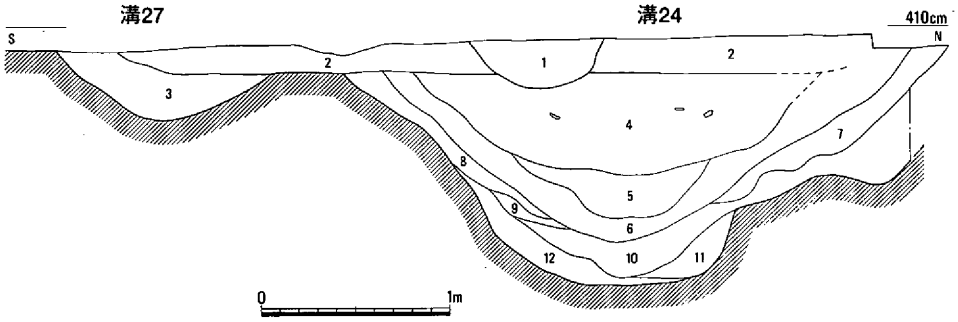
直線的な溝の西端と北東端は調査区外に延び、北肩がｘ６線にほぼ重なる。中央のｙ43線付近で南側に広がる部分は上層の堆積がみられる。検出時の規模は長さ約60m、幅4.5～５m、ｙ43線付近での最大幅７mを測る。検出面の標高は海抜400cm強で、深さは130～150cm前後を測る。底面の標高は東端で270cm前後、中央で260cm前後、ｙ43線から５m東に寄った箇所で230cm前後となり、この間では東から西に向かって徐々に深くなる。しかし、溝の西端部は数段に浅くなり、最深部との比高差は１m以上を測ることから、単純に西流する溝であるとも言えない。溝の断面形は逆台形を基本とするが、上層の広がりによって上部が逆ハの字状になる箇所もある。

埋土は上下層に大別できる。上層はマンガンと鉄分を顕著に沈着する層（第83図上断面第１～４層、下断面第２層）で、黒褐色粘土塊等によって埋め戻されたものと推定される。下層は粘質土を基調とするレンズ状堆積で、部分的に炭や微砂の堆積がみられ、最下層付近にはグライ化が認められる。

本遺構は長大なものであることから、他の多くの遺構と切り合い、先後関係にある。ここに中近世の遺構に限って記すと、本溝よりも新しい遺構は井戸３・４、土壙16、溝34で、同じ存在か古いと考えられる遺構は溝25～27である。また、遺物の一部が接合関係にある土壙８とは、少なくとも廃絶時期が極めて近接し、本来有機的な関係にあったものと推定される。



1. 灰褐色粘質土(明褐色粘質土塊多含,黒褐色粘土塊多含,Mn・Fe沈着)5YR6/2
2. 灰黄褐色粘質砂(にぶい黄色微砂斑含,黒褐色粘土塊含)10YR5/2
3. 灰褐色砂質土(Mn・Fe沈着)5YR5/2
4. 灰褐色砂質砂(Mn・Fe沈着)5YR5/2
5. 灰褐色粘質砂(黒褐色粘土塊含,Mn・Fe沈着)7.5YR5/2
6. 炭層
7. 灰オリーブ色粘質土5Y6/2
8. 明褐灰色粘質砂(Mn・Fe沈着)7.5YR7/2
9. 暗灰黄色粘質砂(Mn・Fe沈着,灰色粘土塊含)2.5Y4/2
10. 灰色粘質土N5/
11. 灰オリーブ色粘質微砂5Y5/1



1. 灰色粘質土5Y4/1
2. 暗灰黄色粘質土2.5Y5/2
3. 黄灰色粘質土2.5Y5/1
4. 褐色粘質土7.5YR4/3
5. 黄灰色粘質土2.5Y4/1
6. 褐灰色粘質土10YR5/1
7. にぶい黄褐色微砂(Fe沈着)10YR5/4
8. にぶい黄褐色微砂(Fe沈着)10YR5/4
9. 黄褐色粘質土10YR5/6
10. 黄灰色粘質土2.5Y4/1
11. 黄褐色微砂2.5Y5/4
12. 灰色粘質土N4/0

第83図　溝24断面図（上　1/60，下　1/40）

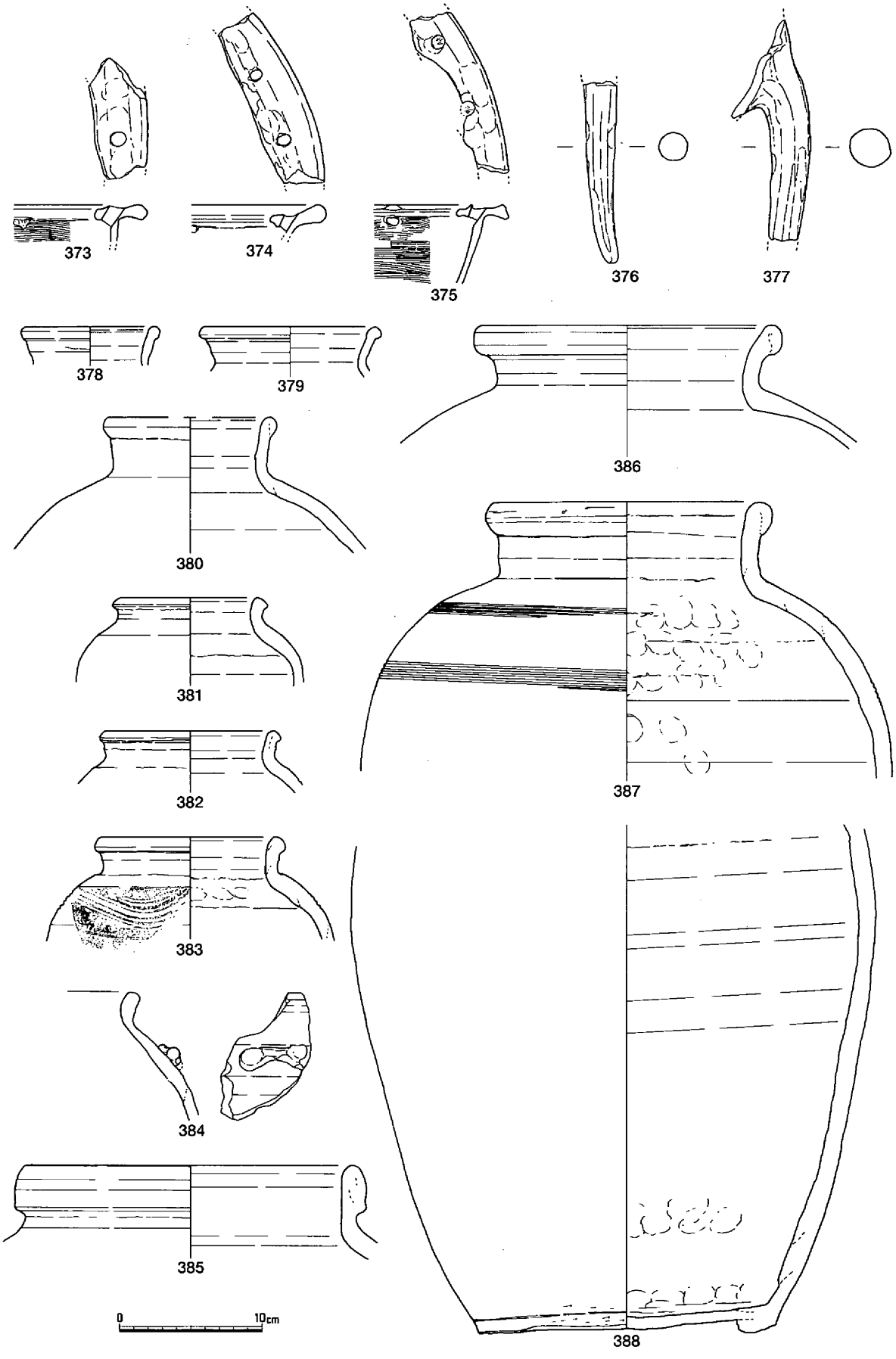
出土遺物はコンテナで25箱程度出土している。

第84～90図は下層出土の土器類である。土師器椀345～348は口径10.2～11.8cmに復元され、低く小さな貼付け高台をもつ。土師器皿358とともに溝の北東端で出土した。土師器杯349～357のうち、植物繊維の圧痕を残す353以外の底部切り放しはイトキリである。359～364は土師器鍋である。瓦質火鉢365～367のうち、365は有脚、366・367の体部外面には雷文が押捺される。瓦質の煮炊具には羽釜368～370と、鍋371～377がある。鍋には外耳371と内耳373～375がある。

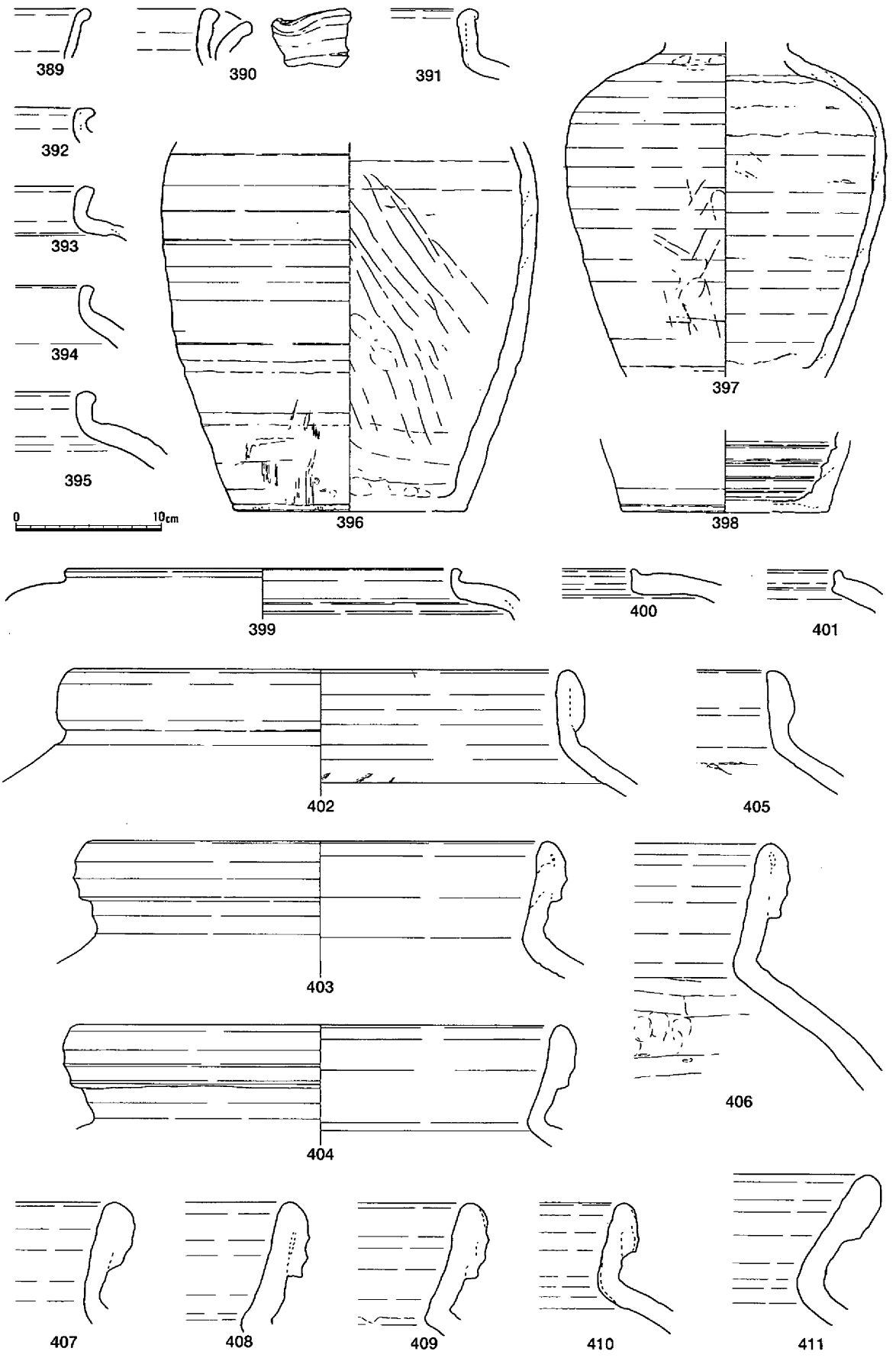
出土遺物の大半を占める備前焼は、壺378～398・444～447・457～464、甕399～411、擂鉢412～442、皿443、徳利448～454、花生455がある。456は水盤型と考えられる。表裏や断面に煤や火を受けた痕跡をもつものが目立つ。壺は大小があり、その口縁は、玉縁状となるもの、端部を上から押さえつけたような玉縁状となるもの、雀口とするものがある。また、肩部に数条１単位のクシガキ文を施すものや、横耳を付けるものがある。なお、387と388は同一個体である。甕の口縁は、内傾する偏平な玉縁状のものと、外反する頸部から太い凹線を外面に施す玉縁状ものがある。399～401は水屋甕である。擂鉢の口縁は、直裁的なもの、端面に凹部をもち上下にやや肥厚するもの、上方に大きく、下方に小さく拡張するもの、上下に拡張し外面に凹線を施すものがある。また、重ね焼きの痕跡をもつものが多い。438の外底面にはゲタ印がある。皿443は外底面イトキリで、内面のみ煤が付着する。徳利448～454、花生455の内面はロクロ目が顕著で、449はシボリ目も残る。

465・466は亀山焼の甕である。467～472は須恵器の鉢で、東播系と考えている。

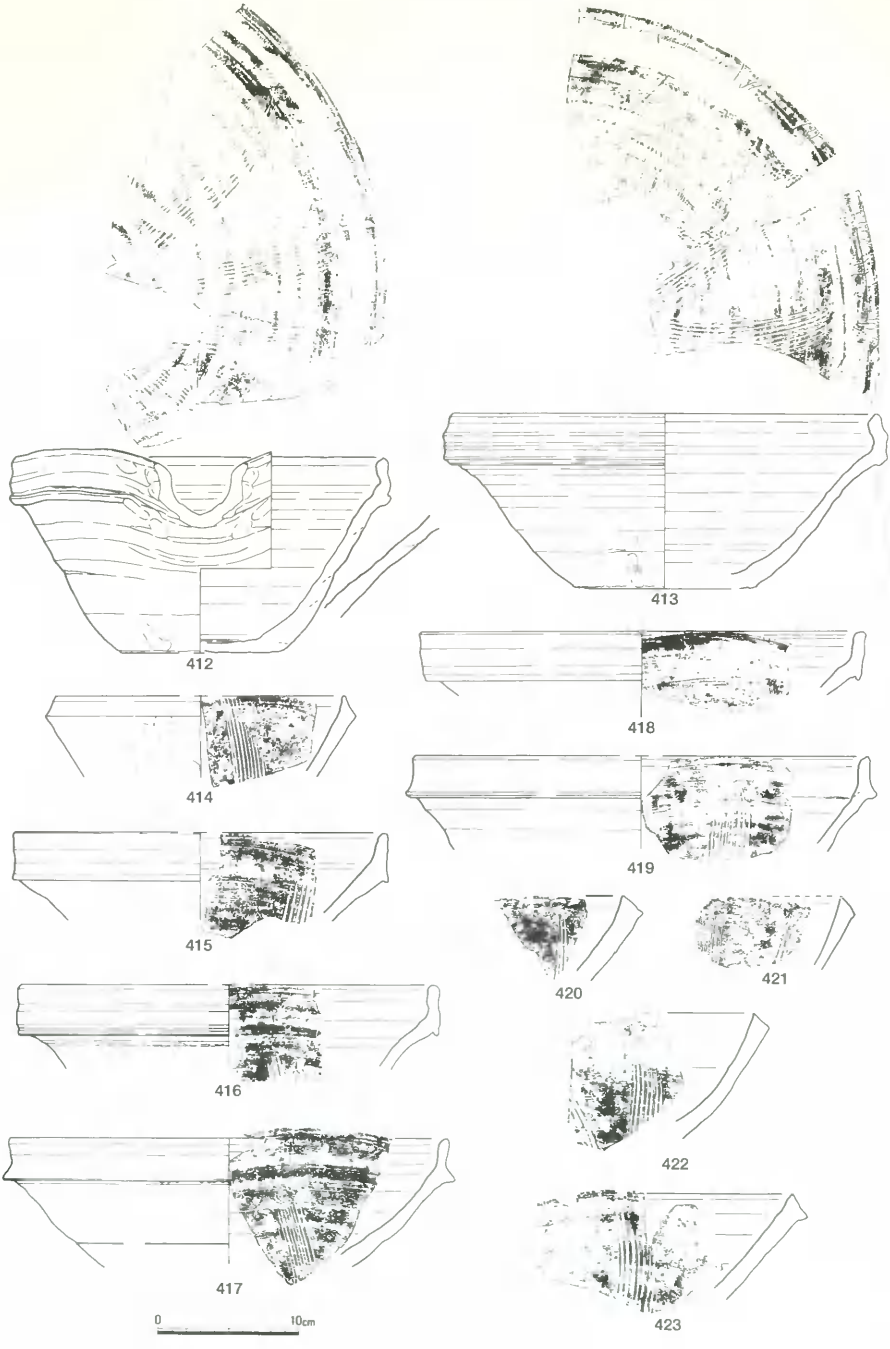
第84図　溝24出土遺物（１）（1/40）



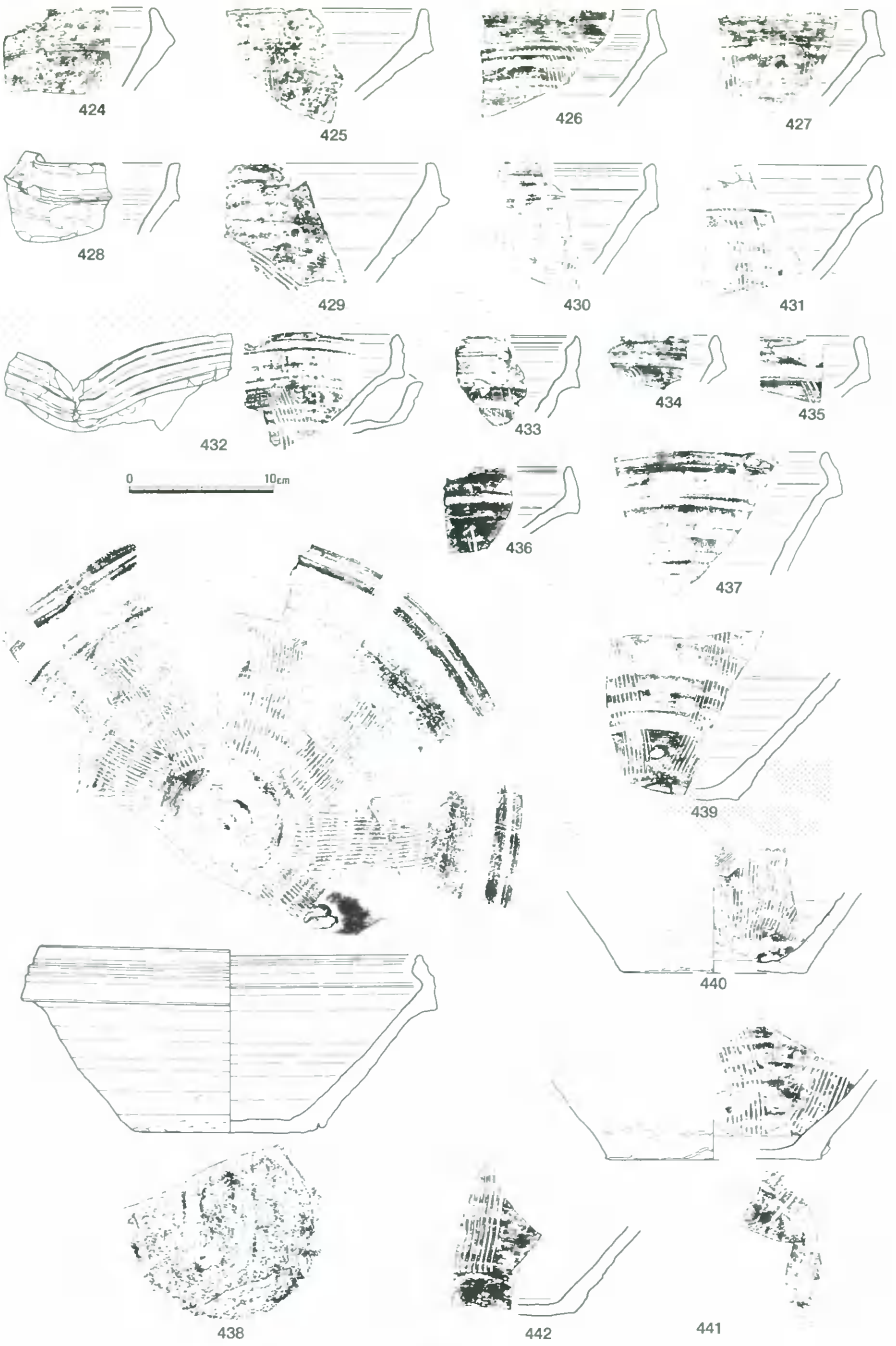
第85図　溝24出土遺物（２）(1/4)



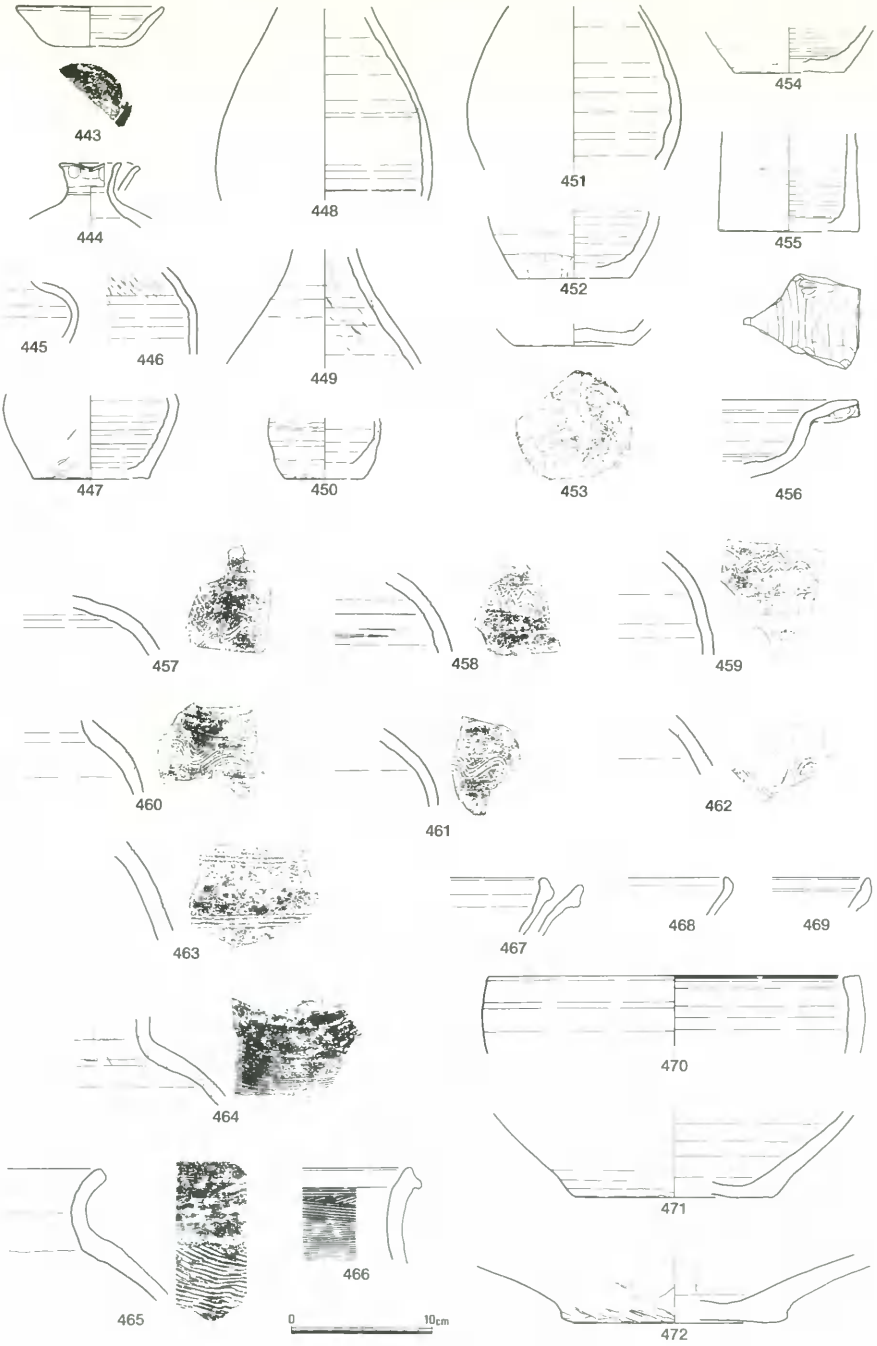
第86図　溝24出土遺物（３）(1/4)



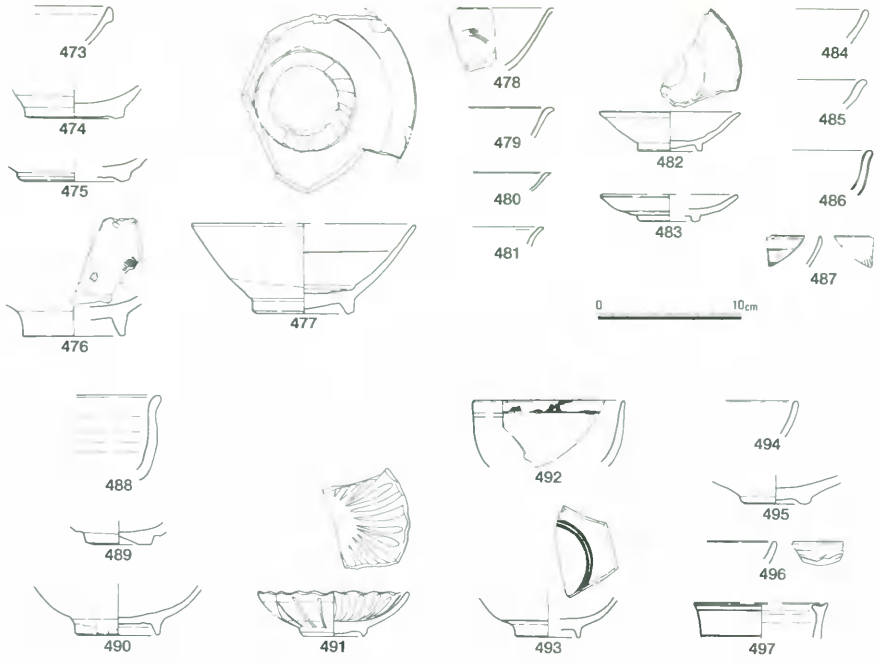
第87図　溝24出土遺物（４）（1/4）



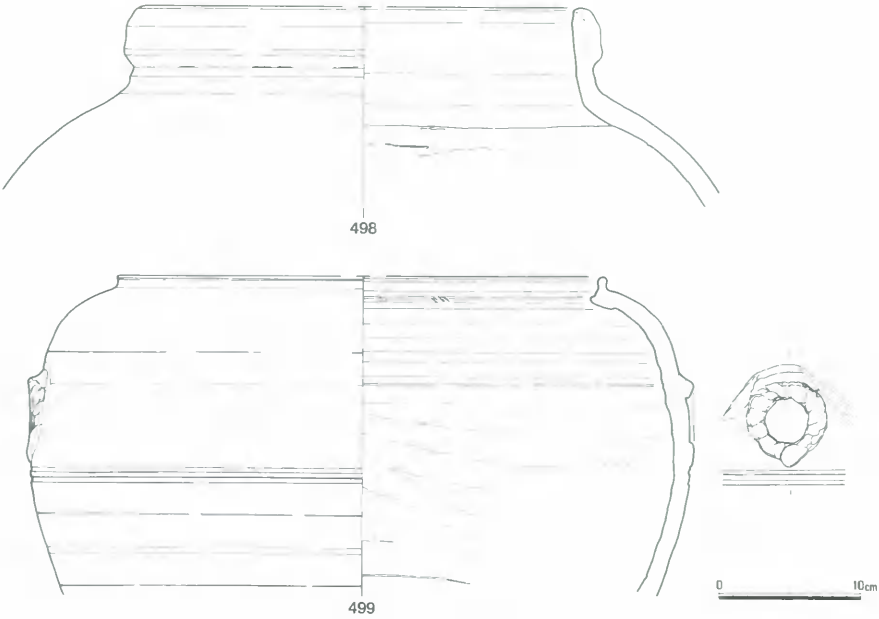
第88図　溝24出土遺物（５）（1/4）



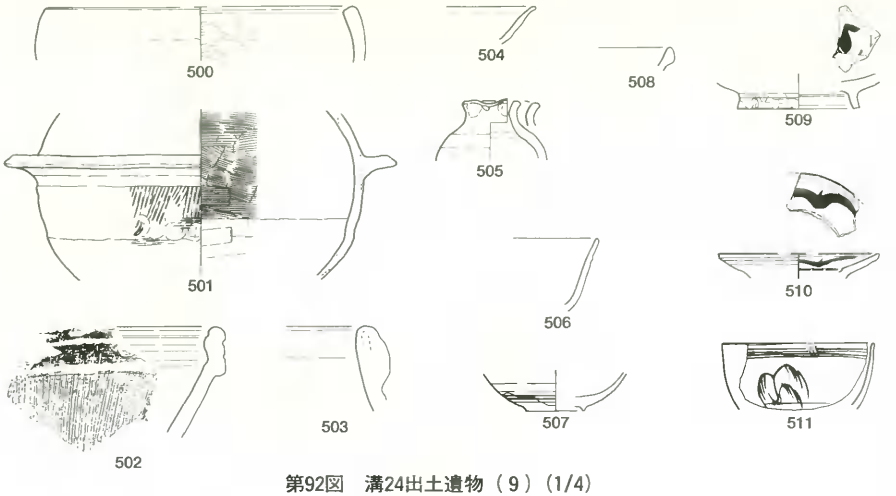
第89図　溝24出土遺物（６）(1/4)



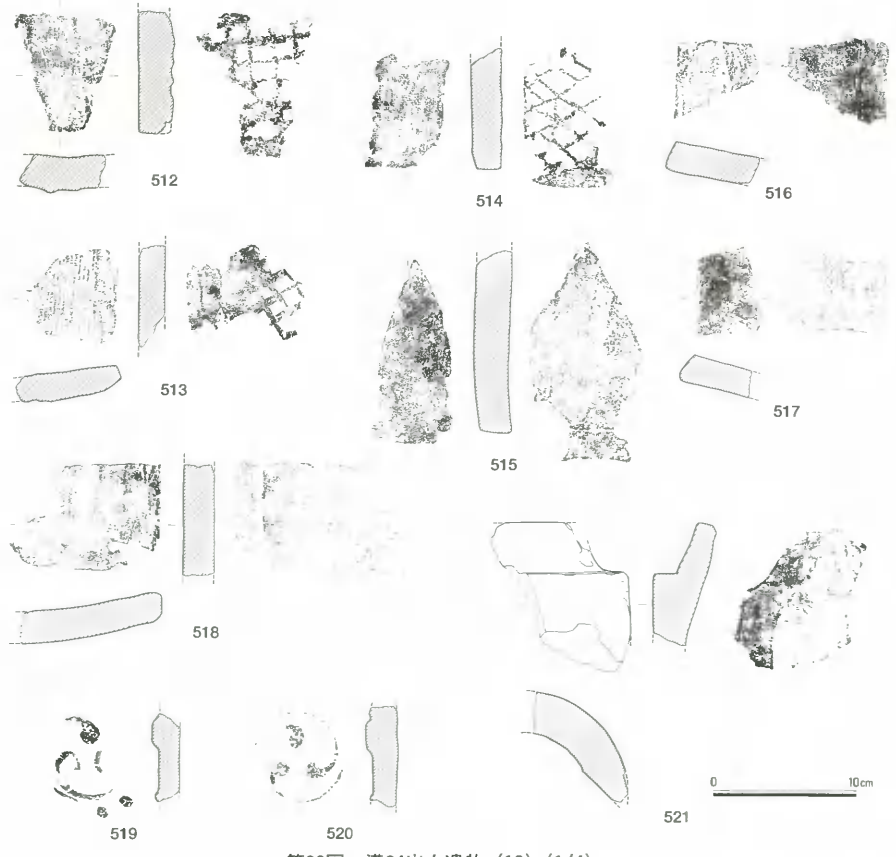
第90図　溝24出土遺物（７）（1/4）



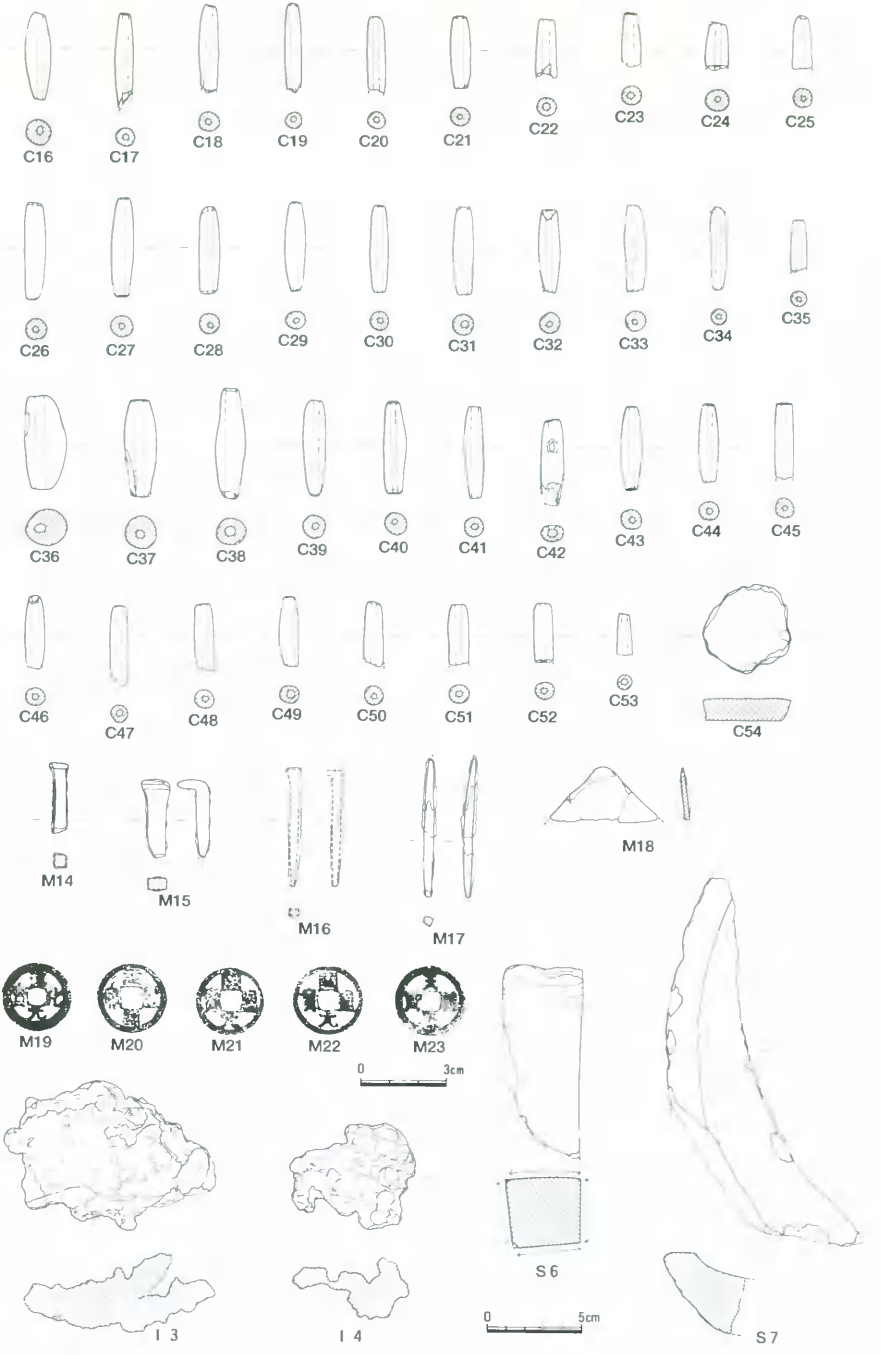
第91図　溝24出土遺物（８）（1/4）



第92図　溝24出土遺物（９）（1/4）



第93図　溝24出土遺物（10）（1/4）



第94図　溝24出土遺物（11）（1/3・1/2）

第90図は輸入・国産陶磁器である。473～481は白磁碗、482・483は白磁皿で、477と482は内底見込みの釉を輪状にカキ取り、476と478の内面にはクシガキ文を施す。484～486は龍泉窯系、487は同安窯系の青磁碗である。487の内外面にはクシガキ文の一部がみられる。488は美濃・志野椀、489は古瀬戸の天目椀、490は瀬戸・美濃の椀、491は同輪花皿である。492・494は肥前陶器椀、493は肥前磁器の染付碗、495は唐津陶器皿である。また、496・497は中国産の磁器と考えられる。

第91図は溝下層出土の備前焼で、土壙８出土資料と接合関係にある。図示した甕498と水屋甕499の他にも擂鉢等がある。499は胴部に２条の沈線を巡らし、双耳となる輪状の把手を貼り付ける。

第92図は上層出土遺物で、瓦質土器鍋500・羽釜501、備前焼摺鉢502・甕503・皿504・雀口小壺505、白磁碗508、中国産染付碗509、唐津陶器椀507、唐津陶器皿510、唐津磁器碗506・511がある。

第93図は下層出土瓦で、平瓦512～518、丸瓦519～521がある。519・520は三つ巴文軒丸瓦である。

第94図は上下層出土の土製品、金属製品、石製品等をまとめたもので、土製品は土錘Ｃ16～53、備前焼片転用の円板状土製品Ｃ54である。鉄製品は釘Ｍ14～16、錐Ｍ17、火打金Ｍ18である。Ｍ19～23は下層出土の輸入銭で、図示し得ない１枚と合わせ計６枚が重なっていた。Ｉ３は上層出土の椀形２段滓、Ｉ４は炉壁に近い精錬滓である。石製品は流紋岩製砥石Ｓ６、砂岩製石臼Ｓ７がある。

遺物の時期は、下層が16世紀後半代を中心に14世紀～17世紀前半代と考えられる。上層は相対的に新しく、18世紀代の遺物がある。上層段階での、溝から通路への機能変化が考えられる。　（高田）

溝25（第43・44・83・95図）

１区中央北端に位置する。溝24の北側に接し、西側は近現代撹乱で不明となり、東端は調査区外に延びる。溝24との関係は、第83図の上段断面に示すように本遺構が古い。検出規模は幅1.6m、深さ47cmを測る。西側が一段10cm程浅くなり、東に向かって徐々に深くなる。断面形は椀形を呈す。

出土遺物は土師器の杯522、備前焼の擂鉢523～526、平瓦527～529の土器・瓦類のほか、鞴の羽口Ｃ55、土錘Ｃ56、鉄滓Ｉ５・６がある。Ｃ55は孔径3.8cm、復元長21cm程度と考えられる大形品である。先端部にはガラス質溶融物が付着し、この分析を白石純氏に依頼したところ鉄成分を検出した。Ｉ５・６の椀形鍛冶滓（付載２参照）とともに、周辺での鍛冶作業を示すものであろう。

溝の時期は、出土遺物と検出状況から室町時代後半代と考えられる。　（高田）

溝26（第43・44・96図）

１区の中央北寄りに位置し、溝24の南側に接して検出した遺構で、第83図の下段断面第３層にあたる。底面に鉄分の沈着が顕著に認められることから溝と考えたが、近現代撹乱や溝24に切られるため、規模や流水方向等は不明である。検出面の海抜高は384cm、２段となる底の浅い側で海抜355cm、深い側で334cmを測る。埋土は、西側の底の深い部分が微砂～砂質土となり、鉄分沈着が顕著である。

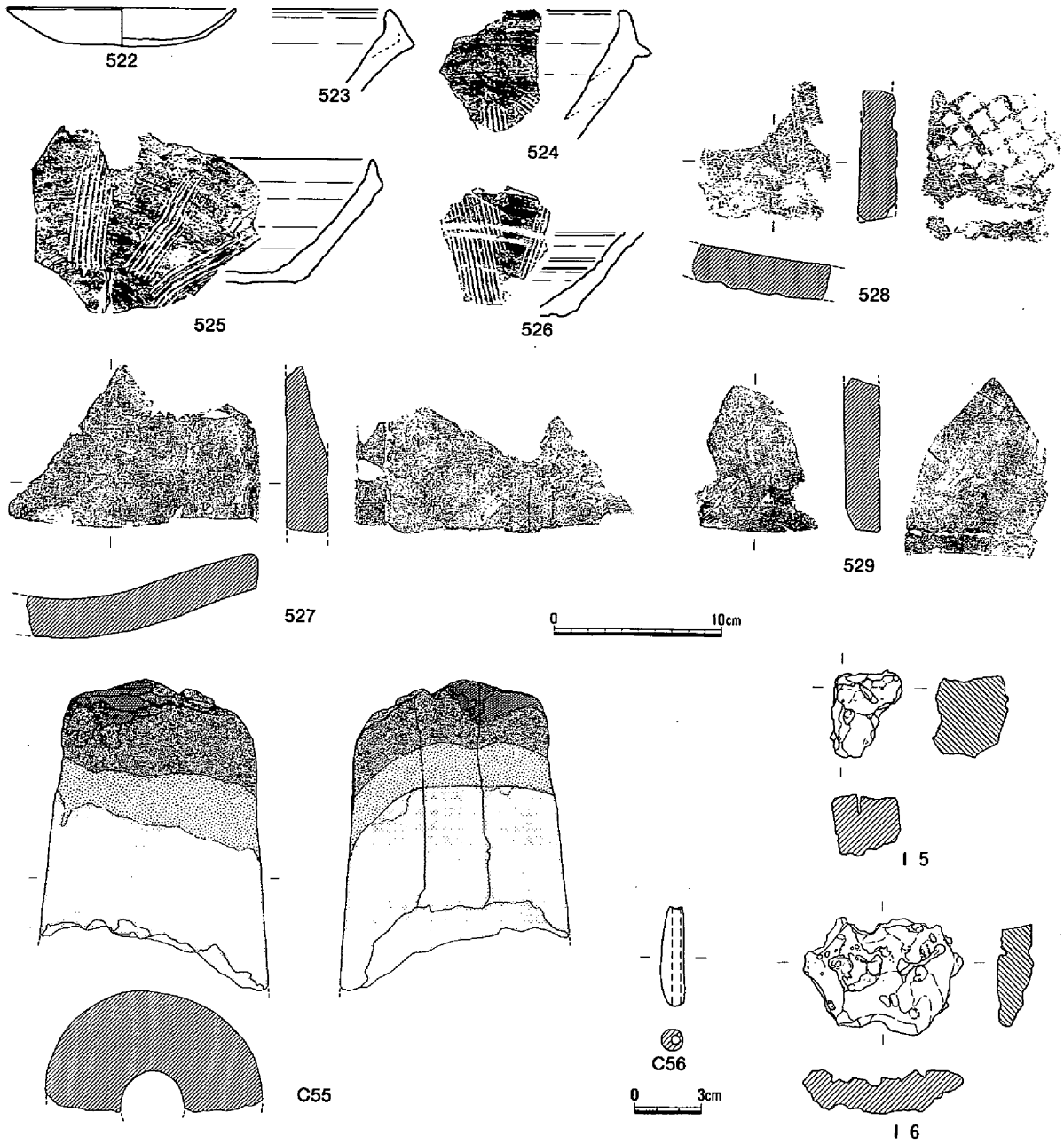
図示した遺物は、土師器椀530・531、瓦質土器鍋532、東播系と考えられる須恵質の鉢533・534である。土師器椀の口径は10cm前後を測り、貼り付け高台は断面三角形の簡略化したものである。

溝の時期は、出土遺物と検出状況から鎌倉時代末頃と考えられる。　（高田）

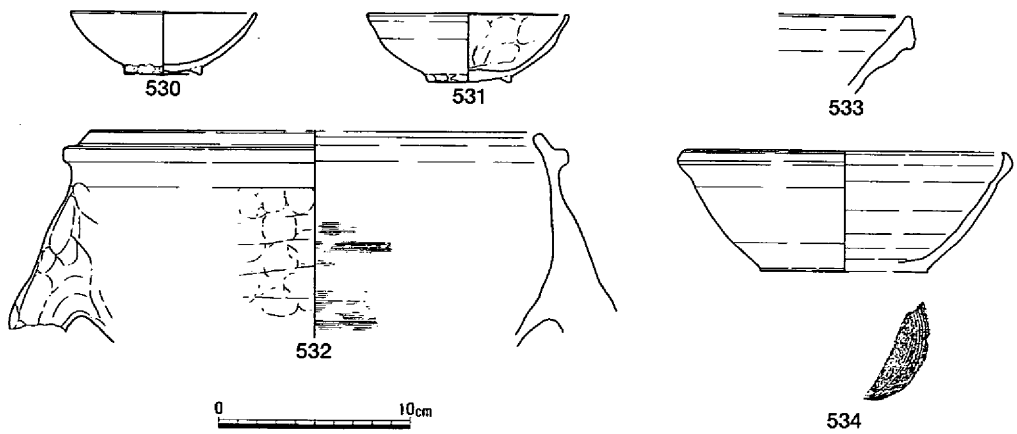
溝27（第43・44・83・97図）

１区の中央北寄りに位置し、溝24に北肩を切られる。先述の溝26と同一の溝となる可能性がある。東西方向の検出長は７ｍで、幅1.25cm、深さ12cmを測る。底は数段に落ち込み、肩は緩やかに立ち上がる。出土遺物は土師器椀535と土師器皿536の他、土師器片が少量ある。

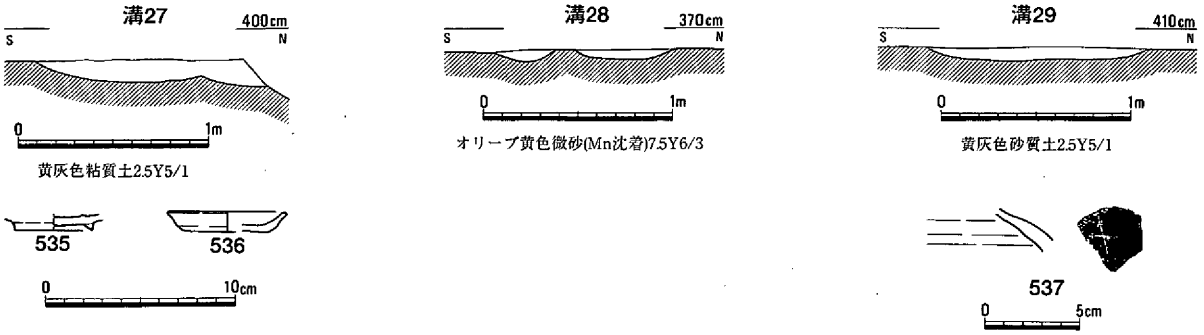
溝の時期は、出土遺物と検出状況から、溝26に近いものと考えられる。　（高田）



第95図　溝25出土遺物（1/4・1/3）



第96図　溝26出土遺物（1/4）



第97図　溝27～29断面図（1/40）・溝27・29出土遺物（1/4）

溝28（第43・44・97図）

１区南西隅に位置し、東西方向に蛇行する溝である。その西端は近現代撹乱に、東端は土壙８に切られ、検出規模は長さ８ｍ、幅95cm、深さ７cmを測る。部分的に底が２つになる箇所がある。

出土遺物はないが、土壙７・８に切られることから中世段階の溝と考えられる。　（高田）

溝29（第43・44・97図）

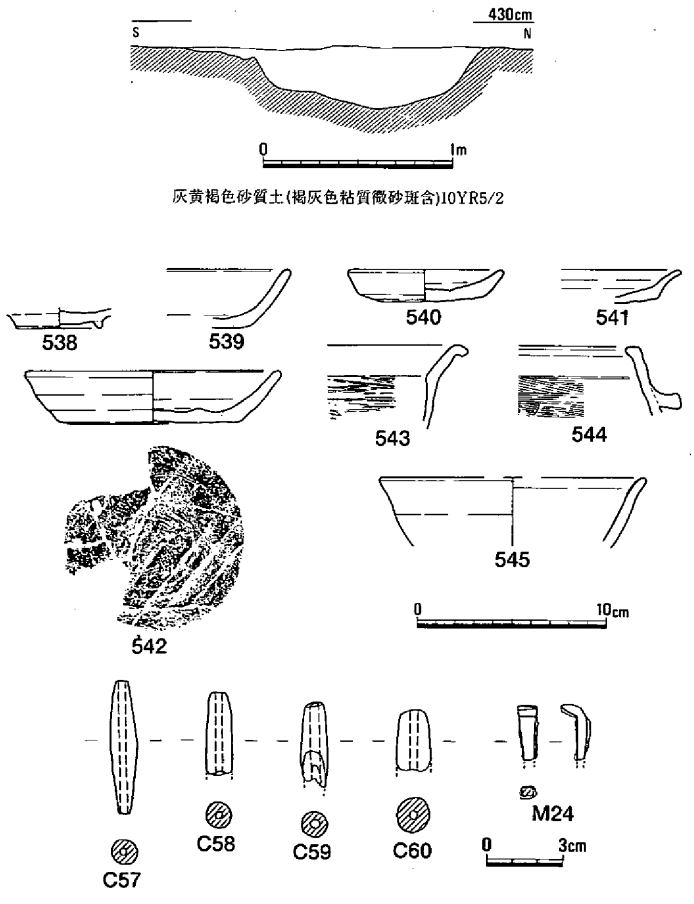
ｘ６ｙ42区に位置する東西方向の溝である。その東側で井戸５と、西側で土壙９と接する。検出時の規模は長さ６ｍ、幅115cm、深さ７cmを測る。底はほぼ平坦で、底面のレベル変化に乏しく、溝の流走方向は不明である。出土遺物は、ヘラ記号を肩にもつ須恵器壺**537**がある。検出状況から、井戸５と土壙９を繋ぐ溝と考えられ、両者と同時期、14世紀前半代に機能したものであろう。　（高田）

溝30（第43・44・98図）

ｘ６ｙ42・43区に位置する東西方向の直線的な溝である。北側の井戸５、土壙９、溝29とは2.5～3.5ｍの距離にある。また、溝24とは６～７ｍ離れている。溝の西端は土壙８に切られ、東端は徐々に浅くなって終わる。検出規模は長さ18m、幅1.2ｍ前後、深さ33cmを測る。断面形は丸い底面から急斜に壁が立ち上がり、南肩の一部には浅く広がる箇所がある。溝底面の標高は東端で海抜400cm、中央付近で385cm、西端付近で380cmとなる。

出土遺物は土師器、瓦質土器、青磁、土錘、釘がある。**538**は土師器椀の高台、**539**・**542**は土師器杯、**540**・**541**は土師器皿、**543**は土師器鍋、**544**は瓦質土器羽釜、**545**は青磁碗である。**542**の口径は13.4cmで外底面はヘラキリ後板目である。

溝の時期は、出土遺物から13世紀後半代と考えられる。　（高田）

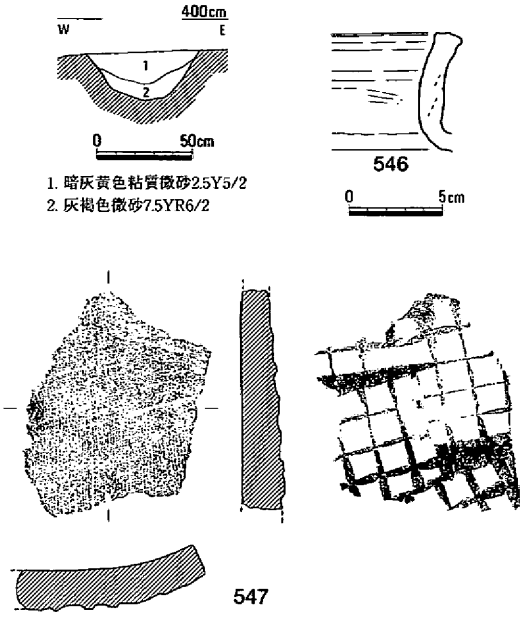


第98図　溝30断面図（1/40）・出土遺物（1/4・1/3）

溝31（第43・44・99図）

ｙ44線の西約4.5ｍで検出した、南北方向の溝である。土壙21、土壙22よりも古い。検出面での幅は、約60～80cm程度で、残存する深さは20cm前後であった。断面形は緩い逆台形を呈し、埋土には微砂が堆積していた。

出土遺物には須恵器壺**546**、平瓦**547**、鉄滓がある。**547**は凸面に５×16㎜の正格子叩き、凹面に布目痕が残る平瓦である。厚さは最大21㎜を測る。出土した鉄滓は鍛冶滓であった。遺構の時期は明確ではないが、鎌倉時代のなかでおさまるのではないか。　（重根）



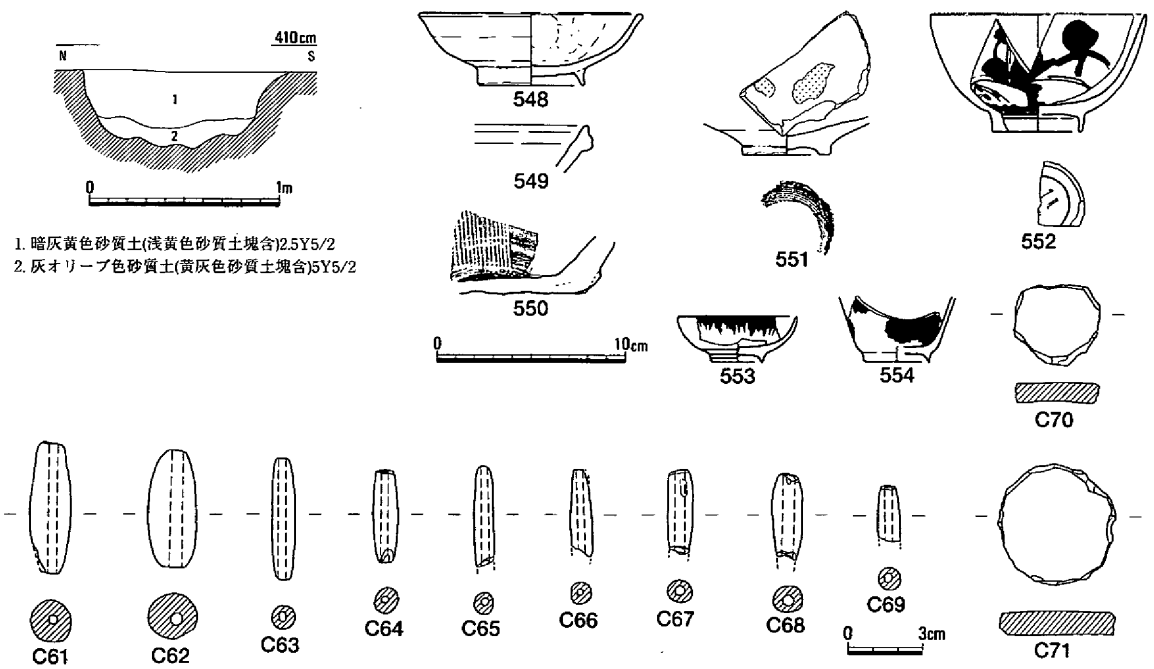
第99図　溝31断面図（1/40）・出土遺物（1/4）

溝32（第43・44・100図）

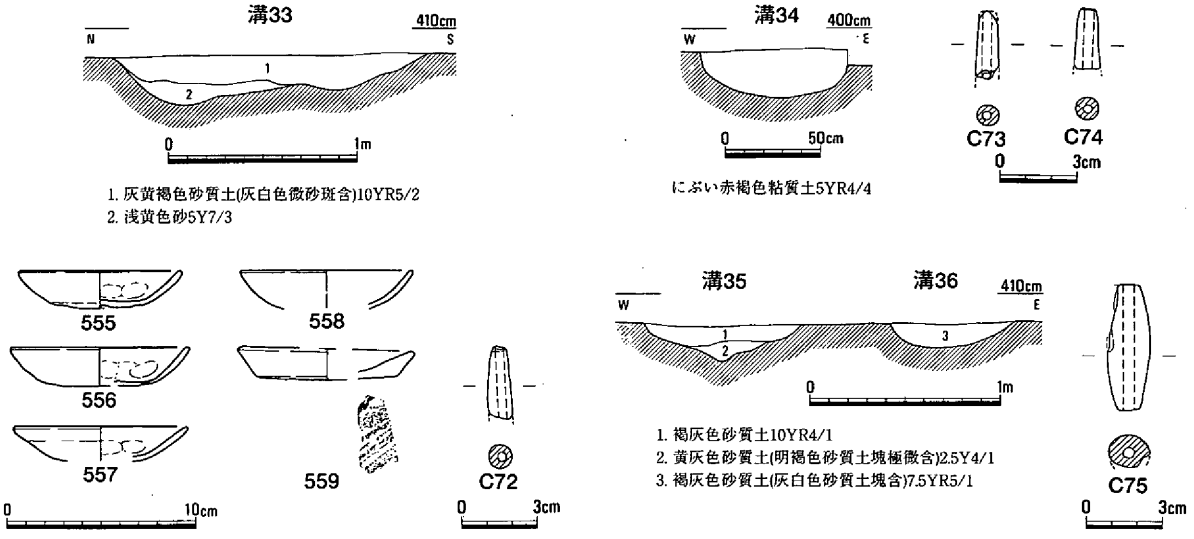
ｘ７線の南約0.5～４ｍで検出した、東西方向の溝である。これはｘ７ｙ44から南東約11ｍあたりで、ほぼ直角に、北方向に屈曲する。土壙23よりも新しい。検出面での幅は、約100～140cm程度で、残存する深さは40cm前後であった。断面形は緩い逆台形を呈するが、底面はやや起伏がある。

埋土中より土師器椀**548**、須恵器**549**、備前焼擂鉢**550**、土錘Ｃ61～69、円板状土製品Ｃ70・71が、また、底面の一部より、３～５cm大の礫とともに陶器**551**、磁器**552**～**554**が出土した。

548は吉備系土師器椀である。口径推定値は118㎜、底径は56㎜を測る。**549**は東播系の須恵器である。**552**～**554**は肥前磁器で、**551**は肥前陶器である。Ｃ70は瓦質土器の、Ｃ71は備前焼の転用品である。遺構の時期は**552**～**554**の肥前磁器より、17世紀末から18世紀前半を想定している。　（重根）



第100図　溝32断面図（1/40）・出土遺物（1/4・1/3）



第101図　溝33～36断面図（1/40）・出土遺物（1/4・1/3）

溝33（第43・44・101図）

ｘ７ｙ44区の北西隅で検出した、東西方向の溝である。溝32と平行する。検出面においてこの溝の幅は不均一で、そのため平面形も不整形である。残存する深さは20～30cm前後である。

出土遺物には土師器皿555～559、土錘Ｃ72がある。555～559の口径推定値は、90～94mm程度である。557は手ずくねにより成形したものである。573は底面に板目痕が残る。土器の時期は13世紀後半～14世紀前半のなかにおさまるであろう。　（重根）

溝34（第43・44・101図）

１区北東部に位置し、平面形が中央で屈曲する。北西端は調査区外に延び、東端は浅くなり閉じる。また南側は近現代撹乱で切られる。検出規模は幅76cm、深さ37cmで、東半よりも西半が一段深くなる。出土遺物は土錘２点のみである。時期は、溝24より新しいことから近世と考えられる。　（高田）

溝35・36（第43・44・101図）

近現代撹乱を挟んで、溝34の南側3.5ｍから南に延びる２条の溝である。40cm前後離れて平行し、いずれも南から北に向かってやや深くなる。溝35は長さ8.8ｍで閉じ、溝32の北端とは4.5ｍの間隔をおく。幅0.8～１ｍ、深さ36cmを測る。溝36は長さ７ｍ、幅60cm前後、深さ29cmを測る。遺物は土師器小片と溝35出土の土錘がある。溝32・34と有機的な関係にある近世の溝であろう。　（高田）

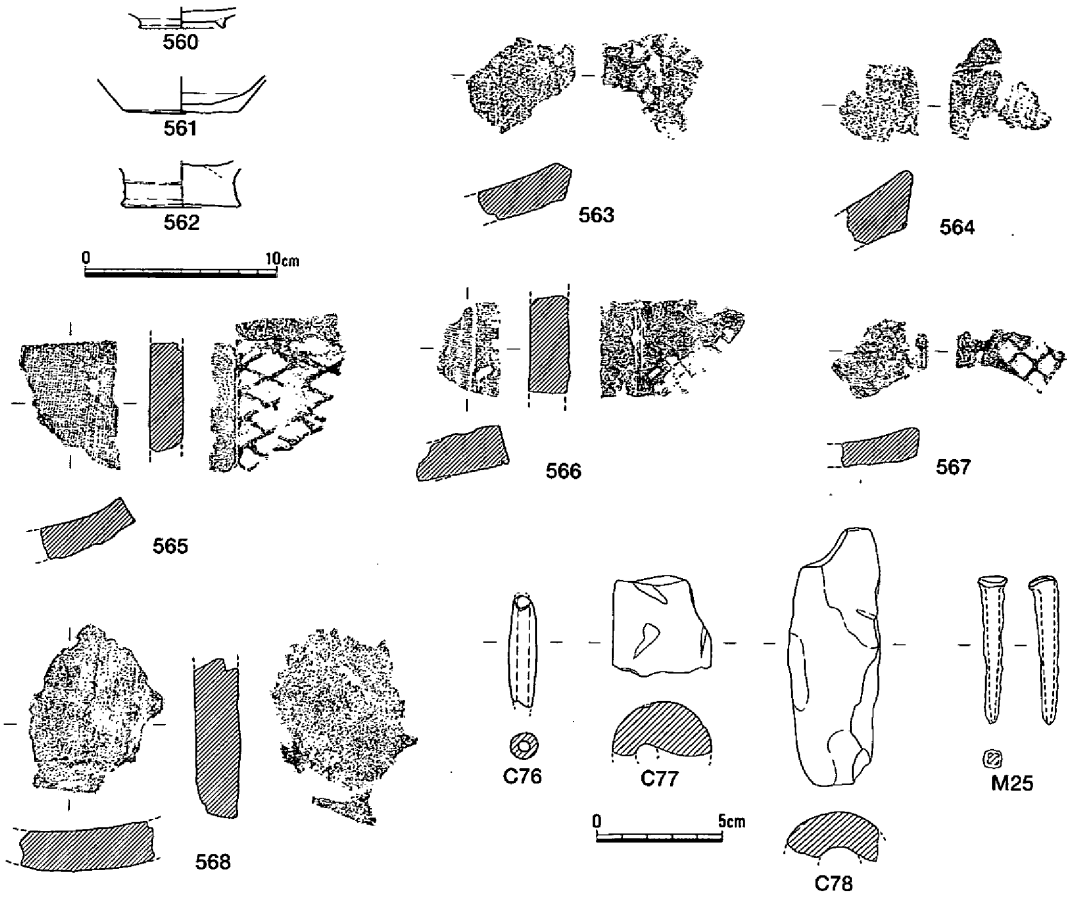
（９）水　　田

水田１（第43・44・102図）

１区の南西端、溝24より南で、土壙８の溝状部分以西の一角に水田層と考えられる水平堆積を確認した。調査区の南・西壁断面の観察によると、海抜400～360cm間に少なくとも４層の水平堆積があり、いずれの層下部にも鉄分やマンガンの沈着がみられる。土質は砂質土や粘質微砂で、各層の厚さは６～13cmを測る。平面精査と断面の検討を行ったが、畦畔は検出していない。

出土遺物は比較的多く、生活域に近い水田であることを示している。図示したものは土師器椀560、土師器杯561、土師器皿562、平瓦563～568、土錘Ｃ76～78、鉄釘Ｍ25である。

水田は、土壙７・８、溝28より古く、中世前半代を中心に営まれたものと考えたい。　（高田）

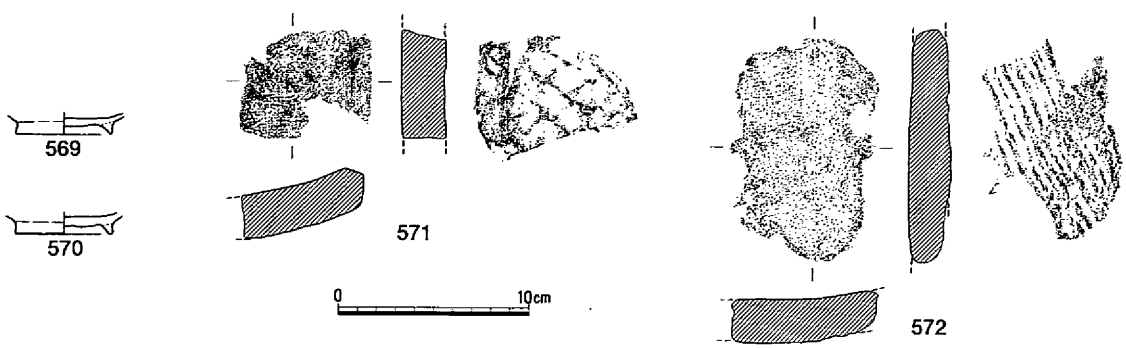


第102図　水田１出土遺物（1/4・1/3）

水田２（第43・103図）

３区の近世旧河道５より西に広がる水田である。洪水砂と考えられる黄褐色微砂層（第24図第26・27層）を除去し、田面と畦畔を検出した段階で調査を終了した。田面の海抜高は430cmで、オリーブ黄色粘土（第24図第29層）の耕作土は下部に鉄分が沈着し、厚さ５～６cmを測る。畦畔は南北と東西方向のものを検出している。南北畦畔は長さ16.5m、幅3.5～4.5m、田面との比高差20cmを測る。東西畦畔は南北畦畔の西側に直角に取り付くもので、長さ14m、幅2.5mを測るが、4.3m幅に途切れる箇所は水口と考えられる。さらに下層にも水田層と考えられる同様の水平堆積が認められる。

図示した遺物は、水田耕作土から出土した土師器椀の高台569・570と、平瓦571・572である。これらの遺物は、鎌倉時代後半代と考えられる。（高田）



第103図　水田２出土遺物（1/4）

５．その他の遺物

柱穴出土の遺物（第104～106図）

１区で多数の柱穴を検出し、多種多様な遺物が出土した。第104～106図にその一部を掲載する。

土師器椀573～586のうち、573・574は「ハ」の字状に開く高い高台と直線的に延びる体部をもつ。575・576は無高台のいわゆる「へそ椀」である。583・585は内面にヘラミガキがみられる。土師器杯587と土師器皿588～598のうち、587・591・593・595の底部外面はヘラキリ後板目、589・597・598の底部外面はヘラキリである。599は土師器鍋で、体部が直線的な長胴形を呈す。600は瓦質深鉢で、体部内面に横方向のハケ後同心円文の当て具痕がある。601は瓦質鍋で、把手が付き体部側に穿孔がある。602は瓦質羽釜である。603・604は土師器カマドの庇部分である。605は須恵器の椀で、底部外面をイトキリする。606は和泉型の瓦器椀で、内面にミガキを施す。607は亀山焼甕、608は備前焼擂鉢である。609～612は須恵器鉢で、東播系と考えられる。613・615は古瀬戸の天目椀で、613は内外面に鉄釉を施すが外面底部付近は露胎である。底部はイトキリ後に高台を削り出す。614は古瀬戸の壺と考えられる。616～618は白磁碗で、619は青磁碗と考えられる。瓦は軒平瓦621、平瓦620・623・624がある。621は柱穴の底部に礎石替わりに置かれたもので、内区に唐草文、外区内縁にやや密な珠文があり、県内において同種の瓦当は見当たらない。620は凹面布目、凸面縄目である。622は土師質の塼で、土壙12やその周辺の包含層から出土した「是重」線刻塼に形態・焼成が酷似する。

土器類以外では、土錘Ｃ79～88、鉄釘Ｍ26～35、鉄製毛抜Ｍ36、北宋銭「天聖元寶」Ｍ37、「天禧通寶」Ｍ38、流紋岩製の砥石Ｓ８・９がある。また、図示した以外の遺物に灰釉陶器片、鍛冶滓片、坩堝と考えられる小破片、人歯片、獣骨片等がある。

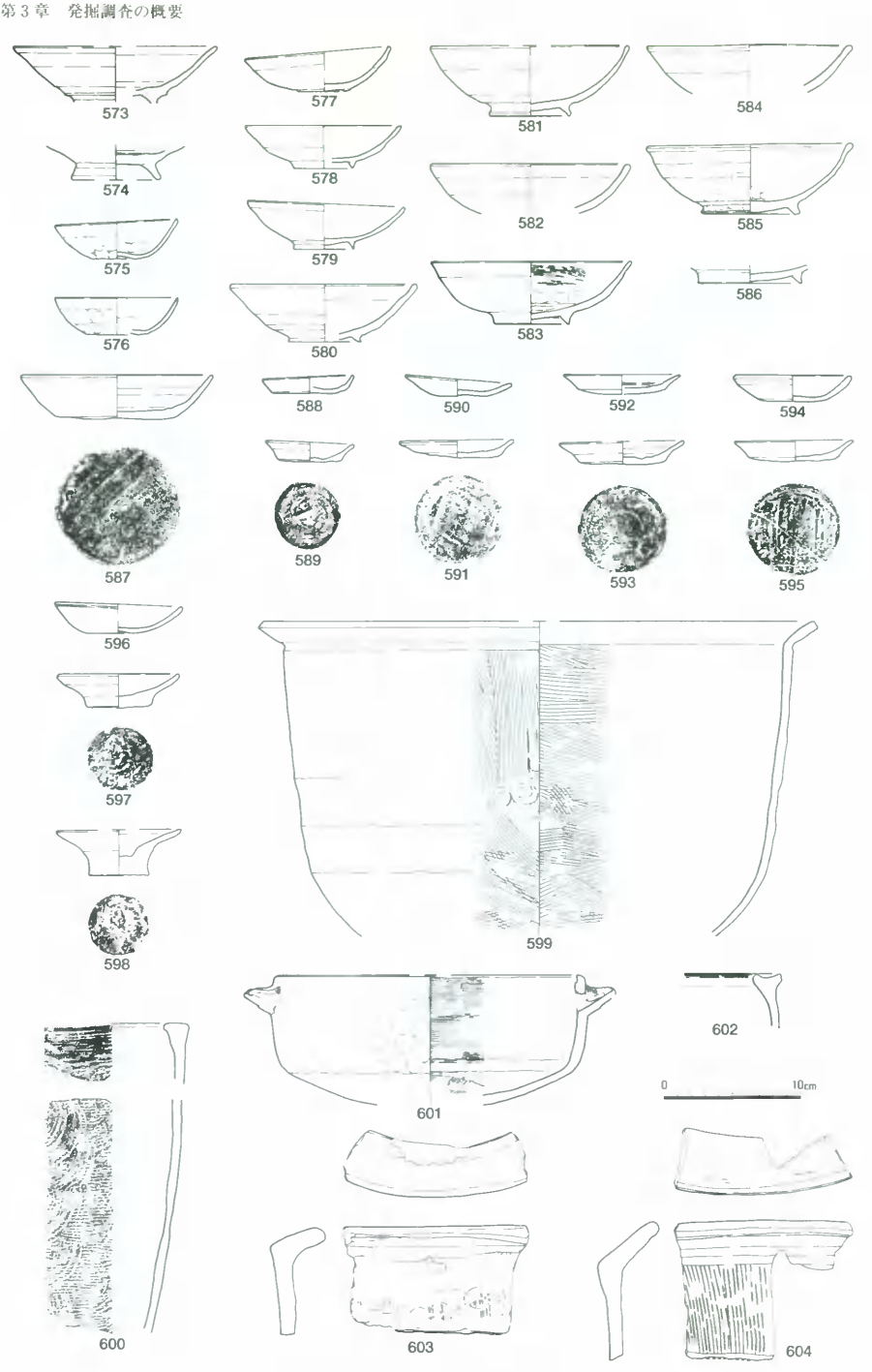
以上の遺物の時期は、573・574・599・621が平安時代後半代、620がそれらより古く考えられるのに対し、その他の多くは13～15世紀代、とくに鎌倉時代に属するものと考えられる。　（高田）

包含層出土の遺物（第107・108図）

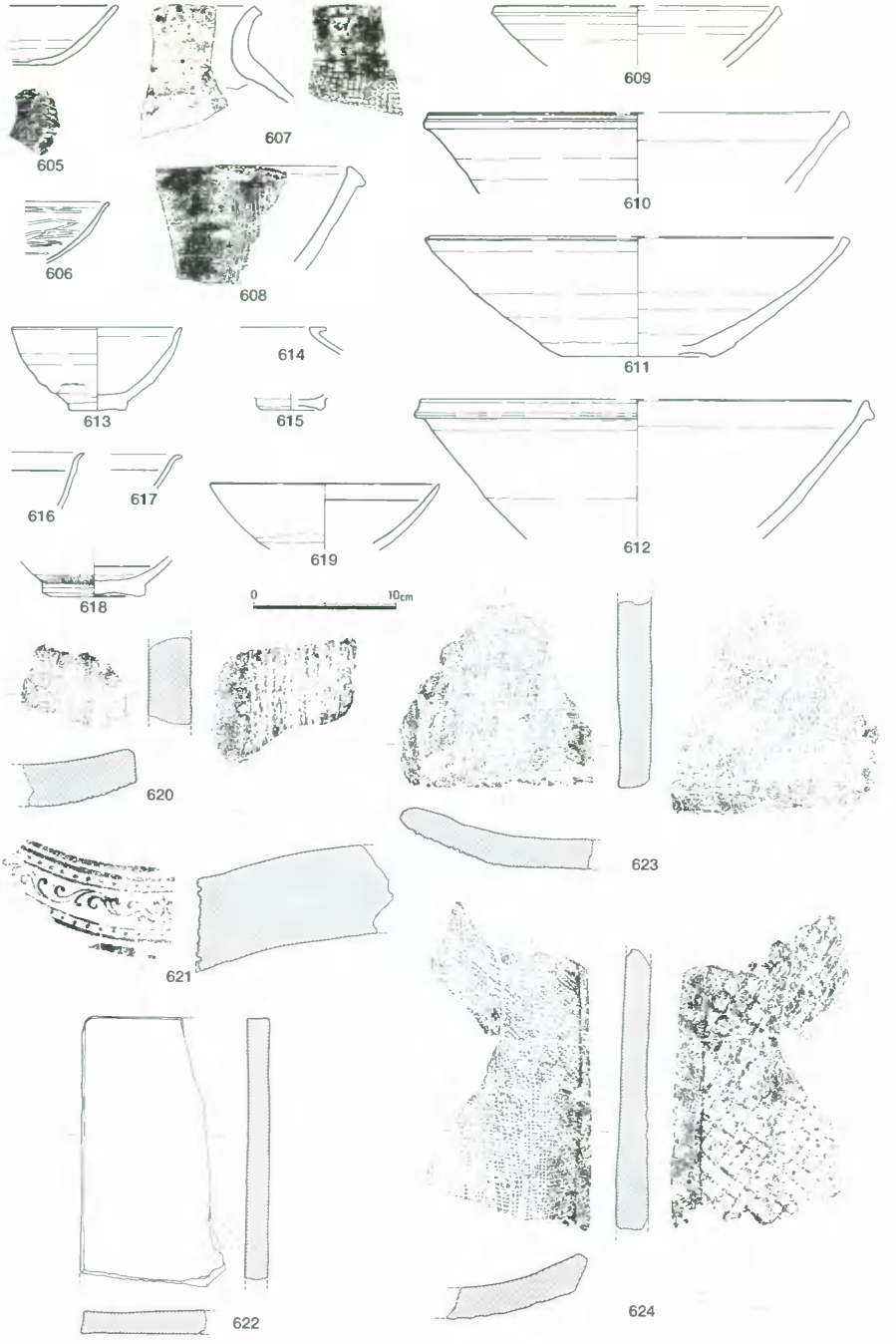
第107図に遺構出土の混入遺物、第108図には包含層出土の遺物を掲載する。

625～630は旧河道１の砂礫層出土で、631は旧河道４出土の円筒埴輪片である。土師器皿632、灰釉陶器壺633～635は溝24出土である。土壙12出土の軒丸瓦642は複弁と間弁をもち、外区に珠文を配すると考えられ、周縁に狭い突帯を巡らす。岡山市富原北廃寺出土瓦に複弁文と外区珠文の組み合わせがある。636・637は瓦器椀、638・639は白磁碗、640は白磁皿である。641は同安窯系青磁碗である。Ｃ89は土錘。Ｓ10は砂岩製の石臼。Ｉ７は羽口先端のガラス質が付着した椀形滓である。Ｍ39は「永楽通寶」、Ｍ40は水田１出土の鏡片で、復元鏡径８cm前後の捩文鏡片と考えられる。

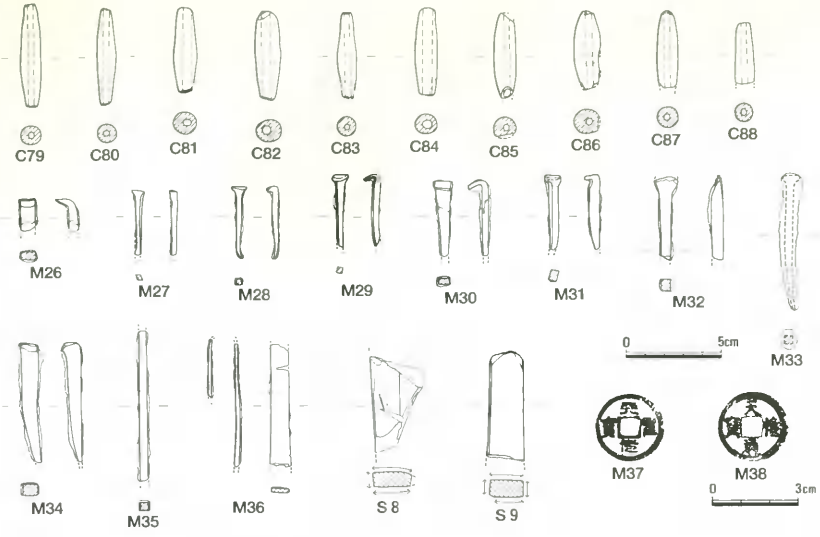
土師器は、椀643～645、皿646～649、杯650がある。646～648の底部外面はヘラキリ、649・650はヘラキリ後板目である。651は瓦質浅鉢で、体部外面に花文を押捺する火鉢である。652は近江産と考えられる緑釉陶器椀で見込に沈線とトチン痕があり、貼付け高台の畳付以外に施釉する。653は灰釉陶器壺、654・655は黒色土器椀で内面に炭素を吸着する。656は和泉型瓦器椀、657～660は白磁碗、661・662は白磁皿、663は龍泉窯系青磁碗、664は龍泉窯系青磁杯である。665は土師質塼で土壙12出土品と同様片面に「是重」を線刻する。666は凹面布目で凸面縄目の平瓦である。Ｃ90～100は土錘、Ｃ101は鞴羽口と考えられる。Ｓ11は頁岩製の砥石である。Ｓ12はサヌカイト製の楔で、スクレイパー転用である。Ｍ41・42は鉄釘、Ｍ43～46は「寛永通寶」で、いずれも新寛永である。　（高田）



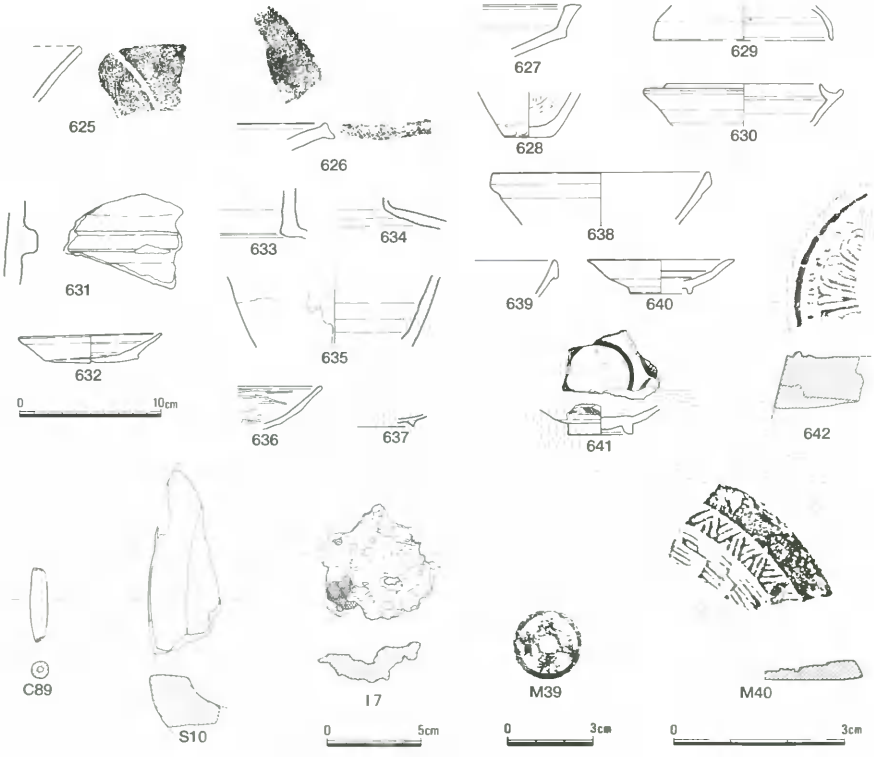
第104図　柱穴出土遺物（１）（1/4）



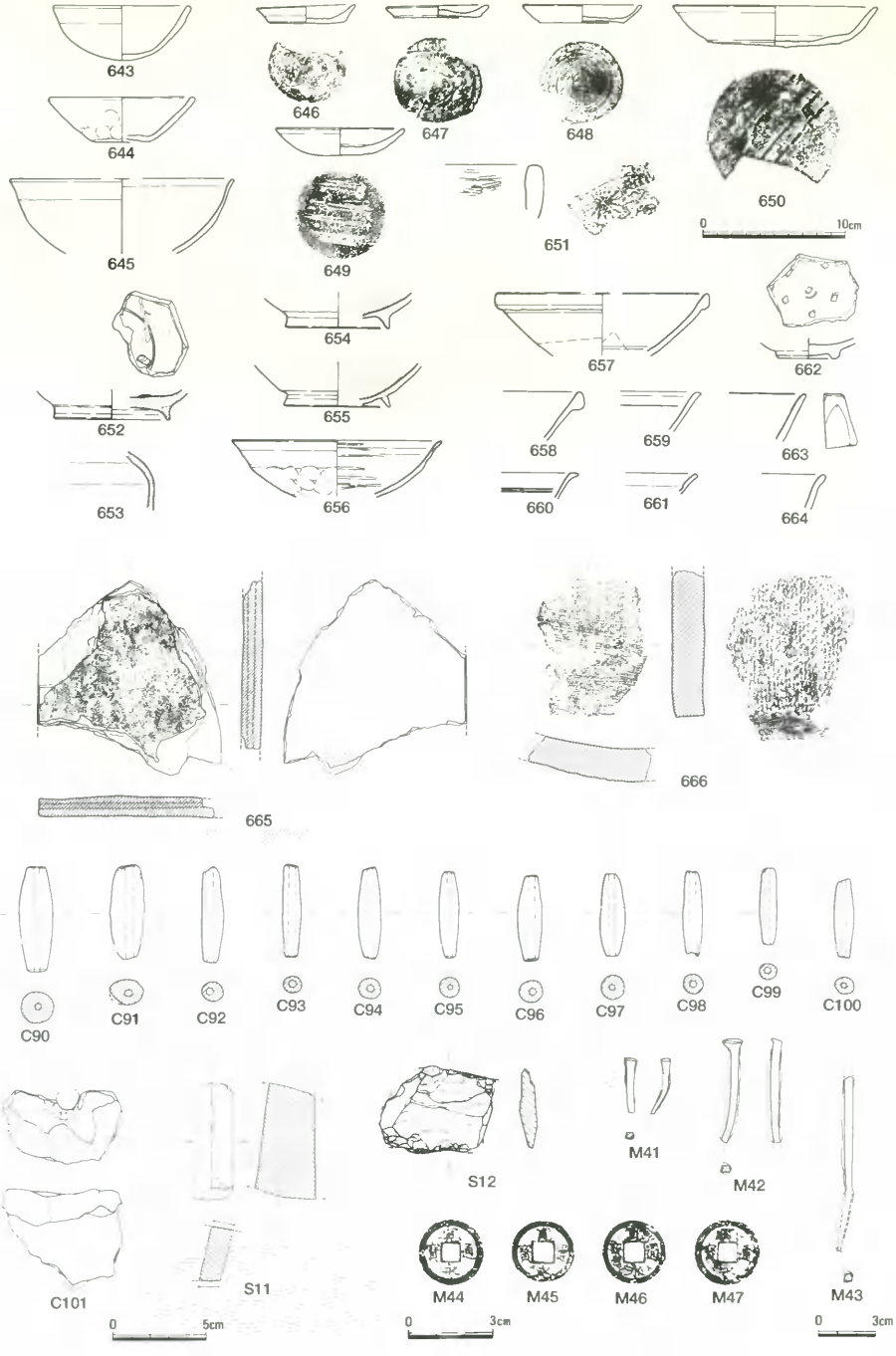
第105図　柱穴出土遺物（２）(1/4)



第106図　柱穴出土遺物（３）（1/4・1/3・1/2）



第107図　包含層出土遺物（１）（1/4・1/3・1/2・1/1）



第108図　包含層出土遺物（2）（1/4・1/3・1/2）

第4章　ま　と　め

北方地蔵遺跡・北方薮ノ内遺跡は、旭川西岸に形成された自然堤防上に所在する。今回の発掘調査では、多種多様な遺構・遺物が出土し、弥生～近世の複合遺跡であることを確認している。また、小字境で2遺跡に分けて報告しているが、地形的にまとまるものである。個々の遺構の概要や各時代の遺構の変遷については前章で示しており、ここでは、主な遺構・遺物に注目しつつ、遺跡の変遷を概観してみたい。

縄文時代の遺構は検出しておらず、遺物には古代の**旧河道1**から出土した後期の深鉢片**625**や、黒褐色粘質土層から出土した晩期の土器細片がある。周辺の遺跡では、津島岡大遺跡（註1）で後・晩期の遺構・遺物、津島江道遺跡（註2）で晩期の水田を検出し、万国Ⅰの「北方下沼・横田・中溝・地蔵遺跡（註3）」（以下、万国Ⅰ所収の遺跡名・地区名には「」を付す）や、津島遺跡（註4）では後・晩期の土器が出土している。これらは、後期以降に始まったとされる沖積地への生活域拡大を示す資料であり、今回の調査成果もそれを裏付けるものであろう。

弥生時代前期の包含層と考えられる黒褐色粘質土（粘土）層は、現存の市道や後世の旧河道等で不明な箇所を除く調査区のほぼ全面に存在する。層上面の海抜高は、調査区西端のｙ40線付近で330cm、東端のｙ48線付近で360cmを測り、東から西に向かって緩やかに傾斜している。出土遺物は僅かで、弥生時代前期と考えられる土器片と、先述の縄文時代晩期土器片がある。土壌分析ではイネのプラント・オパールを検出し、水田層の可能性が指摘されるが（付載3参照）、畦畔等は検出していない。また、層下においても遺構の検出に努めたが、認められなかった。この黒褐色粘土層は、津島遺跡や「北方下沼～地蔵遺跡」等周辺の遺跡で広く水田層と認識されるもので、田面の海抜高は津島遺跡で150～200cm、「北方中溝遺跡1区」で275～290cm、「北方地蔵遺跡1区」で290cmを測る。また、「北方地蔵遺跡2区」東端のｙ36線付近から東側の「北方地蔵遺跡3区」では、層上面の海抜高が330cmと高くなり、水田畦畔は存在しない。このｙ36線以東、今回の調査区にかけては微高地と考えられるが、弥生時代前期の遺構・遺物の密度は低く、居住区から離れた地区と推定される。後世の削平で畦畔を失った微高地高位部の水田が存在する可能性も指摘しておきたい。

弥生時代中期～古墳時代の遺構は、12条の溝を検出している。1例を除いて、自然堤防の長軸方向である北東から南西方向にほぼ直線的に流走するが、北方地蔵遺跡と北方薮ノ内遺跡で若干方向が異なる。出土遺物は乏しく、いくつかの溝でかろうじて出土した土器片は、弥生時代中期中葉から6世紀前半代の幅がある。このように各時期の溝が集約されることから、調査区は取水源に比較的近い地区であったと推定される。中でも北方薮ノ内遺跡の**溝1**と**2**は、幅約5ｍ、深さ1.5ｍを測る大規模な溝であり、下流の水田に水を供給するための幹線用水路と考えられる。微高地上を新たに掘開するためには多大な労働力の投入が必要であり、それを可能とした集団の存在が下流域に想定される。

古墳時代の遺物としては、北方薮ノ内遺跡の中世水田耕土から出土した銅鏡片**M40**が注目される。復元鏡径約8cmの小型鏡と考えられ、遺存状態は良い。縁部は幅6.5mmの平縁で、外区は3～4本を単位とする隆線による複合鋸歯文である。その内側には、段差をもつ2本の隆線で区切られる長さ7mmの2～3本単位の隆線が連続する文様帯がある。さらにその内側にも同様の隆線と段差による文様

帯が反対回りに配される。これらの文様帯を捩文帯として外区に含めるか、主文の一部に含めるかは、内区全体の遺存しない現状では判断が困難である。しかし以上の観察から、出土鏡片は捩文鏡に分類され、岡山県内では7例めの出土に数えられる（註5）。また直接的な関連は全く不明だが、同じ自然堤防上の北北東約250mの位置にある神宮寺山古墳の築造年代観と、捩文鏡群の使用年代観が近接することは留意する必要があろう。

古代の遺構は、旧河道1条と土壙2基、溝12条を検出している。北から南に緩やかに傾斜する地形であることから、土壙より北の調査区外に屋敷地等を想定している。一方、北方薮ノ内遺跡の**溝17**よりも南側に広がる窪地は、土壌分析でイネのプラント・オパールを高い密度で検出しており（付載3参照）、畦畔等は検出していないが水田の可能性が高い。さらに「北方地蔵遺跡」では、正方位方向の畦畔痕跡を伴う水田を検出しており、広範囲な水田開発が推定される。

北方薮ノ内遺跡の**旧河道1**は、幅約50m前後と推定される大規模なもので、北東から南西への流れが考えられる。出土遺物から9～11世紀前半代の存続年代が与えられ、旧河道の西岸に位置する古代の土壙や溝群はすべてこの年代幅に収まる。また、主な溝の流走方向は、北東―南西方向と東西方向にあり、前者が旧河道とともに弥生時代以来の流走方向を踏襲するのに対して、後者は水田の造田とともに条里地割に基づく土地開発の可能性を示唆するものである。特に最大幅8mを測る北方薮ノ内遺跡の**溝16**は、岡山平野の復元条里の里境に位置し、内外面に赤色顔料を塗布する墨書土器**99**の出土とともに注目されるものである。このように古代に遡る溝で条里関連の可能性が指摘されるものは、津島岡大遺跡で東西方向の坪境とされるものがあり、平安時代後半代の遺物が出土している。また「北方下沼～中溝遺跡」では、東西方向の長大な溝が検出され、平安～鎌倉時代の大量の遺物を出土している。坪境と考えられるこの溝と、**溝16**を西に延長した線上とはおよそ1町の距離にあり、復元条里に合致する。さらに南方釜田遺跡（註6）では、正方位地割に基づいた奈良・平安時代の水田が検出され、大畦畔に沿う南北の水路が坪境と考えられている。**溝16**や津島岡大遺跡、「北方下沼～中溝遺跡」例は、いずれも幅10m前後を測る東西方向の大溝である点が共通する。

北方薮ノ内遺跡の**土壙2**は、完形の緑釉陶器椀と人頭骨が共伴することで注目されるものである。検出状態の検討から埋納時の両者の関係については、椀を頭部に直接被せたか、痕跡は認められなかったものの頭部を納めた何らかの容器の蓋として椀を用いた可能性を想定している。いずれにしても、完形の緑釉陶器椀を用いた行為には、頭部の埋納に伴う祭祀的な意味合いが与えられよう。また緑釉陶器椀**67**は、その特徴から10世紀後半代に周防国で生産された製品と考えられ、岡山県内では窪木遺跡（註7）で同国産製品のまとまった出土が知られている。いずれも周防産緑釉陶器の流通を考える上で貴重な資料といえる（註8）。

中世～近世の土地利用状況は、前代までの水路と水田が展開する様相と一変して集落地となる。集落の形成は、古代の**旧河道1**埋没後の12世紀後半代に始まっており、以降現代まで断続的に営まれている。注目される遺構としては、条里の里境に位置すると考えられる北方薮ノ内遺跡の**溝24**がある。これは幅5m前後、深さ1.5mを測る東西方向の直線的な大溝で、16世紀後半代を中心に14～18世紀に属する大量の遺物が出土している。しかし、**溝24**の両岸に遺構の空白地帯があることや、鎌倉時代と考えられる他の遺構と軸線が揃うことなどから、溝の掘削時期は集落の形成開始まで遡る可能性がある。つまりこの集落は、**溝24**を基本軸として成立し、以後もそれに規制されて存続したと考えられるのである。この規制から解かれるのは、**土壙16**や**溝35・36**にみられるような新たな規制が出現する

近世後期以降と考えられる。さらに、**溝24**を西に延長した線上には、津島遺跡の中世段階の条里関連とされる東西溝があり、密接な関連が想定される。また、9世紀代の**溝16**からは北側に約5m離れた位置にあり、**溝16**の廃絶後に時間をおいて**溝24**が掘削されたのであろう。その間、今回の調査区内では条里関連と考えられる溝を検出していない。

一方、集落の東西では、鎌倉時代後半代を中心に水田が営まれる。このうち、北方地蔵遺跡が室町時代以降に屋敷地として利用されるのに対して、北方薮ノ内遺跡3区は旧旭川の氾濫源にあたることから、水田埋没後も顕著な遺構はみられない。なお北方地蔵遺跡では、この水田層下で粘土採掘坑群を検出しており、「北方地蔵遺跡2・3区」から続く一連の広がりの東端にあたっている。

今回の調査で検出した中世～近世の集落は、古代の旧河道埋没後の不安定な地盤にもかかわらず、新たに形成されたものである。これは、中世以降に進んだ耕地の大規模な開発によって平坦な地形が広がったことにもよるが、とりわけこの地を選択した理由は、いくつかの大小河川に面するという水運に適した立地にあったのではなかろうか。また、近世以降には津山・倉敷往来が付近に比定されるなど陸上交通においても利便性が高かったと考えられる。このように交易に適した立地であったことは、各遺構から出土した輸入陶磁器を始めとする各種遺物からも窺える。付近には「東大寺領野田荘広瀬市」の市庭が推定されるが（註9）、今回の調査地と同様に水運に適した立地であったのだろう。さらに精錬・鍛錬鍛冶滓や羽口**C55**の出土から、集落内での一貫した鍛冶操業が実証される（付載1参照）など、集落機能の充実・変遷を考える上でも貴重な資料であるといえよう。

以上、今回の調査成果をもとに遺跡の変遷を概観してみた。しかし、本来触れるべき遺構・遺物の多くを捨象してまとめたものであり、検討不足の感は否めない。これまであまり知られていなかった当地域の遺跡変遷の一端に触れたことに免じてご寛恕いただきたい。（高田）

註

1　小林青樹・野崎貴博編『津島岡大遺跡10』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第14冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1998など。

2　「津島江道遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開―資料集―』日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡県考古学会　1988

3　岡田　博編『北方下沼遺跡・北方横田遺跡・北方中溝遺跡・北方地蔵遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告126　岡山県教育委員会　1998

4　渡邉恵里子・島崎　東編『津島遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告137　岡山県教育委員会　1999

5　水野敏典「捩文鏡の編年と製作動向」『日上天王山古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第60集　津山市教育委員会・日上天王山古墳発掘調査委員会　1997

6　「南方釜田遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開―資料集―』日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡県考古学会　1988

7　平井泰男編『窪木遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告124　岡山県教育委員会　1998

8　周防産緑釉陶器の生産は、国府に付属した小規模なものであったと考えられ、その分布も周防国内にほぼ限られるとされる。
柴尾俊介「長門・周防の緑釉陶器生産」『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東3・施釉陶器―』古代の土器研究会　1994
本報告例や窪木遺跡例は、内向的な流通状況にある周防産緑釉陶器の他地域への流通例として注目される資料である。

9　東大寺文書によると、応長元（1311）年には御野郡広瀬郷に市庭があったとされる。
『岡山県史』第5巻中世Ⅱ　岡山県　1991

付載１　北方薮ノ内遺跡出土鉄滓の金属学的調査

たたら研究会委員　　大澤　正己
株式会社九州テクノリサーチ　鈴木　瑞穂

１．概要

北方薮ノ内遺跡出土の３点の鉄滓を調査して、次の点が明らかになった。

＜1＞　平安時代に属して粗割り痕跡をもつ緻密質鉄滓は、鉱石製錬滓であった。含鉄炉底塊から鉄部分を割り出した、残滓の可能性をもつ。鉄部分は鍛冶原料となろう。

＜2＞　室町時代の溝から出土した2点の鉄滓は、鍛冶炉の炉底に堆積形成された椀形鍛冶滓である。１点は荒鉄（製錬生成鉄で、表皮スラグや捲込みスラグ、更には炉材粘土などの不純物を含む原料鉄：鉄塊系遺物）の不純物除去と成分調整を行った精錬鍛冶滓、残る1点は鉄器製作に際して、鉄素材の繰返し折り曲げ鍛接の高温作業で排出された鍛錬鍛冶滓に分類された。

２．いきさつ

北方薮ノ内遺跡は、岡山市中井町1・2丁目に所在し、旭川西岸の沖積地に立地する弥生時代から近世にかけての複合遺跡である。当遺跡内では、古代以降の遺構から39点の製鉄関連遺物が出土する。これらの遺物を通して、当時の鉄生産（鉄器製作）の実態を把握すべく目的から、3点の鉄滓を選び出して金属的調査を行った。

３．調査方法

３－１．供試材

Table. １に調査試料の履歴と調査項目を示す。

３－２．調査方法

（１）　肉眼観察　（２）顕微鏡組織　（３）ビッカース断面硬度　（４）化学組成分析

４．調査結果

（１）　HPU－１：炉内滓

①　肉眼観察：平面は不整五角形をした全面破面の炉底塊の破片である。表面に幅２cm程の木炭痕を１ヶ所に残し、黄褐色の酸化土砂を固着する。側面には一部に炉壁粘土が極く薄く残存していた。緻密で重量感のある滓である。含鉄部分抽出後の残滓であろう。

②　顕微鏡組織：Photo.1の①～③に示す。鉱物組成は、淡灰色短片状結晶のファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）と、ガラス質スラグで構成される。ガラス質スラグ中には帰属不明の微細鉱物が晶出する。この種の晶癖は、鉱石製錬滓に分類される。

③　ビッカース断面硬度：Photo. １の①に淡灰色不定形結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は598Hvであった。ファイヤライトの文献硬度値は、600～700Hvであり[①]、下限値を僅かに切るがファイヤライトに同定される。

④　化学組成分析：Table. ２に示す。全鉄分（Total　Fe）は42.30%に対して、金属鉄（Metallic

Fe）0.17%、酸化第1鉄（FeO）47.56%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）7.30%の割合である。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は、39.19%でこのうちに塩基性成分（CaO＋MgO）を3.90%含む。二酸化チタン（TiO_2）は0.27%、バナジウム（V）0.01%の両値は低く、酸化マンガン（MnO）0.37%を少量と銅（Cu）0.008%の微量値は磁鉄鉱を原料とした鉱石製錬滓と考えられる。

（2） HPU－2：椀形鍛冶滓（鍛錬鍛冶滓）

① 肉眼観察：鍛冶炉の炉底に堆積形成された椀形鍛冶滓の破損品である。現存外形は不整四角形を呈し、側面の一面を除き全面が破面となる。径1㎜程の気泡が側面の表皮下に、やや集中して認められるが緻密な滓である。破面は僅かに光沢を発す。色調は、地が暗灰色で、一部が暗赤紫色となる。

② 顕微鏡組織：Photo. 1の④に示す。鉱物組成は、白色粒状結晶が大量に晶出し、その粒間を淡灰色不定形結晶のファイヤライトが暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。鉄素材の繰返し折り曲げ鍛接の高温作業で排出された鍛錬鍛冶滓の晶癖である。鉄器製作時の排出滓と推定される。

（3） HPU－3：椀形鍛冶滓（精錬鍛冶滓）

① 肉眼観察：平面は不整台形状の椀形鍛冶滓で1/2以上を残存させる。側面の4面が破面である。表面は1cm以下の小型木炭痕が数ヶ所に認められる。裏面は滓の垂下による細かい凹凸を残し、表面と同様の木炭痕である。偏平な滓で、色調は黒灰色、一部に暗赤紫色を混じえる。

② 顕微鏡組織：Photo. 1の⑤～⑦に示す。鉱物組成は、白色粒状結晶のやや小粒のヴスタイトと、淡灰色長柱状結晶のファイヤライトが暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。ガラス質スラグが多い晶癖で、荒鉄の不純物除去と成分調整の精錬鍛冶滓に分類される。

5．まとめ

北方薮ノ内遺跡の古代から室町時代に比定される溝から、鉱石（磁鉄鉱）製錬滓と椀形鍛冶滓を出土した。鍛冶は、荒鉄の不純物除去と成分調整を目的とした精錬鍛冶滓と、鉄器製作の繰返し折り返し曲げ鍛接の高温作業で排出された鍛錬鍛冶滓であった。鍛冶は一貫作業が実証される。

それに対して、製錬滓は鉄生産の製錬操業までを言及するにたる量はない。製錬滓は、炉底塊からの含鉄抽出で派生した残滓の可能性が高い。一方、先に北方薮ノ内遺跡の至近距離にある津島遺跡においても6世紀代の鉄滓を調査したところ、今回と同じ傾向の結果を得ている②。両者は、旭川西岸の沖積平野に立地して、製錬滓を出土するのは看過できぬ問題である。今後共、沖積平野での製錬操業は、周辺遺跡の動向をみながら結論を出すべきであろう。

註

① 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968
ヴスタイトは450～500Hv、ファイヤライトは600～700Hv、マグネタイトは500～600Hvの硬度値がある。

② 大澤正己・鈴木瑞穂「津島遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『津島遺跡』（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告145）岡山県古代吉備文化財センター 1999

Table. 1　供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	遺構名	遺物No.	遺物名称	推定年代	計測値		メタル度	調査項目								備考
						大きさ（mm）	重量（g）		マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回析	CMA	化学分析	耐火度	カロリー	
HPU-1	北方薮ノ内	1区溝14	31	炉内滓	平安時代	60×53×38	213.32	なし		○	○			○			
HPU-2	北方薮ノ内	1区溝25	35	椀形鍛冶滓	室町時代	37×30×26	54.49	なし		○							
HPU-3	北方薮ノ内	1区溝25	36	椀形鍛冶滓	室町時代	70×51×18	89.28	なし		○	○						

Table. 2　供試材の化学組成

試料番号	遺跡名	出土位置	遺物名称	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	*二酸化珪素 (SiO_2)	*酸化アルミニウム (Al_2O_3)	*酸化カルシウム (CaO)	*酸化マグネシウム (MgO)	*酸化カリウム (K_2O)	*酸化ナトリウム (Na_2O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	Σ* 造滓成分	造滓成分 / Total Fe	TiO_2 / Total Fe	注
HPU-1	北方薮ノ内	1区溝14	炉内滓	42.30	0.17	47.56	7.38	30.40	4.08	3.13	0.77	0.58	0.23	0.37	0.27	0.00	0.29	0.22	0.09	0.01	0.008	39.19	0.926	0.006	

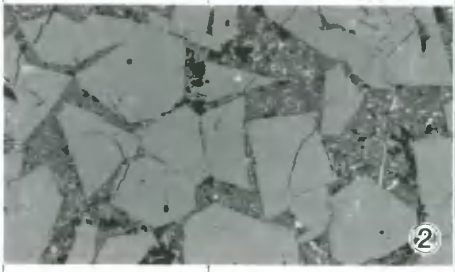
Table. 3　出土遺物の調査結果のまとめ

試料番号	遺跡名	出土位置	遺物No.	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	調査項目								所見
							Total Fe	Fe_2O_3	塩基性成分	TiO_2	V	MnO	ガラス質成分	Cu	
HPU-1	北方薮ノ内	1区溝14	31	炉内滓	平安時代	ファイヤライト＋ガラス質スラグ	42.3	7.38	3.9	0.27	0.01	0.37	39.19	0.008	鉱石製錬滓
HPU-2	北方薮ノ内	1区溝25	35	椀形鍛冶滓	室町時代	ヴスタイト＋ファイヤライト	−	−	−	−	−	−	−	−	鍛錬鍛冶滓
HPU-3	北方薮ノ内	1区溝25	36	椀形鍛冶滓	室町時代	ヴスタイト＋ファイヤライト	−	−	−	−	−	−	−	−	精錬鍛冶滓

（1）　HPU－1
1区溝14
鉱石製錬滓

1×200．硬度圧痕
ファイヤライト：598Hv 200g
2×100．3×400
ファイヤライト＋ガラス質

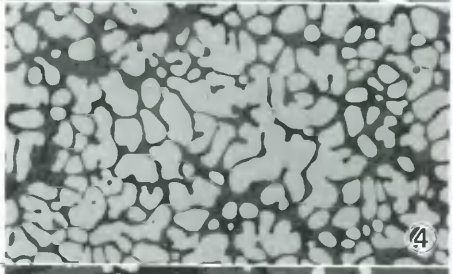
外観写真 1/1.5



（2）　HPU－2
1区溝25
椀形鍛冶滓

4×100
ウスタイト＋ファイヤライト

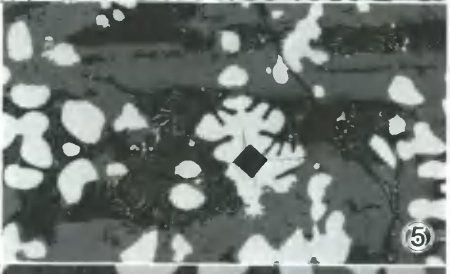
外観写真 1/1



（3）　HPU－3
1区溝25
椀形鍛冶滓

5×200．硬度圧痕
ウスタイト：434Hz 200g
6×100．7×400
ウスタイト＋ファイヤライト

外観写真 1/2



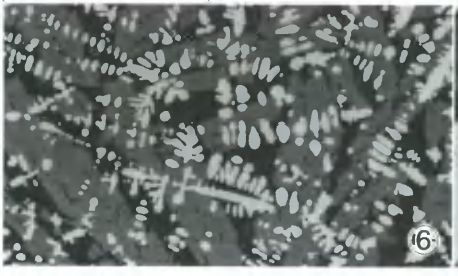


Photo. 1　鉄滓の顕微鏡組織

付載２　北方薮ノ内遺跡出土緑釉陶器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所　**白石　純**

１．はじめに

この胎土分析では、北方薮ノ内遺跡から出土した緑釉陶器の胎土を蛍光Ｘ線分析法で分析し胎土の特徴を調べ、以前窪木遺跡から出土した緑釉陶器[(1)]との比較を行った。この窪木遺跡出土の緑釉陶器は、形態、技法、肉眼観察などから京都、近江、防長の各生産地に分類されていたが、胎土分析でもほぼこの３つの生産地に識別が可能であった。そこで前述した北方薮ノ内遺跡出土の緑釉陶器が胎土分析でどの生産地に分類されるか検討した。

２．分析結果

分析方法、試料の調整、測定条件などは従来通りに従った。各生産地との比較では窪木遺跡の緑釉陶器を分析したときにK_2O、CaOの元素に差がみられたことから、この分析でもこれらの元素で比較した。この結果、第１図のK_2O-CaO散布図から試料番号１の１区包含層出土の椀は防長産と考えられる分布領域に入った。しかしながら、形態・技法的な検討では近江産と考えられ、胎土分析の結果とは一致しなかった。また、この椀がプロットしたところは、防長と近江の分布領域の境界付近にあたることから、近江産の分布域が広がることも予想されるし、両分布域が重複する領域にもあたると考えられる。このように胎土分析では、生産地の推定が難しい結果となった。

註

(１)白石　純「窪木遺跡出土土器の胎土分析」『窪木遺跡２』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告124) 岡山県古代吉備文化財センター　1998

表１　緑釉陶器分析試料一覧表

番号	出土地区	出土遺構･層位	器種･部位	素地	生産地	K	Ca	Sr	Rb
1	１区	L=3.83mまで掘り下げ中	椀･高台	土師	近江産	1.95	0.47	39	53

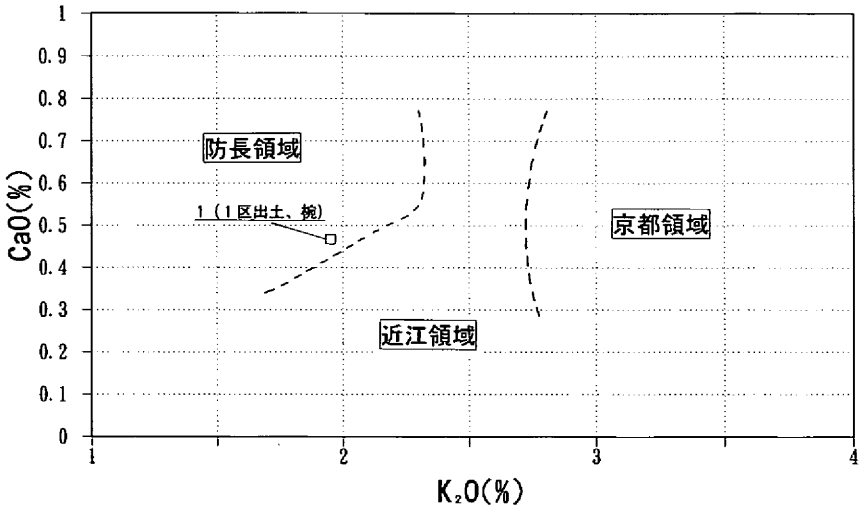


図１　北方薮ノ内遺跡出土緑釉陶器と各生産地との比較

付載３　北方薮ノ内遺跡におけるプラント・オパール分析

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

植物珪酸体は、ガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が植物の細胞内に蓄積したものであり、植物が枯死した後も微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール（植物珪酸体）分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出し、その組成や量を明らかにする方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている。

この調査は、北方薮ノ内遺跡における農耕跡、特に稲作跡の探査を目的にプラント・オパール分析を行ったものである。以下に調査結果を報告する。

２．試料

調査地点は、１区（調査時５ａ区）の南壁断面である。分析試料は、上位より黄灰色粘質微砂（試料１，平安時代）、黄褐色粘質微砂（試料２，時期不明）、オリーブ黄色粘質微砂（試料３，弥生～古墳時代）、黒褐色粘土（試料４，弥生時代前期？）、褐灰色粘質土（試料５，弥生時代前期？）より採取された５点である。（第23図の対応層位に試料番号を記載。）

３．分析法（省略）

４．分析結果

検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属型）、タケ亜科（ネザサ節型、その他）および不明（未分類）である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１および図１に示した。おもな分類群については巻末に顕微鏡写真を示した。

表１　プラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個／１ｇ）

分類群／試料	１区（調査時５ａ区）				
	1	2	3	4	5
イネ科					
イネ	13	29		6	
ヨシ属	6				
ウシクサ属（ススキ属型）	6	12		6	5
タケ亜科					
ネザサ節型	31	17	38	23	11
その他	19	29	6	11	16
未分類等	100	93	178	180	108
プラント・オパール総数	175	180	222	225	141

おもな分類群の推定生産量（単位：kg／㎡・cm）

イネ	0.37	0.85		0.17	
ヨシ属	0.39				
ウシクサ属（ススキ属型）	0.08	0.14		0.07	0.07
ネザサ節型	0.15	0.08	0.18	0.11	0.05

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

５．考察

（１）農耕の可能性について

１区において採取された試料５点について分析を行ったところ、試料１、試料２、試料４の３試料よりイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの試料が採取された層準において稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、試料２ではプラント・オパール密度が2,900個/gと比較的高い値であり、ピークが認められる。このことから、当該層については耕作層であった可能性が高いと考えられる。試料４については、プラント・オパール密度が1,000個/g未満と低い値である。ただし、直上層の試料３からはまったく検出されていないことから、上層からの混入は考えら

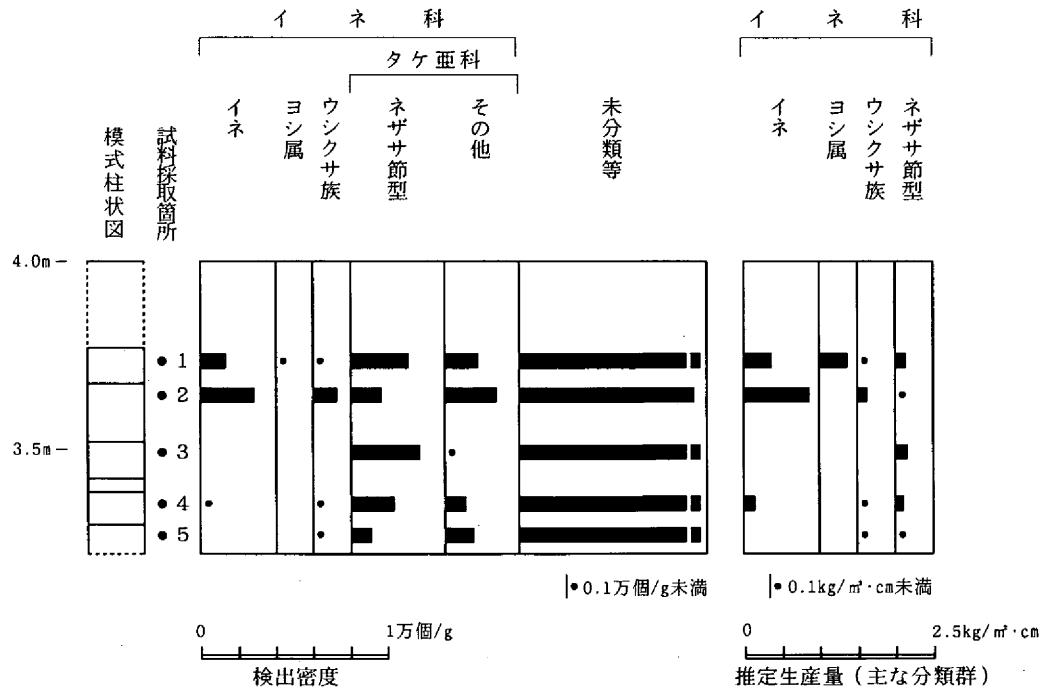


図1　プラント・オパール分析（※おもな分類群について表示）

れない。このことから、当該層においては本地点あるいは近傍において稲作が行われていた可能性が考えられる。

なお、イネ以外の栽培作物に由来するプラント・オパール（例えばヒエやアワなどが含まれるキビ族，ムギ類が含まれるオオムギ族，ハトムギが含まれるジュズダマ属，シコクビエが含まれるオヒシバ属、モロコシが含まれるモロコシ属）はいずれの試料からも検出されなかった。ただし、イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、未分類等としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。

（2）プラント・オパール分析から推定される植生と環境

その他の分類群では、各層準ともネザサ節型などのタケ亜科がやや多く、ウシクサ族(ススキ属型)も試料3を除く各試料で低い密度ではあるが検出されている。一方、ヨシ属は試料1でわずかに検出されたのみである。一般に、タケ亜科やススキは乾燥した環境を好み、ヨシ属は湿地的環境に多く生育する植物である。このことから、これら各層の堆積時は比較的乾いた環境であったと推察される。

6．まとめ

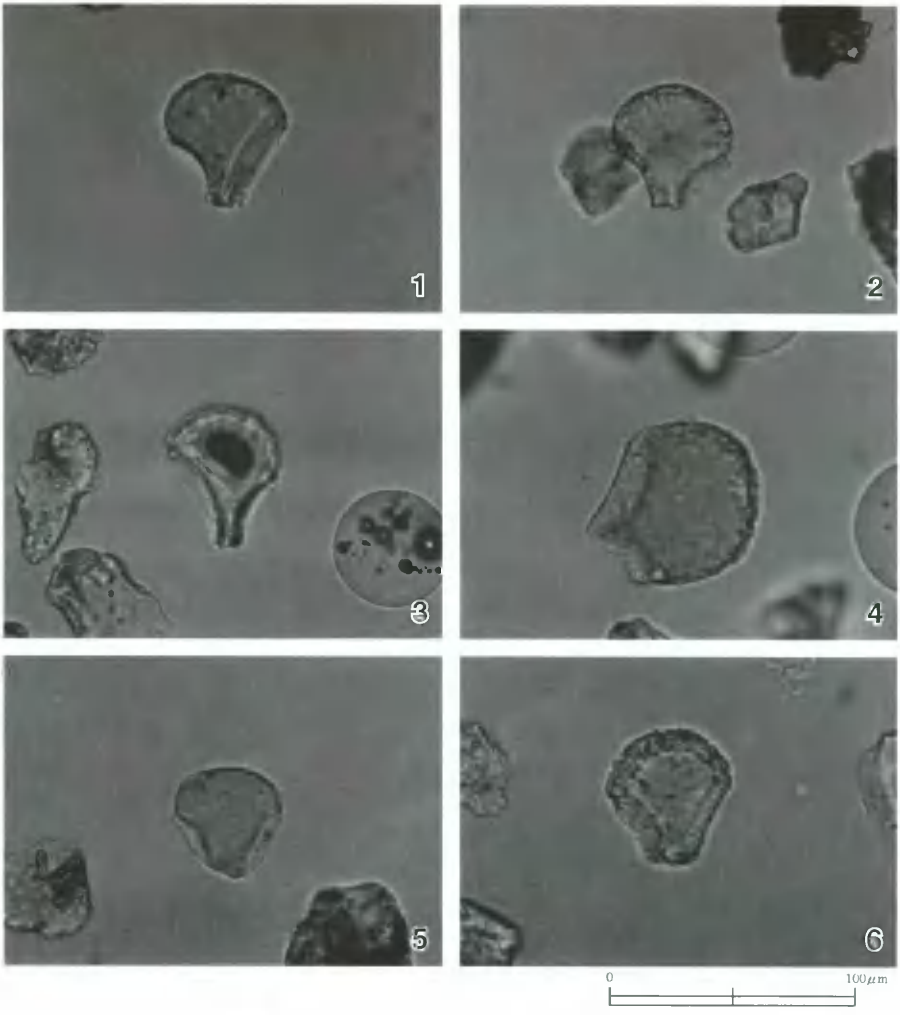
北方薮ノ内遺跡においてプラント・オパール分析を行い、稲作跡の探査を試みた。その結果、試料1、試料2および試料4においてイネのプラント・オパールが検出されたことから、これらの層準において稲作が行われていた可能性が推定された。なお、試料2についてはその可能性が高いと判断された。

参考文献

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－，考古学と自然科学，9:15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17:73-85.

図版1　植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真



1．試料番号1　イネ　　2．試料番号2　イネ　　3．試料番号4　イネ
4．試料番号1　ヨシ属　　5．試料番号2　ウシクサ族（ススキ属）
6．試料番号3　タケ亜科（ネザサ節型）

図版 1

1　第 2 次確認調査
　Ｔ 2 南壁土層断面
　（北より）

2　北方地蔵遺跡
　遠景
　（東より）

3　北方地蔵遺跡
　粘土採掘坑群東半
　（北西より）

図版 2

1　北方薮ノ内遺跡
1区北壁土層断面
（南西より）

2　北方薮ノ内遺跡
溝 1
（南西より）

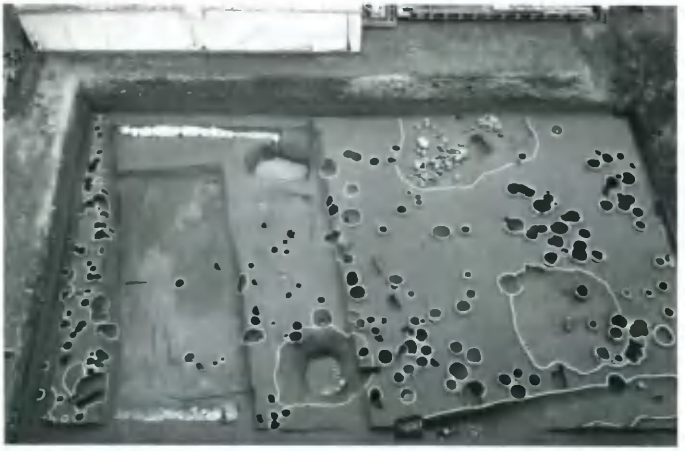
3　北方薮ノ内遺跡
溝 2～5
（東より）

1　北方薮ノ内遺跡
溝13～17
（東より）

2　北方薮ノ内遺跡
中世～近世遺構
（調査時５b区：
東より）

3　北方薮ノ内遺跡
中世～近世遺溝
（調査時５a区：
南東より）

図版 4



1　北方薮ノ内遺跡
中世～近世遺構
（調査時 3 c区：
南より）

2　北方薮ノ内遺跡
中世～近世遺構
（調査時 3 b区：
南西より）

3　北方薮ノ内遺跡
建物 1
（南より）

1　北方薮ノ内遺跡
井戸 7
（南より）

2　北方薮ノ内遺跡
溝24土層断面
（東より）

3　北方薮ノ内遺跡
2 区南壁土層断面
（北より）

図版 6

1　北方地蔵遺跡　粘土採掘坑群東半（北より）

2　北方地蔵遺跡　粘土採掘坑土層断面(南より)

3　北方薮ノ内遺跡　溝 4 土層断面（南西より）

4　北方薮ノ内遺跡　溝 5 土層断面（南西より）

5　北方薮ノ内遺跡　土壙 2 椀出土状況(南より)

6　北方薮ノ内遺跡　土壙 2 土層断面(北より)

7　北方薮ノ内遺跡　旧河道 1 検出状況(南より)

8　北方薮ノ内遺跡　旧河道 1 土層断面(南より)

1　北方薮ノ内遺跡　井戸 1（東より）

2　北方薮ノ内遺跡　井戸 4（北より）

3　北方薮ノ内遺跡　井戸 5（南より）

4　北方薮ノ内遺跡　土壙墓 2（南より）

5　北方薮ノ内遺跡　土壙12（西より）

6　北方薮ノ内遺跡　土壙13土層断面（北より）

7　北方薮ノ内遺跡　土壙20（南より）

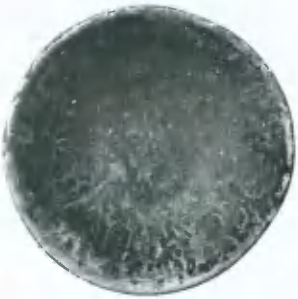
8　北方薮ノ内遺跡　土壙21（北より）

図版 8

26

29

31



99

102

652

634

61

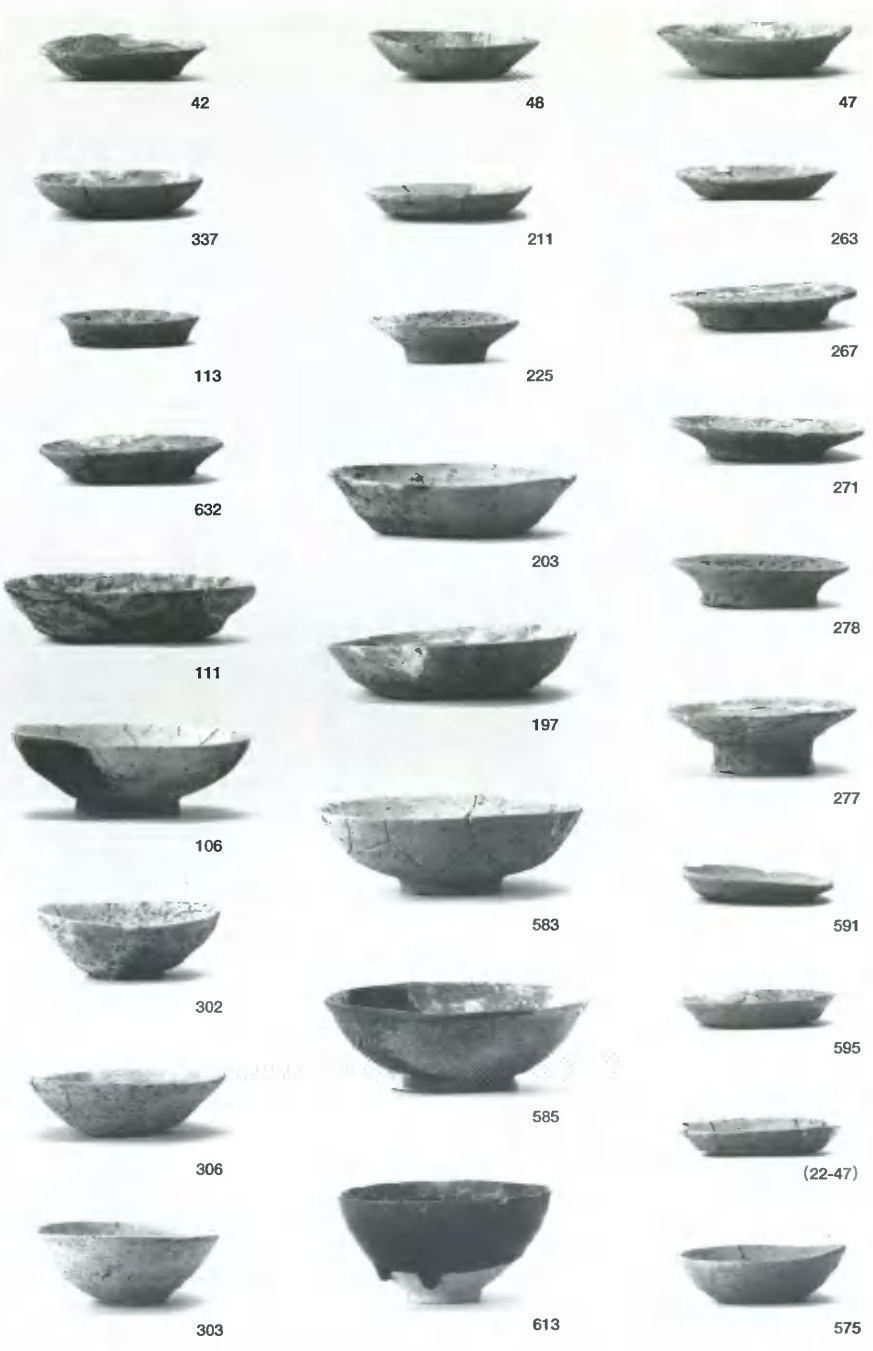
67

633

653

635

弥生土器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器（1／3）



土師器・古瀬戸天目椀（1／3）

図版10

404

438

387

413

388

1

弥生土器・備前焼（1／3、1／5）

621

642

252

623

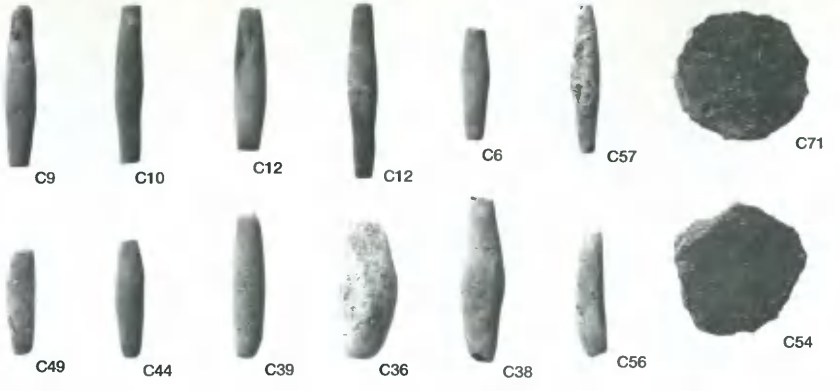
624

瓦（1／2、1／3）

図版12

1　線刻文字塼（1／2）

2　石製品（1／2）

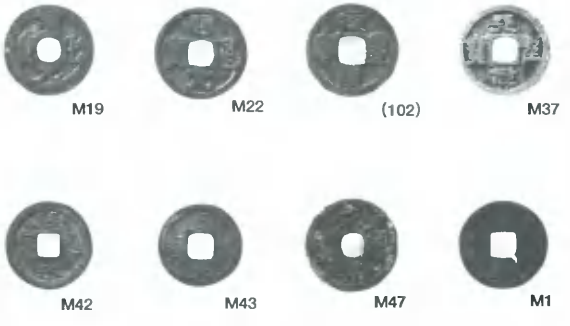


1　土製品（1／2）

2　鞴の羽口（1／3）

3　金属製品（1／2）

4　捩文鏡片（1／1）



5　銅銭（2／3）

報告書抄録

ふりがな	きたかたじぞういせき　きたかたやぶのうちいせき
書名	北方地蔵遺跡２・北方藪ノ内遺跡
副書名	都市計画道路万成・国富線建設に伴う発掘調査
巻次	Ⅱ
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	149
編著者名	高田恭一郎・岡本寛久・重根弘和・平井　勝・山磨康平・大橋雅也
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701－0136　岡山県岡山市西花尻1325－３　TEL086－293－3211
発行年月日	2000年２月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
きたかたじぞういせき 北方地蔵遺跡 きたかたやぶのうちいせき 北方藪ノ内遺跡	おかやまけん 岡山県 おかやまし 岡山市 なかいちょう 中井町	33201	－	34度 40分 68秒	133度 55分 80秒	19960202～ 19980725	4,357	都市計画道路万成・国富線に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北方地蔵遺跡 北方藪ノ内遺跡	集落跡	弥生～古墳	溝 12	弥生土器 土師器 須恵器 瓦 塼 青磁 白磁 染付 緑釉陶器 灰釉陶器 備前焼 唐津焼 瀬戸美濃焼 石製品 木製品 金属製品 土製品 鉄滓	・人の頭骨と緑釉陶器を納めた古代の土壙 ・古代～近世の条里関連の溝 ・中世～近世の集落
		古代	旧河道 1 土壙 2 溝 12		
		中世～近世	旧河道 4 建物 3 柱穴列 1 井戸 7 土壙 25 土壙墓 2 溝 18 水田 2 粘土採掘坑群 1		

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 149

北方地蔵遺跡 2
北方薮ノ内遺跡

都市計画道路万成・国富線建設に伴う発掘調査Ⅱ

2000年２月28日　印刷
2000年２月28日　発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3
発行　岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6
印刷　山陽印刷株式会社
岡山市富吉3098-1